

『日本語歴史コーパス 室町時代編』
形態論情報規程集

Ver. 1.0

国立国語研究所 言語変化研究領域(片山久留美)編

2019年5月

目次

長単位

第1章	文節認定規程	1
第1	文節認定規程	1
第2	複合辞・連語	10
第2章	長単位認定規程	11
第1	長単位認定規程	11
第3章	付加情報	21
第1	付加情報の概要	21
第2	品詞情報の概要	22
第4章	付加情報付与基準	38
第1	語彙素読み・語彙素付与の基準	38
第2	品詞付与基準	47

短単位

第1章	最小単位認定規程	60	
第1	最小単位認定規程	60	
第2	和語の最小単位認定に関する規則	68	
第3	最小単位の分類	84	
第2章	短単位認定規程	85	
第1	短単位認定規程	86	
第2	最小単位の結合の例	97	
第3章	付加情報	103	
第1	付加情報の概要	103	
第2	品詞情報の概要	103	
第3	語種情報の概要	134	
第4章	同語異語判別規程	136	
第1	同語異語判別規程	136	
細則	6.1	名詞と接辞の判定基準（1）	151
細則	6.2	名詞と接辞の判定基準（2）	154
細則	6.3	動詞連用形と動詞連用形転成名詞の判定基準	155
細則	6.4	人名の扱い	157
細則	6.5	固有名詞の扱い	160
細則	6.6	擬音語・擬態語の扱い	163
細則	6.7	感動詞の扱い	169
細則	6.8	出現形「に」の判別基準	173

細則	6.9	出現形「にて」の品詞判別基準	174
細則	6.10	助詞の品詞認定	175
細則	6.11	ほか、品詞判別に注意を要する語	180
細則	6.12	読みの認定基準	182
第2		意味の面から見た同語異語の判別	184
参考文献			184
資料		要注意語	185
	1	接頭的要素	186
	2	接尾的要素	187
	3	助詞	196
	4	助動詞	204
	5	「一の～」	209
	6	「一が～」	221
	7	「一つ～」	221

長単位

長単位は、言語の構文的な機能に着目して規定した言語単位である。長単位の認定は、文節の認定を行った上で、各文節の内部を規定に従って自立語部分と付属語部分とに分割していくという手順で行う。そのため、長単位の認定規程は、文節と長単位の二つの認定規程から成る。

《凡例》

1. 各規程に示した例は、コーパスに現れた例又は作例である。「室町時代編」のコーパスに適例が見つからない場合、他の時代のコーパスから挙例した。

2. 文節・長単位・最小単位・短単位の境界を示すために次の記号を用いた。

文節の境界		例:		国立国語研究所の	
長単位の境界		例:		国立国語研究所	の
最小単位の境界	/	例:	/	国立国語研究所	/
短単位の境界		例:		国立国語研究所	
当該規定で着目している箇所		例:		国立国語研究所	
文節・長単位のつなぎ目	-	例:		消え=や=わたらむ	
当該規定で着目している箇所	=	例:		消え=や=わたらむ	

第1章 文節認定規程

第1 文節認定規程

1 句読点・空白・改行に関する規程

1.1 句読点・空白の原則

句読点（句読点として用いられているカンマ・ピリオド・エクスクラメーションマーク・クエスチョンマーク、三点リーダー、並びにコロンを含む。）及び空白の後ろで切る。

【例】

| 罷出たる | 者は、 || おくづくしの | 者で御ざる、 ||
| この難を | 御助け有らば、 |

1.1.1

次に挙げる読点・カンマ（以下、読点とする。）の後ろでは切らない。

1.1.1.1

それがないときに全体が1短単位となるものの中に現れるもの

【例】

| どじやうの | すしを、 | はう=、=ばつて、 |

1.1.1.1.1

読点の前の短単位が読点より後方の要素に係っており、読点がない場合に、全体が1文節となるものの中に現れる場合は、読点の後ろで切る。

【例】

| おはり、 || みのの | ものは、 |

1.1.1.1.2

助詞・助動詞・接尾辞連続の中に現れるもの（読点の後ろで切ると、直後の文節が助詞・助動詞又は接尾辞から始まることになる場合）

【例】

| あら、 | うらめし=、=とは | 思へども、 |

1.1.1.1.3

読点の後ろで切ると、接頭辞のみで構成される文節が認定されるもの

【例】
| 得意の | 短、=中距離に | 確かな | 手ごたえを | 感じた | ようだ。 |

1.1.1.2

その他、読点の後ろで切ると、問題のある場合は、適宜個別に判断する。

【例】
| ころは、 | 正月、 | 三月、 | 四月、 | 五月、 | 七=、=八=、=九月、 | 十一=、=二月、 |

1.1.1.3

次に挙げる空白の後ろでは切らない。

1.1.1.3.1

文頭にあるもの

1.1.1.3.2

格助詞等で受けられて日本語文の構成要素となっている欧文中にあるもの

【例】
| S a n s t a = = O b e d i e n t i a の | 旨に |

1.1.1.3.2.1

空白を含む欧文が日本語文の構成要素となっていない場合は、空白の後ろで文節を切る。

【例】
| グレース・ケリー | G r a c e | K e l l y |

1.1.1.4

規定 2 以下によって定められる文節境界が句読点等の直前に位置する場合、その規定は適用しない（句読点等のみの文節を認定しない）。

【例】
| 急いで | もつて | まいらふと | 存る=、 |

※「急いでもつてまいらふと存る、」の場合、文末「存る、」は、用言の終止用法に当たるため、「| 存る |、|」となる。しかし、句読点のみの文節を認定するのは問題があるため、本規定を設け、上記のとおり文節を認定することとした。

2 付属語に関する規程

助詞・助動詞・接尾辞連続（言いよどみの助詞・助動詞・接尾辞も含む。）の後ろで切る。助詞・助動詞には「複合辞・連語」に挙げた複合辞を含む。

【例】
| まん中に、 || しやうぎに || こしを || かけさせ、 || 二人 | 左右に || いる |

2.1

複合辞の中に副助詞など（言いよどみの助詞・助動詞も含む。）が挿入された場合も、文節認定の上では全体で一つの複合辞と見なす。

【例】
| して=さへ=くるれば | まんぞくした |

2.2 付属語の例外

次に挙げる付属語の後ろでは切らない。

2.2.1

第2 1.2 連語リスト，短単位規程集「一が～」 「一つ～」 「一の～」 に挙げた語の中に現れる付属語

【例】

「うはの=空の | かりが=ねとこそ | あれ |

2.2.2

「御（おほん・お・み・ご）～す・奉る」「～おはす・おはします・候ふ・奉る・給ふ・仕る・参らせる・申す」という形式の敬語表現の中に現れる助動詞「る・らる」「す・さす」

【例】

「めしの | こぶ | めさ=れ=候へ、 |
かう | 申せばとて | 君を | 臆せ=させ=ませうとて、 | 申すでは御座無い： |

2.2.3

一般に助動詞の語幹とされる「そう」「よう」が体言・用言・形状詞・副詞・助動詞・終助詞及び文末に相当する表現に直接続く場合、「そう」「よう」の前後ともに文節を切らない。

【例】

「一段 | そくさい=さう=に | おりやるが |
申上る=やう=な | 名では御ざなひ |

2.2.3.1

ただし，連体詞や格助詞に「よう」が続く場合は，「よう」の前で文節を切り離す。

【例】

「その || やうな | ものでござる |
今の || やうな | 事を | いふものか |

2.2.4

固有名・動植物名の中に現れる付属語
※固有名の扱いは 6.2・6.3 を参照。

【例】

「西の=宮 |
きの=めとうげ |
ありの=み |

2.2.5

全体を受ける体言・接辞があるものの中に現れる付属語

【例】

「参=た=げ |

2.2.6

分数の読み上げの中に現れる助詞「の」「が」

【例】

「十分=が=一分 |

3 構文的情報による規定

助詞・助動詞を伴わない自立語は、以下の各項に該当する箇所切る。

3.1

主語・主題の後ろで切る。

【例】
| 大こく || すすみ出て |

3.2

連用修飾成分の後ろで切る。

【例】
| 事の外 || かるう | なつた |
| 毎年 || 罷出て | せんじ物を | うりまらす、 |

3.3

連体修飾成分の後ろで切る。

【例】
| さても | うつくしき || 牛かな |

3.4

用言の中止法・終止法・命令法の後ろで切る。

【例】
| 互に | をもしろく | 思ひ || かたみに | 扇を | とりかはし給ふ也 |
| くせ事じや程に、 | なおれ || きらふと | おほせられて |

3.4.1

ただし、用言の命令形であっても、体言の構成要素となっている等、命令法として機能していない場合には切らない。

【例】
| 内にも | 御覧ぜ=させよ=がほにて | 有ければ、 |

3.5

接続詞の前後で切る。

【例】
| 捨て置かれた | 女房共 || 或いは || 松の | 下、 || 或いは || 砂の | 上に | 袴 | 踏みしだき、 |

3.6 融合形「てふ」

「といふ」の融合形「てふ」の前で切る。

【例】
| まつり || てう | 人は | まいる | よし | 申伝へ候 |

3.7

感動詞の前後で切る。

【例】
|| よう || あら || しほらしや |

3.7.1

ただし、感動詞であっても、体言の構成要素となっている等、感動詞として機能していない場合には切らない。

【例】
| 天の | 戸 | 渡る | 梶の | 声 | 微かに | 聞こゆる | えいや=声 |

3.8

体言の独立格の後ろで切る。

【例】
| 太郎くわじや || こひ、 |

文節の認定上問題となる点については、第1章 第1 4 意味情報による規定、第1章 第1 5 単位の内部構造による規定に従う。

4 意味情報による規定

4.1

擬音語・擬態語の類は一続きにする。

【例】
| くわた / \ =ぐわつたり |

4.2

同じ要素及び類似の要素の繰り返しは切り離す。

【例】
| 如何に || 如何に | と | 尋ねらるれば、 |

4.2.1

ただし、次に挙げるものは切り離さない。

さてさて なおなお まずまず よくよく

【例】
| さて=さて | 厳しい | 平家上戸で御座る。 |

5 単位の内部構造による規定

5.1 形式的な意味を表す動詞

体言に形式的な意味の「す」「致す」「参る」「仕る」「召す」が直接続く場合、体言と「す」「致す」「参る」「仕る」「召す」とを切り離さない。

【例】
その	ごとく	口まね=する
浴中に	住居=いたす	
中 / \	しこう=つかまつらふ	
さらば	おもてへ	おとも=めされひ

5.1.1

「す」「致す」「参る」「仕る」「召す」に実質的な意味がある場合は切り離す。

【例】

「まさる | めでたき | のふ || 仕る | ※「行う」「する」の意味があるため切り離す
おせんじ物 || 召せ | ※「召しあがる」の意味があるため切り離す

5.2 敬語形式

「御(お) ~す・有る・致す・候ふ・奉る・仕る・なされる・召す・申す・やる」「~あそばす・有る・致す・おはします・奉る・給ふ・仕る・成る・参らせる・参る・まします・召す・申す」という形式の敬語表現は、全体を一続きのものとする。

【例】

「こちへ | お=かへし=やれ |
さやうに | おこころへ=なされ=てくだされひ、 |
御=装束=させ=奉れば、 |
只今 | 是へ | 御いで=なされ=まらする |

5.2.1

「御」が本動詞と敬意を表す補助動詞の間や複合動詞の間に現れた場合も、全体を一続きのものとする。

【例】

「御がつてん | なひ程に、 | おもひ=お=きり=やれ |
漢の | 武帝に | 仕へ=御=甲=なさるる | 臣下殿にて候が、 |

5.3 体言+用言

体言+用言という形式のうち、『日本国語大辞典』第2版(小学館)で見出し語(連語としての見出し語は除く。)となっている以下のものについては、体言と用言とを切り離さない。

~げ無し 言い甲斐無し 静心無し 正体無し 筋無し 是非無し 詮方無し 左右無し 大事無し 等閑無し
能無し 本意無し 面目無し 勿体無し

【例】

「人も | 某を | おとなげ=なふ | おほせらるるほどに、 |

5.4 副詞+用言

副詞に形式的な意味の「す」「致す」が直接続く場合、副詞と用言とを切り離さない。

【例】

「むさと=した | 事を | いふ | 人じや |

5.4.1

副詞に「す」「致す」が直接続く場合のうち、「す」「致す」が「行う・やる」又は「行える・やれる」に置き換えることができる場合は、副詞との間を切り離す。

【例】

「さうじなど | こと / \ なく || せうず |

5.4.2

「こう」「そう」「ああ」「どう」に「す」「致す」が直接続く場合は、切り離す。

【例】

「いや | かう || する | もので御ざる |
さう || いたさうか |

5.5 同格

同格の関係にある体言連続は切り離さない。

【例】
| 次男=宗盛 |
| 国母=建礼門院 |

5.5.1

同格の要素の両方もしくは一方が、複数長単位から構成される場合は長単位を分割し、それぞれに文節を付ける。

【例】
| ちごくの | あるじ || ゑんまわう |
| 重盛の | 次男 || 資盛の卿 |

5.5.2

同格の関係にある体言の間に読点がある場合は、読点の後ろで切る。

【例】
| 信濃の国の | 住人、 || あさうの | なにがしです、 |

5.5.3

同格の関係にある体言連続全体に係る、又はそれら全体を受ける体言・接辞がある場合も読点の後ろで切る。

5.6 並列

並列された語は切り離さない。

【例】
| くげ=ぶけ=児=若衆に | いたるまで、 |
| 望みかけたる | 事なれば、 | ききつたへ=みつたへて |

5.7 数を表す要素

数を表す要素は一続きにする。数を表す要素とその直前直後の要素とは切り離さない。

【例】
その	中に	雁=一つ	飛び上がって、
元暦=二年=五月=七日の	卯の	刻に	
残り無う	申したを	白状=四五枚に	記いて、
矢を	七つ=八つ=ほど	射立てられて、	
建暦=三年=癸酉、			

5.7.1

ただし、直前の要素が数量の程度を表す場合は除く。

【例】
| 建礼門院を | 始め奉って | 凡そ || 四十三人と、 | 聞こえて御座る。 |

5.7.2

数を表す要素とその直前の要素との間に読点がある場合、読点の後ろで切る。

【例】
| 只今 | おふるまひなされた、 | まんぢう、 || 二十びきの | おふるまひでござる |

6 補則

6.1 記号

句読点以外の区切り符号は、文節認定に当たって、次のように扱う。

6.1.1

原則として、句読点以外の区切り符号は切り出さない。

【例】
| 秋萩=・=夏草 |
| (=真なれば=) |

6.1.2

文節境界（文頭・文末を含む。）にあるものは、直前又は直後の文節に含める。

【例】
| (=真なれば=) |
| 「よう | おじやつた |

6.1.3

繰り返し記号「/ \」が1文節あるいは1長単位に相当する要素の繰り返しを表している場合、4に従って文節を切る。

【例】
| いざ || / \ | こひ || / \ |
| 扱も || / \ | りよぐわいな | 事で御ざる |

6.2 固有名

固有名及びそれを含む体言句は、その内部が規定2・規定3で切ることになっていても切らない。人名については、第4章第2.2も参照。

【例】
[人名]
| 源(みなもとの)=頼朝 | | 佐々木の=四郎 |
[地名]
| 西の=宮へ | 参て、 |
| 是 | 三人は | いわうが=嶋へ | ながされ給ふ | 処に、 |
[建造物名など]
| 木曾殿が | 火打が=城に | 置かれた | 齋明威儀師 |

6.3 行政区画名・組織の名称等

より上位のものから下位のものへと順を追って並んでいる、意味的に段階性のある自立語のうち、次に挙げるものは、各名称を切り離す。

6.3.1 行政区画名等

【例】
| 和州 || みよしの |
| 江戸 || 浅草 |

6.3.1.1

上位のものと同下位のものとの間に中点がある場合は、切り離さない。

6.3.1.2

律令制における国名・郡名が「～の国」「～の郡」の形で現れた場合、2は適用せず「の」の後ろでは文節を切らない。村以下については「の」の後ろで分割する。

【例】
大和の国 |
かたののこをり |
～の | 村 |
～の | 里 |

6.3.2.1

組織の名称・それに関連する肩書き（官職名）と人名は切り離さない。「組織の名称」・「官職名」，「人名」は前後どちらも同様に扱う。

【例】
| 大納言=藤原国経朝臣 |

6.4 意味的に問題のあるもの

次に挙げる文節は，文節認定に当たって，それぞれ例に示したように文節を認定する。

6.4.1

同格の関係にある要素の両方又は一方が2文節以上から成り，文節認定規程に従って文節を認定すると，意味的に問題のある体言連続を文節として認定することになるもの

【例】
| その | 子息 || 少将は | 何と | 成られて有ったぞ？ |

※文節認定規程を単純に適用すれば，「子息少将は」を文節とすることになるが，意味的に問題があるため，切り離す。

6.4.2

並列の関係にある要素のうち一つ以上の要素が2文節以上から成り，文節認定規程に従って文節を認定すると，意味的に問題のある体言連続を文節として認定することになるもの

【例】
| 鬼の | もつた | たからは、 | 隠蓑 || かくれ笠 || うちの || こづち、 | 諸行無常 |

※文節認定規程を単純に適用すれば，「隠蓑かくれ笠うちの」を文節とすることになるが，意味的に問題があるため，切り離す。

6.4.3

連体修飾関係にある要素を文節認定規程に従って文節を認定すると，意味的に問題のある体言連続を文節として認定することになるもの

【例】
毎日新聞	「記者の	目」		係へ。	
「日本の	明日を	創る	会」		メンバー。
この	あたり		独特の	商売	
我が	国		社会が	二十世紀後半に	形成した

※文節認定規程を単純に適用すれば，「目」係へ。」等を文節とすることになるが，意味的に問題があるため，切り離す。

6.5 「故（ゆえ）」

体言や連体形に続く形式名詞で，理由・逆接を表す場合，「故」の前で文節を切る。

【例】
| さけ || ゆへ |
| 花 || ゆへ |

6.6 和歌中の名詞連続の扱い

和歌中に名詞連続がある場合は，各句の後ろで文節を切ることがある。次のように文節を認定する。

【例】
旅の空 埴生の小屋のいぶせさに、如何に古里恋しかるらん。
なにはづに、しやくやくの花 冬ごもり、今を春べとしやくやくの花

7 参考 文節の例

【例】
そもそもひえいざんゑんりやくじは、伝教大師くわんむ天王と御心をひとつにして、ゑんりやく年中にかいひやくし給ふ、されば一ねん三ぜんの機をもつて、三千人の衆徒を置、仏法今にはんじやうたり、其時伝教大師此山には、三千の衆徒あれば、一日に三千を守り給ふ、てんぶをときせし給ふ所に、此大黒出現する、かいさんいひや大こくは、一日に千人をこそふちし給へ、此山には三千人の衆徒あれば、三千を守り給ふ、てんぶをこそあんじ申べけれとありしかば、此大こく大にいかりをなし、いでさらば三千を守る奇特をみせんとして、たちまち三面六ひと現じ、今におひて仏法はんじやうに守るなり、なんぼうきどくなる大こくにてあるぞ、心やすくしんがうせよ、たのしうなさうずるぞ

第2 複合辞・連語

「室町時代編」では、BCCWJと同様に複合辞・連語を1長単位と認めた。ここでは、複合辞・連語の選定方針と選定の具体的な方法について述べる。

1 基本的な方針

複合辞・連語については、「室町時代編 I 狂言」に現れる2短単位から5短単位の語の連続のリストを作成し、その中から複合辞・連語となりうる語について、下記の方針に従って判断することとした。

【複合辞】

- 方針1：狂言の中に30例以上の用例があるものを認定する。ただし、30例に満たない場合も、現代語もしくは狂言において同等の語が複合辞認定されており、無理なく判断ができる場合は認定することもある。
- 方針2：ある短単位の連続のうち、複合辞化している例の方が多数であるものを認定する。
- 方針3：複合辞化しているか否かの判断が難しい例が多い場合は無理に認定しない。
- 方針4：現代語で同等の語が複合辞と認定されていない場合は認定しない。

【連語】

- 方針1：狂言の中に30例以上の用例があるものを認定する。ただし、30例に満たない場合も、現代語・狂言において同等の語が連語認定されており、無理なく判断ができる場合は認定することもある。
- 方針2：連語化しているか否かの判断が難しい例が多い場合は無理に認定しない。
- 方針3：現代語で同等の語が連語と認定されていない場合は認定しない。
- 方針4：上記以外に、連濁や係り受けを考慮し、付属語を含むが切り離さない方が妥当と考えられるものをリストで管理する。

これらの方針の下、先行研究と比べて複合辞・連語とするものの範囲を限定した。

1.1 複合辞リスト

語彙素読み	語彙素	品詞
トシテ	として	助詞-格助詞
ニヨッテ	によつて	助詞-格助詞
ニヨッテ	によつて	助詞-接続助詞
ニヨリ	により	助詞-格助詞
ニヨリ	により	助詞-接続助詞
ホドニ	ほどに	助詞-接続助詞
ジャアル	じゃある	助動詞
デアアル	てある	助動詞
デアアル	である	助動詞
デオジャル	でおじゃる	助動詞
テオリヤル	ておりやる	助動詞
テオリヤル	ておりやる	助動詞
テクダサレル	てくださる	助動詞
テクレル	てくれる	助動詞
テゴザル	てござる	助動詞
デゴザル	でござる	助動詞
テソウロウ	て候う	助動詞
デナイ	でない	助動詞
デハオリナイ	ではおらない	助動詞
デハゴザナイ	ではござない	助動詞
デハゴザル	ではござる	助動詞
デハナイ	ではない	助動詞
テモラウ	てもらう	助動詞
テヤル	てやる	助動詞
ニデアアル	にてある	助動詞
ニテゴザル	にてござる	助動詞
ニテソウロウ	にて候う	助動詞
ネバナラズ	ねばならず	助動詞

1.2 連語リスト

語彙素読み	語彙素	品詞
アンナイモウ	案内申	感動詞-一般
ゴメンアル	御免有る	感動詞-一般
サアラバ	然有らば	接続詞
サラバ	然らば	接続詞
サリナガラ	然りながら	接続詞
サルホドニ	然る程に	接続詞
サレドモ	然れども	接続詞
シカラバ	然らば	接続詞
シカレドモ	然れども	接続詞
シカレバ	然れば	接続詞
シテモ	しても	接続詞
カマイテ	構いて	副詞
カマエテ	構えて	副詞
ゼヒトモ	是非共	副詞
ナニヨリ	何より	副詞

2 細則

2.1 複合辞「として」の認定基準

複合辞「として」と認定しないもののうち、特に注意を要するものを、次に挙げる。

2.1.1 「～を…として」の形式で、格を支配しているもの

【例】

「明暮 | 山野を | 家と | して、 | とりおこなふ | ことなれば |

2.1.1.1 「として」に前接する語と合わせて、副詞的に働くもの

【例】

「じひを | もつぱらと | してこそ、 | 利生も | あらふずれ、 |

第2章 長単位認定規程

第1 長単位認定規程

長単位は、以下の規定に基づいて文節を分割する（又は分割しない）ことによって得られた要素を1単位とする言語単位である。

1 句読点・空白・改行に関する規定

句読点・空白・改行に関する規定は、2以下のすべての規定に優先して適用される。

1.1

句読点（句読点として用いられているカンマ・ピリオド・エクスクラメーションマーク・クエスションマーク、三点リーダー、並びにコロンを含む。）及び空白は1長単位とする。

【例】

「罷出たる | 者 | は、 || おくづくし | の | 者 | で御ざる ||、 ||

1.1.1

次に挙げる読点・カンマ（以下、読点とする）は1長単位としない。

1.1.1.1

それがないときに全体が1短単位となるものの中に現れるもの

【例】

「どじやう | の | すし | を |、 | はう=、=ばつ | て |、 |

1.1.1.2

読点の後ろで切ると、接頭辞のみで構成される長単位が認定されるもの

【例】

「得意 | の | 短、=中距離 | に | 確か | な | 手ごたえ | を |

1.1.2

その他、読点の後ろで切ると、問題のある場合は、適宜個別に判断する。

2 記号に関する規程

2.1

記号は1長単位とする。

【例】

|| 『 || かわらけ | わり | て ||』 ||

2.1.1

それがないときに全体が1長単位となるものの中に現れる記号は、1長単位としない。

【例】

「花粉 | の | 少ない | スギ品種 | の | 普及 | と | 採穂= (=種=) =園 | の | 造成 | 及び | 早期供給体制 | の | 充実 |
こ=・=だ=・=わ=・=る | ・ | 貴方 | に | こそ | 使っ | てほしい |。 |
「 | びわこミレニアム=・=フレームワーク | 」 | で | は |、 | 優先的行動 | の | ため | の |
訪米し | た | 山崎拓=・=自民党幹事長ら | に | こう | 説き |
大学院 | に | は | 約2万5=、=000人 | が | 在籍し | ている |

2.1.2

語と同じ働きをする記号・記号連続及びそれらを含む結合体は、全体で1長単位とする。

【例】
「はもじなれども、歌をよふで」
※「は」文字のこと。短単位では「は（記号一般）文字（普通名詞一般）」。

「ござれ / \、」
※「/ \」は「ござれ」に相当する。文節も切れる（第1章 第1 6.1.3 参照）。

3 付属語に関する規定

付属語（第1章 第2 1.1 に挙げた複合辞を含む）は1長単位とする。

【例】
「一のたなについた者を、末代つけさせられうずるとのお事じや」
「今日吉日にて有により、みよしのよりむこ殿の御出にて候間」

3.1

複合辞の中に助詞が挿入されている場合、複合辞と見なさず、各構成要素に分割する。

【例】
「してさへくるればまんぞくした」

3.2

現代語で一般に助動詞とされる「ようだ」「そうだ」にあたる「ようなり」「そうなり」は、「よう/そう」と「なり」をそれぞれ単独で1長単位とする。

【例】
「そのやうな事が有物か、
誠にふかさうにみえてござるほどに、」

3.3 付属語の例外

次に挙げる付属語は1長単位としない。

3.3.1

それを1長単位とすると、単独の動詞的・形容詞的・形状詞的接尾辞が切り出されることになる場合の付属語

【例】
「参=た=げ」

3.3.2

それを1長単位とすると、用言・助動詞の終止形・連体形以外に続く名詞的接尾辞が切り出されることになる場合の付属語

【例】
「聞=た=さ」
「おきき=やり=やう」
「聞か=まほし=さ」

3.3.3

第1章 第2 1.2 連語リスト、及び、短単位規程集「一が～」「一つ～」「一の～」の中に現れる付属語。連語リスト、「一が～」「一つ～」「一の～」の扱いについては補則 6.2 を参照。

3.3.4

「御（おほん・お・み・ご）～す・奉る」、 「～おはす・おはします・候ふ・奉る・給ふ・仕る・参らせる・申す」という形式の敬語表現の中に現れる付属語

【例】
めし | の | こぶ | めさ = れ = 候へ | 、 | し | て | 御装束さ = せ = 奉れ | ば | 、 |
髪 | 掻き撫で | 、 | 結い | など | とて | 、 | 申す | では御座無い | : |
君 | を | 臆せ = させ = まらせ | う |

3.3.5

全体を受ける体言・接辞があるものの中に現れる付属語

【例】
聞か = まほし = げ |
心得 = た = 立て |

3.3.6

分数の読み上げの中に現れる助詞「の」「が」

【例】
十分 = が = 一 |

付属語を伴わない文節、及び規定 第2章 第1.3 によって付属語を切り出した後に残った形式（おおよそ文節の自立語部分に相当する形式）に以下の規程を適用する。それによって得られた各形式を1長単位とする。

4 意味情報による規定

4.1

擬音語・擬態語の類は一続きにする。

【例】
くわた / \ = ぐわつたり | | あわ / \ = むく / \ = ほう / \ |

4.2

同じ要素及び類似の要素の繰り返しは切り離す。

【例】
あれ || あれ |
如何に || 如何に |

4.2.1

ただし、次に挙げるものは切り離さない。

さてさて なおなお まずまず よくよく

【例】
良く = 良く | 戒め | て | 置け |

5 単位の内部構造による規定

5.1

主語・主題の後ろで切る。

【例】
大こく || すすみ出 | て |
都 | に | 人 || おおひ | と | いへ | ども |
しくわうでん | に | は | 、 | がん門 || なく | て | すみがたし | と | 見え | たり |

5.2

体言に形式的な意味の「す」「致す」「参る」「仕る」「召す」が直接続く場合、体言と「す」「致す」「参る」「仕る」「召す」とを切り離さない。

【例】

吉日 | を | もつ | て | 、 | くわんじやう=せよ |
いつも | 同道=いたす | 人 | が | 御ざる |
此 | あたり | に | 住居=仕る | 、 | しやうばいにん | でござる |
やがて | 下向=めさ | れひ | と | いへ |

5.2.1

「す」「致す」「参る」「仕る」「召す」に実質的な意味がある場合、体言と「す」「致す」「参る」「仕る」「召す」とを切り離す。

【例】

まさる | めでたき | のふ || 仕る |
おせんじ物 || 召せ |

5.3

「御(お) ~す・有る・致す・候ふ・奉る・仕る・なされる・召す・申す・やる」「~あそばす・有る・致す・おはします・奉る・給ふ・仕る・成る・参る・まします・召す・申す」という形式の敬語表現は、全体を一続きのものとする。

【例】

こちへ | お=かへし=やれ |
さやう | に | おこころへ=なされ=てくだされひ | 、 |
御=装束=させ=奉れ | ば | 、 |

5.3.1

「御」が本動詞と敬意を表す補助動詞の間や複合動詞の間に現れた場合も、全体で1長単位とする。

【例】

御がつてん | なひ | 程に | 、 | おもひ=お=きり=やれ |
漢 | の | 武帝 | に | 仕へ=御=申=なされる | 臣下殿 | にて候 | が | 、 |

5.4 体言+用言

体言+用言という形式のうち、『日本国語大辞典』第2版(小学館)で見出し語(連語としての見出し語は除く。)となっている以下のものについては、体言と用言とを切り離さない。

~げ無し 言い甲斐無し 静心無し 正体無し 筋無し 是非無し 詮方無し 左右無し 大事無し 等閑無し
能無し 本意無し 面目無し 勿体無し

【例】

| 人 | も | 某 | を | おとなげ=なふ | おほせ | らる | ほどに |

5.5

副詞に形式的な意味の「す」「致す」が直接続く場合、副詞と「す」「致す」とを切り離さない。

【例】

| むさと=し | た | 事 | を | いふ | な |

5.5.1

副詞に「す」「致す」が直接続く場合のうち、「す」「致す」が「行う・やる」又は「行える・やれる」に置き換えることができる場合は、副詞との間を切り離す。

【例】

| ころびかから | ふ | と | し | 、 | 色々 || し | て | 、 | おもひなをひ | て |

5.5.2

「こう」「そう」「ああ」「どう」に「す」「致す」が直接続く場合は、切り離す。

【例】
| かう || し | て | 居る | さへ | 腹 | の | 立つ | に |
| そう || せ | ず | は | なる | まひ | と | 思ふ | が |

5.6 同格

同格の関係にある体言連続は切り離さない。

【例】
| 次男=宗盛 |
| 国母=建礼門院 |

5.6.1

同格の関係にある体言の間に読点がある場合は本規定を適用しない。

5.6.2

同格の要素の両方もしくは一方が複数長単位から構成される場合、本規定を適用しない。

【例】
大羽	が	舎弟		またの
四条家	の	庶流		山蔭中納言
重盛	の	次男		資盛の卿

5.7 並列

並列された語は切り離さない。

【例】
うどんさうめん餅まんぢう	の	あげく	に	は
縦様横様蜘蛛手十字	に	駆け破って		
種々さま / \	の	くらべ物	など	

5.7.1

並列された語のうち、次に挙げるものは切り離す。

5.7.1.1

並列の関係にある語の間に読点がある場合

【例】
| 是 | に | は | こま道具 || 、 || かがみ || 、 || べにおしろひ || 、 || くしはり || 、 || けぬきはさみ || 、 || きんちやくたたき

5.7.2

並列の関係にある体言の間に読点がある場合、その体言連続全体に係る、又はそれら全体を受ける体言的な形式や接辞があっても、読点の後ろで切り離す。

【例】
| きんらんどんすどんきん || 、 || からをりにしき | など | を | 、 | しやうばいいたさ | う | と | 存る |

5.7.2.1

並列の関係にある体言連続全体に係る、又はそれら全体を受ける体言的な形式や接辞、並列された体言全体を受ける形式的な意味の「す」「致す」があり、並列の関係にある体言の間に読点がない場合は切らない。

【例】

十二年 | の | 間 | 難行苦行=し | 給ひ | て | 、 |
うぎやうさぎやう=し | て | 心 | を | なぐさむ | もの | の | せい | なり |

5.8 接尾辞

次に挙げる接尾辞は切り離す。

5.8.1

用言の終止形・連体形に名詞的接尾辞が続く場合。

【例】

四月 | 八日 | に | 至る || 毎 | に |

5.9 数を表す要素

数を表す要素を含む自立語は、以下の規定に基づき長単位を認定する。

5.9.1

数を表す要素は、単位の変わり目の後ろで切る。

【例】

安元 | 三年 || 七月 || 二十日 |
道 | の | とをさ | は | くり || 八ちやう |
一尺 || 五寸 | の | 高履 | を | はき |

5.9.1.1

ただし、数を表す要素に体言・接辞が続く例のうち、体言・接辞が数を表す要素全体を受けている場合は、単位の変わり目の後ろでは切らない。

【例】

五十騎=百騎=宛て | に | 差し向け | られ | て御座る | . |

5.9.1.2

以下の例のように、数を表す要素に体言・接辞が続いていても、単位の変わり目で分割して特に問題がないと考えられる場合は、単位の変わり目の後ろで切る。（規定 5.9.3 参照）

【例】

本年 | 4月末-現在 | 、 | 国連平和維持活動 | の | 要員 | は |
96年 | 3月 | 31日=以前 | に | 設立さ | れ | た | 企業 | の | 場合 |

5.9.2

数を表す要素の前で切る。

【例】

寿永 || 三年 | 二月 | 十二日 |
枝 || 一つ | は | 王位 | の | 徳 | に | 供えい |
主従 || 七騎 | に | 成っ | たれ | ば |

5.9.2.1

次の例のように一つの数を表す要素に対して、本規定を複数回適用する場合もある。

【例】
火を弱めて油大さじ二分一杯を足し、
卵六個入り一パック

5.9.2.2

ただし、次に挙げるものは、数を表す要素と前の要素とを切り離さない。

5.9.2.2.1

接頭辞は切り離さない。

【例】
第一御十日
両三日

5.9.2.2.2

数を表す要素と直前の要素とに係る、又はそれら全体を受ける体言・接辞がある場合

【例】
学校5日制導入で授業時間が少なくなつた
平成十五年調査結果については
パンフレットはA4判四ページで一万部を作成。
衆院東京4区に立候補すること
ゆとり教育の名の下に完全週休二日制にしたり

5.9.3

数を表す要素とそれに続く体言・接辞とは切り離さない。

【例】
五まいかぶと
二つ瓦
三里四はうなるたいこ

5.9.3.1

数字を表す要素とそれに続く体言・接辞との連続体が、①連用修飾成分になっている、②格助詞で受けられている、③文末に用いられているといった場合には、原則として全体で1長単位とする。

5.9.4

数を表す要素の並列は切り離し、それぞれを1長単位とする（文節は切り離さない）。

【例】
二三十騎四五十騎控え控え落ちて

6 補則

6.1 中点の扱い

「室町時代編Ⅰ・Ⅱ」には現れないが、参考のため以下に現代語の中点の長単位認定規定を挙げる。

6.1.1

原則として、中点は切り出さない。

【例】

平成 | 3年度 | から | コンピュータ=ネットワーク | を | 利用し | , |
 政府 | の | 経済財政諮問会議 | (| 議長=小泉純一郎首相 |) | が | 九日 | 開か | れ | 、 |
 豪商=山崎屋 | の | 与五郎 | と | 遊女=吾妻 | と | の | 恋 | を |
 首都=東京 | は | 新世紀最初 | の | 年明け | から | 、 |
 麦=大豆=飼料作物 | の | 生産振興 | に | 資する | 水田 | の |
 最も | 先進的 | な | 青森=岩手=秋田 | の | 北東北 | 三県 | は |
 ホームセキュリティガイド | を | 作成=配布する | 等 | の | 活動 | を |
 福岡 | 米国領事館 | に | 着任し | た | ウー=C=リー | 首席領事 | も |
 問い合わせ | は | 同社 | (| 0120=76=8150 |) |
 D=N=A | (| ABC | = | 深夜 | 3=20 |) |
 十二 / 二十七=二十八 | = | PARCO劇場 |
 午後 | 五時 | から | 、 | 大阪=フェスティバルホール | で | 、 |
 公営地下鉄黒字決算 | 札幌=南北線 | など | 全国 | 4路線 | だけ |
 ○ | 神戸=三浦知 |
 Vゴール | を | 決め | 喜ぶ | G大阪=中山 |

6.1.2

以下に挙げる中点は切り出し、1長単位とする。

6.1.2.1

中点の前後の要素の両方又は一方が2長単位以上から成るもの。

【例】

寺園慎一著 | 現実化する | クローン人間 | 評者 || 山元 | | 大輔 |
 マイケル・リチャードソン | (| シンガポール || 東南アジア研究所 | 上級客員研究員 |) |
 医薬品卸売業 | 「 | 鍋林勝田 | 」 | (| 本社 || 長野県 | 松本市 |) | の |
 ダッタンそば早食い競争 | など | 。 | 千円 | (| そば食券 | 2枚 || 抽選券付 |) | 。

6.1.2.2

中点の前後の要素が用言であるもの。

【例】

「 | 安く || 軽く | なっ | て | 電動自転車快走中 |
 「 | はじめる || はじまる | 」 | は | 「 | 初 | 」 | でなく | 、 |
 「 | 始める || 始まる | 」 | と | 書き | ます | 。

6.1.2.3

中点の前又は後に数を表す要素があるもの（ただし、日付・時刻・電話番号・郵便番号等は除く）。

【例】

個人毎 | の | ニーズ | に | 合わせ | て | 、 | 二十四時間 || 三百六十五日リアルタイム | に |
 牙を | むく | 都会 | 逢坂剛著 | (| 中央公論新社 || 二千円 |) |
 白 | 七十八 || 八十 | の | 手筋 | で | コウ | に | 持ち込み | 、 |

6.1.2.4

担当職務と担当者名との間に用いられたもの。

【例】

撮影 || 寺河内美奈 |
 (| 文 || 川上 | 健 | | 写真 || 上田幸一 |) |
 原作 || ヘミングウェイ。 |
 (| v o & g || イノヒロキ |) |

6.2 一覧の語等の扱い

連語、「要注意語」の「一が～」「一つ～」「一の～」に挙げられている語、及びそれらを含む結合体は、全体で1長単位とする。

【例】

「 | かのこ=まだら | に | たつ | は | しらなみ |

6.3 固有名

固有名及びそれを含む体言句は、その内部が規定 3 で切ることになっていても切らない（全体で1長単位とする）。人名については、第4章 第2 2 も参照。

【例】

〔人名〕

| 源 (みなもとの) =頼朝 | | 佐々木=の=四郎 |

〔地名〕

| 西=の=宮 | へ | 参 | て |
| 是 | 三人 | は | いわう=が=嶋 | へ | ながされ給ふ | 処 | に |

〔建造物名など〕

| 木曾殿 | が | 火打=が=城 | に | 置か | れ | た | 齋明威儀師 |

6.4.1 〔行政区画名〕

より上位のものから下位のものへと順を追って並んでいる、意味的に段階性のある行政区画名は、各行政区画名を切り離し、それぞれ1長単位とする。

【例】

| 伊豆の国 || ひるがこ嶋 |
| 和州 || 御吉野 |

6.4.2 〔組織の名称及びそれに関連する肩書〕

組織の名称・それに関連する肩書き（官職名）と人名は切り離さない。「組織の名称」・「官職名」, 「人名」は前後どちらも同様に扱う。

【例】

| 上総の守=忠清 | | 刑部卿=忠盛 | | 鎌倉左兵衛の助=頼朝 |

6.5 動植物名

動植物名及びそれを含む体言句は1長単位とする。

【例】

| ひの木=ちやおけ |

6.6 意味的に問題のあるものの扱い

次に挙げるものは、長単位認定に当たって、それぞれ例に示したように長単位を認定する。

6.6.1 同格の関係にある要素

同格の関係にある要素の両方又は一方が2長単位以上から成り、長単位認定規程に従って長単位を認定すると、意味的に問題のある体言連続を長単位として認定することになるもの。

【例】

| 然 | ばかり | の | 朝敵 || 平大納言 | が | 婿 | に | 成る | 事 | 然る | べから | ぬ |

※長単位認定規程を単純に適用すれば、「朝敵平大納言」を長単位とすることになるが、意味的に問題があるため、切り離す。

6.6.2 並列の関係にある要素

並列の関係にある要素のうち一つ以上の要素が2長単位以上から成り、長単位認定規程に従って長単位を認定すると、意味的に問題のある体言連続を長単位として認定することになるもの。

【例】

| 家 || の || 子 || 若たう | を | 引つれ | 、 |

※長単位認定規程を単純に適用すれば、「子若たう」を長単位とすることになるが、意味的に問題があるため、切り離す。

6.6.3 連体修飾関係にある要素

連体修飾関係にある要素を長単位認定規程に従って長単位を認定すると、意味的に問題のある体言連続を長単位として認定することになるもの。

【例】
毎日新聞「記者の目」係へ。
「日本」の明日を創る会「メンバー」。
このあたり独特の商売
我が国社会が二十世紀後半に形成した

※長単位認定規程を単純に適用すれば、「目」係」等を長単位とすることになるが、意味的に問題があるため、切り離す。

6.7 「故（ゆえ）」の扱い

体言や連体形に続く形式名詞で、理由・逆接を表す場合、「故」の前で長単位を切る。

【例】
| さけ || ゆへ | | 花 || ゆへ |

7 参考 長単位の例

【例】
| 所 | も | ひ | え | い | ざ | ん | ぶ | り | や | く | じ | は | 、 | 伝 | 教 | 大 | 師 | く | わ | ん | む | 天 | 王 | と | 御 | 心 | を | ひ | と | つ | に | し | て | 、
| 多 | り | や | く | 年 | 中 | に | か | い | ひ | や | く | し | 給 | ふ | 、 | さ | れ | ば | 一 | ね | ん | 三 | ぜ | ん | の | 機 | を | も | つ | て | 三 | 千 | 人 | の
| 衆 | 徒 | を | 置 | 、 | 仏 | 法 | 今 | に | は | ん | じ | や | う | たり | 、 | 其 | 時 | 伝 | 教 | 大 | 師 | 此 | 山 | に | は | 三 | 千 | の
| 衆 | 徒 | あ | れ | ば | 、 | 一 | 日 | に | 三 | 千 | を | 守 | り | 給 | ふ | 、 | て | ん | ぶ | を | と | き | せ | い | し | 給 | ふ | し | 所 | に | 此 | の
大 | 黒 | 出 | 現 | す | る | 、 | か | い | さ | ん | い | ひ | や | 大 | こ | く | は | 一 | 日 | に | 千 | 人 | を | こ | そ | ふ | ち | し | 給 | へ | 此 | 山
に | は | 三 | 千 | 人 | の | 衆 | 徒 | あ | れ | ば | 三 | 千 | を | 守 | り | 給 | ふ | し | て | ん | ぶ | を | こ | そ | あ | ん | じ | 申 | べ | け | れ
と | は | し | か | ば | 、 | 此 | 大 | こ | く | 大 | に | い | か | り | を | な | し | 、 | い | で | さ | ら | ば | 三 | 千 | を | 守 | る | 奇 | 特
を | み | せ | ん | と | て | 、 | た | ち | ま | ち | 三 | 面 | 六 | ひ | と | 現 | じ | を | な | し | 、 | お | ひ | て | 仏 | 法 | は | ん | じ | や | う | に | 守 | る
な | り | 、 | な | ん | ぼ | う | き | ど | く | な | る | 大 | こ | く | に | て | あ | る | ぞ | 、 | 心 | や | す | く | し | ん | が | う | せ | よ | 、 | た | の | し | う | な
さ | う | ず | る | ぞ

第3章 付加情報

第1 付加情報の概要

長単位認定規程によって認定された各単位に、次に挙げる付加情報を付与する。

1 語彙素読み

自立語の語彙素読みは、同一語の活用変化・表記のゆれ（補助記号の有無を含む。）をグループ化するための情報である。表記以外のゆれ、省略・融合等によって生じた異形態はグループ化しない。
付属語の語彙素読みは、同一語の活用変化・ゆれ・省略・融合等によって生じた異形態をグループ化するための情報である。

語彙素読みは、原則としてコーパスに出現したすべての長単位に付与する。

2 語彙素

語彙素は、代表形に対する国語の表記である。原則としてコーパスに出現したすべての長単位に付与する。

語彙素読み・語彙素という名称は、形態素解析用辞書UniDicで使われているものを、BCCWJにおける長単位・短単位の見出しの名称として用いたものである。ただし、UniDicの語彙素が語彙素読み・語彙素表記等の4属性から成る見出しに与えられた名称であるのに対し、BCCWJの語彙素はUniDicで言うところ語彙素表記を指すという違いがある。

また、語彙素読み・語彙素を与えるに当たり同一語と見なす範囲については、UniDic・短単位と長単位との間で違いがある。UniDic・短単位では、語形・表記のゆれを考慮せず、同一語と見なせるものに同一の語彙素読み・語彙素を与えるのに対し、長単位では、特に自立語について、上記のように省略・融合等によって生じた異形態は同一語と見なさず、別の語彙素読み・語彙素を与える。

長単位の語彙素読み・語彙素については、付加情報付与基準の第4章 第1 「語彙素読み・語彙素付与の基準」を参照。短単位の語彙素読み・語彙素については、短単位規程集「同語異語判別規程」を参照。

3 品詞等の情報

各単位に対して、品詞等の情報（以下、品詞情報）として、次に挙げる情報を付与する。

- (1) 品詞
- (2) 活用型
- (3) 活用形

第2 品詞情報の概要

1 品詞

品詞は、次に挙げるものとする。

1.1 名詞

1.1.1 名詞-普通名詞-一般

【例】
玉 祝い 矛盾 碾き茶 荒馬乗り 賑やかさ 修行者 御謀反 詩歌管弦 いづも路 阿
弥陀経 塗籠籐 打ち付け所

1.1.2 名詞-固有名詞-一般

1.1.3 から 1.1.7 以外の固有名詞。組織の名称や元号・ペットの名など。名詞-固有名詞-一般の詳細は、付加情報付与基準の 第4章 第2 「品詞付与基準」の 第4章 第2 4 「固有名の扱い」を参照。

【例】
大黒 びしやもん いけづき 薄墨 延喜

1.1.3 名詞-固有名詞-人名-一般

日本・中国・韓国以外の人名， 1.1.4 ， 1.1.5 に分類できない人名，あだ名やしこ名等，及びそれらに肩書き・敬称等がついたもの。
人名（1.1.3 から 1.1.5 ）についての詳細は、付加情報付与基準の 第4章 第2 「品詞付与基準」の 第4章 第2 2 「人名の扱い」を参照。

【例】
平家 大日如来 和田の義盛 日蓮上人 大かうぼう E s o p o 桓武天皇 東方朔 梶原景時

1.1.4 名詞-固有名詞-人名-姓

日本・中国・韓国の人名のうち姓に当たるもの，及びそれに肩書き・敬称等がついたもの。

【例】
あさいな 手塚 佐々木 北条殿 平相国 斑婕好 源三位入道

1.1.5 名詞-固有名詞-人名-名

日本・中国・韓国の人名のうち名に当たるもの，及びそれに肩書き・敬称等がついたもの。

【例】
藤六 重衡 どん太郎殿 さつまのかみただのり 資盛の卿

1.1.6 名詞-固有名詞-地名-一般

国名以外の地名（行政区画名・地域地方名・地形名）。
地名（1.1.6 ， 1.1.7 ）についての詳細は、付加情報付与基準の 第4章 第2 「品詞付与基準」の 第4章 第2 3 「地名の扱い」を参照。

【例】
くらま 出雲 ひえいざん 加賀の国 きのめたうげ もとすの郡 入間川 栗田口 竹生嶋
Europa Babylonia

1.1.7 名詞-固有名詞-地名-国

地名のうち国名。なお日本国内の「旧国名」に相当するものは「地名 - 一般」。

【例】
日本 唐 蜀国 まかだ国 前漢 Grego Egypto

1.1.8 名詞-数詞

数詞の範囲は、付加情報付与基準の 第4章 第2 「品詞付与基準」の 第4章 第2 5 「数詞の扱い」を参照。

1.2 代名詞

【例】
それ ここ 我 いづれ 汝等 わごりよ わごぜ達 あいつめ

1.3 形状詞

1.3.1 形状詞-一般

1.3.2 , 1.3.3 以外の、いわゆる形容動詞の語幹に当たるもの。

【例】
ゆたか したたか 殊勝 見事 あほうげ 大きくわほう 傍若無人 懈怠勝ち 折知り顔

1.3.2 形状詞-タリ

いわゆるタリ活用の形容動詞の語幹に当たるもの。

【例】
漫々 峨々 くう / \ じやく / \

1.3.3 形状詞-助動詞語幹

一般に助動詞とされる「そうだ」（様態）及び「ようだ」「みたいだ」の語幹に当たるもの。

1.4 連体詞

【例】
ある あらゆる この

1.5 副詞

擬音語・擬態語を含む。

【例】
急度 たくさん ひらり / \ 別して 泣く泣く 夜な夜な なぐさみがてら おもひの外

1.6 接続詞

【例】
あるいは さて ただし また

1.7 感動詞

1.7.1 感動詞-一般

フィラー以外の感動詞。

【例】
あら いざ なふ もの申 やれ / \

1.7.2 感動詞-フィラー

【例】
あの

1.8 動詞

1.8.1 動詞-一般

【例】
聞く 見る 僉議する 待ちかねる 御下り有る 興がる 存じ尽くす

1.9 形容詞

1.9.1 形容詞-一般

【例】
美しい 無い 絶え難い ねだり臭い

1.10 助動詞

第1章 第2 1.1 複合辞リストで品詞を「助動詞」としたものを含む。

【例】
む なり ず まい げな でござる てある ねばならず

1.11 助詞

第1章 第2 1.1 複合辞リストで品詞を「助詞」としたものを含む。

1.11.1 助詞-格助詞

【例】
が に の をば より として

1.11.2 助詞-副助詞

【例】
さえ しも だに など のみ ばかり まで

1.11.3 助詞-係助詞

【例】
か こそ ぞ は も や

1.11.4 助詞-接続助詞

【例】
つつ て とも ながら によって ほどに

1.11.5 助詞-終助詞

【例】
い か かし ぞ ばや もの わ

1.11.6 助詞-準体助詞

【例】
の

1.12 接頭辞

長単位では、通常、接頭辞が単独で1単位となることはないが、文に係る接頭辞など、例外的に1単位となるものがある。

【例】
乳母は【うち】も臥されず、

1.13 接尾辞

長単位では、通常、接尾辞が単独で1単位となることはないが、活用語に直接する接尾辞など、例外的に1単位となるものがある。

1.13.1 接尾辞-名詞的-一般

【例】
四月八日に至る【毎】に

1.14 記号

1.14.1 記号-一般

1.14.2 以外の記号。漢字の解説に用いられたもの（メタ的に用いられた文字）などを含む。

【例】
い (の字)

1.14.2 記号-文字

アルファベットやギリシャ文字。

【例】
A α Σ

1.15 補助記号

1.15.1 補助記号-一般

【例】
・ : ' / \

1.15.2 補助記号-句点

【例】
。 . !

1.15.3 補助記号-読点

【例】
、 ,

1.15.4 補助記号-括弧開

【例】
(《 「

1.15.5 補助記号-括弧閉

【例】
) 》 」

1.16 空白

行頭の字下げなどの空白。

1.17 品詞一覧

名詞-普通名詞-一般
名詞-固有名詞-一般
名詞-固有名詞-人名-一般
名詞-固有名詞-人名-姓
名詞-固有名詞-人名-名
名詞-固有名詞-地名-一般
名詞-固有名詞-地名-国
名詞-数詞
代名詞
形状詞-一般
形状詞-タリ
形状詞-助動詞語幹
連体詞
副詞
接続詞
感動詞-一般
感動詞-フィラー
動詞-一般
形容詞-一般
助動詞
助詞-格助詞
助詞-副助詞
助詞-係助詞
助詞-接続助詞
助詞-終助詞
助詞-準体助詞
接頭辞
接尾辞-名詞的-一般
記号-一般
記号-文字
補助記号-一般
補助記号-句点
補助記号-読点
補助記号-括弧開
補助記号-括弧閉
空白

2 活用型

長単位に付与する活用型のうち、主なものを次に挙げる。

2.1 動詞

2.1.1 文語四段活用

2.1.1.1 文語四段-カ行

【例】
行く 置く

2.1.1.2 文語四段-ガ行

【例】
仰ぐ 凌ぐ

2.1.1.3 文語四段-サ行

【例】
明かす 致す

2.1.1.4 文語四段-タ行

【例】
うがっ 放つ

2.1.1.5 文語四段-ハ行

【例】
争ふ 追ふ 会ふ 買ふ そうもん申候ふ

2.1.1.6 文語四段-バ行

【例】
喜ぶ 聞き及ぶ

2.1.1.7 文語四段-マ行

【例】
惜しむ 打ち涙ぐむ

2.1.1.8 文語四段-ラ行

【例】
煽る 散る 思い切る

2.1.2 文語上一段活用

2.1.2.1 文語上一段活用-カ行

【例】
着る

2.1.2.2 文語上一段活用-ナ行

【例】
煮る 似る

2.1.2.3 文語上一段活用-ハ行

【例】
干る 簸る

2.1.2.4 文語上一段活用-マ行

【例】
見る 鑑みる 試みる

2.1.2.5 文語上一段活用-ヤ行

【例】
射る 鋳る

2.1.2.6 文語上一段活用-ワ行

【例】
居る 率る 用ゐる

2.1.3 文語上二段活用

2.1.3.1 文語上二段-カ行

【例】
起く 生く

2.1.3.2 文語上二段-ガ行

【例】
過ぐ

2.1.3.3 文語上二段-タ行

【例】
落つ 満つ

2.1.3.4 文語上二段-ダ行

【例】
閉づ 恥づ

2.1.3.5 文語上二段-ハ行

【例】
恋ふ 生ふ

2.1.3.6 文語上二段-バ行

【例】
浴ぶ 滅ぶ

2.1.3.7 文語上二段-マ行

【例】
恨む

2.1.3.8 文語上二段-ヤ行

【例】
老ゆ 悔ゆ 報ゆ

2.1.3.9 文語上二段-ラ行

【例】
降る 懲る

2.1.4 文語下一段活用

【例】
蹴る

2.1.5 文語下二段活用

2.1.5.1 文語下二段-ア行

【例】
得る 心得る

2.1.5.2 文語下二段-カ行

【例】
避く 溶く

2.1.5.3 文語下二段-ガ行

【例】
上ぐ 告ぐ

2.1.5.4 文語下二段-サ行

【例】
乗す 見す

2.1.5.5 文語下二段-タ行

【例】
当つ 捨つ

2.1.5.6 文語下二段-ダ行

【例】
出づ 撫づ 萌え出づ

2.1.5.7 文語下二段-ナ行

【例】
ぬ(寝)

2.1.5.8 文語下二段-ハ行

【例】
和ふ 終ふ ふ(経)

2.1.5.9 文語下二段-バ行

【例】
比ぶ 並ぶ

2.1.5.10 文語下二段-マ行

【例】
留む 止む

2.1.5.11 文語下二段-ヤ行

【例】
消ゆ 燃ゆ

2.1.5.12 文語下二段-ラ行

【例】
暮る 忘る

2.1.5.13 文語下二段-ワ行

【例】
植う 飢う

2.1.6 変格活用(文語)

2.1.6.1 文語カ行変格

【例】
来 疲れ来

2.1.6.2 文語サ行変格

【例】
す 接す 信ず 甘んず 強化す

2.1.6.3 文語ナ行変格

【例】
死ぬ

2.1.6.4 文語ラ行変格

【例】
あり 居り

2.1.7 五段活用

2.1.7.1 五段-カ行-一般

2.1.7.2 2.1.7.3 以外のカ行五段活用動詞

【例】
置く 聞く

2.1.7.2 五段-カ行-イク

語形が「イク」及び「～イク」のもの。連用形の音便形が促音便となる。

【例】
行く 吊り行く

2.1.7.3 五段-カ行-ユク

語形が「ユク」及び「～ユク」のもの。連用形の音便形がない。

【例】
行く 去り行く

2.1.7.4 五段-ガ行

【例】
嗅ぐ 泳ぐ

2.1.7.5 五段-サ行

【例】
差す 致す 話す

2.1.7.6 五段-タ行

【例】
立つ 持つ

2.1.7.7 五段-ナ行

【例】
死ぬ

2.1.7.8 五段-バ行

【例】
遊ぶ 学ぶ 立ち並ぶ

2.1.7.9 五段-マ行

【例】
済む 進む まどろむ 飛び込む

2.1.7.10 五段-ラ行

【例】
煽る 戻る

2.1.7.11 五段-ワア行-一般

【例】
追う 拾う 笑う

2.1.7.12 五段-ワア行-イウ

動詞「言う」及び動詞「言う」を末尾に持つ複合動詞。連用形が「ユウ」と発音されることがある。

2.1.8 上一段活用

2.1.8.1 上一段-ア行

【例】
居る 射る

2.1.8.2 上一段-カ行

【例】
生きる 出来る 尽きる

2.1.8.3 上一段-ガ行

【例】
過ぎる

2.1.8.4 上一段-ザ行

【例】
甘んじる 信じる 相通じる

2.1.8.5 上一段-タ行

【例】
落ちる 満ちる

2.1.8.6 上一段-ナ行

【例】
似る 煮る

2.1.8.7 上一段-ハ行

【例】
干る

2.1.8.8 上一段-バ行

【例】
浴びる 減びる 生き延びる

2.1.8.9 上一段-マ行

【例】
見る 試みる

2.1.8.10 上一段-ラ行

【例】
下りる 足りる

2.1.9 下一段活用

2.1.9.1 下一段-ア行

【例】
与える 得る 捨える

2.1.9.2 下一段-カ行

【例】
受ける 掛ける 助ける

2.1.9.3 下一段-ガ行

【例】
告げる 逃げる 申し上げる

2.1.9.4 下一段-サ行

【例】
着せる 見せる 読み参らせる

2.1.9.5 下一段-ザ行

【例】
かき混ぜる なぜる はぜる

2.1.9.6 下一段-タ行

【例】
当てる 捨てる 申し立てる

2.1.9.7 下一段-ダ行

【例】
出る 罷り出る

2.1.9.8 下一段-ナ行

【例】
寝る 撥ねる 破り兼ねる

2.1.9.9 下一段-ハ行

【例】
経る

2.1.9.10 下一段-バ行

【例】
焼べる 食べる 燻べる

2.1.9.11 下一段-マ行

【例】
定める 慰める 動き始める

2.1.9.12 下一段-ラ行-一般

【例】
入れる 下される 御来臨なされる

2.1.9.13 下一段-ラ行-呉レル

動詞「呉れる」及び動詞「呉れる」を末尾に持つ複合動詞。命令形に「～よ」「～ろ」の形がなく、「くれ」である。

2.1.10 変格活用（口語）

2.1.10.1 カ行変格

【例】
来る 求め来る

2.1.10.2 サ行変格

【例】
御覧ずる 覚悟する 持て成し参らせる

2.1.11 特殊型（-候）

「そろ」「そう」など「候（そうろ）う」の異語形で特殊な活用をするもの。

2.2 形容詞

2.2.1 口語活用

2.2.1.1 形容詞

【例】
良い 無い 高い 御心安い 外様がましい

2.2.2 文語活用

2.2.2.1 文語形容詞-ク

ク活用の形容詞。

【例】
白し 高し 有り難し

2.2.2.2 文語形容詞-シク

【例】
美し 楽し いみじ

2.3 助動詞

2.3.1 個別の活用型

次に挙げる助動詞の活用は、動詞・形容詞の活用と比べて個別であるため、例に示したように助動詞ごとに活用型を立てる。

〔文語助動詞〕
き けむ けり ごとし しも じ ず たり (完了) たり (断定) つ なり (断定) なり (伝聞) ぬ
べし まし まじ む むず めり らし らむ り

〔助動詞〕
げな じゃ た たい です なんだ まい ます れる・られる

【例】
ず ……活用型：文語助動詞-ズ
なり (断定) ……活用型：文語助動詞-ナリ-断定
げな ……活用型：助動詞-ゲナ

2.3.2 無変化型

【例】
う よう 候 (す) べい ろう

2.3.3 その他

2.3.1 以外の助動詞には、動詞・形容詞と同じ活用型を付与する。

【例】
さす ……活用型：文語下二段-サ行
まほし ……活用型：文語形容詞-シク
てくれる ……活用型：下一段-ラ行

2.4 接尾辞

「接尾辞-動詞的」は動詞の活用型を、「接尾辞-形容詞的」は形容詞の活用型を付与する。

【例】
難し ……活用型：文語形容詞-ク-一般
ばむ ……活用型：文語四段-マ行

2.5 活用型一覧

文語四段-〇行
 文語上一段-〇行
 文語上二段-〇行
 文語下一段-〇行
 文語下二段-〇行
 文語カ行変格
 文語サ行変格
 文語ナ行変格
 文語ラ行変格
 五段-〇行
 上一段-〇行
 下一段-〇行
 カ行変格
 サ行変格
 特殊型
 形容詞
 文語形容詞-ク
 文語形容詞-シク
 文語助動詞-キ
 文語助動詞-ケム
 文語助動詞-ケリ
 文語助動詞-ゴトシ
 文語助動詞-シモ
 文語助動詞-ジ
 文語助動詞-ズ
 文語助動詞-タリ-完了
 文語助動詞-タリ-断定
 文語助動詞-ツ
 文語助動詞-ナリ-伝聞
 文語助動詞-ナリ-断定
 文語助動詞-ス
 文語助動詞-ベシ
 文語助動詞-マシ
 文語助動詞-マジ
 文語助動詞-ム
 文語助動詞-ムズ
 文語助動詞-メリ
 文語助動詞-ラム
 文語助動詞-ラム
 文語助動詞-リ
 無変化型
 助動詞-ゲナ
 助動詞-ジャ
 助動詞-タ
 助動詞-タイ
 助動詞-デス
 助動詞-ナンダ
 助動詞-マイ
 助動詞-マス
 助動詞-レル

3 活用形

長単位に付与する活用形のうち、主なものを以下に挙げる。

3.1 語幹

3.1.1 語幹一般

3.1.2 以外の活用語の語幹。

【例】

【うれし】や ほそ【たへがた】と【おもしろ】やな

3.1.2 語幹-サ

いわゆる様態の助動詞「そうなり」が接続する場合の形容詞「良い」の語幹「良さ」。

3.2 未然形

3.2.1 未然形-一般

下記以外の未然形。

3.2.2 未然形-サ

助動詞「す」が接続する場合のサ変動詞「する」の未然形「さ」。

3.2.3 未然形-補助

文語形容詞の補助活用，文語形容詞型活用の助動詞の補助活用，文語助動詞「ず」の未然形「ざら」。

3.3 意志推量形

【例】

かかよう たとう まどろもふ 滅びよう 見よう

3.4 連用形

3.4.1 連用形-一般

下記以外の連用形。

3.4.2 連用形-〇音便

助動詞「たり」や接続助詞「て」が接続する場合の一般的な音便形。

3.4.3 連用形-融合

連用形と係助詞「は」とが融合したもの。また断定の助動詞「なり」の連用形「に」と助詞「て」が融合したもの。

【例】

ゆか【ざ】なるまひ
それ【で】もござなひ

3.4.4 連用形-省略

連用形の活用語尾が省略されたもの。

【例】

さて太郎が所へ【い】て
おれを【よびこ】でおひて

3.4.5 連用形-ト

文語助動詞「たり」の連用形「と」。

3.4.6 連用形-ニ

文語助動詞「なり」の連用形「に」。

3.4.7 連用形-補助

文語形容詞の補助活用，文語形容詞型活用の助動詞の補助活用，文語助動詞「ず」の連用形「ざり」。

3.5 終止形

3.5.1 終止形一般

下記以外の終止形。

3.5.2 終止形-撥音便

助動詞の終止形末尾が撥音便になったもの。

【例】
そうもん申さ【ん】 さこそくやしうおもふ【らん】

3.6 連体形

3.6.1 連体形一般

下記以外の連体形。

3.6.2 連体形-〇音便

【例】
馬にいね【こう】須磨の浦 (ウ音便)
誰かあはれと思ふ【らん】 あほうにて【御ざん】なり (撥音便)
然る【べい】者を召して (イ音便)

3.6.3 連体形-補助

文語形容詞の補助活用，文語形容詞型活用の助動詞の補助活用補助活用，文語助動詞「ず」の連体形「ざる」。

3.7 已然形

3.7.1 已然形一般

下記以外の已然形。

3.7.2 已然形-補助

文語形容詞の補助活用，文語助動詞「ず」の已然形「ざれ」。

3.8 命令形

【例】
ござれ おこせい 申あげい 御らん候へ

3.9 ク語法

【例】
古本に【いはく】 【仰ぎ願わく】は

3.10 ミ語法

形容詞のミ語法。短単位では形容詞語幹と接尾辞「み」に分割される。

【例】
山【ふかみ】

3.11 活用形一覧

語幹-一般
 語幹-サ
 未然形-一般
 未然形-サ
 未然形-補助
 意志推量形
 連用形-一般
 連用形-○音便
 連用形-融合
 連用形-省略
 連用形-ト
 連用形-ニ
 連用形-補助
 終止形-一般
 終止形-撥音便
 連体形-一般
 連体形-○音便
 連体形-補助
 已然形-一般
 已然形-補助
 命令形
 ク語法
 ミ語法

第4章 付加情報付与基準

ここでは、語彙素読み・語彙素、品詞の付与基準について述べる。

以下、説明の中で短単位の語彙素読み・語彙素、品詞について言及することがあるが、それらの詳細については、短単位規程集を参照。

第1 語彙素読み・語彙素付与の基準

長単位の解析は、短単位解析結果を基に長単位を自動構成する解析器を用いて行う。この長単位の自動構成では、例えば「|自然|言語|」という二つの短単位から「自然言語」という長単位を自動構成する（長単位境界を自動認定する）だけでなく、語彙素（「自然言語」）・語彙素読み（「シゼンゲンゴ」）・品詞（名詞-普通名詞-一般）等、長単位の付加情報も短単位が持つ語彙素読み・語彙素、品詞等の付加情報から自動構成する。

語彙素読み・語彙素の自動構成については、例えば「自然言語」のように構成要素となる短単位が非活用語で、それらが結合する際に連濁等の語形変化を伴わないのであれば、図2. 1に示すように短単位の語彙素読み・語彙素を単純に結合させることによって、長単位の語彙素読み・語彙素を得ることができる。

短単位語彙素読み	短単位語彙素	長単位語彙素読み	長単位語彙素
シゼン	自然	シゼンゲンゴ	自然言語
ゲンゴ	言語		

図2. 1 長単位「自然言語」の構成

しかし、単純に短単位の語彙素読み・語彙素を結合させるという方法では、長単位の語彙素読み・語彙素を正しく構成できない場合がある。その例を図2. 2に挙げる。

短単位語彙素読み	短単位語彙素	長単位語彙素読み	長単位語彙素
① ウィンドウズXP ウインドー エックスピー	ウインドー XP	ウインドーエックスピー	ウインドXP
② 振り込め詐欺 フリコム サギ	振り込む 詐欺	フリコムサギ	振り込む詐欺
③ 欧州連合 オウシュウ レンゴウ	オウシュウ 連合	オウシュウレンゴウ	オウシュウ連合

図2. 2 問題のある長単位語彙素読み・語彙素読みの構成例

- ①は、長単位の語彙素読み・語彙素としては、「ウィンドウズエックスピー【ウィンドウズXP】」※1となるのが正しい。しかし、短単位「ウィンドウズ」の語彙素読み・語彙素が「ウインドー【ウインドー】」であるため、短単位の語彙素読み・語彙素を結合させても正しい長単位の語彙素読み・語彙素は構成されない。このような問題は、「チュウイブカイ【注意深い】」のように、短単位どうしが結合する際に連濁を生じるものでも起こる。
- ②は、長単位の語彙素読み・語彙素を正しく構成するためには、終止形の形を取っている語彙素読み・語彙素ではなく、命令形の語形「フリコメ」と表記「振り込め」を自動構成に用いる必要がある。
- ③は、短単位では地名の語彙素が片仮名となっていることに起因するものである。「欧州」は書字形として登録されているので、長単位の語彙素の構成には書字形を用いる必要がある。

※1 語彙素・語彙素読みを併記する場合は、語彙素に【】を付ける。

このような問題を解決するために、長単位の語彙素読み・語彙素の構成に当たって、短単位の語彙素読み・語彙素ではなく、UniDicで言うところの「語形」「書字形」の層の情報を利用することとした。

我々は、BCCWJの形態論情報付与作業を効率的に行うために、形態素解析用辞書UniDicの基となる階層化された辞書見出しとコーパスを格納する「形態論情報データベース」を構築し、運用している※2。コーパス（短単位解析結果）は、このデータベース内で辞書見出しを活用展開させたテーブル「語彙表」と関連付けられている。長単位の語彙素読み・語彙素の構成に当たっては、この「語彙表」の以下に挙げる情報を利用することとした。

- 語形 : 語形の語頭・語末変化及び活用展開後の形式
 語形基本形 : 語形の終止形（活用語のみ）
 語形代表表記 : 語形の語頭・語末変化後の形式の代表表記。活用語の場合、語形基本形の代表表記（終止形）
 語形代表表記出現形 : 活用語における語形代表表記の活用展開後の形式

※2 「形態論情報データベース」については、小木曾・中村（2011）を参照。

形容詞「深い」を例に概略を説明する。形容詞「深い」は、次の図2. 3のように語形や書字形が展開される。

語彙素	語形	語頭変化形	語末変化形	活用形	出現書字形
フカイ	フカイ	フカイ	フカイ	フカク（連用形）	深く・ふかく・・・
				フカイ（終止形）	深い・ふかい・・・
				・	・
				・	・
フカイ【深い】	フカイ	フカイ	フカイ	フカク（連用形）	深く・ぶかく・・・
				フカイ（終止形）	深い・ぶかい・・・
				・	・
				・	・

図2. 3 形容詞「深い」の語形・書字形の展開例

長単位の語彙素読みを構成する際には、語形「フカイ」と語頭変化形「フカイ」を連用形等の各活用形に展開させたものを利用することとした。

また、UniDicでは「語形」の下に登録された各書字形に対して、「代表表記」という属性を付与している。この属性が付与されるのは、基本的に語彙素と表記が同じ書字形である。「深い」の語形「フカイ」「フカイ」の代表表記は、どちらも「深い」である。長単位の語彙素を構成する際には、この代表表記「深い」の終止形や各活用形に展開させたものを利用することとした。

語形・語形代表表記等を利用して長単位の語彙素読み・語彙素を構成するための、基本的な方針を整理して示すと、次のようになる。

方針1 語彙素読み・語彙素は短単位の語形とその代表表記を基に構成する。

先に挙げた「注意深い」について言えば、語形「フカイ」を用いることで、連濁形の「チュウイブカイ」という語彙素読みが構成される。また語彙素は、「フカイ」の代表表記「深い」を基に「注意深い」となる。

方針2 語の末尾以外の活用語は出現した活用形を基に語彙素読み・語彙素を構成する。

命令形「フリコメ（振り込め）」を長単位の語彙素読み・語彙素の構成に用いることができるようになるため、「フリコメサギ【振り込め詐欺】」という正しい語彙素読み・語彙素が得られる。

方針3 固有名詞- {人名, 地名} は出現書字形を基に語彙素を構成する。

出現書字形「欧州」を長単位の語彙素の構成に用いることができるようになるため、「欧州連合」という正しい語彙素が得られる。

以上のような方針を取ることで、図2. 2に挙げた「ウィンドウズXP」「振り込め詐欺」「欧州連合」の語彙素読み・語彙素が正しく構成されるようになる。しかしその一方で、次のような問題が生じることとなる。

本来、語形や表記が異なっても同じ語であれば、同じ語彙素読み・語彙素が与えられる。短単位を例にとると、「あんまり」と「あまり」には「アマリ【余り】」という語彙素読み・語彙素が、「コンピューター」と「コンピュータ」には「コンピューター【コンピューター】」という語彙素読み・語彙素が与えられる。これにより、「あんまり」と「あまり」、「コンピューター」と「コンピュータ」はそれぞれ同じ語の異語形として扱われる。しかし、長単位の語彙素読み・語彙素を構成するに当たって、上記の方針に示したように短単位の語形を利用すると、短単位では同じ語の異語形として扱われていたものが、長単位では別語として扱われることになる。（図2. 4参照）

短単位語彙素読み・語彙素	短単位語形	長単位語彙素読み・語彙素
①余り		
アマリ【余り】	アマリ	アマリ【余り】
	アンマリ	アンマリ【余り】
②コンピューター		
コンピューター【コンピューター】	コンピューター	コンピューター【コンピューター】
	コンピュータ	コンピュータ【コンピュータ】

図2. 4 短単位語形に基づく長単位語彙素の構成例

なお、「スイート」と「スイート」, 「アドヴァイス」と「アドバイス」のように書字形は異なるが語形が同一の場合は, 短単位の語形に基づき「スイート」「アドバイス」を語彙素読みとするため, 同じ語彙素の下にまとめられる。

また, 複数の短単位から構成される長単位についても, 構成要素となる短単位が複数の語形を持つ場合, その語形の違いが語彙素読み・語彙素に反映されるため, 別語として扱われるものが出てくる。図2. 5に挙げた「コンピューターシステム」がその例である。

元々の語彙素の設計方針から言えば, 「コンピュータシステム」と「コンピューターシステム」は, 同じ語の異語形として扱われるべきものである。それが別語として扱われることになる。

短単位と長単位とで, 同語としてまとめ上げる範囲に違いが生じることは, 望ましいこととは言えない。しかし, 短単位を基に長単位を自動構成するという手法を取る以上, 現時点では, 長単位では上記のような語彙素読み・語彙素とせざるを得ないのも, また事実である。長単位において短単位と同様の語彙素読み・語彙素を実現するのは, 今後の課題としたい。

短単位語彙素読み・語彙素	短単位語形	長単位語彙素読み・語彙素
コンピューター【コンピューター】	コンピューター	コンピューターシステム 【コンピューターシステム】
システム【システム】	システム	
コンピューター【コンピューター】	コンピュータ	コンピュータシステム 【コンピュータシステム】
システム【システム】	システム	

図2. 5 短単位語形に基づく「コンピューターシステム」の語彙素の構成例

なお, 長単位の語彙素については, 短単位の補助記号・記号もその構成要素となる。しかし, 補助記号・記号は語彙素読みを持たないため, 長単位の語彙素読みに補助記号・記号が反映されることはない。

このようなことから, 同じ語彙素読みであっても, 補助記号・記号の有無や種類の違いによって語彙素が異なる, つまり別語として扱われるものがある。(図2. 6参照)

出現形	長単位語彙素読み	長単位語彙素
維持向上 維持・向上	イジコウジョウ イジコウジョウ	維持向上 維持・向上
十一十二月期 十~十二月期	ジュウジュウニガツキ ジュウジュウニガツキ	十一十二月期 十~十二月期

図2. 6 補助記号・記号を含む長単位語彙素の構成例

1 凡例

1.1

長単位の語彙素読み・語彙素の構成に用いる短単位の情報を示す場合, 冒頭に「短」を付す。

1.2

長単位の語彙素読み・語彙素とそれを構成するのに用いる短単位の各種情報を以下のように示す。

【例】

出現書字形	やっぱり
短) 語彙素	矢張り
短) 語彙素読み	ヤハリ
短) 語形	ヤッパリ
短) 語形代表表記	矢っ張り

出現書字形	時間貸し駐車場
短) 語彙素	貸す
短) 語彙素読み	カス
短) 語形	ガシ
短) 語形代表表記	貸し

出現書字形	男っぽく
短) 語彙素	ぼい
短) 語彙素読み	ボイ
短) 語形	ッポク
短) 語形基本形	ッボイ
短) 語形代表表記	っぼい

1.3

品詞名について、「形状詞」「普通名詞-副詞可能」「固有名詞-一般」「人名-一般」「人名-姓」のように適宜略称を用いる。

2 語彙素読み

語彙素読みの構成に関する規定を以下に示す。

2.1

長単位の語彙素読みは、構成要素となる短単位の語形を基に構成する。

【例】

言葉	語彙素読み：コトバ
短) 言葉	語形：コトバ

ヴァラエティ	語彙素読み：バラエティ
短) ヴァラエティ	語形：バラエティ

日経NETWORK	語彙素読み：ニッケイネットワーク
短) 日経	語形：ニッケイ
NETWORK	語形：ネットワーク

風土記	語彙素読み：フドキ
短) 風土	語形：フド
記	語形：キ

聖路加国際病院	語彙素読み：セイロカコクサイビョウイン
短) 聖	語形：セイ
路加	語形：ロカ
国際	語形：コクサイ
病院	語形：ビョウイン

安倍清明	語彙素読み：アベノセイメイ
短) 安倍	語形：アベノ
清明	語形：セイメイ

2.2

活用する短単位を構成要素に含む場合、その長単位内の位置によって次のように語彙素読みを構成する。

2.2.1

長単位の末尾にある場合は語形基本形を基に語彙素読みを構成する。

【例】
 お会いし 語彙素読み：オアイスル
 短) お 語形：オ
 会い 語形：アイ
 し 語形基本形：スル

2.2.2

長単位の末尾以外にある場合は語形を基に語彙素読みを構成する。

【例】
 時間貸し駐車場 語彙素読み：ジカンガシチュウシャジョウ
 短) 時間 語形：ジカン
 貸し 語形：ガシ
 駐車 語形：チュウシャ
 場 語形：ジョウ

2.3

語形がない短単位を構成要素に含む場合、原則として、その短単位を無視して語彙素読みを構成する。

※web誤脱は、語形がない短単位として扱う。
 ※補助記号- {括弧開, 括弧閉} を構成要素に含む場合の例外規定を 4.1 に示す。
 ※固有名の名を表す部分が伏せ字化されているものについての例外規定を 4.2 に示す。

【例】
 M/T 語彙素読み：エムティー
 短) M 語形：エム
 / 語形：(なし)
 T 語形：ティー

九州・沖縄各県 語彙素読み：キュウシュウオキナワカクケン
 短) 九州 語形：キュウシュウ
 ・ 語形：(なし)
 沖縄 語形：オキナワ
 各県 語形：カクケン

(財) 家計経済研究所 語彙素読み：カケイケイザイケンキュウシヨ
 短) (財) 語形：(なし)
 家計 語形：カケイ
 経済 語形：ケイザイ
 研究 語形：ケンキュウ
 所 語形：シヨ

3 語彙素

語彙素の構成に関する規定を以下に示す。

3.1

長単位の語彙素は、構成要素となる短単位の語形代表表記を基に構成する。

【例】
 言葉 語彙素：言葉
 短) 言葉 語形代表表記：言葉

やっぱり 語彙素：矢っ張り
 短) やっぱり 語形代表表記：矢っ張り

真っ暗闇 語彙素：真っ暗闇
 短) 真っ 語形代表表記：真っ
 暗闇 語形代表表記：暗闇

シックスシグマ 語彙素：シックスσ
 短) シックス 語形代表表記：シックス
 シグマ 語形代表表記：σ

3.2

活用する短単位を構成要素に含む場合、その長単位内の位置によって次のように語彙素を構成する。

3.2.1

長単位の末尾にある場合は語形代表表記を基に語彙素を構成する。

【例】
お勧めでき 語彙素：御勧め出来る
短) お 語形代表表記：御
勧め 語形代表表記出現形：勧め
でき 語形代表表記：出来る

3.2.2

長単位の末尾以外にある場合は語形代表表記出現形を基に語彙素を構成する。

【例】
時間貸し駐車場 語彙素：時間貸し駐車場
短) 時間 語形代表表記：時間
貸し 語形代表表記出現形：貸し
駐車 語形代表表記：駐車
場 語形代表表記：場

3.3

補助記号を構成要素に含む場合、原則として補助記号を含めて語彙素を構成する。

※補助記号- {括弧開, 括弧閉} を構成要素に含む場合の例外に関する規定を 4.1 に示す。

【例】
巨人一阪神戦 語彙素：巨人一阪神戦
サッカー・キリンチャレンジカップ 語彙素：サッカー・キリンチャレンジカップ
劇団☆新感線 語彙素：劇団☆新感線

3.4

固有名詞-地名, 固有名詞-人名を構成要素に含む場合、当該部分は出現書字形を基に語彙素を組み上げる。

【例】

東京都	語彙素：東京都
短) 東京	出現書字形：東京
都	語形代表表記：都

あいち防災カレッジ	語彙素：あいち防災カレッジ
短) あいち	出現書字形：あいち
防災	語形代表表記：防災
カレッジ	語形代表表記：カレッジ

欧州連合	語彙素：欧州連合
短) 欧州	出現書字形：欧州
連合	語形代表表記：連合

聖路加国際病院	語彙素：聖路加国際病院
短) 聖	語形代表表記：聖
路加	出現書字形：路加
国際	語形代表表記：国際
病院	語形代表表記：病院

バナード・リーチ	語彙素：バナード・リーチ
短) バナード	出現書字形：バナード
・	語形代表表記：・
リーチ	出現書字形：リーチ

さつまいもパイ	語彙素：さつまいもパイ
短) さつまいも	出現書字形：さつまいも
パイ	語形代表表記：パイ

アカエゾマツ	語彙素：赤エゾ松
短) アカ	語形代表表記：赤
エゾ	出現書字形：エゾ
マツ	語形代表表記：松

あきたこまち	語彙素：あきたこまち
短) あきた	出現書字形：あきた
こまち	語形代表表記：こまち

神戸入りし	語彙素：神戸入りする
短) 神戸	出現書字形：神戸
入り	語形代表表記：入り
し	語形代表表記：する

3.5

固有名詞一般が構成要素に含まれる場合は、規定 3 を適用し、構成要素となる短単位の語形代表表記を基に語彙素を構成する。

【例】

Yahoo 掲示板	語彙素：ヤフー掲示板
短) Yahoo	語形代表表記：ヤフー
掲示	語形代表表記：掲示
板	語形代表表記：板

3.6

サ変動詞「する」、文語サ変動詞「す」の語形代表表記「為る」「為」は「する」「す」に置き換える。これを含む複合動詞も同様に扱う。

4.1 補助記号- {括弧開, 括弧閉} を構成要素に含む場合の扱い

補助記号- {括弧開, 括弧閉} を構成要素に含む場合は、括弧でくくられた語句の内容に従い、以下のように長単位の語彙素読み・語彙素を付与する。

4.1.1 語彙素読み

4.1.1.1

文中に括弧がある場合及び括弧でくくられた語句が文脈を補う場合は、括弧を除いた形を長単位の語彙素読みとする。

【例】
「告白」する 語彙素読み：コクハクスル
短) 「 語形：(なし)
告白 語形：コクハク
」 語形：(なし)
する 語形基本形：スル

4.1.1.2

括弧でくくられている語句がその前の部分と並列関係にある場合は、括弧を除いた形を長単位の語彙素読みとする。

【例】
肉ばさみ(重ね)パン 語彙素読み：ニクバサミガサネパン
短) 肉ばさみ 語形：ニクバサミ
(語形：(なし)
重ね 語形：ガサネ
) 語形：(なし)
パン 語形：パン

4.1.1.3

注釈的要素が括弧でくくられている場合は、括弧を除いた形を長単位の語彙素読みとする。

【例】
列車集中制御装置(CTC)化等
語彙素読み：レッシャシュウチュウセイギョソウチシーティーシーカトウ
短) 列車 語形：レッシャ
集中 語形：シュウチュウ
制御 語形：セイギョ
装置 語形：ソウチ
(語形：(なし)
CTC 語形：シーティーシー
) 語形：(なし)
化 語形：カ
等 語形：トウ

4.1.1.4

読み仮名が括弧でくくられている場合は、括弧及び括弧にくくられた読み仮名を除いた形を長単位の語彙素読みとする。

【例】
萎縮(いしゆく)する 語彙素読み：イシュクスル
短) 萎縮 語形：イシュク
(語形：(なし)
いしゆく 語形：イシュク
) 語形：(なし)
する 語形基本形：スル

4.1.1.5

以下のようなものは語として扱い、語彙素読みを「カッコナイ」とする。

【例】
() 内 [] 内 () 内

4.1.2 語彙素

4.1.2.1

文中に括弧がある場合及び括弧でくくられた語句が文脈を補う場合は、括弧を除いた形に基づいて、長単位の語彙素を付与する。

【例】
「時間稼ぎ」できる → 語彙素：時間稼ぎ出来る

4.1.2.2

括弧でくくられている語句がその前の部分と並列関係にある場合は、括弧を除いた形に基づいて、長単位の語彙素を付与する。

【例】

肉ばさみ(重ね)パン → 語彙素：肉挟み重ねパン

4.1.2.3

注的要素が括弧でくくられている場合は、括弧を除いた形に基づいて、長単位の語彙素を付与する。

【例】

列車集中制御装置(CTC)化等 → 語彙素：列車集中制御装置CTC化等

4.1.2.4

読み仮名が括弧でくくられている場合は、括弧及び括弧にくくられた読み仮名を除いた形に基づいて、長単位の語彙素を付与する。

【例】

萎縮(いしゆく)する → 語彙素：萎縮する

4.1.2.5

以下のようなものは語として扱い、語彙素を「括弧内」とする。

【例】

() 内 [] 内 () 内

4.2 伏せ字を含む固有名

固有名の名を表す部分が補助記号で伏せ字化されている場合、語彙素読みに補助記号を補う。

【例】

○○ちゃん 語彙素読み：○○ちゃん
短) ○ 語形：(なし)
○ 語形：(なし)
ちゃん 語形：ちゃん

4.3 複合辞・連語の語彙素読み・語彙素

4.3.1 語彙素読み

複合辞・連語の語彙素読みは、付属語と同様に、同一語の活用変化・ゆれ・省略・融合・補助記号の有無等によって生じた異なる形態をグループ化するものとする。グループ化の範囲には短単位で同語彙素別語形とされる可能形を含む。

【例】

わかりにくく	て	すいません	。	語彙素読み：スミマセン			
それで	、	帰っ	て	来	て	から	語彙素読み：ソレデ
だけど	全然	大丈夫	語彙素読み：ダケレド				
次の	世代	に	引き継い	で	いける	語彙素読み：テイク	
別の	葛藤	が	起こる	ん	じゃない	か	語彙素読み：ノデハナイ
文部科学省	におい	ちゃ	語彙素読み：ニオイテ				
替え	なければならず	、	語彙素読み：ナケレバナラナイ				

4.3.2 語彙素

複合辞の語彙素は原則として語彙素読みの平仮名表記とする。ただし、日本語能力試験1・2級の〈機能語〉の類のリスト等を参考に、短単位の語彙素に基づき、語彙素を付与することがある。連語については、構成要素となる短単位の語形代表表記を基に組み上げる。

4.4.1 語彙素読み

連語の語彙素読みは、付属語と同様に、同一語の活用変化・ゆれ・省略・融合・補助記号の有無等によって生じた異なる形態をグループ化するものとする。グループ化の範囲には短単位で同語彙素別語形とされる可能形を含む。

4.4.2 語彙素

連語の語彙素は、構成要素となる短単位の語形代表表記を基に組み上げる。

第2 品詞付与基準

長単位のうち短単位と境界が一致しているものの品詞は、原則として短単位の品詞と同じ品詞とする。また、長単位が複数短単位から構成される場合は、原則として構成要素の末尾に位置する短単位の品詞に基づいて長単位の品詞を付与する。以下に例を示す。

【例】
八十末社（名詞-普通名詞-一般）
短）八十 名詞-数詞
末社 名詞-普通名詞-一般
住居仕る（動詞-一般）
短）住まい 名詞-普通名詞-一般
仕る 動詞-一般

しかし、単独の短単位から成る長単位であっても、短単位の品詞をそのまま長単位の品詞にできない場合がある。また、複数の短単位から成る長単位においても、単純に構成要素末尾にある短単位に基づいて品詞等の情報を付与できないものがある。以下、それらについて品詞付与の基準を示す。なお、品詞名について、「形状詞」「普通名詞-副詞可能」「固有名詞-一般」「人名-一般」「人名-姓」のように適宜略称を用いることがある。

1 「名詞-普通名詞-〇〇可能」を構成要素末尾等を持つ長単位の品詞

短単位の普通名詞のうち、形状詞や副詞等としても使われ得る語には、「名詞-普通名詞-形状詞可能」「名詞-普通名詞-副詞可能」という曖昧性を持たせた品詞を与えている。これに対して、長単位では「名詞-普通名詞-〇〇可能」といった曖昧性を持たせた品詞は設けず、実際の文脈において名詞として使われているのか、形状詞として使われているのかなどを判断し、それに基づいて品詞を付与することとした。そのため、「名詞-普通名詞-〇〇可能」の短単位1語から成る長単位や、「名詞-普通名詞-〇〇可能」の短単位を構成要素末尾を持つ長単位について、どのような基準によって品詞を判定するのかが問題となる。そこで、品詞の判定基準を以下のとおり定めた。なお、「名詞-普通名詞-助数詞可能」については、規定 5.2 を参照。

1.1 短単位1語から成る長単位

短単位1語から成る長単位については、以下の判別基準に従う。

1.1.1 「名詞-普通名詞-副詞可能」の名詞/副詞の判別

1.1.1.1 時を表す要素

時を表す要素は名詞とする（時の副詞を「副詞」としない）。

【例】
秋（アキ） 朝（アサ） 明日（アシタ・アス） 後（アト） 今（イマ） 折（々）（オリ（オリ）） 昨日（キノウ） 今日（キョウ） 今年（コトシ） 頃（コロ） 先（々）（サキ（ザキ）） 時（々）（トキ（ドキ）） 年（トシ）
夏（ナツ） 後（々）（ノチ（ノチ）） 春（ハル） 冬（フユ） 前（マエ） 昔（ムカシ） 夜（ヨル）

1.1.1.2 数量詞

以下に挙げるものは数量詞として名詞とする（連用修飾していても名詞とする）。

一生（イッショウ） 一昨年（オトトシ） 一日（ツイタチ） 一人・独り（ヒトリ）
一人一人（ヒトリヒトリ） 二人（フタリ）

1.1.1.3 文脈に沿って判断するもの

上記以外の語は、文脈によって名詞か副詞かを判断する。以下に判断の目安を示す。1.2.2 も合わせて参照のこと。

1.1.1.3.1 副詞とするもの

1.1.1.3.1.1 連用修飾成分として機能しているもの

【例】
【一切】下馬の礼にも及ばず、
ぞんじた者に【みな】あふてござる
それは【近比】かたじけなひ
【おりふし】たのふだものおもてへ出られた程に
【よろづ】にはとりのごとくにせよ

1.1.1.3.1.2 副助詞・係助詞（「は」「まで」は除く）が後接するもの

【例】
ふたりして【半分】つとらふ
【各々】もさやうに仰せらるるよ
あの木をば【自ら】こそ植えさせられたが

1.1.1.3.2 名詞とするもの

1.1.1.3.2.1 文末に用いられているもの

【例】
これお聞き有れ【各々】：

1.1.1.3.2.2 連体修飾を受けているもの

【例】
むさとしたる事いわたると云【心もち】
我等の【あたり】からもつれがあまたござるが
此いそがしひ【おりふし】、才覚にきてくれたれ

1.1.1.3.2.3 格助詞が後接しているもの

【例】
【一切】の生をうけたるものの、じきをもとめぬは御ざなひ程に
【みな】がきらわるるに依て
一つつつなりとも、【各】へしんぜたひが
【よろづ】の事もねがひのまま

1.1.2 「名詞-普通名詞-（サ変）形状詞可能」の名詞／形状詞の判別

名詞-普通名詞-（サ変）形状詞可能が単独で一長単位となる場合の品詞の判断基準は、1.2.3 に従う。

【例】
その他には【哀れ】を掛けうずる者有らうずるとも存ぜぬ →名詞-普通名詞-一般
真に【哀れ】な事で御座る。 →形状詞-一般

1.2 複数の短単位から成る長単位

複数の短単位から成る長単位のうち、その末尾に「名詞-普通名詞-〇〇可能」が位置するものは、次に示す基準により品詞の判定を行う。

1.2.1 名詞-普通名詞-サ変（形状詞）可能

サ変動詞「す」及び形式的な意味の「致す」「参る」「仕る」「召す」が直接するものは、全体で一長単位の動詞とする（第2章 第1 5.2 を参照）。これらが直接していないものは名詞とする。
なお、名詞-普通名詞-サ変形状詞可能を構成要素の末尾に持つ長単位は、規定 1.2.3 によって名詞か形状詞かの判定を行う。

【例】

鼓判官は【戦奉行】をして →名詞-普通名詞-一般
かたきももたぬ【つめようじん】、是先一つ無用なり →名詞-普通名詞-一般

1.2.2 名詞-普通名詞-副詞可能

名詞-普通名詞-副詞可能を構成要素の末尾に持つ長単位の品詞（名詞・副詞）の判定基準は、以下のとおりとする。

1.2.2.1 副詞

以下のいずれかに該当する場合は副詞とする。

1.2.2.1.1

単独で連用修飾成分になっているもの。

【例】

E s o p o を寵愛有って忝くも【御身近う】召し置かせられた。

1.2.2.1.1.1

ただし、文節の一部のみが連用修飾成分になっている場合（記号が長単位冒頭にある場合等を除く。）は名詞とする。

1.2.2.1.2

副助詞・係助詞・接続助詞が後接して、連用修飾成分になっているもの（「まで」は除く。）

【例】

【自今以後】も汝等良う心得い：

1.2.2.1.3

他の副詞や連体詞を修飾しているもの。

【例】

【カンヌ史上】初めて公式審査員の会見が開かれ

1.2.2.1.4

述語となる名詞を修飾しているもの。

【例】

前は、前々回九十三年の五十一・四三%から一気に【十ポイント以上】低下。

【各年とも】5月1日現在の値。

藤瀬さんは【事件当日夜】、松江被告も出入りしていた武雄市のスナックで飲食。

1.2.2.1.5

副詞と認め得るもの。

【例】

いくら【一生懸命】働いても給料は同じ、チップもない。

【前年同様】、アジア地域が6割を超え、

1.2.2.2 名詞

上記 1.2.2.1 に該当しないものは名詞とする。名詞とするもののうち、特に注意を要するものを、以下に挙げる。

1.2.2.2.1

文末に用いられているもの。単独で文・見出し・箇条書き等になっているもの。

【例】
それならば【なんぢ次第】

1.2.2.2.2

連体修飾を受けているもの。

【例】
聖の御坊の【御俣】と申した。

1.2.2.2.3

数を表す要素に直接係っているもの。

【例】
【御年】十三四ばかりにおはす。

1.2.2.2.4

格助詞が後接しているもの。当該の長単位と並列の関係にある語句（文節を越えるものを含む）に格助詞が後接しているもの。

【例】
心は先に進んだれども、【馬次第】に歩ませたに、
【しゆえんなかば】のさるのきやう

1.2.2.2.5

助動詞が後接しているもの。

【例】
どなたへ参らふずると【しあんなかば】にて御ざ有が

1.2.2.2.6

前後の体言と同格関係にあるもの（読点をはさんでいる等、対応するものが複数文節であっても同格関係を認める）。

【例】
【岩田慶治氏ほか】民俗研究者が
噴火から【一週間後】、十一月二十一日

1.2.2.2.7

名詞と認め得るもの。

1.2.3 名詞-普通名詞-（サ変）形状詞可能

名詞-普通名詞-（サ変）形状詞可能を構成要素の末尾に持つ長単位の品詞（名詞・形状詞）の判定基準は、以下のとおりとする。

1.2.3.1 形状詞

以下のいずれかに該当する場合は形状詞とする。

1.2.3.1.1

助動詞「なり」の連体形「な」・「なる」を伴って連体修飾しているもの。

【例】
一だん【ぶじゆう】なまひやうな
扱も【無果報】なEsopo哉！

1.2.3.1.2

助動詞「なり」の連用形「に」を伴って連用修飾しているもの。

【例】
紂王をほろぼし、【天下安全】になすべし
楊梅桃李の梢も【折知り顔】に色々に咲き乱れて

1.2.3.1.3

形状詞の構成要素と並列・同格関係にあるもの。

【例】
目標に対して【迅速・正確】かつ柔軟に攻撃力を指向することが可能となる。
国内の森林所有構造が【小規模】、分散的であり、

1.2.3.1.4

形状詞と認め得るもの。

【例】
君も、ずいぶんわからずやの、【意地っ張り】であったね。
【高効率】な発電ができるブレード形状を開発し、
皆さんが一番良く【ご存知】なものは、

1.2.3.2 名詞

上記 1.2.3.1 に該当しないものは名詞とする。名詞とするもののうち、特に注意を要するものを、次に挙げる。

1.2.3.2.1

文末に用いられているもの。単独で文・見出し・箇条書き等になっているもの。

【例】
誠に【天下太平】、【国土安全】、

1.2.3.2.2

主格・対格・与格に立っているもの。副助詞・係助詞が後接しているもの。

【例】
うたに【できふでき】がござらふ程に
殊に【御不憫】を加えられて
いつもより【お仕合】もよう御ざるほどに

1.2.3.2.2.1

長単位の末尾となる短単位の品詞が接尾辞-形状詞的、形状詞-一般の場合も、主格・対格・与格に立っている場合は名詞とする。

【例】
涙の進んだを余所に【弱気】を見えまじいとてか

1.2.3.2.3

格助詞「と」が後接しているもの。

【例】
【もろぐわほう】とはそなたの事じや程に
【是生滅法】と響なり

1.2.3.2.4

数を表す要素が後接しているもの。

【例】
3連休の【水難事故死者・不明】三十三人に

1.2.3.2.5

名詞と認め得るもの。

1.2.3.3

意味に余り差がなく、形状詞、名詞のどちらでもよい以下の例については、形状詞、名詞の優先順位で品詞を付与する。

1.2.3.3.1

格助詞「の」が後接し、助動詞「なり」の連体形「な」・「なる」に言い換え可能であるもの。

【例】
それに付てそなたは【大くわほう】の人じや
【至極甚深】の床の上には真理の玉を磨くかと見え

1.2.3.3.1.1

以下の例のように、「な」に言い換え不可能な場合は名詞とする。

【例】
【おやかう / \】のためといひ、ことわりといひ

2 人名の扱い

人名に関わるものについては、以下の基準に従って品詞を付与する。

2.1 特定の個人の名前（姓，名，姓名，通称等）を指し示しているもの

特定の個人の名前（姓，名，姓名，通称等）を指し示しているものは人名とし、以下のように品詞を付与する。

2.1.1 構成要素に人名- {姓，名，一般} を含むもの

【例】

〔人名-姓〕

あさいな さなだ 北条殿 平相国 ばん大納言 かんせうじやう 巨勢氏 はくごうすさま
長兵衛 源三位入道 藤原氏 手塚の別当

〔人名-名〕

なりひら 藤六 与市殿 兵衛の助頼朝 八郎ためとも 山城判官行村 おとごぜ
清盛 讃岐の守正盛 高望の王 忠雅公 時忠の卿 次男宗盛 仲綱奴

〔人名-一般〕

平家 源氏 そせい法師 孟嘗君 すいにん天皇 さるまる太夫
土肥の次郎実平 正二位源実朝 後藤兵衛の尉守長 さとうびやうへのりきよ
Esopo Lycero帝王 桓武天皇 鳥羽の院 浄憲法印 石童丸 国母建礼門院
大將軍李少卿 梶原平三景時 在原の業平 東方朔 平大納言時忠卿

※短単位品詞「人名-姓」「人名-名」の両方を含む場合、長単位品詞は「人名-一般」とする。

※「人名-姓」と普通名詞の「太郎・二郎」等により姓名の形式を取る場合には長単位品詞を「人名-一般」とする。

例) 大場の三郎 熊井太郎 亀井の六郎

2.1.1.1

複数の人名を並列したものは普通名詞とする。規定 2.2.1 を参照。

2.1.2 構成要素に人名-〔姓、名、一般〕を含まないもの

構成要素に人名を含んでいなくても、長単位の品詞を人名とすることがある。以下にその基準を示す。

2.1.2.1 人名とするもの

2.1.2.1.1 帝・院・その他武家・公家の男性

帝・院・その他の武家・公家の男性のうち、地名と官職・官位等の組み合わせにより個人を特定できる呼称は「人名-一般」とする。また地名を含まなくても個人を特定できる通称がある場合は「人名-一般」とする。

【例】

〔地名を含むもの〕

紀伊の二位 木曾の冠者 小松の新三位 丹波の少将 伊賀の太夫 七条の修理の大夫 小松の三位
中将 矢田の判官 越中の次郎兵衛 熊野の別当 阿波の民部

〔通称〕

池の大納言 悪七兵衛

2.1.2.1.1.1

ただし、国司に相当するものは特定の個人を指し示していたとしても固有名詞とはしない（2.1.2.2.2 参照）。

2.1.2.1.2 中宮・后・その他武家・公家の女性

中宮・后・その他武家・公家の女性について、通称・建物名・地名・官位（本人・父・夫）・出自を伴うことで特定の個人を表すものについては「人名-一般」とする。

【例】

阿波の内侍 京極のみやす所 小宰相の局 そめどののきさき

2.1.2.2.1 官職・官位・地位の名称

地名を含まず、官職・官位・地位の名称等のみの場合には固有名詞としない。

【例】

右大將 太政大臣 右のおとど 右衛門の守 四位の兵衛の助 少將殿 三位の中将 左衛門の太夫 新大納言

2.1.2.2.2 国守を表すもの

国守を指し示すものは、地名を含んでいても人名としない。

【例】
さつまの守 上総の守 越中の前司
※いずれも全体で1長単位の普通名詞とする。

2.1.2.2.3 「地名+殿」，および地名単独で用いられるもの

「地名+殿」の形式および地名単独で用いられているものは、それが明らかに特定の個人を指し示している場合でも人名としない。「地名+殿」は普通名詞，地名単独の場合は短単位品詞に従い長単位も地名とする。

【例】
〔普通名詞—一般〕
能登殿 小松殿 丹後殿
〔地名—一般〕
木曾（源義仲を指す）

2.1.3 個別に判断するもの

以下に挙げるものは、「～」の部分で品詞を個別に判断する。

2.1.3.1 「前（さき）の～」

「前（さき）の～」全体で1文節（付属語の例外）・1長単位とする。

【例】
〔普通名詞〕
前の関白大かう
〔人名—一般〕
先の右兵衛の助頼朝 ※「先の右兵衛の助」と「頼朝」が同格のため全体で1長単位となる

2.1.3.2 「故～」

【例】
〔普通名詞〕
故太政入道 故左馬の守殿
〔人名—一般〕
故建春門院
※「故」がかかる語句までで1長単位

2.1.3.3 「～院」

「～院」全体で1長単位とする。

【例】
〔人名—一般〕
|くわさんの院|
〔普通名詞〕
|寂光院|と|申す|所|こそ|

2.1.4 神仏名

神仏名のうち、日本神話、仏教、ギリシャ・ローマ神話関連の神、キリスト教関連の天使、人間由来の神・仏・聖人の名は人名—一般とする。

【例】
いざなぎの尊 観音菩薩

2.1.4.1

2短単位以上から成る神仏名で、構成要素に「固有名詞-人名」を含まず「固有名詞-一般」のみを含む場合も、上記に該当する神仏であれば長単位品詞は「人名—一般」とする。

【例】
釈迦如来 毘沙門天王 えんま大王

2.2 特定の個人の名前（姓，名，姓名，通称等）を指し示していないもの

構成要素に人名- {姓，名，一般} を含んでいても，長単位全体が特定の個人の名前（姓，名，姓名，通称等）を指し示していない場合は，人名として扱わない。

【例】
平家ぶし（名詞-普通名詞-一般）
平家物語（名詞-普通名詞-一般）

2.2.1

指し示す人物が明確でない場合や人名の並列，複数の人物を指し示す場合は普通名詞-一般とする。

【例】
四条家 源氏共 長茂主従 いま若さる若中若 河原弟兄 仲頼以下 新五新六

3 地名の扱い

地名に関わるものについては，以下の基準に従って品詞を付与する。

3.1

特定の国，行政区画及び地形等の名を表すものは地名とし，以下のように品詞を付与する。

【例】
〔地名-国〕
日本 唐 高麗 震旦 はくさいこく E g y p t o
〔地名-一般〕
大和の国※ もとすの郡※ 竹生島 ふじ山 いるま川 B a b i l o n i a E u r o p a

※律令制における「～の国」「～の郡（こおり）」は一続きで1長単位。

3.1.1

構成要素に地名- {国，一般} を含んでいなくても，長単位全体として地形を指し示している場合は地名として扱う。

【例】
放生川
※放生会のときに魚を放してやる川のため，短単位「放生」は普通名詞。ただし文脈上特定の川を指していることが明らかなら長単位品詞は地名一般とする。

3.2

構成要素に地名- {国，一般} を含んでいても，長単位全体として特定の国，行政区画及び地形等を指し示していない場合は，地名として扱わない。

【例】
〔普通名詞-一般〕
いるまやう 熊野詣で 伊勢物がたり むさしあぶみ はりまがみ たうずまふ

3.2.1

路線・航路・海路名，道路などの一部を構成する建造物，公園・競技場・動植物園・牧場・寺社・古墳・遺跡・基地は地名としない。普通名詞-一般とする。

【例】
三井寺 伊勢太神宮 丹波路 鹿野苑 五智院 宇治橋

3.2.2

指し示す国や場所等が明確でないものや地名の並列は、普通名詞一般とする。

【例】
備前備中備後 宇治瀬田 みこしち 西の宮辺 明石表 五条あたり

4 固有名詞の扱い

人名・地名以外の固有名詞の扱いについて述べる。

4.1 固有名詞とするもの

短単位品詞が「固有名詞一般」の語がそのまま一長単位と成る場合は、長単位品詞も「固有名詞一般」とする。構成要素に「固有名詞一般」を含み複数の短単位から成る長単位で、屋号など固有名詞と解釈できるものは長単位品詞を「固有名詞一般」とする。なお、室町時代編においては、原則として構成要素に「固有名詞一般」を含まないものの長単位品詞を「固有名詞一般」にすることはしない。

【例】
生食 摺墨 びしやもん かくすい 保元 平治
※短単位品詞が「固有名詞一般」のため長単位品詞も「固有名詞一般」とする。

大こくや
※屋号と見て長単位品詞を「固有名詞一般」とする。

4.2 固有名詞としないもの

構成要素に固有名詞一般を含んでいても、以下のような場合は固有名詞一般としない。

4.2.1

組織名・建物名（寺社名を含む）は原則として普通名詞一般とする。

【例】
〔普通名詞〕
二条院 仁和寺

4.2.2

民族・国民名，王朝・時代名，流派・宗派・家系名，文明・文化名は，原則として普通名詞一般とする。

【例】
日本人 日本語 高麗朝 平安時代 二天一流 赤松家

4.2.2.1

ただし、短単位と境界が一致している長単位で、民族・国民名，王朝・時代名，流派・宗派・家系名，文明・文化名を表す場合は、短単位の品詞を長単位の品詞とする。

4.2.3

指し示す対象が明確でない場合や固有名詞の並列は普通名詞一般とする。

【例】
ゑびす大こく 保元平治

4.2.4

構成要素に「固有名詞一般」を含んでいても、長単位全体で固有名詞を表さない場合は「普通名詞一般」とする。

【例】
ゑんまがほ 大黒れんが 文殊経 あみだ経

4.2.5

構成要素に「固有名詞-一般」を含んでいても、日本神話、仏教、ギリシャ・ローマ神話関連の神、キリスト教関連の天使、人間由来の神・仏・聖人名の場合は「人名-一般」とする。2.1.4.1を参照。

【例】

しやか大師 住吉大明神

5 数詞の扱い

5.1 数詞の範囲

5.1.1 数詞とするもの

以下、「助数詞」とあるのは、短単位の品詞が「接尾辞-名詞的-助数詞」のもの及び「普通名詞-助数詞可能」のうち助数詞として用いられているものである。

5.1.1.1 1個以上の数詞（分数の読み上げを含む）

【例】

一 二十五 十分が一分

5.1.1.2 1個以上の数詞+助数詞

【例】

ひとつ 二羽 三本 五日 百疋

5.1.1.3 1個以上の数詞+助数詞+接尾辞-名詞的-一般

数詞+助数詞の後に、接尾辞-名詞的-一般「目」が後続するものは数詞とする。

【例】

三つめ 二段目

5.1.1.4 接頭辞+1個以上の数詞

【例】

第一

5.1.1.5 接頭辞+1個以上の数詞+助数詞

【例】

両三度 両三日

5.1.2 数詞としないもの

上記 5.1.1 以外の構成要素から成るものは、数詞としない。特に注意が必要なものを次に挙げる。

5.1.2.1 1個以上の数詞+接尾辞-名詞的-一般

名詞-普通名詞-一般とする。

【例】

一粒（いちりゅう） 二荷（ふたかけ） 三人（さんにん） 十四束（じゅうしそく）

5.1.2.2 1個以上の数詞+名詞-普通名詞-一般

名詞-普通名詞-一般とする。

【例】
三所 一朝 ひとひ

5.1.2.3 1個以上の数詞＋{名詞-普通名詞, 接尾辞-名詞的} - {副詞可能, 形状詞可能, サ変可能, サ変形状詞可能}

規定 1.2 に従い, 名詞・副詞・形状詞・動詞の判別を行う。

5.2 名詞-普通名詞-助数詞可能の扱い

長単位では, 名詞-普通名詞-助数詞可能を設けない。名詞-普通名詞-助数詞可能のうち助数詞用法ではないものは, 名詞-普通名詞-一般を付与する。

5.2.1

規定 5.1 に示したように, 名詞-普通名詞-助数詞可能のうち助数詞用法のものは, 原則として数詞の構成要素となる。ただし, 空白・括弧等の挿入によって助数詞用法の名詞が単独で長単位となった場合は普通名詞-一般とする。

6 動詞・形容詞の扱い

長単位では, 動詞-非自立可能, 形容詞-非自立可能という品詞を設けない。動詞-非自立可能, 形容詞-非自立可能の短単位が単独で長単位となる場合, 及び長単位の末尾に位置する場合, その長単位の品詞は, 動詞-一般, 形容詞-一般とする。

7 複合辞・連語の扱い

複合辞・連語は以下の基準により品詞を付与する。それぞれの複合辞・連語に付与された品詞については 第1章 第2 1.1, 第1章 第2 1.2 のリストを参照のこと。

7.1 複合辞

複合辞の品詞については, コーパスでの用法をもとに決定した。助詞に関しては, 名詞に接続するものを格助詞, 動詞・助動詞に接続するものを接続助詞とした。

7.2 連語

連語の品詞付与に当たっては, コーパスでの用法のほか, 『岩波国語辞典』第6版(岩波書店), 『日本国語大辞典』第2版(小学館)を参考にした。

8.1 接尾辞-〇〇的

接尾辞-〇〇的接尾辞-{形状詞的, 形容詞的, 動詞的}が長単位の末尾に位置する場合, その長単位の品詞は, 形状詞-一般, 形容詞-一般, 動詞-一般とする。長単位認定規程の規定 第2章 第1 5.8 によってこれらの接尾辞が切り離された場合には, 短単位の品詞を付与する。

8.2 接尾辞-名詞的-〇〇可能

長単位では, 接尾辞-名詞的-{副詞可能, 形状詞可能, サ変可能, サ変形状詞可能}を設けない。接尾辞-名詞的-{副詞可能, 形状詞可能, サ変可能, サ変形状詞可能}が長単位の末尾に位置する場合, その長単位の品詞は 1 に従い, 名詞・形状詞・副詞・動詞の判別を行う。第2章 第1 5.8 によってこれらの接尾辞が切り離された場合には, 接尾辞-名詞的-一般を付与する。

8.3 接尾辞「み」の扱い

「み」(接尾辞-名詞的-一般; コメント「ミ語法」)を結合した形式は1長単位とし, 活用形を「ミ語法」とする。また, 並列を表す「み」(接尾辞-名詞的-副詞可能; 語義「並列」)を結合した形式を1長単位とし, 品詞を副詞とする。

【例】
(山)ふかみ →形容詞-一般・文語形容詞-ク・ミ語法
泣きみ(笑ひみ) →副詞

9 その他

構成要素の末尾となる短単位の品詞に基づくことなく、文脈に応じて例外的に長単位の品詞を決定する場合があります。代表的な例を以下に挙げる。

9.1 副詞

【例】
御ぞんじなくは、【路次すがら】おしへてしんぜう

9.2 形状詞

【例】
そのやうに【りふじん】な事をおしやつたといふても、

短単位

短単位は、言語の形態的側面に着目して規定した言語単位である。短単位の認定に当たっては、まず現代語において意味を持つ最小の単位（最小単位）を規程する。その上で、最小単位を短単位認定規程に基づいて結合させる（又は結合させない）ことにより、短単位を認定する。そのため、短単位の認定規程は、最小単位と短単位の二つの認定規程から成る。

《凡例》

- 以下の規程に示した例は、コーパスに現れた例又は作例である。「室町時代編」のコーパスに適例が見つからない場合、他の時代のコーパスから挙例した。なお、例の引用に際し、表記をわかりやすく改めたところがある。
- 最小単位・短単位の境界を示すために次の記号を用いた。
最小単位の境界 …………… / 例： / 国 / 立 / 国 / 語 / 研 / 究 / 所 /
短単位の境界 …………… || 例： | 国立 | 国語 | 研究 | 所 |
短単位の境界（当該規程で着目している箇所） …………… || 例： | 国立 | 国語 | 研究 || 所 |
- 最小単位・短単位について分割しないことを特に示す必要があるときには、次の記号を用いた。
最小単位・短単位のつなぎ目 …………… - 例： | 大-丈夫 | です |
最小単位・短単位のつなぎ目（当該規程で着目している箇所） …………… = 例： | パソ=コン | を | 使う |
- 着目している最小単位・短単位がわかりにくい場合は、当該箇所を【 】で囲った。

第1章 最小単位認定規程

第1 最小単位認定規程

最小単位は、現代語において意味を持つ最小の言語単位のことである。

最小単位は、和語・漢語・外来語・記号・数・人名・地名の種類ごとに、以下の規程によって認定する。

和語・漢語・外来語の語種の判定は、原則として『新潮現代国語辞典』第2版（新潮社）による。『新潮現代国語辞典』第2版の見出しにない語は、『日本国語大辞典』（第2版）（小学館）を主たる資料として語種判定を行う。また、『新潮現代国語辞典』第2版の語種判定に従い難いと判断した場合は、『日本国語大辞典』第2版等を参照し、独自に語種を判定した。

室町時代編における最小単位についても、現代語との関連を重視して、原則として現代語を対象とした最小単位認定規程を適用する。現代では用いない語についても、原則として同様の扱いとする。

1

ただし必要に応じて、使用実態に基づき、個別の判断をすることがある。例えば、次に挙げるような語である。

【例】

/ 異 / なる / :

『日本国語大辞典』第2版では、動詞「異なる」の用例は、明治時代からであり、それ以前は形状詞「異（こと）」+助動詞「なり」と扱っていることによる。

2 和語

和語の最小単位は、以下の例のように認定する。

【例】

/ この / あき / なべ / と / いふ / もの / にて /

2.1 融合形

融合形は、元の形に戻さずに、融合している複数の最小単位全体で1最小単位とする。

【例】

/ とが / ぎ / なる / まひ / が / (とがずは) / かる / が / ゆへ / に / (かあるがゆへに) / おい / に / けらし /
/ な / (けるらし) / そなた / も / それ / ほど / に / おも / やれ / ば / (おおもいあれ) / 哥 / よみ / で / おり /
やる / よ / (おいりある)

2.2 省略形

省略形は、元の形に戻さずに、可能な範囲で最小単位を認定する。その際、元の形との対応をできる限り取るよう留意する。

【例】
わ／ごりよ／が／おれ／を／よび／【こ】※／で／おい／て

※ 元の形「よびこんでおいで」との対応を可能な限り取るように、「こ」を、動詞「込む」の連用形撥音便「こん」の省略された形と考えて、最小単位の認定を行う。

2.3 分割不可

現代語において分割することができない、若しくは分割することが適切でないと考えられるものは、分割せずに全体で1最小単位とする。ただし、室町時代編における使用状況から、分割することがある。

【例】
／いなづま／　／えがく／

／異／なる／
※現代語では分割しないが、「室町時代編」では分割する。

2.4 前の要素に含め1最小単位としない語

次に挙げるものは、それだけで1最小単位とせずに前の要素に含める。

2.4.1 形容詞語尾

【例】
／さむ=し／　／ひろ=く／　／うれ=しから／

2.4.2 形状詞語末「か」「やか」「らか」

【例】
／しず=か／　／にぎ=やか／　／つまび=らか／

2.4.3 動詞の活用語尾

【例】
／おも=ふ／　／ひろ=ふ／　／はか=る／

2.4.4 いわゆる副詞語尾「と」

【例】
／くわつ=と／　／しか=と／　／そつ=と／　／つつ=と／　／とう=ど／　／どつ=と／　／はつた=と／
／ひた=と／　／まんま=と／　／むさ=と／

2.4.5 助数詞「とり（たり）」

【例】
／ひ=とり／　／ふ=たり／

2.4.5.1

「ひとり」「ふたり」以外（例：みたり、よたり、いくたり）については、助数詞「たり」を前の要素に含めず、1最小単位とする。

【例】
／いく／たり／

2.4.6 延言の「く」

【例】
／いは=く／　／のたまは=く／

2.4.7 コソアド類の各語末

【例】
／こ=れ／ ／そ=れ／ ／そ=こ／
／あち=ら／ ／ど=れ／ ／ど=こ／
／た=れ／ ／いづ=れ／

2.5 前後の要素にまとめないもの

次に挙げるものは、前又は後ろの要素にまとめずに助詞・助動詞と同様に単位を認定する。

2.5.1 接続詞・接続助詞の構成要素となっている助詞・助動詞

【例】
／さら／ば／ ／しかれ／ども／ ／ならび／に／ ／もの／の／ ／もの／を／

2.5.2 いわゆる形容動詞、いわゆる形容動詞活用型の助動詞の変化部分

【例】
形容動詞 : ／静か／なり／ ／見事／なり／
形容動詞型活用の助動詞: ／さう／なり／ ／やう／なり／

2.5.3 いわゆる副詞語尾「に」

【例】
／こと／に／ ／さら／に／ ／げ／に／

2.5.4 「動詞連用形+て」から副詞に転じた語の接続助詞「て」

【例】
／せめ／て／ ／定め／て／

2.6 副詞「と」「かく」を構成要素に含む語

副詞「と」「かく」を構成要素に含む語については、副詞「と」「かく」を1最小単位とした上で、他の要素もそれぞれ1最小単位とする。

【例】
／と／かく／ ／と／に／かく／に／ ／と／も／かく／も／

2.7 感動・呼び掛け・応答など

感動・呼び掛け・応答などの1回の描写を1最小単位とする。

【例】
／あら／ ／いで／ ／やい／

2.8 言いよどみ

言いよどみに伴う語の断片は、1最小単位とする。

【例】
／う／うし／や／

3 漢語

漢語（和製漢語を含む。）は、漢字1文字で表されるものを1最小単位とする。

【例】
／次／第／ ／拍／子／ ／果／報／者／ ／百／疋／

4 外来語

外来語・外国語は原語で1単語になるものを1最小単位とする。外来語・外国語に漢字を当てたものも外来語・外国語として扱う。

【例】
／菩薩／ 　／娑婆／ 　／【遮羅婆羅】／草／

5 記号

記号は1文字に当たるものを1最小単位とする。

【例】
／。／ 　／；／ 　／【い】／の／字／ 　／M／.／D／.　L／.　／

6 数

数字は1文字に当たるものを1最小単位とする。

【例】
／一／万／億／ 　／百／万／石／ 　／三／口／四／口／

6.1

「ひとり」「ふたり」は、「室町時代編」においても全体で1最小単位とする。（2.4.5 参照）

【例】
／ひ=とり／ 　／ふ=たり／

7.1 姓・名

人名は姓を1最小単位、名を1最小単位とする。

【例】
／源／実朝／ 　／深江／広高／

7.1.1 通称・雅号・しこ名

通称・雅号・しこ名（その略称も含む。）等は、次のように最小単位を認定する。

【例】
／千代大海／ 　／十返舎／一九／ 　／古今亭／志ん生／

7.2 姓+読み添えの「の」+名

姓と名との間にある読み添えの「の」が本文に表記されている場合は、助詞として扱い、1最小単位とする。

【例】
／藤原／の／道長／ 　／源／の／頼朝／

7.2.1

本文に表記されていない場合は規定 7.1 を適用する。

【例】
／源／頼朝／

7.3 姓又は名を略したもの

姓又は名を略したものは1最小単位とする。

【例】
／【長】／兵／衛／ ※長谷部氏のことを指す。
／【かん】／せう／じやう／ ※菅原氏のことを指す。

7.4 女房の名前

女房、それに類する女性を表す呼称は、「平安時代編」に従い次のように最小単位を認定する。

7.4.1

地位に由来するものは、和語・漢語の最小単位として扱い、人名としては扱わない。

【例】
／小／式／部／内／侍／

7.4.2

現代でも人名として通用しているものは、全体で1最小単位とする。

【例】
／紫式部／

7.5 称号を表す類概念

神話、伝説、歴史、創作等の人名で、称号を表す類概念が付加された人名は、次のように最小単位を認定する。

【例】
／豊雲野／神／ ／イザナギ／ノ／ミコト／ ／瑞齒別／天皇／ ／市辺押羽／皇子／ ／刀自古／郎女／

7.5.1

日本神話の登場人物名のうち「～ヒメ」「～ヒコ」は類概念とせず、全体で1最小単位とする。

【例】
／コノハナサクヤ=ヒメ／ ／ヌナカワ=ヒメ／ノ／ミコト／
／ウミサチ=ヒコ／ ／ワカタケ=ヒコ／

7.5.2

日本神話の登場人物名以外の「ヒメ」については次のとおりとする。

7.5.2.1

「漢字1字+ヒメ」は、全体で1最小単位とする。

【例】
／絢=姫／ ／清=姫／ ／濃=姫／ ／漁=姫／

7.5.2.2

「2字以上+ヒメ」は、「ヒメ」以外の部分が一般的な名に相当する場合は名と「ヒメ」をそれぞれ1最小単位とする。

【例】
／和子／姫／ ／紗夜／姫／

7.5.2.3

「2字以上+ヒメ」の場合であっても、「ヒメ」を切り出した残りの部分が一般的な名に相当しない場合は、全体で1最小単位とする。

【例】
／小桜=姫／ 　／檜皮=姫／ 　／おおまき=姫／

7.6 中国系の人名

中国系の人名のうち姓と名がそれぞれ1文字ずつのものは、姓名をまとめて1最小単位とする。

【例】
／項=羽／

8 地名

地名は、次の規定により最小単位を認定する。

8.1 地域・地方を表す地名

地域・地方を表す地名（通称や呼称などを含む。）は、名を表す部分と類概念を表す部分及び「東・西・南・北・新」等を分割した上で、名を表す部分を地名の1最小単位とする。類概念を含むそれ以外の部分は最小単位の認定規定を適用する。

【例】
／【遠江】／国／ 　／おうしう／

8.1.1

七道は、「道」を含めて1最小単位とする

【例】
／東海=道／ 　／東山=道／ 　／北陸=道／ 　／山陰=道／ 　／山陽=道／ 　／南海=道／ 　／西海=道／

8.2 地形名

地形名は、類概念を表す部分を除いた部分を1最小単位とする。

【例】
／春日／山／ 　／入間／川／

8.2.1

地形名と類概念を表す部分との間にある読み添えの助詞が本文に表記されている場合は、助詞として扱い、1最小単位とする。

【例】
／ひえ／の／山／ 　／須磨／の／浦／

8.2.1.1

ただし、助詞を含む全体で、一般的に地名として用いられているものや、助詞を1最小単位とすることに問題があると思われるものは、全体で1最小単位とする。

【例】
／西=の=宮／ 　／鬼=が=嶋／ 　／ひる=が=こ=嶋／

8.2.2

名を表す部分が漢字1字の場合は、類概念を表す部分をまとめて1最小単位とする。

【例】
／慈=山／ 　／嵐=山／

8.3 参考

現代語の最小単位認定規定にある地名に関する規定を、参考として以下に挙げる。

8.3.1

行政区画を表す地名は「都・府・県・郡・市・区・町・村・字」を除いた部分をそれぞれ1最小単位とする。類概念を表す部分には最小単位の認定規定を適用する。

【例】
／東京／都／北／区／西が丘／三／丁／目／九／番／十／四／号／

8.3.1.1

「北海道」は全体で1最小単位とする。

【例】
／北海道／夕張／郡／長沼／町／ 　／明日／の／北海道／の／天気／

8.3.1.2

市区内の小区分の「～町」は「～町」を含めて1最小単位とする。

【例】
／大阪／府／豊中／市／待兼山町／ 　／千代田／区／大手町／

8.3.1.3

京都の地名のうち、通りの名称の部分には8.3.3の規程を適用する。

【例】
／京都／市／上京／区／今出川／通／烏丸／東／入／

8.3.1.4

地名の略称は、全体を1最小単位とする。

【例】
／ちとから／（千歳烏山） 　／天六／（天神橋筋六丁目）

8.3.1.5

行政区画を表す地名が他の場所名等に使われている場合には、行政区画の名を表す部分を1最小単位とし、類概念を含むそれ以外の部分は最小単位の認定規定を適用する。

【例】
／さいたま／新／都／心／駅／ 　／茨木／市／駅／ 　／日比谷／公／園／
／島根／県／立／松江／北／高／等／学／校／

8.3.2

外国の国名や行政区画名などにも8.3.1から8.3.1.5を適用する。

【例】
／アメリカ／合／衆／国／ 　／南アフリカ／共／和／国／ 　／中華／人／民／共／和／国／
／カリフォルニア／州／ 　／広東／省／ 　／メキシコ／シティー／ 　／ミズーリ／ステート／

8.3.3

場所名については、名を表す部分と類概念を含むその他の部分とに分割した後、両方の部分に最小単位の認定規定を適用する。

【例】
山手通り 新御堂筋 神田橋 さいたま新都心駅 茨木市駅
山陽本線 大江戸線 首都圏外郭放水路 アスワンハイダム

8.3.4

地名を略した漢字1字の「日」「米」などについては、漢語の最小単位として扱い、地名としては扱わない。

【例】
日米 日米韓 米国 日韓 漁業協定 京阪 播但
阪奈 自動車道 磐越西線

8.3.5

地名のうち最小単位の認定に当たり判断に迷う例について、その認定方法を示す。

8.3.5.1 地形名

【例】
瀬戸内 瀬戸内海 プリンセスワード島 耶馬溪 奥穂高岳
大菩薩峠 鬼押出 ポートアイランド イーストリバー

8.3.5.2 場所名（駅名以外）

【例】
岡田山古墳 加茂岩倉遺跡 荒神谷遺跡
妻木晩田遺跡 吉野が里遺跡 田和山遺跡
区役所通り 富士見坂
武田山トンネル 八方尾根 スキー場 スターリン広場
関西国際空港
関空 暗闇坂 駒ヶ坂 別府温泉

8.3.5.3 駅名

8.3.5.3.1 行政区画名と一致する駅名

【例】
東中野 西日暮里 江戸川 多賀城

8.3.5.3.2 二つの地名から成る駅名

【例】
祖師ヶ谷大蔵 多摩境 武蔵境 武蔵小山 武蔵小杉 川西池田

8.3.5.3.3 その他

【例】
表参道 半蔵門

9 参考 最小単位の例

【例】
「是は此あたりに住居いたす者でござる、用所あつて都へ上る、爰御ざ
る程に、あれへさそひに参らふと存るが、是もなひの約束で、
折節よそへまいつたによつて、ちしん太刀を持てござる、いや参る程
に、是じや、物まふ「出て常のごとく「是へ参るもべちなる事でも
ござらぬ、先度都へ参らば、同道なされうとおほせられに付て、
さそひにまいつた「近比かたじけなひ、おとも申さう「いざさらばござれ、
「つねのごとくちぎ有て太刀持た、物さきへゆく「見まらずれば、自
身太刀をもたせられた「其事、折ふし内の者もおらひで、自身太
刀をもつてござるが、路次に、よひものにあふたらばもたせうと存
る「それは一段よう御ざあらふ

第2 和語の最小単位認定に関する規則

室町時代編の短単位認定規程の基礎となっている現代語の短単位認定規程を理解するために、現代語を対象とした短単位認定規程にある「和語の最小単位認定に関する規則」を、参考として以下に掲載する。「和語の最小単位認定に関する規則」は、現代語を対象とした規則であり、現代語における語意識を基に最小単位の認定を行っている。そのため、規程の中には室町時代編に適用しないものがある。それらについては、適宜、注を付した。

1 語の一覧等に基づいて最小単位を認定するもの

1.1 常用漢字表の訓

常用漢字表（1981年、内閣告示第1号・内閣訓令第1号）の音訓欄に掲げられた訓は、1最小単位とする。可能動詞形については、元の動詞に準じて1最小単位とする。

【例】
／あわ=せる／ ／まつり=ごと／ ／え=がく／
／え=がける／

1.2 二語に分解しにくい「じ」「ず」を含む語

語源的には二つ以上の要素から成る語のうち、現代仮名遣い（1986年、内閣告示第1号・内閣訓令第1号）の第2の5において「現代語の意識では一般に二語に分解しにくいもの等として、それぞれ「じ」「ず」を用いて書くことを本則と」すると規定されている語のうち次に挙げるものは、全体で1最小単位とする。

【例】
／いな=ずま／ ／かた=ず／ ／き=ずな／ ／さか=ずき／ ／ときわ=ず／ ／ほお=ずき／ ／みみ=ずく／
／うな=ずく／ ／おと=ずれる／ ／かし=ずく／ ／つま=ずく／ ／ぬか=ずく／ ／ひざ=ま=ずく／
／あせみ=ずく／ ／さし=ずめ／ ／で=ずっ=ぱり／ ／なか=ん=ずく／ ／うで=ずく／

1.3 「要注意語」

「要注意語」の「助詞」「助動詞」「接頭的要素」「接尾的要素」に挙げたものは1最小単位とする。可能動詞形については、元の動詞及び動詞性接尾辞に準じて1最小単位とする。

【例】
／それ／で／も／ ／話し／た／ ／考え／がたい／ ／乗り／こなす／ ／乗り／こなせる／
／使い／ま／くれる／

2 上記の規定に該当しないものに関する規定

2.1 単独で使用される語

コーパス中の文において、他の要素と結合せず単独で語として使われているものは1最小単位とする。

【例】
／空／が／ 【かすむ】／

2.2 複合語を構成する要素

複合語を構成する要素については、以下の規定によって最小単位を認定する。

2.2.1

複合語の構成要素のうち、現代語において単独で語として機能し得るものどうしが結合して語を構成している場合は、それぞれの構成要素を1最小単位とする。

【例】
／空き／家／ ／灰汁／抜き／ ／揚げ／足／ ／明け／暮れる／

2.2.2

結合の際に音変化が起きているものは、以下の規程によって最小単位を認定する。

2.2.2.1

複合語の前項に音変化が起きているものは、以下の規程によって最小単位を認定する。

2.2.2.1.1

前項が被覆形となっているものは、その音節数等によって、以下のように最小単位を認定する。

2.2.2.1.1.1

2音節以上であれば、原則として1最小単位とする。

【例】
／つま／先／

2.2.2.1.1.1.1

ただし、以下のいずれかに該当するものは、1最小単位とせず、全体で1最小単位とすることがある。

2.2.2.1.1.1.1.1

既に語源意識が失われていると考えられるもの

【例】
／うつ=ぶす／

2.2.2.1.1.1.1.2

一方の構成要素が語源未詳、若しくは語源は判明しているが、音変化等のため一般には元の語への還元が難しいと考えられるもの

【例】
／うわ=みず／（上溝）　／しら=に／（白土）　／しら=ふ／

2.2.2.1.1.2

1音節で、元の形への還元が難しくないと考えられるものは1最小単位とする。

【例】
／木／陰／　／木／枯らし／　／木／立ち／

2.2.2.1.1.2.1

語源意識が失われている等の理由によって一般には元の形への還元が難しいと考えられるものは1最小単位とせず、全体で1最小単位とすることがある。

【例】
／こ=だま／　／こ=ぬれ／　／か=ぶれる／　／こ=がね／　／こ=よみ／

2.2.2.1.2

前項の名詞に音変化が生じている場合、全体で1最小単位とする。

【例】
／かい=ま／（垣間）　／かえ=で／（<蛙手）　／かん=ざし／（簪）

2.2.2.1.3

前項が用言の音便形となっているものは、以下のように最小単位を認定する。

2.2.2.1.3.1

後項が動詞である場合（当該の複合語が複合動詞、又はその転成名詞である場合）、前項を1最小単位とする。一般には語源が意識されることの少ない語についても同様に扱う。

【例】
／追っ／掛け／ ／切っ／掛け／ ／くっ／付く／

2.2.2.1.3.2

前項の動詞が連用形に見られる音便形とは異なる音便形を取っていても、それが規則的で広く用いられるものである場合は、前項を1最小単位とする。

【例】
／突っ／張る／ ／引っ／掛かる／ ／吹っ／切れる／

2.2.2.1.3.3

前項の動詞が連用形に見られる音便形とは異なる音便形で個別的な事例と考えられる場合や、音の脱落を生じている場合は、前項を1最小単位とせず、全体で1最小単位とする。

【例】
／おもん=ばかる／ ／しゃべ=くる／ ／せっ=かち／

2.2.2.1.3.4

後項が用言以外である場合、後項と結合した形で1最小単位とする。

【例】
／追っ=手／ ／同い=年／ ／切=手／

2.2.2.1.4

後項が個別の変化を起こしている等のことから、それを1最小単位と認定し難い場合は、個別の判断によって最小単位を認定する。

【例】
／飲んだくれる／
※「たくれる」を最小単位と認定する必要はないと考えられるため。
／引っ／ぺがす／
※「引っ／ぺがす」が2最小単位となることとの整合性を取るため。

2.2.2.2

複合語の後項に音変化が起きているものは、以下の規定によって最小単位を認定する。

2.2.2.2.1

連濁を生じている場合も、元の形が規定 2.2.1 に該当するものであれば、1最小単位とする。

【例】
／わたし／ぶね／（渡し船） ／ほん／ばこ／（本箱）

2.2.2.2.1.1

常用漢字表の音訓欄に挙げた訓には、規定 1.1 が優先的に適用される。

【例】
／え=がく／ ／いろ=どる／

2.2.2.2.2

後項の語頭の母音に子音が挿入されている場合も、前項・後項をそれぞれ1最小単位とする。

【例】
／あき／さめ／（秋雨）　／きり／さめ／（霧雨）

2.2.2.2.3

後項の語頭音が個別的に変化・脱落している場合、全体で1最小単位とする。

【例】
／かわ=も／（川面）　／かわ=ら／（川原）　／ごき=ぶり／

2.2.2.2.4

結合部分の母音が融合している場合、全体で1最小単位とする。

【例】
／おっしゃる／　／きゅうり／　／しょう／（背負う）

2.2.2.2.4.1

ただし、「ひと（人）」に由来する「と」「うと（ど）」「っと」等を最小単位と認める関係上、本規定に該当する語であっても、「と」「うと（ど）」「っと」と前項とをそれぞれ1最小単位とすることがある。

【例】
／おちゅ／うど／（落人）　／わこ／うど／（若人）

2.2.2.2.4.1.1

「（う）と」の部分に「人」の意味が殆ど認められない語は、全体で1最小単位と認めることがある。

【例】
／隼人／　／もうと／（真人）

2.2.3

結合の際に挿入された促音又は撥音は、後項に含める。

【例】
／開け／っ広げ／　／朝／っばら／　／甘／ったれ／　／甘／っちょろい／　／腕／っ節／　／崖／っ淵／
／首／っ引き／　／くま／ん蜂／　／下／っ端／　／しみ／ったれる／　／杉／っ葉／　／手／っ取り／早い／
／出／っ歯／　／出／っ張る／　／菜／っ葉／　／抜き／ん出る／　／猫／っ毛／　／端／っ端／
／びり／っけっ／　／宵／っ張り／

2.3 助詞・助動詞を構成要素に含む語

助詞・助動詞を構成要素に含む語は、以下の規定によって最小単位を認定する。

2.3.1 1最小単位とする助詞・助動詞

以下に挙げる語の構成要素となっている助詞・助動詞は1最小単位とする。助詞・助動詞以外の構成要素は、特に定めのない限り、他の規定に基づいて最小単位を認定する。

2.3.1.1 「一の～」

前後の要素が古語であったり、音変化を生じていたりする場合も、助詞「の」を1最小単位とする。

【例】
／味／の／素／　／天／の／川／　／あま／の／じゃく／　／有り／の／俣／　／タツ／ノ／オトシ／ゴ／

2.3.1.2 助動詞の連用形が独立性を失い、動詞と1語化して名詞・形状詞に転じたもの

【例】

／いわ／れ／(謂れ)　／いやがら／せ／　／知ら／せ／　／憎ま／れ／つ子／　／人／泣か／せ／
／人／騒が／せ／　／番／狂わ／せ／　／虫／刺さ／れ／　／やら／せ／

2.3.1.3 その他の名詞・形状詞等

【例】

／擦っ／た／揉ん／だ／　／土／踏ま／ず／　／人／で／なし／　／減ら／ず／口／　／間／に／合う／
／水／入ら／ず／

2.3.1.4 「動詞+て」型の副詞

【例】

／あえ／て／　／改め／て／　／得／て／し／て／　／かえっ／て／　／かね／て／　／辛う／じ／て／
／極め／て／　／強い／て／　／すべ／て／　／せめ／て／　／次い／で／　／なべ／て／　／果たし／て／
／ひい／て／は／　／翻っ／て／　／まし／て／

2.3.1.5 「動詞+ず」型の副詞

【例】

／すかさ／ず／　／取り／あえ／ず／

2.3.1.6 「動詞の未然形・已然形+ば」型の副詞

【例】

／言わ／ば／　／例え／ば／

2.3.1.7 「形容詞の連用形+は」型の副詞

【例】

／あわ／よく／ば／

2.3.1.8 「副詞・形容詞の連用形+も」型の副詞

【例】

／いと／も／　／やや／も／　／奇しく／も／　／いやしく／も／　／長く／も／　／からく／も／
／くれ／ぐれ／も／　／よく／も／

2.3.1.9 その他の副詞

【例】

／飽く／まで／　／如何／せ／ん／　／いわ／ん／や／　／なる／べく／　／願わく／ば／　／びく／と／も／
／まる／で／　／わり／と／

2.3.1.10 「動詞+ぬ・ない」型の連体詞

【例】

／素／知ら／ぬ／　／尽き／せ／ぬ／

2.3.1.11 「動詞+べき」型の連体詞

【例】

／さる／べき／　／しかる／べき／

2.3.1.12 「動詞+たる」型の連体詞

【例】

／さし／たる／

2.3.1.13 「動詞+て+動詞」型の動詞及びその転成名詞

【例】
／取っ／て／置き／

2.3.2 1 最小単位としない助詞・助動詞

以下に挙げる語の構成要素となっている助詞・助動詞は1最小単位とはしない。助詞・助動詞を含む全体で1最小単位とする。

2.3.2.1 「動詞+て+動詞」のうち、助詞「て」が後続の動詞と縮約しているもの

【例】
／打っちやる／ /置いてけ／ぼり／

2.3.2.2 「持って」に由来する「も(っ)て」を含む語(その転成名詞を含む。)

【例】
／も=て／あそぶ／ /も=て／なす／

2.3.2.3 「～に」型の副詞

本規定の適用を受ける語は以下の通り。

【例】
／如何=に／ /実(げ)=に／ /殊=に／ /更=に／ /既=に／ /遂=に／ /頓(とみ)=に／ /偏(ひとえ)=に／ /平(ひら)=に／ /本=に／ /世=に／

2.3.2.4 「～なる・な」型の連体詞

本規定の適用を受ける語は以下の通り。

【例】
／いか=なる／ /いか=な／ /い=な／ /大き=な／

2.3.2.5 あいさつ・掛け声等の感動詞

【例】
／さら=ば／ /すは=や／

2.3.2.6 その他

【例】
／あた=か=も／
※「あた」を最小単位とは認め難いため。
／そ=も／そ=も／
※指示詞「そ」が1最小単位と認定されないため。

2.4 副詞「と」「かく」を構成要素に含む語

副詞「と」「かく」を構成要素に含む語については、副詞「と」「かく」を1最小単位とした上で、他の要素もそれぞれ1最小単位とする。

【例】
／と／ある／ /兎／角／ /兎／に／角／ /と／も／あれ／ /兎／も／角／ /と／て／も／
／と／に／も／かく／に／も／

2.5 派生形容詞・繰り返しの要素を含む副詞・形状詞

派生形容詞及び繰り返しの要素を含む副詞・形状詞については、以下の規定によって最小単位を認定する。

2.5.1

「AAしい」という語構成の形容詞は、次のように最小単位を認定する。

【例】
／青／々しい／　／軽／々しい／　／白／々しい／　／痛／々しい／　／忌／々しい／　／初／々しい／

2.5.2

「黄色い」「奥ゆかしい」等、複合語に形容詞語尾が付いた語（「待ち遠しい」のようにク活用型形容詞の語幹にシク活用型形容詞の活用語尾が接続したものを含む。）は、以下のように最小単位を認定する。

【例】
／黄／色い／　／待ち／遠しい／　／奥／ゆかしい／

2.5.3

複合名詞の一部が形容詞語尾として異分析された語や、後項に個別的な音変化が生じているものは、全体で1最小単位とする。

【例】
／目＝ぼしい／
※目星の転
／目＝まぐるしい／
※「目＋紛らしい」の転。後項「紛らしい」に音変化が生じている。

2.5.4

重複要素を含む副詞・形状詞は、次のように重複する要素をそれぞれ1最小単位とする。

【例】
／粗／々／　／生き／生き／　／色／々／　／浮き／浮き／　／更／々／　／偶／々／　／つい／つい／
／いよ／いよ／　／しば／しば／　／そろ／そろ／

2.6 接頭辞

接頭辞は、以下の規定によって最小単位を認定する。

2.6.1

次に挙げる接頭辞は、1最小単位とする。
接頭辞の直後に挿入された促音は接頭辞に含める。

2.6.1.1 生物の雌雄を区別する「お（雄）」

【例】
／雄／牛／　／牡／鹿／

2.6.1.1.1

ただし、生物の雌雄を直接指示しない「お」は除く。

【例】
／雄＝たけび／

2.6.1.2 おお（大）

【例】
／大／君／　／大／雨／

2.6.1.3 か

【例】
／か／細い／　／か／弱い／

2.6.1.4 こ（小）

【例】
／小／商い／

2.6.1.4.1

ただし、「小間」の「こ」を除く。

【例】
／小=間／物／ /小=間／使い／

2.6.1.5 こっ

【例】
／こっ／ばずかしい／ /こっ／酷い／

2.6.1.6 さ

【例】
／さ／迷う／ /小／夜／

2.6.1.7 さか (逆)

【例】
／さか／うらみ／ /さか／のぼる／

2.6.1.7.1

ただし、以下の「さか」は除く。

【例】
／逆=さ／ /逆=らう／

2.6.1.8 だだ

【例】
／だだっ／広い／

2.6.1.9 ど

【例】
／ど／田舎／ /ど／えらい／ /ど／ぎつい／ /度／肝／ /度／突く／ /どん／底／

2.6.1.10 どす

【例】
／どす／黒い／

2.6.1.11 ひ

【例】
／ひ／弱／

2.6.1.12 ひた

【例】
／ひた／隠す／ /ひた／あやまり／

2.6.1.12.1

ただし、以下のものは除く。

【例】
／ひた=すら／ ／ひた=むき／

2.6.1.13 ま (真)

【例】
／ま／いわし／ ／真ん／中／ ／真っ／白／

2.6.1.14 め (雌)

【例】
／雌／牛／ ／牝／鹿／

2.6.1.15 ゆう (夕)

【例】
／夕／焼け／ ／夕／暮れ／

2.7 接尾辞

接尾辞は、以下の規定によって最小単位を認定する。

2.7.1 1 最小単位とする接尾辞

次に挙げる接尾辞は、1 最小単位と認定する。

2.7.1.1 がましい

【例】
／おこ／がましい／ ／押し／付け／がましい／

2.7.1.2 がり

【例】
／暗／がり／ ／怖／がり／ ／強／がり／ ／広／がり／

2.7.1.3 かす

【例】
／甘や／かす／ ／脅／かす／ ／おびや／かす／ ／散ら／かす／ ／寝／かす／ ／冷や／かす／
／ほったら／かし／ ／ほったら／かす／ ／ほっぽら／かす／ ／見せびら／かす／ ／やら／かす／
／笑／かす／

2.7.1.4 け

【例】
／真っ／暗／け／ ／真っ／白／け／

2.7.1.5 ころ

【例】
／石／ころ／ ／犬／ころ／

2.7.1.6 ずむ

【例】
／黒／ずむ／

2.7.1.7 たらしい

【例】
／長／たらしい／ 　／憎／たらしい／ 　／みじめ／たらしい／

2.7.1.8 っこい

【例】
／油／っこい／ 　／丸／っこい／ 　／ねば／っこい／ 　／ねち／っこい／

2.7.1.9 ったい

【例】
／野暮／ったい／ 　／口／幅／ったい／

2.7.1.10 ったけ

【例】
／首／っ丈／ 　／有り／っ丈／

2.7.1.11 ったるい

【例】
／甘／ったるい／

2.7.1.12 っち

【例】
／タマゴ／ッチ／

2.7.1.13 っちい

【例】
／丸／っちい／ 　／嘘／っちい／

2.7.1.14 っちょ

【例】
／先／っちょ／ 　／横／っちょ／

2.7.1.15 っばち

【例】
／嘘／っばち／ 　／自棄／っばち／

2.7.1.16 っぺ

【例】
／田舎／っぺ／ 　／野／っぺ／

2.7.1.17 っぺら

【例】
／薄／っぺら／

2.7.1.18 っぺらい

【例】
／薄／っぺらい／ 　／やす／っぺらい／

2.7.1.19 っぼ

【例】
／尾／っぼ／ 　／先／っぼ／ 　／空／っぼ／

2.7.1.20 っぽい

【例】
／荒／っぽい／ 　／安／っぽい／

2.7.1.21 びる

【例】
／古／びる／

2.7.1.22 びれる

【例】
／悪／びれる／

2.7.1.23 べったい

【例】
／平／べったい／

2.7.1.24 ぼったい

【例】
／厚／ぼったい／ 　／暗／ぼったい／ 　／腫れ／ぼったい／

2.7.1.25 めかしい

【例】
／艶／めかしい／ 　／古／めかしい／

2.7.2 1 最小単位としない接尾辞

次に挙げる接尾辞は前の要素に含める。

2.7.2.1 ク語法

【例】
／いわ=く／ 　／ねがわ=く／ 　／思えら=く／

2.7.2.2 こ

擬音語・擬態語に付いて、「～という状態である」という意の語や他の擬音語・擬態語を作る。

【例】
／泥ん=こ／ 　／どんぶら=こ=っこ／ 　／ぺたん=こ／ 　／ぺちゃん=こ／

2.7.2.3 こ

名詞や擬音語に付いて、そのものに対する愛着・愛情等を表現する名詞を作る。

【例】
／にゃん=こ／ 　／わん=こ／

2.7.2.4 ち（歳）

【例】
／はた=ち／ 　／三十=路／

2.7.2.5 っか

【例】
／輪=つか／

2.7.2.6 つかしい

【例】
／危な=つかしい／ 　／そそ=つかしい／

2.7.2.7 つかる

【例】
／乗=つかる／

2.7.2.8 つける

【例】
／乗=つける／

2.7.2.9 っぴら

【例】
／大=っぴら／ 　／真=っぴら／

2.7.2.10 まか

【例】
／大=まか／ 　／ちょこ=まか／

2.7.2.11 まる

【例】
／薄=まる／ 　／奥=まる／ 　／固=まる／ 　／静=まる／ 　／狭=まる／ 　／高=まる／

2.7.2.12 める

【例】
／赤ら=める／ 　／薄=める／ 　／固=める／ 　／静=める／ 　／高=める／

2.7.2.13 み

【例】
／とろ=み／ 　／柔らか=み／ 　／弱=み／

2.8 1音節の基本語を構成要素に含む語

1音節の基本語を構成要素に含む語は、その基本語を分析・還元することが難しいと考えられる場合、最小単位とせず全体で1最小単位とすることがある。

2.8.1 サ変動詞「する」の連用形「し」

サ変動詞「する」の連用形「し」を含む語については、「し」に当たる要素が「仕」「支」等の別字で表記されることが多いため、原則として「し」を最小単位とせず、全体で1最小単位とする。

【例】
／試=合／ 　／し=あわせ／ 　／仕=入れる／ 　／仕=立て／ 　／仕=付け／糸／ 　／仕=留める／ 　／し=にせ／
／支=払い／ 　／仕=舞う／ 　／仕=業／

2.8.1.1

ただし、「する」の意味が比較的強く感じられる語は、「し」を1最小単位とする。

【例】
／為／手／ 　／為／直す／

2.8.2 「す(素)」「そ(素)」

「す(素)」「そ(素)」を含む語は、「す」「そ」を1最小単位とする。

【例】
／素っ／飛ばす／ 　／素っ／飛ぶ／ 　／素っ／ぴん／ 　／素っ／裸／ 　／素／手／ 　／素／通り／ 　／素／肌／
／そ／振り／

2.8.2.1

ただし、以下のように、他方の構成要素の意味が独立して認識される度合いの小さい語に用いられたものは「す」「そ」を1最小単位とせず、全体で1最小単位とする。

【例】
／素=直／ 　／素=晴らしい／ 　／素っ=気／

2.8.3 「て(手)」

「て(手)」を含む語は、原則として「て」を1最小単位とする。

【例】
／手／垢／ 　／手／上げ／ 　／手／足／ 　／手／厚い／ 　／手／当て／ 　／手／薄／ 　／手／落ち／ 　／手／紙／
／手／柄／ 　／手／軽／ 　／手／際／ 　／手／口／ 　／手／答え／ 　／手／塩／ 　／手／摺／
／手／っ取り／ 　／早い／ 　／手／引き／ 　／痛／手／ 　／射／手／ 　／受け／手／ 　／薄／手／ 　／裏／手／
／売／手／

2.8.3.1

ただし、以下に挙げるものは「て」を1最小単位とはせず、全体で1最小単位とする。

2.8.3.2.1 他の規定によって全体で1最小単位と認定されるもの

【例】
／てんでん／ 　／てんやわんや／

2.8.3.2.2 その他、語源意識が極めて希薄であるもの等

【例】
／梃子／ 　／てこずる／ 　／手伝う／ 　／手間／

2.8.4 「ま(間)」

「ま(間)」を含む語は、原則として「ま」を1最小単位とする。

【例】
／間／際／ 　／間／口／ 　／間／近／ 　／間／取り／ 　／間／に／合う／ 　／間／抜け／ 　／間／引く／
／間／違い／ 　／間／違う／ 　／間／違え／ 　／間／違える／

2.8.4.1

ただし、現在語源意識が極めて希薄であるもの等は、「ま」を最小単位とせず、全体で1最小単位とすることがある。

【例】
／万=引き／ (＜間引き)

2.8.5 動詞「見る」の連用形「み」

動詞「見る」の連用形「み」を含む語は、原則として「み」を1最小単位とする。

【例】
／見／合い／ 　／見／出だす／ 　／見／入る／ 　／見／劣り／ 　／見／限る／ 　／見／応え／ 　／見／詰める／
／看／取る／ 　／見／栄え／ 　／見／舞う／ 　／国／見／ 　／下／見／ 　／見／付かる／※

※「付かる」という語が単独で存在しているわけではないが、「／見／付ける／」に対応する語として「／見／付かる／」の2最小単位に分割する。

2.8.5.1

ただし、以下に挙げるものは「み」を1最小単位とはせず、全体で1最小単位とする。

2.8.5.1.1 他の規定によって1最小単位と認定されるもの

【例】
／認める／ 　／醜い／

2.8.5.1.2 その他、語源意識が極めて希薄であるもの等

【例】
／見事／ 　／みっともない／

2.8.6 「め（目）」

「め（目）」を含む語については、原則として「め」を1最小単位とする。

【例】
／目／新しい／ 　／目／当て／ 　／眼／鏡／ 　／目／くじら／ 　／目／先／ 　／目／指す／ 　／目／敏い／
／目／覚める／ 　／目／付き／ 　／目／抜き／ 　／目／安／ 　／網／目／ 　／板／目／ 　／裏／目／ 　／上／目／
／負い／目／

2.8.6.1

ただし、以下に挙げるものは「め」を1最小単位とはせず、全体で1最小単位とする。

2.8.6.1.1 他の規定によって1最小単位と認定されるもの

【例】
／め＝くるめく／ 　／め＝じろ／ 　／め＝ぼしい／ 　／目ま＝ぐるしい／

2.8.6.1.2 その他、語源意識が極めて希薄であるもの等

【例】
／め＝ど／

2.9 語の構成要素となっている古語

語の構成要素となっている古語は、以下の規定によって最小単位を認定する。

2.9.1

語の構成要素となっている動詞が、文語の活用形を残存している場合にも、それを1最小単位と認定する。

【例】
／あし／げ／（足蹴） 　／こじ／開ける／ 　／攀じ／登る／

2.9.2

助詞「つ」「の」等の母音交替形や、室町時代において既に生産性が低くなっていると判断される助詞は、最小単位とせず全体で1最小単位とする。

【例】
／ひ=な=た／ /み=な=そこ／

2.9.3

1 語化した語の中に残存する文語の助動詞は、1 最小単位としない。

【例】
／あら=まし／ /いわ=ゆる／

2.10 その他、最小単位としないもの

以下に挙げる要素は、最小単位としない。

2.10.1 指示代名詞の構成要素「あ」「か」「こ(ん)」「さ」「そ(ん)」等

【例】
／あそこ／ /あちら／ /あなた／ /あの／ /かの／ /きゃつ／

2.10.2 疑問代名詞・疑問副詞などの構成要素「いか」「いく(幾)」「ど」等

【例】
／いか=なる／ /ど=の／

2.10.3 単独では動植物を示すことがない一般語が複数結合し、動植物名として用いられている語の構成要素、及び構成要素の一部に動植物名を含むが、結合した全体は個々の構成要素が表す動植物とは無関係な動植物を表す語の構成要素

【例】
／あさ=がほ／ /かた=つぶり／

2.10.4 競走馬名などの構成要素

【例】
／マチ=カネ=フク=キタル／ /マチ=カネ=ワラウ=カド／

2.11 その他、問題となる語

以上に定めたもののほか、問題となる語の最小単位認定について、次に一覧する。

2.11.1

次に挙げる語は、元々は二つ以上の要素から成るが、現在は既に1語と意識されていると考えられるため、全体で1最小単位とする。

《あ》

仰向け (アオムケ) 足掻く (アガク) 論う (アゲツラウ) 曙 (アケボノ) 浅はか (アサハカ)
朝ぼらけ (アサボラケ) 嘲笑う (アザワラウ) 汗疹 (アセモ) 厚かましい (アツカマシイ)
呆気 (アツケ) あっけらかん 当てずっぽう (アテズッポウ) あどけ (ない) 脂ぎる (アブラギル)
油ぎる (アブラギル) あやふや 現人 (神) (アラヒト (ガミ)) 在処 (アリカ)
有りふれる (アリフレル) 経緯 (イキサツ) 行成 (イキナリ) 藺草 (イグサ)
居た堪れる (イタタマレル) 麩 (イビキ) 息吹き (イブキ) 鋳師 (イモジ) いんちき
居ろめたい (ウシロメタイ) 団扇 (ウチワ) 自惚れる (ウヌボレル) 姥目 (ウバメ)
羨ましい (ウラヤマシイ) 羨む (ウラヤム) 浮つく (ウワツク) 得手 (エテ) 干支 (エト)
花魁 (オイラン) 大凡 (オオヨソ) 落ちぶれる (オチブレル) 弟切 (オトギリ) 一昨日 (オトイ)
一昨年 (オトシ) 乙女 (オトメ) 覚束無い (オボツカナイ) おわします おんぼろ

《か》

神楽 (カグラ) 駆けずる (カケズル) 瘡蓋 (カサブタ) 気質 (カタギ) 片栗 (粉) (カタクリ (コ))
忝い (カタジケナイ) 象る (カタドル) 形見 (カタミ) 竈 (カマド) 蒲鉾 (カマボコ)
我楽多 (ガラクタ) 枳殻 (カラタチ) 木こり (キコリ) 如月 (キサラギ) きな粉 (キナコ)
木目 (キメ) 際どい (キワドイ) 草薙 (クサナギ) 嘴 (クチバシ) 毛羽 (ケバ)
毛むくじゃら (ケムクジャラ) 煙たい (ケムタイ) 悉く (コトゴトク) 言葉 (コトバ) 寿ぐ (コトホグ)
諺 (コトワザ) 小間 (コマ)

《さ》

棧敷 (サジキ) 皐月 (サツキ) 最中 (サナカ) ざりがに 潮騒 (シオサイ) しこたま
枝垂れる (シダレル) 芝居 (シバイ) 僕 (シモベ) 白ける (シラケル) するべ 辛抱 (シンボウ)
酢橘 (スダチ) 簾 (スダレ) すっからかん すっ込む (スッコム) 住処 (スミカ) 背子 (セコ)
そそくさ 某 (ソレガシ)

《た》

暈付く (タタナツク) 忽ち (タチマチ) 七夕 (タナバタ) たなびく 容易い (タヤスイ) ちぎれる
稚児 (チゴ) 司る (ツカサドル) 辻褄 (ツジツマ) 恙ない (ツツガナイ) 津波 (ツナミ) 唾 (ツバ)
椿 (ツバキ) 鶴嘴 (ツルハシ) 釣瓶 (ツルベ) 出しゃばり (デシャバリ) 出しゃばる (デシャバル)
出鱈目 (デタラメ) てんでん (テンデン) 途切れ (トギレ) 途切れる (トギレル) 途絶える (トダエル)
怒鳴る (ドナル) とびきり (トビキリ) 戸惑い (トマドイ) 戸惑う (トマドウ) 止めど (トメド)
鳥居 (トリイ) 虜 (トリコ) 砦 (トリデ) 取り分け (トリワケ) 団栗 (ドングリ) とんでも (ない)

《な》

名うて (ナウテ) 亡くなる (ナクナル) なけなし 何某 (ナニガシ) 名乗り (ナノリ) 名乗る (ナノル)
名乗れる (ナノレル) なまじっか 何ぼ (ナンボ) ねんね 仰け反る (ノケズル) のさばる

《は》

羽織 (ハオリ) 羽交い (ハガイ) 葉書 (ハガキ) 捲る (ハカドル) 儂い (ハカナイ) 儂む (ハカナム)
狭間 (ハザマ) 梯子 (ハシゴ) 鱈 (ハタハタ) 葉っぱ (ハっぱ) 餞 (ハナムケ) 埴輪 (ハニワ)
羽根 (ハネ) 原っぱ (ハラっぱ) 遙々 (ハルバル) 日がな (ヒガナ) 蹄 (ヒヅメ) ひねくれる
日和る (ヒヨル) 平たい (ヒラタイ) 平たく (ヒラタク) ひれ伏す (ヒレフス) 広げる (ヒロゲル)
ふくらはぎ 不貞腐れる (フテクサレル) へたばる 部屋 (ヘヤ) ほくそ笑む (ホクソエム)
ほっつき (歩く) 進む (ホトバシル)

《ま》

馬子 (マゴ) 実しやか (マコトシヤカ) まさか 真砂 (マサゴ) 真面目 (マジメ) 混ぜこぜ (マゼコゼ)
まっしぐら 真秀ろば (マホロボ) 虻 (マムシ) 丸切り (マルキリ) 晦日 (ミソカ) 見附 (ミツケ)
見惚れる (ミトレル) 深山 (ミヤマ) 蝕む (ムシバム) 息子 (ムスコ) 群がる (ムラガル)
娶る (メトル) 目眩 (メマイ) 基づく (モトづく) 裳抜け (モヌケ) 最早 (モハヤ) 最寄り (モヨリ)

《や》

館 (ヤカタ) やきもき 火傷 (ヤケド) 屋敷 (ヤシキ) やっとこ やっとこさ 屋根 (ヤネ)
矢張り (ヤハリ) 流鏑馬 (ヤブサメ) 山びこ (ヤマビコ) 昨夜 (ユウベ) タベ (ユウベ)
湯がく (ユガク) 行きずり (ユキズリ) 蘇る (ヨミガエル) 四方山 (ヨモヤマ)
夜半 (ヨフ)

《わ》

轍 (ワダチ) 侘助 (ワビスケ)

2. 11. 2

次に挙げる語は、現在単独で用いられることがない、あるいはほとんどない要素を含む。しかし、それを構成要素に持つ語について、現在のところ複数の構成要素から成る語であると意識されており、その要素も複数の語の中に認められるなど、一定の独立性を持っていると考えられるため、1最小単位とする。

《あ》
 /あから/さま/ /朝な/朝な/ /朝な/夕な/ /あだ/名/ /新/巻/ /熱り/立つ/
 /投げ/うつ/ /産/声/ /産/湯/ /うろ/覚え/ /うろ/つく/ /うわ/ごと/ /生き/餌/
 /撒き/餌/ /笑/顔/ /生い/立ち/ /おい/どん/ /面/影/ /面/持ち/
 《か》
 /嵩/張る/ /わり/かし/ /神/主/ /色/きち/ /くす/だま/ /無茶/苦茶/ /滅茶/苦茶/
 /かま/くら/ /おし/くら/
 《さ》
 /遠/ざかる/ /今/更/ /殊/更/ /しか/じか/ /しず/しず/ /じり/安/ /代/物/
 /道/すがら/ /後/ずさり/ /炭/すご/ /せせら/笑う/ /ぞろ/目/ /寝/そべる/
 《た》
 /横/たえる/ /塗り/たくる/ /耳/たぶ/ /だふ/屋/ /たわ/ごと/ /横/たわる/
 /千/尋/ /千/代/ /乳/飲み/子/ /乳/首/ /ちよめ/ちよめ/ /はい/つくばる/
 /常/夏/ /常/世/ /どさ/くさ/ /どさ/回り/ /とど/松/ /どんでん/返る/
 /どんど/焼き/
 《な》
 /ぬるま/湯/ /のんべん/だらり/
 《は》
 /端/唄/ /端/ぎれ/ /羽/ばたく/ /はし/ぶと/ /はし/ぼそ/ /はす/向かい/
 /はちや/めちや/ /食み/瓜/ /はみ/出す/ /はみ/出る/ /曾/孫/ /久/方/
 /引っこ/抜く/ /芝/生/ /舐/先/ /海/辺/ /川/辺/ /岸/辺/ /へし/合い/
 /へし/折る/ /へり/くだる/ /瘦せ/つぼち/ /洞/穴/ /ほろ/苦い/
 《ま》
 /ぶち/まける/ /まで/貝/ /までば/しい/ /まな/板/ /継/子/ /継/母/ /まま/ごと/
 /血/みどろ/ /むく/鳥/ /女/神/ /やたら/めったら/ /めり/はり/ /もも/とり/
 /諸/手/ /諸/刃/ /諸/々/
 《や》
 /八百/屋/ /八百/万/ /青/柳/ /朝な/夕な/ /ゆすら/うめ/ /夜な/夜な/
 《わ》
 /板/わさ/

第3 最小単位の分類

短単位を認定するために、最小単位を以下のように分類する。

【例】 分類

一般

和語

【例】花 ほど したたか かたじけない 笑う …

漢語

【例】連 歌 来 臨 …

外来語

【例】菩薩 娑婆 ぼろおん …

付属要素

接頭的要素

【例】相 (あい) 御 (お、ご、み) 大 (おお) 不 (ぶ) …

接尾的要素

【例】殿 (どの) 兼ねる がましい 気 (げ) 立て (だて) …

記号

【例】、 。 「 」 『 』 …

数

【例】一 二 十 百 千 …幾 数 何 …

固有名

人名

【例】和田 義盛 鈍太郎 運慶 …

地名

【例】出雲 江州 坂本 富士 淡路 春日 …

助詞・助動詞

【例】の を ぞ こそ まで る・らる ず ごとし やる なり う…

1 補則

1.1 一般

1.1.1

ヒトリ（一人）・フタリ（二人）は、「一般」に分類する。

1.1.2

「一」「二」等、数を表す最小単位のうち、数量を表すことに主眼がなく、他との結合が慣用的であり、かつ全体で一つの決まった内容を表すもの（おおよそ次の 1.1.2.1 から 1.1.2.7 に当たるもの）は「一般」に分類する。

1.1.2.1 サ変動詞、副詞、形状詞として使われる語やそれに準じる意味となる語

【例】

一休み 一読 三振 一刻 一律 一時 一流 三角 四角

1.1.2.2 四字熟語、成句の構成要素

【例】

一石二鳥 一夫多妻 一騎当千 ひと騒ぎふた騒ぎ（「ひと一ふた一」という型の表現）

1.1.2.3 比喩的・抽象的で、数字どおりの数を示さないもの（不定の量や大量を表す。）

【例】

一種 一团 一員 一抹 一欠片 八宝 四方 十二分に

1.1.2.4 そのカテゴリに属する種類の数を表すもの

【例】

三家 四季 四苦八苦 六法 七味

1.1.2.5 その他具体的な事柄を表すもの

【例】

七節（虫の名前） 八頭（里芋の品種） 八字・十字（字の形） 四捨五入 四球（四死球） 三箇日 三つ星 二紋

1.1.2.6 数字を含む略語

【例】

小六 中二 高三 四駆（四輪駆動の略） 二文（早稲田大学第二文学部の略）

1.1.2.7 その他

【例】

二の腕 三つ編み 四つ角 二枚舌

1.2 記号

音や文字・語の断片※を指示したものについては、「記号」に分類する。ただし 第1 7.3 で示した姓又は名を略したものについては記号とはせず人名扱いとする。

※ここで言う語の断片とは、次に挙げるものである。

- 漢語は1短単位未満のもの。
- 和語・外来語は1最小単位未満のもの。ただし活用語の語幹は除く。

【例】

【なが】は【長】の字、【みつ】はひかると申字じゃ
それ|と|言う|は|：|ヨ|、|タ|、|ア|、|ホ|、|ミ|、|コ|、|オ|、|これ|ちゃ|。

1.3 数

「幾」「数」「何」が「幾人」「数百」「何個」のように不定の数を表す場合は、「数」に分類する。

第2章 短単位認定規程

第1 短単位認定規程

短単位は、長単位の中で最小単位が以下の規程に基づいて結合した（又は結合しない（これは0回結合と考える。））結合体である。

短単位の認定に関する規程は、第1章 第3 「最小単位の分類」で分類した種類ごとに適用すべき規程が定められている。以下に、それを示す。

擬音語・擬態語の短単位の認定については、同語異語判別規程「擬音語・擬態語の扱い」（第4章 第1 6.6）を参照。

室町時代は、中古・現代の狭間にあり、その言語も過渡的状況を呈している。そのため、室町時代編の短単位認定規程は、現代語・中古語、両者との関連を重視して、用言の活用体系等はおおむね中古語に習いつつも、複合動詞や副詞・連体詞等、語が複合して一語化しているようなものはおおむね現代語と同様に一語と見るなど、適宜調査・判断の上、両規程を照合しつつ認定する。

1 一般

1.1 原則

原則として、「一般」に分類した和語・漢語の最小単位二つの1次結合は1短単位とする。

【例】

| ちち | | はは | | ちち=はは | | わび=こと | | よ=ぶか (夜深) |
| 冠=者 | | 言=語 || 道=断 | | 理 || 不=尽 | | 案=内 || 者 |

1.2 3最小単位以上の結合を1短単位とするもの

以下に挙げるものは、3最小単位以上の結合であっても全体で1短単位とする。

1.2.1 切る位置が明確でないもの、あるいは切った場合と一まとめにした場合とで意味にずれがあるもの

【例】

| 新発意 |

1.2.2 「一が～」 「一つ～」 「一の～」

資料「要注意語」の「一が～」 「一つ～」 「一の～」に挙げたもの。本規程の適用を受ける語は、室町時代編での実態を踏まえて中古和文より範囲を広げている。

【例】

「一が～」 : | 天=が=下 | | 雁=が=音 |

「一つ～」 : | 上=つ=方 |

「一の～」 : | 天=の=川 | | 思い=の=外 | | 竹=の=子 | | 日=の=本 | | 道=の=辺 | | 山=の=端 |

1.2.2.1

「一が～」 「一つ～」 「一の～」で1短単位とするものを選定するに当たっては、以下の事項をおおよその目安とする。

1.2.2.1.1

助詞が読み添えとなっているもの

【例】

斎宮 (いつきのみや) 対屋 (たいのや) 夜去方 (よさりつかた)

1.2.2.1.2

品詞が名詞以外となるもの

【例】

思いの外 殊の外 以ての外

1.2.2.1.3

動植物名等を表すもの

【例】
卵の花 竹の子

1.2.2.1.4

切った場合と一まとめにした場合とで意味にずれがあるもの

【例】
天の川 言の葉 日の本

1.2.2.1.5

分割した場合、そのため（だけ）に語を新規登録する必要の生じるもの

【例】
わたのはら わたつうみ

1.3 1 最小単位を1短単位とするもの

以下に挙げるものは、1最小単位を1短単位とする。

1.3.1 外来語・外国語の最小単位

【例】
| 遮羅婆羅 | 草 | | 金剛 | 夜叉 |

1.3.2 最小単位が三つ以上並列した場合の、それぞれの最小単位

【例】
| 雪 | 月 | 花 |

1.3.3 名を表す部分と類概念を表す部分とが結合してできた固有名のうち、名を表す部分・類概念を表す部分が共に1最小単位である場合の、それぞれの最小単位

【例】
| 急ぼし || や |

1.3.3.1

ただし、名を表す部分が1字の漢語である場合は、その1次結合体を1短単位とする。

【例】
| 奥=州 | | 若=族 | | 史=記 |

1.3.4 感動詞

【例】
| さあ | | いや | | 申し |
|| いや || 申し ||、 | いま | 申し | 事 |

1.3.5 言いよどみ

【例】
| あが | あが |、 | あがら | しめ | | う |、 | うし | や |

1.3.6 規定 1.1 ~ 1.3.4 によって得られた短単位に、前又は後ろから結合した最小単位

【例】
| 大 || 納言 | | 大嘗 || 会 |

1.3.7 単独で文節を構成する最小単位

【例】
| 【おとこ】 | | 「 | 是 | は | かた | じけ | ない | | たの | しう | な | ひ | て | 【下されい】 | |
| 【いかに】 | | 、 | あ | ら | ふ | し | ぎ | や |

1.4 参考

現代語の短単位認定規程にある一般の最小単位に関する規定を、参考として以下に挙げる。

1.4.1

「一般」に分類した外来語の最小単位のうち省略されたものは、和語・漢語の最小単位と同様に扱う。

【例】
| パソ=コン | | 塩=ビ |

1.4.2

以下に挙げるものは、3最小単位以上の結合であっても全体で1短単位とする。

1.4.2.1

三つ以上の最小単位から成る組織の名称等の略称

【例】
| 統=数=研 | | 奈=文=研 | | 日=経=連 |

1.4.2.1.1

ここでいう略称とは、組織の名称を構成する短単位すべて又はその一部を略して結合させたもののことである。したがって、以下のような構成要素の一部（「国語」「党」）が略されていないものは、略称とはしない。

【例】
国立	【国語】	研究	所	→	【国語】	研
自由	民主	【党】	→	自民	【党】	
【主婦】	連合	会	→	【主婦】	連	

2 記号

記号は、1最小単位を1短単位とする。

【例】
|| は || もじ | || M || . || D || . || L || . ||

2.1

それがないときに1短単位となるものの中にある記号は無視する。

【例】
| 角 = 【、】 = 棒 |
| すし | を | ほう = 【、】 = ぱつ | て

3 数

数は、以下の規定によって単位認定する。

3.1

数は、ほかの最小単位と結合させない。

【例】

すまふ | の | 手 | は | 、 || 四十 | 八 || 手 | と | は | 申せ | 共 |
仁王 || 五十 | 六 || 代 |

3.2

数の間どうしの結合については、一・十・百・千の桁ごとに1短単位とする。「万」「億」「兆」などの最小単位は、それだけで1短単位とする。小数部分は、1最小単位を1短単位とする。

【例】

あはすれ | ば || 一 || まん || 千 || 五百 || の | さい | の | 目 |
二 | 粒 | まけ | ば || 二 || 万 || 億 || に | なる |

3.2.1

「四五」「二三十」などと結合させるのは概数の場合に限る。並列の場合は結合させない。

【例】

三 | ばい | 四 | はい | 五 || 六 | 七 | 八 | はい |

4 固有名

固有名（人名・地名）は、1最小単位を1短単位とする。

【例】

[人名] | 源 | 実朝 | | 呂 | 洞賓 | | くわんむ | 天王 |
[地域名] | 伊豆 | | 播磨 | | 西の宮 | | 粟田口 |
[地形名] | ひえい | ざん | | 入間 | 川 |

5 付属要素

付属要素は、1最小単位を1短単位とする。

【例】

あひ || かわら | ず | | うれし || がる | | 送り || かね | | ありき || にくひ |

5.1 居体言の構成要素となっている動詞性接尾辞

付属要素に分類した動詞性接尾辞は、居体言の構成要素となっている場合も接尾的要素として扱う。

【例】

けう || がり || も | 候 | 、 | やう || がり || も | 候 | 、 | おもしろし | も | 候 |

6 助詞・助動詞

助詞・助動詞は、1最小単位を1短単位とする。

【例】

心 || も || すぐ || に || なひ | 者 || で || 御ざる |
是 || に || あたつ || て || み || う || と || 存る |

6.1 「一が～」「一つ～」「一の～」

資料「要注意語」の「一が～」「一つ～」「一の～」に挙げられた語の中の助詞「が」「つ」「の」は、助詞・助動詞として扱わない。

【例】

「一が〜」： | 雁=が=音 |
「一つ〜」： | 上=つ=方 |
「一の〜」： | あり=の=まま | | 福=の=神 | | 日=の=本 |

6.2 助詞を含む人名・地名

人名・地名に含まれる助詞「が」「の」は、助詞・助動詞として扱わない。

【例】

| 小野 (おの=の) | 小町 | 藤原 (ふじわら=の) | 高光 | | 鬼=が=城 |

6.3 「もがな」「もがも」

「もがな」「もがも」は、終助詞「がな」「がも」「もが」のうち、「もが」を一まとまりとすることを優先して単位認定する。

| もが || な | | もが || も |

6.4 「てしがな」「にしがな」

「てしがな」「にしがな」は次のように短単位認定する。

| て || し が || な | | に || し が || な |

7 補則

7.1 掛詞

原則として、掛詞の後ろの語句とのつながりで解釈する。この原則によっても意味を一つに特定できないときは、文脈全体から自然な解釈を選ぶ。

ただし、掛詞や洒落に際しての臨時的な語形等、単位認定の難しいものに関しては、品詞「洒落」とのみの認定にとどめたものもある。

【例】

| 是 | まで | なり | とて | お | 座敷 | を | たちうお | 、 | いさざい | なんと | タなみ | に | いるか | 、 | / \ | も | 、
| みやうぎち | まい | こ | ん |

※「たちうお」は、前とのつながりから「|たち|うお|」と分割すると「うお」が浮いてしまうことから、上の例のように分割する。また、『大蔵虎明本狂言集総索引 8 萬集類』（北原保雄・土屋博映、1985年、武蔵野書院）によれば、「いさざいなんど」は「いざいなむ」と「さざい（榮螺）」「なんと（助詞）」とのことであるが、表記された形に準じて「いさざい」「なんと」と分割し、「いさざい」は臨時的語形と見て「洒落」とした。また、「いるか」については「海豚」とした。

7.2 動詞「一（サ）ス」

原則として、四段・ラ変・ナ変動詞の未然形+助動詞「セル」、四段・ラ変・ナ変以外の動詞の未然形+助動詞「サセル」に分析可能なものは、語末「セル」「サセル」を助動詞とする。

【例】

| しら || せ | う | | おさめ || させ | られ | た | か |

※動詞が「一（サ）ス」によって派生し、下二段に活用するもの。

7.2.1

四段・ラ変・ナ変動詞の未然形+助動詞「ス」、四段・ラ変・ナ変以外の動詞の未然形+助動詞「サス」と分析できないものは、語末の「（サ）ス」を分割しない。

【例】

| 着=す |

※「着る」は上一段動詞であるため、使役の助動詞としては「サス」が接続し、「着さす」となる。したがって、語末の「ス」を助動詞として切り出すのは、助動詞「ス」の接続の上で適切ではない。

[参照] | 見 || さす |

7.2.2

『日本国語大辞典』第2版において、尊敬の助動詞と認定されている「ス」は分割しない。

【例】

| のたまは=す | | たまは=す |

7.2.3

『日本国語大辞典』第2版において、意味の変化を伴い一語化したとの記述のある「ス」は分割しない。

【例】

| 参ら=す | ※1 | 遣は=す | ※2

※1 謙譲語として使用され、使役の意味が認められない場合は分割しない。〈参上させる〉と使役の意味が認められる場合は分割する。

※2 〈おやりになる〉という意味を表す場合は分割しない。

7.2.4

「合はす」は 第1章 第2 1.1 により1最小単位とするので、「ス」は分割しない。

7.3 可能動詞

可能動詞は、元になった四（五）段活用動詞と同様に短単位を認定する。

【例】

| よめる |

7.4 文節との関係

1 最小単位の体言と1最小単位の用言とが接続した場合に、1短単位として結合させるか否かの判断基準を 7.4.1, 7.4.2 として示す。

7.4.1 体言+動詞

2 最小単位から成る動詞のうち、体言+動詞という形式のものについては、以下の規定に基づいて短単位を認定する。

7.4.1.1 原則

『岩波国語辞典』第6版、『日本国語大辞典』第2版のいずれか一方で、見出し語（空見出し・子見出し・連語としての見出し語は除く。）になっているものは1短単位とする。

【例】

| 心=もと=ない | | ならび=なし | | 里=離れる |

7.4.1.2

原則に当たらないものは、体言の後ろで分割し、2短単位とする。

【例】

| 茜 || さす |

7.4.1.3

複合語の先頭又は中間に位置する体言+動詞（連用形）については、7.4.1.1 及び 7.4.1.2 を適用せず、1短単位とする。

【例】

| 波=打ち | 際 | | 鞍=置き | 馬 | | 犬=かけ | づつ |

7.4.1.3.1

体言＋動詞の品詞については、以下のように判定する。

7.4.1.3.1.1

『岩波国語辞典』第6版、『日本国語大辞典』第2版のいずれか一方で、動詞として立項されているものは、同語異語判別規程の細則3「動詞連用形と動詞連用形転成名詞の判定基準」に基づいて動詞か名詞かを判定する。

【例】

波打ち（際）……動詞

7.4.1.3.1.2

『岩波国語辞典』第6版、『日本国語大辞典』第2版のいずれにおいても動詞として立項されていないもの、両方に立項されているが、「連語」とされているもの、又は一方の辞典にしか立項されておらず、なおかつその辞典で「連語」とされているものは、名詞とする。

【例】

鞍置き（馬），犬かけ（づつ）……名詞

7.4.2 体言＋形容詞

2最小単位から成る形容詞のうち、体言＋形容詞という形式のものについては、以下の規定に基づいて短単位を認定する。

7.4.2.1 原則

『岩波国語辞典』第6版、『日本国語大辞典』第2版のいずれか一方で、見出し語（空見出し・子見出し・連語としての見出し語は除く。）になっているものは1短単位とする。

7.4.2.1.1 体言＋「ナシ（無）」

『岩波国語辞典』第6版、『日本国語大辞典』第2版のいずれかで見出し語になっているものを次に挙げる。1短単位とする「体言+「ナイ(無)」」は、原則として次に挙げるものとする。

《あ》

あえない(敢え無い) あじきない(味気無い) あじけない(味気無い) あじない(味無い)
あやない(文無い) いとまない(暇無い) いろない(色無い) いわれない(謂われ無い)
うつつない(現無い) おうない(奥無い) おしめない(惜しみ無い) おぼえない(覚え無い)
おぼつかない(覚束無い) おもいない(思い無い) おもない(面無い) およびない(及び無い)

《か》

かいない(甲斐無い) かぎりない(限り無い) かくれない(隠れ無い) かたわらない(傍ら無い)
きわない(際無い) きわまりない(極まり無い) くもりない(曇り無い) ころない(心無い)
ころもとなない(心許無い) ござない(御座無い) こちない(骨無い) ことない(事無い)

《さ》

さだめない(定め無い) ざんない(慙無い) しおない(潮無い) しだらない(しだら無い)
じつない(術無い) じゅつない(術無い) すげない(素気無い) すじない(筋無い)
ずつない(術無い) ずない(図無い) すべない(術無い) せんない(詮無い)
そうない(双無い) そこいない(底方無い) そっけない(素っ気無い)

《た》

たあいない(たあい無い) だいもない(大も無い) たぐいがない(類無い) たとしえない(譬えない)
たゆみない(弛み無い) だらしない(だらし無い) たわいがない(たわい無い) ちからない(力無い)
つきない(付き無い) つきもない(付きも無い) つつがない(恙無い) つねない(常無い)
ところない(所無い)

《な》

なごりない(名残無い) ならびない(並び無い) にない(二無い) にべない(鰐膠無い)
のこりない(残り無い)

《は》

はかない(儂い) びんない(便無い) へんない(篇無い) ほどない(程無い)

《ま》

まぎれない(紛れ無い) またない(又無い) みつともない(みつともない)

《や》

やくない(益無い) やごとない(止事無い) やむない やんごとない(止ん事無い)
ゆえない(故無い) ゆるしない(許し無い) ゆるぎない(揺るぎ無い) ようない(要無い)
よしない(由無い)

《ら》

らちない(埒無い) ろんない(論無い)

《わ》

わりない(理無い)

7.4.2.1.2 体言+「ナシ(甚)」

以下に挙げたのは、飽くまで語例である。「1最小単位+ナシ(甚)」という語構成のナシ(甚)型形容詞は、以下の語と同様に1短単位とする。

【例】

あらげない はしたない

7.4.2.1.3 上記以外の体言+形容詞

【例】

ほどちかい(程近い) ところせい(所狭い) ころよわい(心弱い)

7.4.2.2 原則に当たらないもの

原則に当たらないものは、体言の後ろで分割し、2短単位とする。

【例】

| 疑い || 無い | | 訳 || ない |

7.4.2.3 関連事項

「要注意語」の「接頭的要素」に掲げていない接頭辞又は語素と1最小単位の形容詞との結合体は1短単位とする。

【例】

|うら=寂しい| |うら=恥ずかしい| |うら=若い| |け=だるい| |もの=悲しい|

7.5 短単位認定に当たって問題となる語

中古語や現代語と室町時代編とで単位認定の異なるもの等、短単位認定に当たって問題となる語について、どのように短単位を認定するかを、次に示す。

7.5.1 連体詞

連体詞を含む以下の語は全体で一短単位とする。

【例】

|此の=中| |此の=方| |此の=頃| |此の=世| |其の=方(ホウ)| |我が=家|

7.5.2 副詞

7.5.2.1 「～に」型、「～て」型の副詞

7.5.2.1.1 副詞と認めないもの

7.5.2.1.1.1

「～」に当たる要素に自立用法があれば、「に」を分割する。

【例】

|さすが||に| |まこと||に|

7.5.2.1.2 副詞と認めるもの

切った場合と一まとめにした場合とで意味にずれがあるものや、文末と呼応するものは、切らずに全体で1短単位とする。また、現代語とのつながりを考慮して、「に」「て」を切らずに全体で1短単位とするものもある。

【例】

■「～に」型の副詞

|如何=に| |げ=に| |さら=に| |すで=に| |つい=に| |ひとへ=に| |ひら=に| |世=に|
(これらは最小単位規定 第1章 第2 2.3.2.3 により1最小単位とされている)
|つぶさ=に|

■「～て」型の副詞

|敢え=て| |却っ=て| |斯く=て| |予=て| |極め=て| |さし=て| |定め=て| |せめ=て|
|総じ=て| |と=て| |初め=て| |別し=て| |況し=て|

7.5.3 副詞「と」「かく」を含む語

【例】

|とて|も|かくて|も| |と|に|かく|に| |と|も|かく|も| |と|も|あれ|
|と=かく| |と=に=も|かく=に=も|

7.5.4 その他の副詞、接続詞

【例】

|ある=ひ=は| |いか=で| |いは=ん=や| |おの=ず=から| |また=も=や|

7.5.5 その他

7.5.5.1 助動詞「う」と助動詞「むず」の語形「うず」

室町時代編では、用言の意志・推量を表す語形について、助動詞「う」・助動詞「むず」の語形「うず」を立て、用言と助動詞を分割することを基本とする。この点は、現代語の規程とは異なる処理である。その理由は、「一人づつゆかう」などの「行こう」は、現代語のコーパスでは口語活用の「意志推量形」とされているが、室町時代編の動詞の多くが属する文語活用では、この「意志推量形」を使用することができないことによる。文語認定した動詞についても、未然形のみを口語活用と認定することも考え得るが、「うずる」のような「うず」型の形態に対しては対応が困難である。ただし例外的に一語の意志推量形を認めることがある。以下に実例を挙げながら詳述する。

7.5.5.1.1 文語四段活用語に付属する場合の取り扱い

文語四段活用語の場合、想定される発音はオ段であり、本来（口語）「五」段活用とすべきものであるが、多くの場合、「行かう」のように活用語尾がア段の仮名で表記されており、表記上四段活用として処理することが可能である。そのため、これらのものは便宜的に「文語四段活用未然形+う・うず」とする。

【例】
| くらま | へ | 同道 | いたい | て | 参ら || う |
| おれ | こそ | 子共 | や | 孫 | を | つかは || ふずれ |

7.5.5.1.1.1 未然形がオ段の仮名で記されている場合

未然形がオ段の仮名で表記されている場合は、用言と「う」「うず」を分割せずに、（口語）五段活用の意志推量形と認定する。表記を基準にしても「四」段と認定できないためである。

【例】
| まだ | 夜ぶか | さう | な | 程 | に | 、 || まどろもふ ||

7.5.5.1.2 文語一・二段活用語に付属する場合の取り扱い

四段活用語と同様、表記上文語一・二段活用の未然形と「う」「うず」に分割可能な場合は用言と助動詞に分割する。

【例】
| まづ | あれ | へ | まいつ | て | 、 | やうす | を | 見 || う | と | 存る |
| 言葉 | を | かけ || う |

7.5.5.1.2.1 動詞と助動詞が融合している場合

動詞と助動詞「う」「うず」の融合が進みオ段拗長音に変化した形が現れた場合は、全体を一短単位とし口語活用の意志推量形とする。

【例】
| 足 | が || よごりよう ||
| しん | で | も | ちごく | に || おてふ ||

7.5.5.2 末尾が「い」となる命令表現

活用語の末尾が「い」となる命令表現については、以下のように短単位認定を行う。

7.5.5.2.1 四段活用の未然形に「い」が後続する場合

四段活用語の未然形に「い」が後続する場合は、動詞と「い」を分割する。「い」は助動詞「い」の命令形と認定する。

【例】
| めでたい | 程 | に | 、 | うたわ || ひ |

7.5.5.2.2 四段活用の命令形に「い」が後続する場合

四段活用語の命令形に「い」が後続する場合も、動詞と「い」を分割する。「い」は終助詞「い」と認定する。

【例】
| 何 | ぞ | ある | か | だせ || ひ | やひ |

7.5.5.2.3 四段活用以外の場合

四段活用以外の語の場合、「い」を命令形の活用語尾と見なし全体で1短単位と認定する。

【例】
|つま|と||さだめひ||

7.5.5.3 「お～やる」

「御」+動詞連用形に後続する「やる」は、前接する動詞とは分割して助動詞「やる」とする。

【例】
|お|も(持)|ち||やら||う|か|お|もち||やる||まひ|か

7.5.5.3.1 「おもやる」と「おりやる」

例外として「おもやる」（「お思いある」の転）と「おりやる」（「お入りある」の転）については融合が進み、部分を切り出すのが困難なため、1短単位と認定する。

【例】
|なをし|たひ|と||おもやら||ば|
|惣名|で||おりやる||よ|なふ|

7.5.5.3.2 「おりない」の扱い

「おりやる」を1短単位としたため、意味・機能が対応する「おりない」「おりなし」についても1短単位と認め、形容詞「おりない」とする。

【例】
|別|なる|事|で|も||おりなひ||

7.5.5.4 「ござある」と「ござない」

存在動詞「ござある」は1短単位と見、語彙素「御座る」の語形とする。また意味・機能が対応する「ござない」「ござなし」も1短単位と認め、形容詞「御座無い」とする。

【例】
|阿弥陀|如来|に|て||御座ある||故|に|
|さやう|で|は||御ざない||

7.6 複数の短単位に分割が困難な出現形

1～7.5によって本来は複数の短単位として認定されるが、出現形の表記上分割することが困難な場合、複数の短単位をまとめて1短単位として扱う。

【例】
|雖も| (本来は「|イエ|ドモ|」)
|加之| (本来は「|シカ|ノミ|ナラ|ズ|」)

8 参考 短単位の例

現 代 人

【例】
| 現代 | 人 | | 伝染 | 病的 | | 昨年 | 末 | | 新築 | 中 | | 自主 | 性 |
| 家庭 | 用 | | 全国 | 的 |

3.1.2

都 議 会

【例】
都	議会		市	庁舎			核	軍縮			食	中毒			正	反対
総	工費		全	理事			大	規模			不	明朗			非	能率
各	選手		同	理事												

3.1.3

年 月 日

【例】
| 年 | 月 | 日 | | 松 | 竹 | 梅 | | 衣 | 食 | 住 |

3.1.4

句 読 点

【例】
| 都区内 | | 統廃合 | | 町村長 |

3.1.5

国 内 外

【例】
| 国内外 | | 輸出入 |

3.1.6

[構造を示すことができないと考えられるもの]

【例】
| 不可解 | | 不思議 |

3.2 4 最小単位語

3.2.1

火 災 防 止

【例】
| 火災 | 防止 | | 公共 | 事業 |

3.2.2



【例】 | 幼稚 | 園 | 児 | | 郵便 | 局 | 長 | | 警備 | 員 | 室 | | 解剖 | 学 | 者 |

3.2.3



【例】 | 中 | 学校 | 長 | | 法 | 医学 | 者 |

3.2.4



【例】 | 総 | 調達 | 額 | | 軽 | 飛行 | 機 | | 各 | 管制 | 塔 | | 同 | 動物 | 園 |

3.2.5



【例】 | 市町村長 |

3.2.6



【例】 | 青少年 | 法 | | 小中学 | 生 |

3.2.7



【例】 | 小 | 中 | 学校 |

3.2.8



【例】 | 市 | 区 | 町 | 村 | | 都 | 道 | 府 | 県 |

3.2.9

生 年 月 日

【例】
| 生 | 年 | 月 | 日 |

3.3 5 最小单位

3.3.1

試 驗 放 送 中

【例】
| 試 驗 | 放 送 | 中 | | 有 線 | 放 送 | 網 | | 行 政 | 區 画 | 名 | | 獨 占 | 禁 止 | 法 |

3.3.1.1

※ 債 權 所 有 者

【例】
| 債 權 | 所 有 | 者 | | 宇 宙 | 飛 行 | 士 | | 沿 岸 | 警 備 | 隊 |
| 地 震 | 觀 測 | 所 | | 入 試 | 改 善 | 策 |

3.3.2

都 清 掃 条 例

【例】
| 都 | 清 掃 | 条 例 | | 準 | 保 護 | 世 帯 |

3.3.3

同 刑 事 部 長

【例】
| 同 | 刑 事 | 部 | 長 | | 同 | 事 務 | 所 | 長 |

3.3.4

再 編 成 論 議

【例】
| 再 | 編 成 | 論 議 |

3.3.5

地 下 核 実 験



【例】
| 地下 | 核 | 実験 |

3.3.6

船 員 中 勞 委



【例】
| 船員 | 中勞委 |

3.3.7

經 団 連 会 長



【例】
| 経団連 | 会長 |

3.4 6 最小单位語

3.4.1

都 市 交 通 問 題



【例】
| 都市 | 交通 | 問題 | | 消費 | 減退 | 傾向 | | 高校 | 全入 | 運動 |

3.4.2

總 合 警 備 本 部



【例】
| 総合 | 警備 | 本部 | | 事故 | 合同 | 会議 |

3.4.3

野 鳥 用 給 水 池



【例】
| 野鳥 | 用 | 給水 | 池 | | 自動 | 車 | 修理 | 工 |

3.4.4

社 会 科 副 読 本



【例】
| 社会 | 科 | 副 | 読本 |

3.4.5



【例】
| 都市 | 交通 | 課 | 長 | | 宇宙 | 開発 | 史 | 上 |

3.4.6



【例】
| 広告 | 代理 | 店 | 員 |

3.4.7



【例】
| 小 | 学校 | 入学 | 児 |

3.4.8



【例】
| 中 | 学校 | 長 | 会 | 長 |

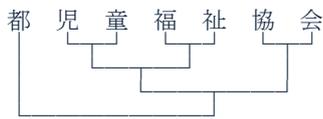
3.5 7 最小単位語

3.5.1



【例】
| 議員 | 給与 | 条例 | 中 |

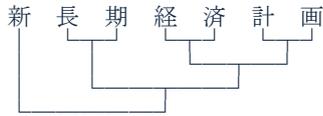
3.5.2



【例】

| 都 | 児 童 | 福 祉 | 協 会 |

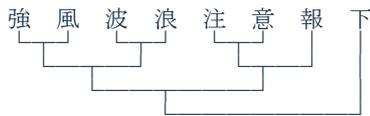
3.5.3



【例】

| 新 | 長 期 | 経 済 | 計 画 |

3.5.4



【例】

| 強 風 | 波 浪 | 注 意 | 報 | 下 |

第3章 付加情報

第1 付加情報の概要

短単位認定規程によって認定された各単位に、次に挙げる付加情報を付与する。

1 語彙素読み

語彙素読みは、同一語の活用変化・音の転化・ゆれ・省略・融合等によって生じた異形態や送り仮名の違い等の異表記をグループ化するための情報である。原則として、コーパスに出現したすべての短単位に付与する。

2 語彙素

語彙素は、語彙素読みに対する国語の表記である。原則として、コーパスに出現した全ての短単位に付与する。

3 品詞等の情報

各単位に対して、品詞等の情報（以下、品詞情報）として、次に挙げる情報を付与する。

- (1) 品詞
- (2) 活用型
- (3) 活用形

4 語種情報

語種とは、語をその出自によって分類したもののことである。原則として、コーパスに出現した全ての短単位に付与する。

第2 品詞情報の概要

1 品詞

品詞のうち、室町時代編に関わる主なものを以下に挙げる。

1.1 名詞

1.1.1 名詞-普通名詞-一般

1.1.2 から 1.1.6 以外の普通名詞

【例】
なのり 衆生 娑婆

1.1.2 名詞-普通名詞-サ変可能

形式的な意味の「いたす」「する」「申す」などが直接続き、動詞として用いられることのあるもの。可能性を示すものであって、実際にサ変動詞の語幹として使われているか否かは問わない。

【例】
同道 奉公 進上

1.1.3 名詞-普通名詞-形状詞可能

断定の助動詞「なり」「たり」が付いて述語になったり、連体修飾成分になったりするもの。可能性を示すものであって、実際に助動詞「なり」が付いているか否かは問わない。

【例】
口下手 高直 奇特

1.1.4 名詞-普通名詞-サ変形状詞可能

形式的な意味の「いたす」「する」「申す」などが直接続き、動詞として用いられることのあるもので、断定の助動詞「なり」「たり」が付いて連体修飾成分にもなるもの。可能性を示すものであって、サ変動詞の語幹として使われているか否か、形状詞として使われているか否かは問わない。

【例】
不審 迷惑

1.1.5 名詞-普通名詞-副詞可能

単独で連用修飾成分になるもの、及び句又は節による連体修飾を受けて、それ全体で連用修飾成分となるもの。可能性を示すものであって、実際に単独で、又は句や節による連体修飾を受けて連用修飾成分として使われているか否かは問わない。

【例】
今日 近頃 一段

1.1.6 名詞-普通名詞-助数詞可能

数詞に付き、助数詞として用いられることのあるもの（主として『日本国語大辞典』第2版、『大辞林』第2版において、名詞のほか助数詞としての用法に関する記述のあるもの）。可能性を示すものであって、実際に助数詞として使われているか否かは問わない。

【例】
面番 方(かた) 袋

1.1.7 名詞-固有名詞-一般

1.1.8 から 1.1.12 以外の固有名詞。組織の名称や仏名・神名、元号など。

【例】
瑞正 延喜 閻魔 大夫黒

1.1.8 名詞-固有名詞-人名-一般

日本・中国・韓国以外の人名及び 1.1.9 , 1.1.10 に分類できない人名。あだ名やしこ名なども含む。

【例】
武悪 俊寛 左近

1.1.9 名詞-固有名詞-人名-姓

日本・中国・韓国の人名のうち姓に当たるもの。

【例】
柿本 源 和田 北条

1.1.10 名詞-固有名詞-人名-名

日本・中国・韓国の人名のうち名に当たるもの。

【例】
為朝 忠度 又九郎左衛門 銀三郎 鈍太郎

1.1.11 名詞-固有名詞-地名-一般

国名以外の地名（行政区画名・地域地方名・地形名）。「旧国名」も含む。

【例】
津 丹波 入間 栗田口

1.1.12 名詞-固有名詞-地名-国

地名のうち国名。なお、日本国内の「旧国名」に相当するもの及び歴史上の都市国家や公国は「地名-一般」。

【例】
日本 秦 胡国 蜀

1.1.13 名詞-数詞

【例】
一 二十 幾（人） 何百 数千

1.2.1 代名詞

【例】
お主 おれ これ そなた それがし なに

1.3 形状詞

1.3.1 形状詞-一般

1.3.2 , 1.3.3 以外の、いわゆる形容動詞の語幹に当たるもの。

【例】
たおやか 僅か 過分

1.3.2 形状詞-タリ

いわゆるタリ活用の形容動詞の語幹に当たるもの。

【例】
峨々 漫々 べう / \ (渺々)

1.3.3 形状詞-助動詞語幹

現代語で一般に助動詞とされる「そうだ」（様態）及び「ようだ」の語幹に当たるもの。

1.4 連体詞

【例】
この おなじ いかな わが

1.5 副詞

擬音語・擬態語を含む。名詞としての用法を持つものは、「名詞-普通名詞-副詞可能」とする。

【例】
あまた いかで まづ もはや わつば

1.6 接続詞

【例】
さて されば また

1.7 感動詞

1.7.1 感動詞-一般

フィラー以外の感動詞。感動詞の詳細は、同語異語判別規程の 第4章 第1 6.7 「感動詞の扱い」を参照。

【例】
ああ いざ やれ / \ ぬいや

1.7.2 感動詞-フィラー

【例】
あの えーと えーっと

1.8 動詞

1.8.1 動詞-一般

1.8.2 以外の動詞

【例】
聞く 笑ふ

1.8.2 動詞-非自立可能

名詞に直接続くことのある「す」「いたす」の類や、補助動詞として動詞連用形や動詞連用形に接続助詞「て」を添えた形に接続することのあるもの。資料「要注意語」の「接尾的要素」に上げた語のうち、品詞を動詞とするものはここに分類する。可能性を示すものであって、実際に補助動詞として使われているか否かは問わない。

【例】
す 候ふ 来 置く

1.9 形容詞

1.9.1 形容詞-一般

1.9.2 以外の形容詞

【例】
美し をかし

1.9.2 形容詞-非自立可能

形容詞・形容詞活用型助動詞の連用形や形容詞・形容詞活用型助動詞の連用形に接続助詞「て」を添えた形に接続し、補助的に用いられることのあるもの。可能性を示すものであって、実際に補助的に使われているか否かは問わない。

【例】
なし 良し

1.10 助動詞

【例】
なり ず ごとし

1.11 助詞

1.11.1 助詞-格助詞

【例】
に の より を

1.11.2 助詞-副助詞

【例】
など のみ ばかり

1.11.3 助詞-係助詞

【例】
こそ ぞ は も

1.11.4 助詞-接続助詞

【例】
つつ て ども ながら ば

1.11.5 助詞-終助詞

【例】
い か ばや よ かな

1.11.6 助詞-準体助詞

【例】
の

1.12 接頭辞

【例】
御（来臨） 大（果報） 不（案内）

1.13 接尾辞

1.13.1 接尾辞-名詞的-一般

【例】
（嬉し）さ （雑人）共 （むこ）殿 （なんぢ）ら

1.13.2 接尾辞-名詞的-サ変可能

名詞に接続してサ変動詞の語幹となり得る語を作るもの。

【例】
(賢人) 立て

1.13.3 接尾辞-名詞的-副詞可能

名詞に接続して作られた語が、単独で連用修飾成分になり得るもの。

【例】
(見物) がてら (一両日) 中

1.13.4 接尾辞-名詞的-助数詞

助数詞としての用法しか持たないもの。

【例】
つ 匹 本 枚

1.13.5 接尾辞-形状詞的

名詞、動詞の連用形、形容詞の語幹、形状詞などに接続して形状詞を作るもの。

【例】
(懈怠) 勝ち (見苦し) 気

1.13.6 接尾辞-動詞的

名詞、動詞の連用形、形容詞の語幹、形状詞などに接続して動詞を作るもの。

【例】
(はづかし) がる (待ち) かぬ

1.13.7 接尾辞-形容詞的

名詞、動詞の連用形、形容詞の語幹、形状詞などに接続して形容詞を作るもの。

【例】
(忘れ) がたし (分別) らしい (とざま) がまし

1.14 記号

1.14.1 記号-一般

1.14.2 以外の記号。漢字の解説に用いられたもの（メタ的に用いられた文字）などを含む。

【例】
い (の字) (義経の) 義 (を下されて)

1.14.2 記号-文字

アルファベットやギリシャ文字。

【例】
A α Σ

1.15 補助記号

1.15.1 補助記号-一般

【例】
: ; / \

1.15.2 補助記号-句点

【例】

。 ・ ！

1.15.3 補助記号-読点

【例】

、 ，

1.15.4 補助記号-括弧開

【例】

(《 「

1.15.5 補助記号-括弧閉

【例】

) 」 』

1.16 空白

行頭の字下げなどの空白

1.17 品詞一覧

品詞	類
名詞-普通名詞-一般	体
名詞-普通名詞-サ変可能	体
名詞-普通名詞-形状詞可能	体
名詞-普通名詞-サ変形状詞可能	体
名詞-普通名詞-副詞可能	体
名詞-普通名詞-助数詞可能	体
名詞-固有名詞-一般	固有名
名詞-固有名詞-人名-一般	人名
名詞-固有名詞-人名-姓	姓
名詞-固有名詞-人名-名	名
名詞-固有名詞-地名-一般	地名
名詞-固有名詞-地名-国	国
名詞-数詞	数
代名詞	体
形状詞-一般	相
形状詞-タリ	相
形状詞-助動詞語幹	助動
連体詞	相
副詞	相
接続詞	他
感動詞-一般	他
感動詞-フィラー	他
動詞-一般	用
動詞-非自立可能	用
形容詞-一般	相
形容詞-非自立可能	相
助動詞	助動
助詞-格助詞	格助
助詞-副助詞	副助
助詞-係助詞	係助
助詞-接続助詞	接助
助詞-終助詞	終助
助詞-準体助詞	準助
接頭辞	接頭
接尾辞-名詞的-一般	接尾体
接尾辞-名詞的-サ変可能	接尾体
接尾辞-名詞的-副詞可能	接尾体
接尾辞-名詞的-助数詞	接尾体
接尾辞-形状詞的	接尾相
接尾辞-動詞的	接尾用
接尾辞-形容詞的	接尾相
記号-一般	記号
記号-文字	記号
補助記号-一般	補助
補助記号-句点	補助
補助記号-読点	補助
補助記号-括弧開	補助
補助記号-括弧閉	補助
空白	補助

1.17.1 未知語の種別

なお『室町時代編 I 狂言』では、解釈が不明な箇所や単語情報付与が困難な箇所は「未知語」として扱い、下記の種別を「品詞」として付与している。

種別（品詞）	内容
歌・呪文ほか	歌や呪文、笛の音など、語としての切れ目を付け難い、あるいは切れ目の分らないもの。
解釈不明	解釈不明の箇所。なお意味は不詳でも、確実に単語や読みの認定が可能なものは短単位認定する。
漢文	訓点等のない漢文箇所
経文	経典の読誦等
言いよどみ	言いよどみ
言い間違い	言い間違い・記憶違い等による臨時的な形態
長大な人名	長大な人名
洒落	洒落や掛詞等による臨時的な形態

1.18 細則

1.18.1 名詞・形状詞・副詞の品詞認定

ある語について、実際のコーパスの用例（『日本国語大辞典 第2版』に立項されている語形の場合、そこにあげられた用例も含む）から名詞・形状詞・副詞用法を判別し、規程上の「品詞」を認定する基準を示す。

1.18.1.1 名詞・形状詞・副詞用法の判別

名詞用法・形状詞用法・副詞用法の判別基準を以下に示す。

1.18.1.1.1 名詞用法と判別するもの

1.18.1.1.1.1 格助詞が後接する

【例】
いつれ【子細】があらふ
目前に【きどく】を見するがてがらじや

1.18.1.1.1.1.1

ただし、1.18.1.1.6.1 に該当する「の」、1.18.1.1.6.2 に該当する「に」「と」は除く。

1.18.1.1.1.1.2

格助詞のない形式となる場合や、格助詞の代わりとなる係助詞・副助詞が付く場合もある。

【例】
【仕合】よふやがておりやれ
【子細】はいはぬがよし

1.18.1.1.1.2 連体修飾を受ける

【例】
日本一の【へた】なり
それは時の【ざれこと】であらう

1.18.1.1.1.3

擬音語・擬態語は1.18.1.1.1.1、1.18.1.1.1.2の用例があっても名詞用法とは認めない（規程 第4章 第1 6. 6.3.2 参照）。

【例】
きのふはたくさんに【ほろろ】をかけたが、けふは【ほろろ】をかけぬに依て（副詞）
※「ほろろ」は鳥の鳴く声を表す語

1.18.1.1.2 形状詞用法と判別するもの

助動詞「なり」「たり」（「に」「と」は除く）が付く形で事物の性質・状態を現すもの

【例】
極楽【はるか】なり
【茫々】たる巨海に船渡りして

1.18.1.1.3 副詞用法と判別するもの

単独で連用修飾するもの。係助詞「は」「も」「ぞ」「なむ」・副助詞「など」「のみ」「ばかり」「だに」等が後続する場合もある。

【例】
【はじめて】あふていふはいかがなれ共、
【まづ】あれへまいつて
【所詮】うたはせぬれうけんをいたさう
【すこし】はおあはれみをなされてくだされひ
私も【さ】のみうたふとはぞんぜなんだれ共

1.18.1.1.4 名詞用法または副詞用法と判別するもの

「す」「できる」などを伴ってサ変動詞になるもの

【例】
是をただかせて【成仏】させう（名詞）
それは【満足】した、（名詞）
あたまをふり、てをあげて、【色々】して（副詞）

1.18.1.1.5 名詞用法または形状詞用法と判別するもの

格に相当する要素によって修飾されるもの

【例】
身が【全盛】の時、恩を与えた者は今どこに居るぞ？（名詞）
又お上人様の【りこう】おせらるる（形状詞）

1.18.1.1.6 形状詞用法または副詞用法と判別するもの

1.18.1.1.6.1 事物の性質・状態を表し、格助詞「の」を伴って連体修飾する

【例】
この所に【過分】の財宝が御座る（形状詞）
ぐそらが、【大事】のけさをおといて候が、（形状詞）
都で【数多】の乞巧人を見たれども、（副詞）
【少し】の間も心静かな事は無うて（副詞）

1.18.1.1.6.2 事物の性質・状態を表し、「～に」「～と」の形で連用修飾する

【例】
身共に【ねんごろ】にいふてくるる程に（形状詞）
上れば白雲が【皓々】として聳え（形状詞）
是から【すぐ】にあれへまいつてふしんをはらさう（副詞）
心も消え入る様で、【漸う】として北の方の仰せられたる事共を【細々】と申して（副詞）

1.18.1.1.6.2.1

なお、「に」「と」の品詞は、形状詞に下接するものは助動詞「なり」「たり」、副詞に下接するものは格助詞「に」「と」とする。

1.18.1.2 『室町時代編』で新たな用法が見つかった場合

1.18.1 によって用法の認定を行うと、室町時代編において既登録語に新しい用法が現れたように見える例がある。しかしその用法が室町時代において新たに出現・定着した用法であると判断することは難しい場合が多いため、基本的には既登録語の品詞の書き換えや別語彙素として異なる品詞の語彙素を登録することはしない。以下に既登録語に新用法が現れた場合の処理を挙げる。

1.18.1.2.1 既登録語と意味の面で共通性が見られる場合

1.18.1.2.1.1 既登録語が「名詞」で新規用例がサ変動詞

既登録語の品詞が「名詞-普通名詞-一般」「名詞-普通名詞-形状詞可能」の場合は、「室町時代編」で新たにサ変動詞の用例が見つかったとしても、既登録語の品詞を修正せずそのまま使用する。

【例】
みねの坊、谷の坊、ことに【めいよ】しけるは、あかひのぼう
室山、水島二箇度の合戦に【高名】したと名乗る

1.18.1.2.1.2 既登録語が「形状詞-タリ」で新規用法が「～なり」

既登録語の品詞が「形状詞-タリ」の場合は、「室町時代編」で助動詞「なり」の後続する用例が新たに見つかったとしても、既登録語の品詞を修正せずそのまま使用する。

【例】
くり【さう / \】にして、ざぜんとくほうなりがたし

1.18.1.2.1.3 「名詞」と「形状詞」

既登録語の品詞が「名詞」の場合、「室町時代編」で形状詞用法と判別される用例が見つかったとしても（あるいは逆に、既登録語の品詞が「形状詞」の場合、室町時代編で名詞用法と判別される用例が見つかったとしても）、既登録語の品詞を修正せずそのまま使用する。

【例】

《既登録語「名詞」、「室町時代編」で形状詞用法→登録は「名詞」のまま》
爰に【うとく】なるおかたの御さあるが
ああ事の外いざりも【しんく】なぞ

《既登録語「形状詞」、「室町時代編」で名詞用法→登録は「形状詞」のまま》
老いてこそ猶【丁寧】をば尽くされうずる事なれ
斯様に【尾籠】を現じて清盛の悪名を立つる事

1.18.1.2.1.4 「名詞」と「副詞」

既登録語の品詞が「名詞」の場合、「室町時代編」で副詞用法と判別される用例が見つかったとしても（あるいは逆に、既登録語の品詞が「副詞」の場合、室町時代編で名詞用法と判別される用例が見つかったとしても）、既登録語の品詞を修正せずそのまま使用する。

【例】

《既登録語「名詞」、「室町時代編」で副詞用法→登録は「名詞」のまま》
【さいぜん】いなせひといふに、

《既登録語「副詞」、「室町時代編」で名詞用法→登録は「副詞」のまま》
のこりの天狗は【つと】より、おんみのくげんも是までなりと、
この勅諭を背かば、【悉く】を攻め取られうずる

1.18.1.2.1.5 「形状詞」と「副詞」

既登録語の品詞が「形状詞」で、「室町時代編」で明らかに副詞用法と判別される用例が見つかったときは、品詞「副詞」を追加登録し、副詞用法の用例を「副詞」と認定する。あるいは逆に、既登録語の品詞が「副詞」で、室町時代編で形状詞用法と判別される用例が見つかったときは、品詞「形状詞」を追加登録し、形状詞用法の用例を「形状詞」と認定する。

【例】

《既登録語「形状詞」、「室町時代編」で副詞用法→「副詞」を追加登録》
いや／＼めのかずも【ばつぐん】ちがふ
けぶりのなかに【きへ／＼】と、

1.18.1.2.1.5.1

副詞と断定の助動詞「なり」の接続は認めない。そのためUniDicに副詞として登録されているものに助動詞「なり」が下接している場合は、新たに形状詞を登録する。ただし以下の語については形状詞と認めがたいため、例外的に副詞のままとする。

【例】

こう さ(然) しか(然) そう どう 何ぼ

1.18.1.2.2 既登録語と意味の面で大きな違いが見られる場合

「室町時代編」で、既登録語とは異なる「品詞」と認定される用法があり、かつ意味の面で大きな違いが見られる場合、新たに認定された「品詞」を追加登録する。

【例】

《既登録語「形状詞」、「室町時代編」で名詞用法→「名詞」を新規登録》
【きよう】こつがら人にすぐれてござる程に
※「形状詞」は「役に立つ才能があること」などの意、「名詞」は「容貌、人柄」の意

2 活用型

UniDicの活用型のうち、「室町時代編」に関わる主なものを、以下に挙げる。

2.1 動詞

2.1.1 文語四段活用

2.1.1.1 文語四段-カ行

【例】
行く 置く

2.1.1.2 文語四段-ガ行

【例】
仰ぐ 凌ぐ

2.1.1.3 文語四段-サ行

【例】
明かす 致す

2.1.1.4 文語四段-タ行

【例】
うがつ 放つ

2.1.1.5 文語四段-ハ行 (一般)

2.1.1.6 ~ 2.1.1.9 以外の文語ハ行四段活用動詞

【例】
争ふ 食ふ

2.1.1.6 文語四段-ハ行 (-ノウ)

語幹末尾がア段音の文語ハ行四段活用動詞。連用形がウ音便になる場合、語幹末尾の発音がオ段音に変わる。

【例】
会ふ 買ふ

2.1.1.7 文語四段-ハ行 (-オウ)

語幹末尾がオの文語ハ行四段動詞。語幹末尾の発音がオ段長音の場合、連用形ウ音便の語幹末尾が二重母音になる。（「おおふ（発音：オーウ）」→「おおう（発音：オオー）」）

【例】
覆ふ 負ふ

2.1.1.8 文語四段-ハ行 (-イウ)

動詞「言ふ」。終止形・連体形が「ユウ」と発音されることがある。

2.1.1.9 文語四段-ハ行 (-チョウ)

「ていふ」の縮約形「てふ」。終止形・連体形の「てふ」、已然形・命令形の「てへ」に限られる。

2.1.1.10 文語四段-バ行

【例】
遊ぶ 及ぶ

2.1.1.11 文語四段-マ行

【例】
歩む 読む

2.1.1.12 文語四段-ラ行

【例】
煽る 散る

2.1.2 文語上一段活用

2.1.2.1 文語上一段-カ行

【例】
着る

2.1.2.2 文語上一段-ナ行

【例】
煮る 似る

2.1.2.3 文語上一段-ハ行

【例】
干る 簀る

2.1.2.4 文語上一段-マ行

【例】
見る 鑑みる 試みる

2.1.2.5 文語上一段-ヤ行

【例】
射る 鋳る

2.1.2.6 文語上一段-ワ行

【例】
居る 率る 用ゐる

2.1.3 文語上二段活用

2.1.3.1 文語上二段-カ行

【例】
起く 生く

2.1.3.2 文語上二段-ガ行

【例】
過ぐ

2.1.3.3 文語上二段-タ行

【例】
落つ 満つ

2.1.3.4 文語上二段-ダ行

【例】
閉づ 恥づ

2.1.3.5 文語上二段-ハ行

【例】
恋ふ 生ふ

2.1.3.6 文語上二段-バ行

【例】
浴ぶ 減ぶ

2.1.3.7 文語上二段-マ行

【例】
恨む

2.1.3.8 文語上二段-ヤ行

【例】
老ゆ 悔ゆ 報ゆ

2.1.3.9 文語上二段-ラ行

【例】
下(お)る 懲る

2.1.4 文語下一段活用

2.1.4.1 文語下一段-カ行

【例】
蹴る

2.1.5 文語下二段活用

2.1.5.1 文語下二段-ア行

【例】
得 心得

2.1.5.2 文語下二段-カ行

【例】
避く 溶く

2.1.5.3 文語下二段-ガ行

【例】
上ぐ 告ぐ

2.1.5.4 文語下二段-サ行

【例】
乗す 見す

2.1.5.5 文語下二段-タ行

【例】
当つ 捨つ

2.1.5.6 文語下二段-ダ行

【例】
出つ 撫づ

2.1.5.7 文語下二段-ナ行

【例】
ぬ (寝)

2.1.5.8 文語下二段-ハ行 (-一般)

2.1.5.9 以外の文語ハ行下二段活用動詞

【例】
和ふ 終ふ

2.1.5.9 文語下二段-ハ行 (-経)

【例】
ふ (経)

2.1.5.10 文語下二段-バ行

【例】
比ぶ 並ぶ

2.1.5.11 文語下二段-マ行

【例】
留む 止む

2.1.5.12 文語下二段-ヤ行

【例】
消ゆ 燃ゆ

2.1.5.13 文語下二段-ラ行

【例】
暮る 忘る

2.1.5.14 文語下二段-ワ行

【例】
植う 飢う

2.1.6 変格活用 (文語)

2.1.6.1 文語カ行変格

【例】
来

2.1.6.2 文語サ行変格 (-ス)

【例】
す 接す

2.1.6.3 文語サ行変格 (-ズ)

【例】
信ず 甘んず

2.1.6.4 文語ナ行変格

【例】
死ぬ

2.1.6.5 文語ラ行変格

【例】
あり 居り

2.1.7 五段活用

2.1.7.1 五段-カ行 (一般)

2.1.7.2 以外のカ行五段活用動詞。

【例】
空く 頂く

2.1.7.2 五段-カ行 (-イク)

語形が「イク」のもの。連用形の音便形が促音便となる。

【例】
行く

2.1.7.3 五段-カ行 (-ユク)

語形が「ユク」のもの。連用形に音便形がない。

2.1.7.4 五段-ガ行

【例】
泳ぐ 注ぐ

2.1.7.5 五段-サ行

【例】
致す 話す

2.1.7.6 五段-タ行

【例】
明け放つ 育つ

2.1.7.7 五段-ナ行

【例】
死ぬ

2.1.7.8 五段-バ行

【例】
遊ぶ 学ぶ

2.1.7.9 五段-マ行 (一般)

2.1.7.10 以外のマ行五段活用動詞

【例】
混む 進む

2.1.7.10 五段-マ行 (-済ム)

動詞「済む」。連用形にイ音便がある。

2.1.7.11 五段-ラ行 (-一般)

2.1.7.12 , 2.1.7.13 以外のラ行五段活用動詞。

【例】

有る 煽る 売る

2.1.7.12 五段-ラ行 (-アル)

語幹末尾がア段音のラ行五段活用動詞。助動詞「ます」が接続する場合に連用形がイ音便となる。命令形の語末が「い」である。

【例】

いらっしゃる おっしゃる

2.1.7.13 五段-ラ行 (-サル)

語幹末尾がサのラ行五段活用動詞。助動詞「ます」が接続する場合に連用形がイ音便となる。命令形の語末が「い」である。

【例】

下さる 為さる

2.1.7.14 五段-ワア行 (-一般)

2.1.7.15 ~ 2.1.7.18 以外のワア行五段活用動詞。

【例】

争う 整う

2.1.7.15 五段-ワア行 (-ウ)

語幹末尾がア段音のワア行五段活用動詞。連用形がウ音便になる場合、語幹末尾がオ段音に変わる。語幹が仮名書きされている場合、この変化が表記に現れる。

【例】

合う 扱う 損なう

2.1.7.16 五段-ワア行 (-オウ)

語幹末尾がオのワア行五段動詞。語幹末尾の発音がオ段長音の場合、連用形ウ音便の語幹末尾が二重母音になる。(「おおう (発音：オーウ)」→「おおう (発音：オオー)」)

【例】

覆う 背負う

2.1.7.17 五段-ワア行 (-イウ)

動詞「言う」で語形が「イウ」のもの。

2.1.7.18 五段-ワア行 (-ユウ)

動詞「言う」で語形が「ユウ」のもの。

2.1.8 上一段活用

2.1.8.1 上一段-ア行

【例】
居る 射る

2.1.8.2 上一段-カ行

【例】
飽きる 出来る

2.1.8.3 上一段-ガ行

【例】
過ぎる

2.1.8.4 上一段-ザ行

【例】
甘んじる 信じる

2.1.8.5 上一段-タ行

【例】
落ちる 満ちる

2.1.8.6 上一段-ナ行

【例】
似る 煮る

2.1.8.7 上一段-ハ行

【例】
干(ひ)る

2.1.8.8 上一段-バ行

【例】
浴びる 滅びる

2.1.8.9 上一段-マ行

【例】
試みる 見る

2.1.8.10 上一段-ラ行 (一般)

2.1.8.11 以外のラ行上一段活用動詞

【例】
下りる 借りる 懲りる

2.1.8.11 上一段-ラ行 (-リル)

動詞「足りる」。未然形に撥音便がある。

2.1.9 下一段活用

2.1.9.1 下一段-ア行 (一般)

2.1.9.2 以外のア行下一段活用

【例】
植える

2.1.9.2 下一段-ア行 (-得ル)

動詞「得（え）る」。終止形，連体形に「える」のほか「うる」がある。

2.1.9.3 下一段-カ行

【例】
開ける 掛ける

2.1.9.4 下一段-ガ行

【例】
上げる 告げる

2.1.9.5 下一段-サ行 (-一般)

2.1.9.6 以外のサ行下一段活用動詞

【例】
褪せる 瘦せる 噎（む）せる

2.1.9.6 下一段-サ行 (-セル)

連用形語尾に「し」がある。

【例】
見せる

2.1.9.7 下一段-ザ行

【例】
交ぜる 爆（は）ぜる

2.1.9.8 下一段-タ行

【例】
当てる 捨てる

2.1.9.9 下一段-ダ行

【例】
出る

2.1.9.10 下一段-ナ行

【例】
重ねる 寝る

2.1.9.11 下一段-ハ行

【例】
経る

2.1.9.12 下一段-バ行

【例】
食べる 調べる

2.1.9.13 下一段-マ行

【例】
止める 褒める

2.1.9.14 下一段-ラ行 (一般)

2.1.9.15 , 2.1.9.16 以外のラ行下一段活用動詞。

【例】
憧れる 遅れる

2.1.9.15 下一段-ラ行 (-レル)

動詞「知れる」。未然形に撥音便がある。

2.1.9.16 下一段-ラ行 (-呉レル)

動詞「呉れる」。命令形に「～よ」「～ろ」の形がなく、「くれ」である。

2.1.10 変格活用 (口語)

2.1.10.1 カ行変格

【例】
来る

2.1.10.2 サ行変格 (-為ル)

2.1.10.3 , 2.1.10.4 以外のサ行変格活用。単独の「する」。未然形で、助動詞「ず」が接続する場合に「せ」, 「せる」が接続する場合に「さ」という区別がある。

2.1.10.3 サ行変格 (-スル)

「1字漢語+する」の形のもの。

【例】
愛する 称する

2.1.10.4 サ行変格 (-ズル)

【例】
甘んずる 信ずる

2.1.11 特殊型 (-候)

「そろ」「そう」など「候(そろ)う」の異語形で特殊な活用をするもの。

2.2 形容詞

2.2.1 口語活用

2.2.1.1 形容詞 (一般)

下記 2.2.1.2 から 2.2.1.5 以外の形容詞。

2.2.1.2 形容詞（-無イ）

形容詞「無い」。様態の助動詞「そうだ」が接続するとき、「無さ」という形を取る。この場合の「無さ」は語幹の一形態とする。

2.2.1.3 形容詞（-良イ-ヨイ）

形容詞「良い」のうち「ヨイ」という語形のもの。

2.2.1.4 形容詞（-〇イ）

- ①語幹末尾がア段音の形容詞は、連用形がウ音便になる場合に語幹末尾がオ段音になる。また、終止形・連体形の語幹末尾がエ段音になる場合がある（たかい→たけえ）。
- ②語幹末尾がウ段音の形容詞は、終止形・連体形の語幹末尾がイ段音になる場合がある（さむい→さみい）。
- ③語幹末尾がオ段音の形容詞は、終止形・連体形の語幹末尾がエ段音になる場合がある（ひどい→ひでえ）。

語幹が仮名書きされている場合、以上の変化が表記に現れる。

2.2.1.5 形容詞（-オイ）

語幹末尾がオの形容詞。語幹末尾の発音がオ段長音の場合、連用形ウ音便の語幹末尾が二重母音になる。（「とおい（発音：トーイ）」→「とおう（発音：トオー）」）

2.2.2 文語活用

2.2.2.1 文語形容詞-ク（一般）

2.2.2.2 ～ 2.2.2.5 以外のク活用の形容詞。

【例】

白し 寒し

2.2.2.2 文語形容詞-ク（-〇シ）

- ①語幹末尾がア段音のク活用形容詞は、連用形ウ音便の場合に語幹末尾がオ段音になる（「たかし」→「たかう（発音：タコー）」）。
- ②語幹末尾がエ段音のク活用形容詞は、連用形ウ音便の場合に語幹末尾がオ段拗音になる（「あまねし」→「あまねう（発音：アマニョー）」）。

【例】

高し あまねし

2.2.2.3 文語形容詞-ク（-ウシ）

語幹末尾がウのク活用形容詞。語幹末尾の発音がオ段長音の場合、連用形ウ音便の語幹末尾が二重母音になる。（「ようし（発音：ヨーシ）」→「ようう（発音：ヨオー）」）

【例】

良うし 憂し

2.2.2.4 文語形容詞-ク（-オシ）

語幹末尾がオのク活用形容詞。語幹末尾の発音がオ段長音の場合、連用形ウ音便の語幹末尾が二重母音になる。（「とほし（発音：トーシ）」→「とほう（発音：トオー）」）

【例】

遠し 青し

2.2.2.5 文語形容詞-ク（-多シ）

形容詞「多し」。終止形に「多し」のほか、「多かり」がある。

2.2.2.6 文語形容詞-シ (-シク)

2.2.2.7 以外のシク活用の形容詞。

【例】
美し 楽し

2.2.2.7 文語形容詞-シ (-ジク)

シク活用の形容詞のうち活用語尾の語頭が「じ」のもの。

【例】
いみじ

2.3 助動詞

2.3.1 個別の活用型

次に挙げる助動詞の活用は、動詞・形容詞の活用と比べて個別であるため、助動詞ごとに活用型を立てる。

き……文語助動詞-キ
けむ……文語助動詞-ケム
けり……文語助動詞-ケリ
ごとし……文語助動詞-ゴトシ
さしも・しも……文語助動詞-シモ
じ……文語助動詞-ジ
ず……文語助動詞-ズ
たり……文語助動詞-タリ-完了
たり……文語助動詞-タリ-断定
つ……文語助動詞-ツ
なり……文語助動詞-ナリ-伝聞
なり……文語助動詞-ナリ-断定
ぬ……文語助動詞-ヌ
べし……文語助動詞-ベシ
まし……文語助動詞-マシ
まじ……文語助動詞-マジ
む……文語助動詞-ム
むず……文語助動詞-ムズ
めり……文語助動詞-メリ
らし……文語助動詞-ラシ
らむ……文語助動詞-ラム
り……文語助動詞-リ

げな……助動詞-ゲナ
じゃ……助動詞-ジャ
た……助動詞-タ
たい……助動詞-タイ
です……助動詞-デス
なんだ……助動詞-ナンダ
まい……助動詞-マイ
ます……助動詞-マス
れる・られる……助動詞-レル

2.3.2 無変化型

次に挙げる活用しない助動詞は「無変化型」とする。

い（四段動詞の未然形に付き命令の意を表すもの） う べい よう ろう 候（す）

2.3.3 その他

2.3.1 , 2.3.2 以外の助動詞には、動詞・形容詞と同じ活用型を付与する。

【例】
さす ……活用型：文語下二段-サ行
まほし ……活用型：文語形容詞-シク

2.4 接尾辞

「接尾辞-動詞的」は動詞の活用型を, 「接尾辞-形容詞的」は形容詞の活用型を付与する。

【例】

難し……活用型: 文語形容詞-ク-一般
がる……活用型: 文語四段-ラ行

2.5 活用型一覧

文語四段-〇行
 文語四段-ハ行 (一般)
 文語四段-ハ行 (-〇ウ)
 文語四段-ハ行 (-オウ)
 文語四段-ハ行 (-イウ)
 文語四段-ハ行 (-チョウ)
 文語上一段-〇行
 文語上二段-〇行
 文語下一段-カ行
 文語下二段-〇行
 文語下二段-ハ行 (一般)
 文語下二段-ハ行 (-経)
 文語カ行変格
 文語サ行変格 (-ス)
 文語サ行変格 (-ズ)
 文語ナ行変格
 文語ラ行変格
 五段-〇行
 五段-カ行 (一般)
 五段-カ行 (-イク)
 五段-マ行 (一般)
 五段-マ行 (-済ム)
 五段-ラ行 (一般)
 五段-ラ行 (-アル)
 五段-ラ行 (-サル)
 五段-ワア行 (一般)
 五段-ワア行 (-〇ウ)
 五段-ワア行 (-オウ)
 五段-ワア行 (-イウ)
 五段-ワア行 (-ユウ)
 上一段-〇行
 上一段-ラ行 (一般)
 上一段-ラ行 (-リル)
 下一段-〇行
 下一段-ア行 (一般)
 下一段-ア行 (-得ル)
 下一段-サ行 (一般)
 下一段-サ行 (-セル)
 下一段-ラ行 (一般)
 下一段-ラ行 (-レル)
 下一段-ラ行 (-呉レル)
 カ行変格
 サ行変格 (-為ル)
 サ行変格 (-スル)
 サ行変格 (-ズル)
 特殊型 (-候)
 形容詞 (一般)
 形容詞 (-無イ)
 形容詞 (-良イ-ヨイ)
 形容詞 (-〇イ)
 形容詞 (-オイ)
 文語形容詞-ク (一般)
 文語形容詞-ク (-〇シ)
 文語形容詞-ク (-ウシ)
 文語形容詞-ク (-オシ)
 文語形容詞-ク (-多シ)
 文語形容詞-シク (-シク)
 文語形容詞-シク (-ジク)
 文語助動詞-キ
 文語助動詞-ケム
 文語助動詞-ケリ
 文語助動詞-ゴトシ
 文語助動詞-シモ
 文語助動詞-ジ
 文語助動詞-ズ
 文語助動詞-タリ-完了
 文語助動詞-タリ-断定
 文語助動詞-ツ
 文語助動詞-ナリ-断定
 文語助動詞-ナリ-伝聞
 文語助動詞-ヌ
 文語助動詞-ベシ
 文語助動詞-マシ
 文語助動詞-マジ
 文語助動詞-ム
 文語助動詞-ムズ
 文語助動詞-メリ
 文語助動詞-ラシ
 文語助動詞-ラム

文語助動詞-リ
助動詞-ゲナ
助動詞-ジャ
助動詞-タ
助動詞-タイ
助動詞-デス
助動詞-ナンダ
助動詞-マイ
助動詞-マス
助動詞-レル
無変化型

※活用型の名称のうち括弧でくられた部分は、入力活用型の細分類である。UniDicによる形態素解析結果には、入力活用型の細分類は出力されない。

2.6 細則

2.6.1 活用型の認定基準

ある書字形から想定される活用型が複数ある場合の、室町時代編での活用型の認定基準を以下に記す。

2.6.1.1 文語活用と口語活用

文語活用とそれに対応する口語活用がある場合、動詞・助動詞は原則として文語活用、形容詞型活用語は口語活用を活用型とする。

【例】
動詞：
話さ(ず) → 文語四段-サ行 × 五段-サ行
見え(たり) → 文語下二段-ヤ行 × 下一段-ア行
助動詞：
(なら)ぬ(こと) → 文語助動詞-ズ × 助動詞-ヌ
形容詞型活用：
いとおし(や) → 形容詞 × 文語形容詞-シク
つれなく → 形容詞 × 文語形容詞-ク
(逃れ)難う(て) → 形容詞 × 文語形容詞-ク

2.6.1.1.1

動詞の口語活用、形容詞型活用語の文語活用は、上記の原則では対応できないものに対してのみ使用する。

【例】
動詞：
にげる → 下一段-ガ行
こしらへる(時) → 下一段-ア行
こひ → カ行変格
形容詞型活用語：
悪しけれ(ば) → 文語形容詞-シク
安から(ず) → 文語形容詞-ク

2.6.1.1.1.1

第2章 第1 7.5.5.1 で挙げた「う」「うず」が後続する形のうち、全体で一短単位と認定された 第2章 第1 7.5.5.1.1.1, 第2章 第1 7.5.5.1.2.1 に該当するものは口語活用の意志推量形とする。

【例】
まどろもふ → 動詞一般・五段-マ行・意志推量形
よごりょう → 動詞一般・下一段-ラ行・意志推量形

2.6.1.1.1.1.1

動詞と助動詞「う」「うず」を分割したものについては、以下のように文語活用を優先して活用型を認定する。

【例】
| 参ら | う | → 動詞-非自立可能・文語四段-ラ行・未然形一般+助動詞・無変化型・終止形一般
| つかは | ふずれ | → 動詞一般・文語四段-ハ行・未然形一般+助動詞・文語助動詞-ムズ・已然形一般

2.6.1.1.1.2

第2章 第1 7.5.5.2 で挙げた末尾が「い」で終わる命令形のうち、全体で一短単位となる動詞の命令形は口語活用とする。

【例】
|つま|と【さだめひ】
→動詞一般・下一段-マ行・命令形
|お|とをり【なされひ】
動詞一般・下一段-ラ行・命令形

2.6.1.1.1.2.1

動詞と助動詞「い」を分割したものについては、以下のように活用型を認定する。

【例】
|うたわ|ひ| →文語四段・未然形+助動詞「い」命令形
|だせ|ひ| →文語四段・命令形+助詞-終助詞「い」
|けづら|れひ| →文語四段・未然形+助動詞・文語下二段-ラ行・命令形

2.6.1.1.2

次にあげる、対応する文語活用がないと考えられる動詞は、口語活用を活用型とする。

2.6.1.1.2.1 可能動詞

【例】
よめ(ぬ) →下一段-マ行 ×文語下二段-マ行

2.6.1.1.2.2 その他

【例】
できる →下一段-カ行 ×文語下二段-カ行 ※文語活用は文語カ行変格「でく」がある

2.6.1.2 文語サ変活用とサ行四段活用

文語サ行変格活用とそこから派生したサ行四段活用がある場合、文語サ行変格活用を活用型とする。

【例】
愛し(て) →文語サ行変格-ス ×文語四段-サ行

2.6.1.2.1

文語サ行変格活用では対応できない場合は、活用型を口語のサ行五段活用とする。

【例】
臆さ(せられた) →五段-サ行

2.6.1.3 文語サ変活用とザ行上一段活用

文語サ行変格活用とそこから派生したザ行上一段活用がある場合、文語サ行変格活用を活用型とする。

【例】
信じ(たり) →文語サ行変格-ズ ×上一段-ザ行

2.6.1.3.1

上一段活用としてしか判別できないもののみ、活用型を上一段活用とする。

【例】
ぞんじ（られた） →上二段-ザ行

※「文語上二段-ザ行」「文語上二段-ザ行」は規程上存在しないので、活用型として認めない。

2.6.1.4 二段活用のハ・ヤ・ワ行間の揺れ

室町時代にはハ行・ワ行の下二段活用語がヤ行で活用するようになるなど、活用型に揺れが見られる。活用型の判別方法を以下に挙げる。

2.6.1.4.1

活用語尾の表記に関わらず、基本的に日本国語大辞典第二版に記載されている活用型を用いる。「与ふ」→「与ゆ」のように室町時代ごろから異なる行で活用するようになった語についてはできるだけ元の活用行・型とする。

【例】
「与ふ」：日国ではハ行下二段活用
ひんなる者に福を【あたへ】 →文語下二段-ハ行
恩を【与え】た者は今どこに居るぞ？ →文語下二段-ハ行
たからを【あたふ】んと有て →文語下二段-ハ行
天の【与うる】を取らざれば →文語下二段-ハ行

「聞こゆ」：日国ではヤ行下二段活用
【きこえ】ぬ事を云人じや →文語下二段-ヤ行
そなたは【きこへ】ぬ →文語下二段-ヤ行

2.6.1.4.2

元の活用型では処理できない語形の場合、変化後の活用型を用いる。

【例】
天の【与ゆる】文じゃ →文語下二段-ヤ行
いまぞ福を【あたゆれ】とて →文語下二段-ヤ行
財宝半分を【与よ】うずる →文語下二段-ヤ行
こゑの【きこうる】 →文語下二段-ハ行

2.6.1.5 四段活用と上二段活用

上二段活用と四段活用とで揺れが生じる語については、上二段活用を活用型とする。

【例】
【忍び】兼ねて→文語上二段-バ行 ×文語四段-バ行
そめどののきさきを【こひ】かねて→文語上二段-ハ行 ×文語四段-ハ行

2.6.1.5.1

四段活用としてしか判別できないもののみ、活用型を四段活用とする。

【例】
【忍ば】せられい →文語四段-バ行

3 活用形

UniDicの活用形のうち室町時代編に関わる主なものを、以下に挙げる。

3.1 語幹

3.1.1 語幹一般

下記以外の活用語の語幹。

3.1.2 語幹-サ

いわゆる様態の助動詞「そうなり」が接続する場合の形容詞「良い」の語幹「良さ」

3.2 未然形

3.2.1 未然形-一般

下記以外の未然形。

3.2.2 未然形-サ

助動詞「す」が接続する場合のサ変動詞「する」の未然形「さ」。

3.2.3 未然形-補助

文語形容詞の補助活用，文語形容詞型活用の助動詞の補助活用，文語助動詞「ず」の未然形「ざら」。

3.3 意志推量形

「室町時代編」で意志推量形を認めるのは 第2章 第1 7.5.5.1 ～ 第2章 第1 7.5.5.1.2.1 に挙げた場合のみ。

【例】

起きよう しのふ まどろもふ

3.4 連用形

3.4.1 連用形-一般

下記以外の連用形。

3.4.2 連用形-〇音便

助動詞「たり」や接続助詞「て」が接続する場合の一般的な音便形。

3.4.3 連用形-融合

連用形と係助詞「は」とが融合したもの。

また断定の助動詞「なり」の連用形「に」に助詞の「て」の付いた「にて」が変化したもの。

【例】

さびたらばとが【ざ】なるまひ
いなかの者【で】、何もしらぬ程に

3.4.4 連用形-省略

連用形の活用語尾が省略されたもの。

【例】

とかく後生をお【ねが】やれ
常のごとく京へ【い】て

3.4.5 連用形-ト

文語助動詞「たり」の連用形「と」。

3.4.6 連用形-ニ

文語助動詞「なり」の連用形「に」。

3.4.7 連用形-補助

文語形容詞の補助活用，文語形容詞型活用の助動詞の補助活用，文語助動詞「ず」の連用形「ざり」。

3.5 終止形

3.5.1 終止形-一般

下記以外の終止形。

3.5.2 終止形-撥音便

助動詞の終止形末尾が撥音便になったもの。

【例】
いざやのぼら【ん】 人は何とか思ふ【らん】

3.6 連体形

3.6.1 連体形-一般

下記以外の連体形。

3.6.2 連体形-〇音便

【例】
馬にいね【こう】須磨の浦（ウ音便）
われとおもは【ん】ものどもは あほうにて【御ざん】なり（撥音便）
然る【べい】者を召して（イ音便）

3.6.3 連体形-補助

文語形容詞の補助活用，文語形容詞型活用の助動詞の補助活用，文語助動詞「ず」の連体形「ざる」。

3.7 已然形

3.7.1 已然形-一般

下記以外の已然形。

3.7.2 已然形-補助

文語形容詞の補助活用，文語助動詞「ず」の已然形「ざれ」。

3.8 仮定形

3.8.1 仮定形-一般

室町時代編では基本的に仮定形は使用しない。ただし，文語活用已然形での処理が不可能な場合，例外的に口語活用の仮定形と認定することがある。

【例】
日数【経れ】ば ※
※キリシタン資料の例。ローマ字本文が「fereba」となっており，文語下二段活用での処理が不可能なため下一段-ハ行の仮定形と認定している。ただし文脈的には確定条件であり，やや問題のある処理である。

3.9 命令形

3.10 ク語法

【例】
願わく（は） いはく のたまはく

3.11 活用形一覧

語幹-一般
語幹-サ
未然形-一般
未然形-サ
未然形-補助
意志推量形
連用形-一般
連用形-○音便
連用形-融合
連用形-省略
連用形-ト
連用形-ニ
連用形-補助
終止形-一般
終止形-撥音便
連体形-一般
連体形-○音便
連体形-補助
已然形-一般
已然形-補助
仮定形-一般
命令形
ク語法

3.12 細則

3.12.1 終止形・連体形の判別基準

形態上、終止形と連体形を区別できない活用語について、判別基準を以下に示す。

3.12.1.1 文末に位置するもの

3.12.1.1.1 係り結び

文中の係助詞「ぞ」「なむ」「や」「か」の結びは連体形とする。

【例】
こぞとやくは【む】
何とか思ひ【けん】

3.12.1.1.2 疑問詞疑問文の文末

疑問詞疑問文の文末は連体形とする。

【例】
如何に古里恋しかる【らん】
木のみのせいは、いかなら【ん】

3.12.1.1.3 その他

3.12.1.1.1 ～ 3.12.1.1.2 以外は終止形とする。

3.12.1.2 後続の助詞・助動詞による判定

後続する助詞・助動詞による判定基準を次に示す。

後続する助詞	前接語の活用形
か (係助詞)	連体形
か (副助詞)	終止形
か (終助詞)	連体形
が (格助詞)	連体形
が (接続助詞)	連体形
かし (終助詞)	終止形
かな (終助詞)	連体形
がな (終助詞)	連体形
から (格助詞)	連体形
くらい (副助詞)	連体形
けれど (接続助詞)	終止形
こそ (係助詞)	連体形
さえ (副助詞)	連体形
し (副助詞)	連体形
しも (副助詞)	連体形
すら (副助詞)	連体形
ぞ (係助詞)	連体形
ぞ (終助詞)	終止形
だに (副助詞)	連体形
と (格助詞)	終止形
と (接続助詞)	終止形
どころ (副助詞)	連体形
とも (接続助詞)	動詞型活用の終止形
な (終助詞)	終止形
など (副助詞)	終止形
なむ (係助詞)	連体形
に (格助詞)	連体形
に (接続助詞)	連体形
にて (格助詞)	連体形
の (格助詞)	連体形※
の (準体助詞)	連体形
のう (終助詞)	終止形
の (終助詞)	連体形
のみ (副助詞)	連体形
は (係助詞)	連体形
ばかり (副助詞)	連体形
ほど (副助詞)	連体形
まで (副助詞)	連体形
も (係助詞)	連体形
もの (終助詞)	連体形
や (係助詞)	終止形
や (終助詞)	終止形
よ (終助詞)	連体形
より (格助詞)	連体形
わ (終助詞)	終止形
を (格助詞)	連体形
を (接続助詞)	連体形
をば (格助詞)	連体形

※引用的な「の」の場合は終止形とする。【例】逆櫓を立てう、立てじの論をし

後続する助動詞	前接語の活用形
なり (断定)	連体形
なり (伝聞)	終止形, ラ変型活用・形容詞型活用の連体形
べし	終止形, ラ変型活用の連体形
まい	四段型活用の終止形, ラ変型活用の連体形
まじ	終止形, ラ変型活用・形容詞型活用の連体形
めり	終止形, ラ変型活用の連体形
らし	終止形, ラ変型活用・形容詞型活用の連体形
らむ	終止形, ラ変型活用の連体形

3.12.2 シク活用形容詞の語幹・終止形の判別基準

文語シク活用の形容詞は、形態上、終止形と語幹の区別ができない。そこで、語幹と認定する基準を以下に示し、示したものを終止形とする。語幹と認定したものの活用型は、文語シク活用ではなく口語活用とする（2.6.1.1 参照）。

3.12.2.1 接尾辞が後続するもの

【例】
【由々し】 気に罵って過ぎたが、
手足をもがるごとくに【惜し】がる
奉公ばかりを本とする事の【嘆かし】さよ

3.12.2.2 接続助詞「ながら」が後続するもの

【例】
【恐ろし】ながら、覗いて見れば

3.12.2.3 詠嘆の「や」が後続するもの

【例】
あら【疎まし】や！

3.12.2.4 後続する名詞を連体修飾するもの

【例】
そのやうに【ほし】ままにはなるまひぞ

3.12.2.5 「～の」の形で後続する名詞を連体修飾するもの

【例】
あふ【いとし】の人や
あら【うつくし】の女房や

3.12.2.6 感動詞「あな」に後続するもの

【例】
あな【見ぐるし】その姿はよ

第3 語種情報の概要

1 語種とは

日本語の語種は一般に、和語、漢語、外来語と、これら3種類の語種のうち異なる2種類以上の語種の語が結合した混種語の4種類に分けられる。この4種類のほかに固有名、記号の2種類を加えた6種類に分類した。なお、各語に語種を付与するに当たっては、〔 〕内の略称等を用いた。

1.1 和語〔和〕

日本固有の語。

【例】
暖かい 言葉 話す

1.2 漢語〔漢〕

近世以前に中国から入った語。

【例】
音楽 国語 報告

1.2.1

和製漢語も漢語とする。

【例】
大根 返事

1.3 外来語〔外〕

欧米系の諸言語から入った語。

【例】
グロリア パン コレジオ

1.3.1

上記のほか、以下のものも外来語とする。

1.3.1.1 梵語等を中国で音訳した語に由来する語

【例】
阿羅漢 盂蘭盆 卒塔婆

1.3.1.2 アイヌ語から入った語

【例】
昆布 鮭 ラッコ

1.3.1.3 中国以外のアジア諸国語から入った語

【例】
キムチ カボチャ パッチ

1.4 混種語〔混〕

和語・漢語・外来語のうち異なる2種類以上の語種の語が二つ以上結合した語。漢語・外来語であったものの末尾が活用するようになった語。

【例】
重箱 木阿弥 案ずる 束帯う

1.5 固有名〔固〕

人名・地名等。品詞が固有名詞となる語。

【例】
日本 駿河 藤原 清盛 保元

1.6 記号〔記号〕

句読点・括弧などの補助記号や、箇条書きの項目名として使われた一字のカタカナなどの記号。固有名以外のローマ字略語。

【例】
, . ; : ! () ア / \

2 語種の判定

2.1

語種の判定は、次の手順によった。

2.1.1

原則として『新潮現代国語辞典』第2版（新潮社）による。

※『新潮現代国語辞典』第2版を使ったのは、見出し語が漢語・外来語の場合は片仮名で、和語及び不明の場合は平仮名で表記しており、その表記を手掛かりにして語種を知ることができるためである。

2.1.2

『新潮現代国語辞典』第2版の見出しにない語は、『日本国語大辞典』第2版(小学館)を主たる資料として語種判定を行う。

また、『新潮現代国語辞典』第2版の語種判定に従い難いと判断した場合は、『日本国語大辞典』第2版等を参照し、独自に語種を判定した。

2.2

なお、『新潮現代国語辞典』第2版では、見出し語が和語の場合のほか、語種が不明の場合も見出し語を平仮名で表記している。見出し語が平仮名表記のものを一律に和語とすると、語種が不明であるため平仮名表記されていた語まで和語と判定してしまうことになる。

そのため、見出し語が平仮名で表記されている場合、『新潮現代国語辞典』第2版の注記や他の辞書等を参照して、和語とすべきか他の語種とすべきか適宜判断した。

第4章 同語異語判別規程

第1 同語異語判別規程

《凡例》

1. 例として挙げる語の表記は、以下の原則による。
 - ①語の形を問題とする場合は、片仮名で表記する。
 - ②語の形を特に問題としない場合は、外来語を除き片仮名以外で表記する。
2. UniDicの階層名を示す場合には、「語彙素」「語形」「書字形」のように鍵括弧を付けて表記する。
3. 一つの「語彙素」「語形」にまとめる語を併記する場合、語と語の間に「/」を記入する。
亭主っ／亭主 レンジュウ／レンチュウ
4. 別の「語彙素」「語形」とする語を併記する場合、語と語の間に「↔」を記入する。
とても↔とっても アイザワ↔アイサワ
5. 「語彙素」「語彙素読み」を併記して示す場合には、「語彙素」に【 】を付ける。
アタタカイ【暖かい】
6. 語例で文脈を補う場合は丸括弧に入れて示し、注記を付ける場合は[]に入れて示す。

1 同一「語形」・別「語形」の判定規定

任意の二つの出現形について、UniDicに登録する際に、一つの「語形」にまとめるか、異なる「語形」として別にするか判断するための規定は、以下のとおりである。

1.1 語形

出現形の形に基づく規定は、以下のとおりである。

1.1.1 同一の「語形」とする出現形

次に示す形の差異を持つ出現形は、語源が同一であり、かつ意味の違いを生じていない限り、同じ「語形」とする。

1.1.1.1 和語・漢語

長音符号を用いた出現形と直前の母音と同じ母音字を重ねた出現形

【例】

なあ／なー じじい／じじー

1.1.1.2 外来語

『室町時代編Ⅱキリシタン資料』ではポルトガル原語をアルファベット表記した語が出現する。これらについては、近藤政美・池村奈代美・浜千代いづみ編(1999)『天草版平家物語語彙用例総索引(1)』(勉誠出版)、江口正弘編(2011)『天草版伊曾保物語影印及び全注釈 言葉の和らげ影印及び翻刻翻訳』(新典社)などの先行研究や、『日本国語大辞典第二版』を参考に個別に「発音形」を判断した。この「発音形」と同形の「語形」と、アルファベット表記の出現形は同じ「語形」とする。

【例】

H i s t o r i a (発音形：イストリヤ) / イストリヤ
S a n s t a (発音形：サンタ) / サンタ

1.1.2 異なる「語形」とする出現形

1.1.2.1 和語・漢語

次に示す形の差異を持つ出現形は、異なる「語形」とする。

1.1.2.1.1 清濁の差異及び濁音と半濁音との差異（連濁を含む）

【例】
レンチュウ ↔ レンジュウ ナンピト ↔ ナンピト (三) カイ ↔ (三) ガイ

1.1.2.1.2 語末長音の短呼形と元の形との差異

【例】
センセ ↔ センセイ ニョウボ ↔ ニョウボウ モ (一つ) ↔ モウ (一つ)

1.1.2.1.3 音が弱まって母音音節となったものと元の形との差異

【例】
アタクシ ↔ ワタクシ ソイ (から) ↔ ソレ (から)

1.1.2.1.4 撥音化した形と元の形との差異

【例】
アンタ ↔ アナタ ソン (なら) ↔ ソレ (なら)

1.1.2.1.5 促音化した形と元の形との差異

【例】
アッタカイ ↔ アタタカイ カッテ [嘗て] ↔ カツテ [嘗て]
(～な) コツ (た) ↔ (～な) コト (だ) テッカク ↔ テキカク

1.1.2.1.6 撥音が挿入された形と元の形との差異

【例】
アンマリ ↔ アマリ ミンナ ↔ ミナ (見た) マンマ ↔ (見た) ママ

1.1.2.1.7 促音の有無の差異

【例】
ゲッシンテ ↔ ケシテ タッタ ↔ タダ

1.1.2.1.8 連声によって生じた形と元の形との差異

【例】
アンノン ↔ アンオン (三) ミ ↔ (三) イ

1.1.2.1.9 語末以外の長音の有無の差異

【例】
シイカ ↔ シカ

1.1.2.1.10 サ行音がチ・チェ・チャ・チョ・ツァに交替した形と元の形との差異

【例】
チッチャイ ↔ チイサイ (お父) ツァン ↔ (お父) サン

1.1.2.1.11 呉音・漢音・慣用音等の差異

【例】
サイシキ ↔ サイシヨク チョウフク ↔ ジュウフク

1.1.2.1.12

※臨時的に長音・促音が付加された形等と元の形についても異なる「語形」とする。

【例】

(だー) カーラー ↔ (だ) カラ トッテモ ↔ トーッテモ ↔ トテモ

1.1.2.2 外来語

規定 1.1.1.2 に記載したもの以外の差異を持つ出現形は、異なる「語形」とする。

【例】

H i s t o r i a (発音形：イストリヤ) ↔ ヒストリア
S a n e t a (発音形：サンタ) ↔ セント

1.2 品詞

1.2.1 無活用語

無活用語が複数の品詞として機能している場合、本規程の細則により、それぞれ異なる品詞が与えられるのであれば、それらは異なる「語形」とする。「室町時代編」で新たな用法が見つかった場合の品詞認定の基準については 第3章 第2 1.18.1.2 を参照。

1.2.1.1 同一の「語形」とするもの

1.2.1.1.1

名詞が形状詞としても機能する場合、「名詞-普通名詞-形状詞可能」という品詞が与えられたものはいずれの用法の場合でも同じ「語形」とする。

【例】

哀れ (を掛けうずる) / 哀れ (なり) (国土) 安全 / 安全 (な)

1.2.1.1.2

名詞が副詞としても機能する場合も、上記と同様に「名詞-普通名詞-副詞可能」という品詞が与えられたものはいずれの用法の場合でも同じ「語形」とする。

【例】

今日 (を最後に) / 今日 (別れて) 多く (を得る能わず) / 多く (あり)

1.2.1.1.3

名詞が助数詞としても機能する場合も、上記と同様に「名詞-普通名詞-助数詞可能」という品詞が与えられているものは、同じ「語形」とする。

【例】

(一) 間 / (いつの) 間 (に) (八) 尺 / 尺 (八寸)

1.2.1.2 異なる「語形」とするもの

ある無活用語が形状詞としても副詞としても機能する場合、形状詞として用いられている出現形には「形状詞-一般」又は「形状詞-タリ」、副詞として用いられている出現形には「副詞」という品詞が与えられるので、各出現形は異なる「語形」とする。

【例】

断固 (たる決心) ↔ 断固 (味方す) 格別 (なる思想) ↔ 格別 (多し)

1.2.2 動詞連用形と動詞連用形転成名詞

動詞連用形とそれから転成した名詞は、それぞれ異なる「語形」とする。

【例】

動き (たり) ↔ (肘の) 動き 遊び (し時) ↔ 遊び (して)

1.3 固有名

1.3.1 人名・地名

品詞と語の形と同じであれば、指し示すものと同じか否かにかかわらず、同じ「語形」として一つにまとめる。語の形が同じであるか否かの判断は規定 1.1 による。

【例】

〔人名-姓〕 檜山／桧山 星野／ほしの モーツァルト／モーツアルト
〔人名-名〕 進次郎／進二郎 輝弘／昭浩 一郎／イチロー
〔地名-一般〕 茨木／茨城 緑町／美土里町／美登里町 ケンブリッジ／ケンブリッジ

1.3.2 人名・地名以外の固有名

1.3.2.1

出現形が同じであれば、指し示すものが異なる場合であっても、同じ「語形」とする。

【例】

三嶺（商事）／三嶺（書房） 永興（号）／永興（寺）／永興（元年）

1.3.2.2

出現形が異なる場合は、異なる「語形」とする。

【例】

興福（寺） ↔ 弘福（寺） ↔ 香福（寺） 大創 ↔ 大惣 ↔ ダイソー

1.3.2.2.1

ただし出現形が異なる場合であっても、指し示すものが確実に同じであれば、同じ「語形」とする。

【例】

日産／ニッサン／NISSAN

1.4 活用型

活用型が異なれば異なる「語形」とする。

【例】

愛す（五段-サ行） ↔ 愛す（文語サ行変格-ス）

2 同一「語彙素」・別「語彙素」の判定規定

任意の二つの「語形」について、一つの「語彙素」にまとめるか、異なる「語彙素」として別にするか判断するための規定は、以下のとおりである。

2.1 語形

語の形に基づく規定は、以下のとおりである。

2.1.1 同一の「語彙素」とする「語形」

2.1.1.1 和語・漢語

次に示す差異を持つ「語形」は、語源が同一であり、かつ意味の違いを生じていない限り、同じ「語彙素」とする。

2.1.1.1.1 清濁の差異及び濁音と半濁音との差異（連濁を含む）

【例】
レンチュウ／レンジュウ ナンピト／ナンピト (三) カイ／(三) ガイ

2.1.1.1.2 語末長音の短呼形と元の形との差異

【例】
センセ／センセイ ニョウボ／ニョウボウ モ (一つ)／モウ (一つ)

2.1.1.1.3 音が弱まって母音音節となったものと元の形との差異

【例】
アタクシ／ワタクシ ソイ (から)／ソレ (から)

2.1.1.1.4 撥音化した形と元の形との差異

【例】
アンタ／アナタ ソン (なら)／ソレ (なら)

2.1.1.1.5 促音化した形と元の形との差異

【例】
アッタカイ／アタタカイ カッテ [嘗て]／カツテ [嘗て] (～な) コッ (た)／(～な) コト (だ) テッカク／テキカク

2.1.1.1.6 撥音が挿入された形と元の形との差異

【例】
アンマリ／アマリ ミンナ／ミナ (見た) マンマ／(見た) ママ

2.1.1.1.7 促音の有無の差異

【例】
ケッシンテ／ケシテ タダ／タッタ

2.1.1.1.8 連声によって生じた形と元の形との差異

【例】
アンノン／アンオン カンノン／カンオン

2.1.1.1.9 語末以外の長音の有無の差異

【例】
シイカ／シカ

2.1.1.1.10 サ行音がチ・チェ・チャ・チョ・ツァに交替した形と元の形との差異

【例】
チッチャイ／チイサイ (お父) ツァン／(お父) サン

2.1.1.1.11 呉音・漢音・慣用音等の差異

【例】
サイシキ／サイショク チョウフク／ジュウフク

2.1.1.1.12 上記以外

上記以外に、「語形」の差異を同一の「語彙素」とすることがある。以下、事例を示す。

2.1.1.1.12.1 母音が交替した形の差異

【例】

ミスオチ/ミゾオチ デケル/デキル エガラッポイ/イガラッポイ

2.1.1.1.12.2 子音が交替した形の差異

【例】

ユルブ/ユルム オトロシイ/オソロシイ ヤッパシ/ヤッパリ

2.1.1.1.12.3 サ(ザ)行の拗音と直音が交替した形の差異

【例】

ネンジュ/ネンズ チシャ/チサ(高苺) ジュツナイ/ジツナイ

2.1.1.1.12.4 特殊拍どうしが交替した形の差異

【例】

クランド/クラウド(蔵人) シッチュウ/シュウチュウ(集注)

2.1.1.1.12.5 語中音節の有無の差異

【例】

一般音節: マイゴ/マヨイゴ オモロイ/オモシロイ フバコ/フミバコ
母音音節: コワモテ/コワオモテ アブラゲ/アブラアゲ ユイイツ/ユイツ

2.1.1.1.12.6 語末音節の有無の差異

【例】

ナス/ナスビ カケックラ/カケクラベ

2.1.1.1.12.7 音の融合した形と元の形の差異

【例】

コサエル/コシラエル シャガレル/シワガレル ミョウト/メオト

2.1.1.1.12.8

※上記 2.1.1.1.12.1 から 2.1.1.1.12.7 の差異を持ち、かつ意味が同じものであっても、語源が同一か否かの判断が困難な場合は、異なる「語彙素」とする。

【例】

ツゴモリ↔ツキゴモリ ツバ↔ツバキ

2.1.1.2 外来語

『室町時代編Ⅱキリシタン資料』に現れるポルトガル語の「語形」のうち、既登録の英語の語彙素と意味・語源が極めて近く、音的に類似するものについては基本的に同じ「語彙素」とする。意味に差異が見られるもの、対応する英語の語彙素が存在しない語は異なる「語彙素」とする。

【例】

デゼンブロ/ディセンバー
サンタ/セント
ラチン/ラテン
コレジオ/コレジョ↔カレッジ

2.2 品詞

2.2.1

ある無活用語がその用法によって異なる品詞を与えられていても、その品詞の属する類が同じであれば、同じ「語彙素」とする。一方、その品詞の属する類※が異なれば、それらは異なる「語彙素」とする。

※UniDicにおいて「語彙素」に付与される情報の一つで、「体」「用」「相」「他」などがある。各品詞がどの類に属するかについては 第3章 第2 1.17 を参照。

【例】
断固（たる決心）／断固（味方す）
自然（を写す）↔自然（生ず）／自然（なるもの）

2.2.2

動詞・形容詞に基づくものであっても、別に定める品詞判別に関する規程により無活用語とされたものについては、元の動詞・形容詞とは異なる「語彙素」とする。

【例】
（肘の）動き↔動き（たり）
（金利）安↔安（さ）

2.3 活用型

活用型が異なる活用語のうち、次に挙げるものは同じ「語彙素」とする。

2.3.1 文語活用の活用語と、それに対応する口語活用の活用語

【例】
す／する 受く／受ける 少なし／少ない 白し／白い ず／ぬ らる／られる

2.3.2 サ行五段活用動詞と、その元になったサ行変格活用動詞

【例】
愛す／愛する 対す／対する

2.3.3 ザ行上一段活用動詞と、その元になったザ行変格活用動詞

【例】
感じる／感ずる 信じる／信ずる

2.3.4 可能動詞と、その元になった五段活用動詞

【例】
書ける／書く 読める／読む

2.3.5 二段活用の動詞で、ハ・ヤ・ワ行間で交代の生じた動詞と、その元になった動詞

【例】
据ふ（文語下二段-ハ行）／据う（文語下二段-ワ行）
強ゆ（文語上二段-ヤ行）／強ふ（文語上二段-ハ行）

2.3.6 その他、元の活用語とは別の活用型を与えた活用語と、その元になった活用語

【例】
そろ／そろろう（候）

2.4 方言形

方言形と、それに形の上で対応する口語の共通語形とは、意味のつながりがある場合、同じ「語彙素」とする。

【例】
オトロシイ／オソロシイ

2.5 人名

人名に関する規程は、以下のとおりである。

2.5.1 日本の人名

日本の人名には、原則として規定 2.1.1 は適用しない。

【例】
アイザワ ↔ アイサワ

2.5.1.1

姓と名との間にある読み添えの「の」を含む語形は、「の」を含まない語形と同じ「語彙素」とする。

【例】
フジワラ / フジワラノ

2.5.1.2

日本の神話の神名や昔の人名などについては規定 2.1.1 を適用する。

【例】
タカミムスビ / タカミムスヒ (高御産巢日) カグヤヒメ / カクヤヒメ ウマヤド / ウマヤト

2.5.2 日本の人名と外国の人名

日本の人名・日本漢字音で読んだ中国・韓国の人名と、それ以外の人名は、異なる「語彙素」とする。

【例】
アンナ (杏奈など) ↔ アンナ (Anna など)

2.5.3 外国の人名

2.5.3.1

『室町時代編Ⅱキリシタン資料』に登場する外国の人名については、同じ人名であると判断できる場合に限り同じ「語彙素」とする。著名人の場合などがこれに相当する。それ以外の場合は異なる「語形」ごとに異なる「語彙素」とする。

【例】
イソップ / エソポ / エソップ

2.6 地名

2.6.1 日本の地名と外国の地名

日本の地名と外国の地名は異なる「語彙素」とする。

【例】
ハワイ (羽合) ↔ ハワイ (Hawaii)

2.6.2 日本の地名

2.6.2.1

日本の地名については、同じ場所を指すことが明らかな場合、規定 2.1.1.1 の範囲で同じ「語彙素」とする。

【例】
カンサイ / カンセイ

2.6.2.1.1

読み添えの「の」を含む語形は、「の」を含まない語形と同じ「語彙素」とする。

【例】
ヒゴ／ヒゴノ

2.6.3 外国の地名

『室町時代編Ⅱキリシタン資料』に現れる原語表記の外国の地名については、同一の地名を指すことが明らかである場合のみ同じ「語彙素」とする。

【例】
エジプト／エジツト ヨーロッパ／エウロパ

3 「書字形」の定め方及び表記

「書字形」は、出現形を基に次のように定める。

3.1 活用のない語

原則として出現形をそのまま「書字形」とし、「書字形」の表記も出現形のとおりとする。

【例】
ひらり / \ → ひらり / \ Greçia → Greçia

3.2 活用のある語

出現形を終止形に直したものを「書字形」とし、「書字形」の表記も出現形を終止形に直したものとす。

【例】
思ひ（たり）→思ふ もつた（物）→もつ

4 「語形」の定め方及び表記

4.1 「語形」の定め方

4.1.1 和語・漢語

和語・漢語については、「書字形」の読み（語形）を「語形」として立てる。

【例】
思ふ→オモウ ひらり / \ → ヒラリヒラリ 合戦→カッセン

4.1.2 外来語

『室町時代編Ⅱキリシタン資料』に登場する原語表記の外来語の固有名詞・普通名詞については、近藤政美・池村奈代美・浜千代いづみ編（1999）『天草版平家物語語彙用例総索引（1）』（勉誠出版）、江口正弘編（2011）『天草版伊曾保物語影印及び全注釈 言葉の和らげ影印及び翻刻翻訳』（新典社）などの先行研究や、『日本国語大辞典第二版』を参考に個別に「発音形」を決定する。この「発音形」を「語形」とする。

4.1.3 人名

人名の「語形」の定め方は、規定 4.1.1，4.1.2 に準ずる。

4.1.4 地名

地名の「語形」の定め方は、規定 4.1.1，4.1.2 に準ずる。

4.1.5 人名・地名以外の固有名

固有名の「語形」の定め方は、規定 4.1.1，4.1.2 に準ずる。

4.2 「語形」の表記

4.2.1 和語・漢語

和語・漢語は、片仮名を用いて、現代仮名遣い（1986年、内閣告示第1号・内閣訓令第1号）に基づき表記する。

【例】

縮む→チヂム 上積み→ウワヅミ 先生→センセイ
思ふ→オモウ ゆゑん→ユエン てふ→チョウ

4.2.1.1

拗音・促音は、小書きに統一する。

【例】

切手→キッテ 社会→シャカイ
もつとも→モットモ かくしやく→カクシャク

4.2.1.2

現代仮名遣いでは、長音の表記に長音符号を用いないため、「語形」の表記でも原則として長音符号を用いない。

【例】

(それ) じゃー→○ジャア ×ジャー
研究→○ケンキュウ ×ケンキュー

4.2.2 固有名

固有名の「語形」の表記は規定 4.2.1 を適用する。

5 「語彙素」の定め方及び表記

5.1 「語彙素」の定め方

5.1.1

「語形」を「語彙素」として立てる。

【例】

チヂム→チヂム【縮む】
ウワヅミ→ウワヅミ【上積み】
センセイ→センセイ【先生】

5.1.2

複数の「語形」を一つの「語彙素」にまとめる場合、以下の規定によって「語彙素」を定める。なお、「語形」が一つしかない場合でも、その「語形」が以下の規定に該当するものであれば、その規定に基づいて「語彙素」を定める。

【例】

アタクシ→ワタクシ【私】※

※「アタクシ」は、5.1.2.1.1.3 に該当する語であるので、「語形」に「アタクシ」のみが登録されている場合でも、「ワタクシ」を「語彙素」とする。

5.1.2.1 語形

5.1.2.1.1 和語・漢語

和語・漢語については、以下のとおりとする。

5.1.2.1.1.1 清濁，濁音・半濁音

清濁の差異及び濁音と半濁音との差異がある場合は，以下のとおりとする。

5.1.2.1.1.1.1

濁音化・半濁音化が短単位の語頭で生じている場合，原則として濁音化・半濁音化する前の元の形を「語彙素」として立てる。

【例】
(三) カイ／(三) ガイ→カイ【階】
ハコ／(道具) バコ→ハコ【箱】

5.1.2.1.1.1.1.1

ただし，濁音化・半濁音化した形のほうが一般に用いられる等の理由から，濁音化・半濁音化した形を「語彙素」として立てる場合がある。

【例】
ガタイ【難い】(接尾辞)
ザマ【様】(接尾辞)

5.1.2.1.1.1.2

濁音化・半濁音化が短単位の語頭以外で生じている場合，「語彙素」は語ごとに定める。

【例】
レンチュウ／レンジュウ→レンチュウ【連中】
ナンビト／ナンピト→ナンビト【何人】

5.1.2.1.1.2 語末長音

語末長音の短呼形と元の形とがある場合，元の形を「語彙素」とする。

【例】
センセ／センセイ→センセイ【先生】
ニョウボ／ニョウボウ→ニョウボウ【女房】
モ(一つ)／モウ(一つ)→モウ【もう】

5.1.2.1.1.3 子音音節・母音音節

音が弱まって母音音節となったものと元の形とがある場合，元の形を「語彙素」とする。

【例】
アタクシ／ワタクシ→ワタクシ【私】
ソイ(から)／ソレ(から)→ソレ【其れ】

5.1.2.1.1.4 撥音化の有無

撥音化した形と元の形とがある場合，元の形を「語彙素」とする。

【例】
アンタ／アナタ→アナタ【貴方】
ナン／ナニ→ナニ【何】

5.1.2.1.1.5 促音化の有無

促音化した形と元の形とがある場合，元の形を「語彙素」とする。

【例】
アツタカイ／アタタカイ→アタタカイ【暖かい】
カッテ／カツテ→カツテ【嘗て】
(～な) コッ (た) / (～な) コト (だ) →コト【事】

5.1.2.1.1.5.1

ただし、漢語は語ごとに定める。

【例】
テッカク／テキカク→テキカク【的確】
トッケン／トクケン→トッケン【特権】

5.1.2.1.1.6 撥音挿入の有無

撥音が挿入された形と元の形とがある場合、元の形を「語彙素」とする。

【例】
アンマリ／アマリ→アマリ【余り】
ミンナ／ミナ→ミナ【皆】
(見た) マンマ / (見た) ママ→ママ【俤】

5.1.2.1.1.7 促音の有無

促音がある形とない形とがある場合、「語彙素」は語ごとに定める。

【例】
ケッシンテ／ケンテ→ケッシンテ【決して】
タダ／タッタ→タダ【唯】

5.1.2.1.1.8 連声の有無

連声によって生じた形と元の形とがある場合、原則として連声によって生じた形を「語彙素」とする。

【例】
アンノン／アンオン→アンノン【安穩】
カンノン／カンオン→カンノン【観音】

5.1.2.1.1.9 語末以外の長音の有無

語末以外に長音がある形とない形とがある場合、「語彙素」は語ごとに定める。

【例】
シイカ／シカ→シイカ【詩歌】

5.1.2.1.1.10 サ行音の音変化の有無

サ行音がチ・チェ・チャ・チョ・ツァに交替した形と元の形とがある場合、元の形を「語彙素」とする。

【例】
チツチャイ／チイサイ→チイサイ【小さい】
ツァン／サン→サン【さん】

5.1.2.1.1.11 漢字音の差異

呉音・漢音・慣用音等の差異がある場合、「語彙素」として立てる語形は、①漢音、②呉音、③慣用音の優先順位で定めるのを原則とする。漢音呉音交じりの語形の優先順位は①と②の間とする。

【例】
サイシキ／サイシヨク→サイシヨク【彩色】 ※「シヨク」は漢音、「シキ」は呉音
ジュウフク／チョウフク→チョウフク【重複】 ※「チョウ」は漢音、「ジュウ」は慣用音

5.1.2.1.1.11.1

「語形」ごとに意味が異なると考えられる場合は、同一の「類」であっても別「語彙素」とする。

【例】

チカ【地下】←→ジゲ【地下】

5.1.2.1.1.12 その他

次のような「語形」の差異を同一の「語彙素」とする場合、「語彙素」は語ごとに定める。

5.1.2.1.1.12.1 母音が交替した形の差異

【例】

ミゾオチ／ミズオチ→ミゾオチ【鳩尾】
デキル／デケル→デキル【出来る】
イガラッポイ／エガラッポイ→イガラッポイ【いがらっばい】

5.1.2.1.1.12.2 子音が交替した形の差異

【例】

ユルム／ユルブ→ユルム【緩む】
オソロシイ／オトロシイ→オソロシイ【恐ろしい】

5.1.2.1.1.12.3 サ（ザ）行の拗音と直音が交替した形の差異

【例】

ネンジュ／ネンズ→ネンジュ【念珠】
チシャ／チサ→チシャ【萵苣】
ジュツナイ／ジツナイ→ジュツナイ【術無い】

5.1.2.1.1.12.4 特殊拍同士が交替した形の差異

【例】

クラウド／クランド→クラウド【蔵人】
シュウチュウ／シツチュウ→シュウチュウ【集注】

5.1.2.1.1.12.5 語中音節の有無の差異

【例】

一般音節：マヨイゴ／マイゴ→マイゴ【迷子】
オモシロイ／オモロイ→オモシロイ【面白い】
フミバコ／フバコ→フバコ【文箱】
母音音節：コワオモテ／コワモテ→コワモテ【強面】
アブラアゲ／アブラゲ→アブラアゲ【油揚げ】
ユイイツ／ユイツ→ユイイツ【唯一】

5.1.2.1.1.12.6 語末音節の有無の差異

【例】

ナスビ／ナス→ナス【茄子】
カケックラ／カケクラベ→カケクラベ【駆け競べ】

5.1.2.1.1.12.7 音の融合した形と元の形の差異

【例】

コサエル／コシラエル→コシラエル【拵える】
シャガレル／シワガレル→シワガレル【嘎れる】
ミョウト／メオト→メオト【夫婦】

5.1.2.1.2 外来語

『室町時代編Ⅱキリシタン資料』に現れるポルトガル語については語ごとに語彙素を定める。

5.1.2.2 活用型

活用型が異なる活用語のうち、次に挙げるものは同じ「語彙素」とする。

5.1.2.2.1 文語活用と口語活用

文語活用の活用語と、それに対応する口語活用の活用語とがある場合、文語活用に対応する口語活用の活用語を「語彙素」とする。

【例】
す／する→スル【為る】
少なし／少ない→スクナイ【少ない】

5.1.2.2.1.1

ただし、打ち消しの助動詞「ず」「ぬ」は、文語活用の終止形を「語彙素」とする。

【例】
ず／ぬ→ズ【ず】

5.1.2.2.1.2

文語活用の活用語に対応する口語活用の活用語の実例がない場合でも、対応が想定される口語活用の活用語を「語彙素」とする。

5.1.2.2.2 サ行四（五）段活用動詞とサ行変格活用動詞

サ行四（五）段活用動詞と、その元になったサ行変格活用動詞とがある場合、サ行変格活用動詞を「語彙素」とする。

【例】
愛す／愛する→アイスル【愛する】

5.1.2.2.3 ザ行上一段活用動詞とザ行変格活用動詞

ザ行上一段活用動詞と、その元になったザ行変格活用動詞とがある場合、ザ行変格活用動詞を「語彙素」とする。

【例】
感じる／感ずる→カンズル【感ずる】
信じる／信ずる→シンズル【信ずる】

5.1.2.2.4 可能動詞と五段活用動詞

可能動詞と、その元になった五段活用動詞とがある場合、五段活用動詞を「語彙素」とする。

【例】
書ける／書く→カク【書く】
読める／読む→ヨム【読む】

5.1.2.2.5 その他、元の活用語とは別の活用型を与えた活用語と、その元になった活用語

その他、元の活用語とは別の活用型を与えた活用語と、その元になった活用語とがある場合、元になった活用語を「語彙素」とする。

【例】
そろ／そろろう→ソウロウ【候う】

5.1.2.3 方言形

方言形と、それに形の上で対応する口語の共通語形とがある場合、共通語形を「語彙素」とする。

【例】
オトロシイ／オソロシイ→オソロシイ【恐ろしい】

5.1.2.4 固有名

5.1.2.4.1 日本語に由来する固有名

日本の人名・地名、日本語に由来する固有名のうち、規定 2.1.1.1 により複数の「語形」を同じ「語彙素」にまとめたものについては、規定 5.1.2.1.1 に従い「語彙素」を定める。また読み添えの「の」を含む語形と含まない語形がある場合、読み添えの「の」のない形を「語彙素」とする。

【例】
ミナモト／ミナモトノ→ミナモト

5.1.2.4.2 外来語に由来する固有名

外国の人名・地名のうち、2.5.3.1、2.6.3 により複数の「語形」を一つの「語彙素」としたものについては、現代語の規程に従って「語彙素」を決定する。

【例】
イソップ／エソポ／エソップ→イソップ
エジツト／エジプト→エジプト

5.2 「語彙素読み」の表記

「語彙素読み」には、「語彙素」として立てることになった「語形」をそのまま登録する。したがって、その表記の仕方については、規定 4.2 を参照。

5.3 「語彙素」の表記

5.3.1 和語・漢語

付属語は平仮名表記とする。
自立語は原則として漢字表記とし、次に示す手順に従ってその漢字表記を定める。

5.3.1.1 手順 1

その語が『岩波国語辞典』第 6 版の見出しにあり、漢字表記されていれば、その漢字表記を「語彙素」とする。複数の漢字表記が挙げられている場合は、原則として最初に挙げられている漢字表記を「語彙素」とする。

5.3.1.2 手順 2

『岩波国語辞典』第 6 版の見出しにない語、及び『岩波国語辞典』第 6 版の見出しになっているが、語の一部又は全部が漢字表記されていない語については、『日本国語大辞典』第 2 版を参照する。
『日本国語大辞典』第 2 版の見出しにあり、漢字表記されていれば、その漢字表記を「語彙素」とする。複数の漢字表記が挙げられている場合は、原則として最初に挙げられている漢字表記を「語彙素」とする。

5.3.1.3 手順 3

『日本国語大辞典』第 2 版の見出しにない語、『日本国語大辞典』第 2 版の見出しにあるが、漢字表記されていない語については、原則として「語彙素」を平仮名で表記する。

5.3.1.4 手順 4

常用漢字を用いて「語彙素」を表記する場合、送り仮名の付け方は次の基準に従う。常用漢字表外の漢字を用いて「語彙素」を表記する場合も、送り仮名の付け方は、次に示す基準を準用する。

5.3.1.4.1 活用のある語

送り仮名の付け方（1973年、内閣告示第 2 号・内閣訓令第 2 号）の通則 1、通則 2、通則 6 の各本則に従って送り仮名を付ける。各通則の例外、許容は採用しない。

5.3.1.4.2 活用のない語

送り仮名の付け方の通則3の本則，通則4の本則・例外及び許容，通則5の本則及び許容，通則6の本則，通則7に従って送り仮名を付ける。

5.3.2 外来語

外来語の「語彙素」には，「語彙素読み」をそのまま用いる。

5.3.3 人名・地名

人名・地名の「語彙素」には，「語彙素読み」をそのまま用いる。

5.3.4 人名・地名以外の固有名

5.3.4.1

日本語由来の固有名の「語彙素」には，出現形をそのまま用いる。

5.3.4.2

外国語由来の固有名の「語彙素」には，「語彙素読み」をそのまま用いる。

6 細則

6.1 名詞と接辞の判定基準（1）

意味に差異がない場合，接頭辞・接尾辞ではなく，できる限り名詞・形状詞・形容詞語幹に統合するのを原則とする。

6.1.1 判定に当たっての基本的な観点

判定に当たっての基本的な観点は，以下のとおりである。

6.1.1.1 接頭辞に関するもの

6.1.1.1.1

形容詞語幹に相当する最小単位が，後接の短単位（短単位の連続体を含む。）と結合する場合，その最小単位は接頭辞とせず形容詞とする。

【例】

こま（道具） ふる（がらかさ） 薄（浅黄） 長（僉議）

6.1.1.1.2

後接する短単位（短単位の連続体を含む。）を連体修飾するものは，接頭辞とせず名詞等とする。

【例】

名詞-普通名詞-一般 主（要因） 他（言語） 初（登場） 平（社員） 満（9歳）
名詞-普通名詞-形状詞可能 急（傾斜） 逆（輸入）
形状詞-一般 直（輸入）

6.1.1.1.3

上記の規定には当てはまらないが，一般に1字漢語として使われ得るもの（単独用法のあるもの）は，接頭辞とせず名詞とする。

【例】
強（母音） 残（日数） 禁（帯出）

6.1.1.2 接尾辞に関するもの

6.1.1.2.1

前接する短単位（短単位の連続体を含む。）の連体修飾を受けるものは、接尾辞とせず名詞とする。

【例】
（訂正）箇所 （文字）列 （要約）文

6.1.1.2.2

上記の規定には当てはまらないが、一般に1字漢語として使われ得るもの（単独用法のあるもの）は、接尾辞とせず名詞とする。

【例】
（被写）体

6.1.2 具体的な判定の基準

具体的な判定の基準及び語例は、以下のとおりである。

6.1.2.1 名詞とするもの

6.1.2.1.1 地名と結合した以下のもの

6.1.2.1.1.1 行政区画を表すもの

【例】
東京 | 都 | 大阪 | 府 | パンジャープ | 州 |

6.1.2.1.1.2 上記以外

【例】
（吉野）山 （薩摩）潟

6.1.2.1.2 同じ語形・意味で、単独で用いられるもの

【例】				
箇所	(不要)	箇所	(訂正)	箇所
側	(反対)	側	(連合国)	側
句	(難解)	句	(名詞)	句
組	(小姓)	組	(二)	組
座	(蓮華)	座	(布団)	※座る場所
作	(鷗外)	作	※創作	
	(大豆)	作	※栽培	
札	(一円)	札		
死式	(自殺)	死式	(安楽)	死式
	(方程)	式	(化学)	※計算式
	(即位)	式	(卒業)	※儀式
食	(日本)	食	(道楽)	
職	(首相)	職	(名誉)	職
数	(議員)	数	(周波)	数
節	(紀元)	節	(名詞)	節
線	(電話)	線	(紫外)	※糸のように細長いもの
	(境界)	線	(海岸)	※境界
他	(国民)	他	(地方)	
体	(口語)	体	(絶縁)	体
代	(千八百年)	代	(十三)	代 (将軍)
地点	(市街)	地	(水源)	地
主	(中心)	点	(共通)	点
年	(工場)	主	(造物)	主
場	年 (収入)			
拍	(波止)	場	(火事)	場
番	(特殊)	拍		
比	(留守)	番		
便	(前年)	比	(圧縮)	比
文	(汽船)	便	(飛脚)	便
弁	(書簡)	文	(擬古)	文
法	(安全)	弁	(江戸)	弁
元	(国際)	法	(現行)	法 ※法律
率	(製造)	元	元 (首相)	
類	(増加)	率	(死亡)	率
列	(機械)	類	(哺乳)	類
論	(文字)	列		
	(進化)	論	(民権)	論

6.1.2.2 接辞とするもの

6.1.2.2.1 助数詞としてのみ用いられるもの

【例】
個 本 つ 日 (か)

6.1.2.2.2 「数詞+助数詞的要素」と結合したもの

【例】
いくつ | 目 |

6.1.2.2.3 その他

6.1.2.2.3.1 省略された形で元の意味を添加するもの

【例】				
界	自然	界	パチンコ業	界 (ある世界)
金	援助	金	入学	金 (資金)
計	体重	(計器)	計	七 通り (合計)
座	文学	座	ミラノ	座 (劇場, 劇団を表す)
作	失敗	作	感動	作 (作品)
史	語彙	史	古代	史 (歴史)
紙	新聞	紙	模造	紙 方眼 紙 (用紙)
式	東京	式	ねじ	式 方眼 方法
質	神経	質	筋肉	質 (性質)
実	実	実	世界	実 世界 (実際, 現実)
線	京王	線	東武	線 線 (路線)
代	宿泊	代	飛行機	代 (代金)
調	上昇	調	演説	調 (調子)
品	衣料	品	骨董	品 (品物)
法	改善	法	分析	法 (方法)
録	議事	録	(記録)	

【例】	
余り	(百年) 余り
生まれ	(明治六年) 生まれ
帰り	(洋行) 帰り
踊り	(阿波) 踊り
狩り	(潮干) 狩り (猛獣) 狩り
代わり	(昼飯) 代わり (ランプ) 代わり
騒ぎ	(家出) 騒ぎ (政党) 騒ぎ
育ち	(武家) 育ち (学校) 育ち
連れ	(親子) 連れ
抜き	(理屈) 抜き
晴れ	(日本) 晴れ
振る舞い	(大盤) 振る舞い
祭り	(先祖) 祭り
向き	(婦人) 向き ※向き不向き

6.2.1.2 接尾辞とするもの

6.2.1.1 に該当しないものを接尾辞とする。以下のような性質がある。

6.2.1.2.1

「～すること」という意味ではなく、「～する人」、「～した結果できたもの」、「～するためのもの」、「～する方法」等の意味を表す。

【例】

(人形) 使い (荒馬) 乗り ※～する人
 (大根) 下ろし (沢庵) 漬け (浅黄) 染め ※～した結果できたもの
 (タバコ) 入れ (進退) 伺い (搜索) 願い ※～するためのもの
 (仮名) 遣い ※～する方法

6.2.1.2.2

複合語全体が状態・性質を表す修飾語になる。

【例】

(東京) 行き (一合) 入り (兄弟) 思い (ペン) 書き (意気) 込み (運河) 沿い (引き出し) 付き
 (女学校) 出 (弱い者) 泣かせ (仲間) 外れ (漢字) 交じり

6.2.1.2.3

数詞に接続する。

【例】

二日置き, 0.5 刻み, 十時過ぎ, 八人乗り, 一引き (も引かず)

6.2.2

※なお, 上記の基準によると, 同じ語が必ずしも同じ品詞を取ることにならない。

【例】

(外国) 行き (を企つ) …名詞
 (倫敦) 行き (の汽船) …接尾辞

6.3 動詞連用形と動詞連用形転成名詞の判定基準

動詞の連用形とするか動詞転成名詞とするかについての判定基準を次に示す。

6.3.1 単独で用いられるもの

6.3.1.1 名詞とするもの

6.3.1.1.1 述語の格

述語の格となる場合は、名詞とする。（「御～」の形をとる場合も含む。）

【例】

ほねに【みがき】をあててとは、此ほねの事
太神宮へ【いのり】をかけて
そなたは【嘆き】も無し
いずれも御【嘆き】の疎かな事は御座らなんだれども

6.3.1.1.2 連体修飾を受ける

連体修飾を受ける場合は、名詞とする。（「御～」の形をとる場合も含む。）

【例】

舟の【おこり】をたづぬるに
のどの【かはき】をやめう

6.3.1.1.3 動詞と認定できないもの

短単位規定上、動詞と認定できないものは、名詞とする。（「御～」の形をとる場合も含む。）

【例】

中入り（×中入る） 目通り（×目通る） 上書き（×上書く）

6.3.1.1.4 連体修飾「～の」

「～の」の形で連体修飾する場合は、名詞とする。

【例】

其上に、枕をおき、【うそふき】のめんをきせ、
【のこり】のおしうはよろこびて

6.3.1.2 動詞連用形とするもの

6.3.1.2.1 「～もせず」「～はせず」など

「～もせず」「～はせず」など、係助詞または副助詞＋サ変動詞「す」の後続する形で用いられる場合は、動詞連用形とする。

【例】

ぬるもねられず、【おき】もせず
人形などに【おち】はすまひぞ

6.3.1.2.2 敬語形式「御～なさる」「御～申す」など

「御～なさる」「御～になる」「御～あり」「御～申す」「御～する」などの尊敬・謙譲の動詞を作る形で用いられる場合は、動詞連用形とする。

【例】

おの / \さまに御【出】なされて
早々お【くだり】なされて
さればこそ御【聞き】有れ

6.3.1.2.3 「～に行く」「～に来る」など

「～に行く」「～に来る」などの形で用いられるものは、動詞連用形とする。

【例】

兩人の者は鳥を【おい】にゆけ
さいぜんの鷹を【とり】にきたほどに

6.3.2 合成名詞の先頭又は中間に位置するもの

6.3.2.1 名詞とするもの

6.3.2.1.1 動詞と認定できないもの

短単位規定上、動詞と認定できないものは、名詞とする。（「御～」の形をとる場合も含む。）

【例】

【鞍置き】馬（×鞍置く）
【犬かけ】づつ（×犬掛く）

6.3.2.1.2 送り仮名がないもの

送り仮名のないものは、名詞とする。

【例】

【作】狂言 【切抜】細工 【焼】團子

6.3.2.1.3 後続名詞の格に相当

後続の名詞又は名詞性接尾辞の格に相当する場合は、名詞とする。

【例】

【立入り】禁止 ※「立入りを禁止」の関係

6.3.2.2 動詞連用形とするもの

6.3.2.1 に該当しないものは、動詞連用形とする。
これは、「～する人」「～する（ための）もの」「～する（ための）場所」などの意で後続の名詞又は名詞性接尾辞にかかり、その意味を限定する働きを持つ。

【例】

【おきやがり】こぼし 【すい】がうやく 【さしで】もの 【ねみだれ】がみ 【になひ】茶屋 【はり】だいち

6.3.2.2.1 接尾的要素の体言化した接尾辞が後続

「要注意語」の「接尾的要素」の体言化した接尾辞が後続する場合、動詞連用形とする。

【例】

【書き】始め 【書き】終わり 【歩き】過ぎ 【行き】付け

6.4 人名の扱い

6.4.1 人名の範囲

6.4.1.1 実在の個人名

実在の個人の名。芸名、雅号、しこ名、院号のうち、個人の呼称として広く一般に知られているものを含む。

【例】

平清盛 空海 建礼門院 武帝 白楽天

6.4.1.2 通称・仮名

通称や仮名などのうち、形式や語感から人名とみなし得るもの

【例】

あん太郎 どん太郎 悪源太 ひかるげんじ

6.4.1.2.1

日本の姓を音読みしたものや、姓の一文字目のみを音読みしたもの

【例】

【源】 三位入道（源頼政を指す） 【かん】 せうじやう（菅原道真を指す）

6.4.1.3 創作中の名

創作中の固有名のうち人間（に類するもの）の名

【例】

E s o p o 六弥太 にやくいち

6.4.1.4 神仏名

6.4.1.4.1

神仏名のうち以下のもの

6.4.1.4.1.1

日本の神話の神

【例】

天照大神 須佐之男命 伊弉諾

6.4.1.4.1.2

ギリシヤ・ローマ神話の神

【例】

ビーナス ヘラ アテナ

6.4.1.4.1.3

キリスト教関連の天使

【例】

ミカエル ラファエロ ガブリエル

6.4.1.4.1.4

人間由来の神仏名

【例】

シツタルタ イエス

6.4.1.4.2

上記以外は人名とはみなさない。

【例】

ラー シヴァ オーディーン 阿弥陀如来

6.4.1.5 敬称・尊称

敬称や尊称などのうち、特定の一個人を指すもの

【例】

仏陀 キリスト

6.4.1.6 その他

以下のものは特定の個人を指さないが、現代語においても慣用的に用いられるため全体で一短単位の人名とする。

【例】
源氏 平家

6.4.2 品詞

6.4.2.1 日本・中国・韓国の人名

6.4.2.1.1

日本・中国・韓国の人名のうち、姓と名をそれぞれ「名詞-固有名詞-人名-姓」（以下「人名-姓」）、「名詞-固有名詞-人名-名」（以下「人名-名」）とする。

【例】
源（人名-姓） | 実朝（人名-名） | | 白（人名-姓） | 楽天（人名-名） | | 東方（人名-姓） | 朔（人名-名）

6.4.2.1.1.1

6.4.1.2.1 で認定した日本の姓を音読みしたものについても、品詞は人名-姓とする。

【例】
源（人名-姓） | 三位（普通名詞-一般） | かん（人名-姓） | せうじやう（普通名詞-一般）

6.4.2.1.2

姓名が特定できない場合、及び最小単位認定規程の規定 第1章 第1 7.6 により姓名全体をまとめて1最小単位と認定した中国の人名は「名詞-固有名詞-人名-一般」（以下「人名-一般」）とする。

【例】
| 阿国（一般） | | 李梅（一般） |

6.4.2.1.3

最小単位認定規程の規定 第1章 第1 7.5.2 により「ヒメ」を含めて1最小単位と認定した人名は、「人名-一般」とする。

【例】
| 濃姫（人名-一般） | | 松浦佐用姫（人名-一般） |

6.4.2.1.4

姓と名との間にある読み添えの「の」は「助詞-格助詞」とする。

【例】
| みなもと（人名-姓） | の（格助詞） | よりとも（人名-名） |

6.4.2.2 日本・中国・韓国以外の人名

6.4.2.2.1

日本・中国・韓国以外の人名、及び人名と認定された神仏名は「人名-一般」とする。

【例】
E s o p o		いざなぎ		観音
I e s u（人名-一般）	C h r i s t o（人名-一般）			
天照（人名-一般）	大神（普通名詞-一般）			

6.4.2.3 院号・しこ名・通称

院号・僧侶の名・通称は「人名-一般」とする。ただし実在の人名との類似性や構成などから「人名-姓」「人名-名」と認定できるものはそのように判定する。

【例】

円融 (人名-一般)		院 (普通名詞)		後醍醐 (人名-一般)		帝 (普通名詞)	
十返舎 (人名-姓)		一九 (人名-名)		ひかるげんじ (人名-一般)			
空海 (人名-一般)		一休 (人名-一般)		宗純 (人名-一般)			

6.4.2.4 敬称を表す類概念

人名に付属する敬称等を表す類概念には「固有名詞-人名」以外の適切な品詞を認定する。

【例】

円融 (人名-一般)		院 (普通名詞)		後醍醐 (人名-一般)		帝 (普通名詞)	
後藤 (人名-姓)		兵衛 (普通名詞)		藤原 (人名-姓)		氏 (接尾辞)	

6.4.2.5 その他

6.4.1.6 で挙げたものの品詞は人名-一般とする。

【例】

源氏 (人名-一般)		平家 (人名-一般)	
------------	--	------------	--

6.5 固有名扱い

ここでは、固有名のうち、人名・地名以外の扱いについて述べる。品詞としては「名詞-固有名詞-一般」が付与される範囲に相当する。

なお、例の中で品詞について言及する場合、当該短単位の上に丸括弧を付して記す。その際、品詞名は「固有一般」「普通名詞」「人名-姓」など類推可能な範囲で略記する。また、概念的な固有名（人名・地名以外）を指す場合は「固有名」、品詞名を指す場合は「名詞-固有名詞-一般」と記す。

6.5.1 「名詞-固有名詞-一般」の判定基準

6.5.1.1 方針

原則として、「短単位」の規程に従い短単位とその品詞を認定した上で、「名詞-固有名詞-一般」以外の品詞で説明できない単位に対して本品詞を付与する。

6.5.1.2 基準

6.5.1.2.1

『日本国語大辞典』『大辞林』（以下「辞書」と略記する。）に立項されていないもの、あるいは人名・地名に該当しないものを、「名詞-固有名詞-一般」とする。

【例】

ソニー (固有一般)		株式 (普通名詞)		会社 (普通名詞)			
興福 (固有一般)		寺 (接尾辞)					
東京 (地名)		三菱 (固有一般)		銀行 (普通名詞)			
山本 (人名-姓)		安英 (人名-名)		の (助詞)		会 (普通名詞)	

6.5.1.2.1.1

ただし、辞書に立項されていないものであっても、個物等に与えられる固有名（固有名）ではなく、同じ種類に属する個物の全てに共通する名（普通名）に相当するものは、「名詞-固有名詞-一般」としない。

【例】

フォドシスニセス (普通名詞) (創作上の花の種類の名)

6.5.1.2.2

辞書に立項されているが、普通名ではなく固有名であり、かつその意味でのみ辞書に記載されているものは、「名詞-固有名詞-一般」とする。

【例】

夢殿〈特定建造物名〉 今鏡〈特定書物名〉

6.5.1.2.3.1

以下に該当するものは、辞書の立項の有無にかかわらず、「名詞-固有名詞-一般」とする。

6.5.1.2.3.1.1

元号

【例】

寿永 平治 延喜

6.5.1.2.3.1.2

生物（相当）の個体の名・人名と認定しない神などの名

【例】

いけづき するすみ（名馬の名）
毘沙門 阿弥陀

6.5.1.2.3.2

上記 6.5.1.2.3.1.1, 6.5.1.2.3.1.2 に該当するものが辞書に普通名として立項されている場合は、別の語彙素を立てる。

【例】

神亀（固有一般） ↔ 神亀（普通名詞）

6.5.2 具体例

上述のとおり、「名詞-固有名詞-一般」か否かの判断は、原則として辞書によりつつも、適宜、固有名か普通名かの判断が求められる。しかし両者の境界は明確ではなく判断に迷うものも少なくない。そこで、以下に固有名とみなすもの、普通名とみなすものの具体例を示す。なお以下には『室町時代編』に現れる例だけでなく、参考として現代語のコーパスに現れる用例も掲載する。

6.5.2.1 固有名とみなすものの例

固有名とみなすものの例を示す。6.5.1 に記したように、ここに示すものすべてに「名詞-固有名詞-一般」という品詞が付与されるわけではなく、「名詞-固有名詞-一般」以外の品詞が付与されることもある。

6.5.2.1.1 元号

【例】

寿永 平治 延喜

6.5.2.1.2 生物（相当）の個体の名（ペット・キャラクター・人名と認定しない神などの名）

【例】

いけづき するすみ 阿弥陀 毘沙門

6.5.2.1.3 特定の集団の名

6.5.2.1.3.1 組織（法人組織・国際組織・行政機関・公共機関など）の名

【例】

| 住友（固有一般） | 商事 | | 総務（普通名詞） | 省 |
N T T（固有一般） U C L A（固有一般）

6.5.2.1.3.2 興行集団・個人の活動集団などの名

【例】

コンサドーレ（固有一般） | 札幌 | スマップ（固有一般） アルカイダ（固有一般）
書真（固有一般） | 会 | あげぼの（普通名詞） | 会 |

6.5.2.1.3.3 民族名

【例】

アイヌ（固有一般） | 大和（地名一般） | 民族 | 壮族（固有一般）

6.5.2.1.4 特定のプロダクトの名

6.5.2.1.4.1 施設・建造物などの名

【例】

法隆（固有一般） | 寺 | 善光（固有一般） | 寺 |
極楽（普通名詞） | 寺 | 三井（地名一般） | 寺 |
梅つぼ（固有一般） | （平安御所の宮）

6.5.2.1.4.2 商品・ブランドの名

【例】

アクオス（固有一般） | ボカリ（固有一般） | スエット（普通名詞） |
ポッキー（固有一般） レクサス（固有一般）
きのこ（普通名詞） | の（助詞） | 山（普通名詞） |

6.5.2.1.4.3 芸術作品名・新聞雑誌名・番組名

【例】

東鑑（固有一般）
つりぎつね（固有一般） かくすい（固有一般） ※狂言の題目

6.5.2.1.4.4 言語名（人工言語やプログラミング言語を含む。）

【例】

日本（地名-国） | 語 | | アプリニャ（固有名詞） | 語 |
エスペラント（固有名詞） | 語 | Perl（固有名詞）

6.5.2.1.5 その他

6.5.2.1.5.1 王朝名

【例】

ムワッヒド（固有名詞） | 朝 | 李朝（固有名詞） | アケメネス（人名一般） | 朝 |

6.5.2.1.5.2 流派・宗派・家系名

【例】

ハナフィー（固有名詞） | 派 | | 太捨（固有名詞） | 流 | | 曹洞（固有名詞） | 宗 |
式家（固有名詞） | 徳川（人名-姓） | 家 |

6.5.2.1.5.3 文明・文化名

【例】

サポテカ（固有名詞） | 文明 | | エジプト（地名-国） | 文明 |

6.5.2.1.5.4 天体名（恒星・惑星・衛星・星雲などの名）

【例】

火星（固有名詞） ポラリス（固有名詞）

6.5.2.1.5.5 山号（実存の山の名は地名の扱い）

【例】

東叡（固有名詞） | 山 | | 金龍（固有名詞） | 山 |

6.5.2.1.5.6 複数の人物の名それぞれを略した要素（1字で構成される名の場合はその全体）で結合体を構成するもの

【例】

若貴（固有名詞） | 兄弟 | アスイザ（固有名詞）

6.5.2.2 普通名とみなすものの例

普通名とみなすもののうち、固有名と迷いやすいものを以下に挙げる。

6.5.2.2.1 思想・制度・学問などの体系名

【例】

儒教 マキャベリズム 哲学

6.5.2.2.1.1

※思想体系としての宗教は普通名の扱いとする。「オウム真理教」など集団としての性格の強いものは固有名の扱いとする。宗派も教義等の違いから生じる集団と考え固有名とする。

6.5.2.2.2 農作物のブランド名として用いられているもののうち、品種名に相当するもの

【例】

コシヒカリ | アケ | ノ | ホシ | とちおとめ

6.5.2.2.3 人種名

【例】

コーカソイド モンゴロイド ネグロイド

6.5.2.2.3.1

※人種名は分類学上の名と考え普通名とし、民族名は集団の名と考え固有名とする。

6.5.2.2.4 手法名

【例】

雲斎 | 織 | ハイポニカ

6.5.2.2.5 イベントの名称のうち、伝統的な年中行事など著名なもの

【例】

ハロウィーン クリスマス オリンピック

6.5.2.2.6 規定 6.5.2.1.4.2 に該当するもののうち、普通名詞化がかなり進んでいると判断されるもの

【例】

タバスコ ジープ ニクロム テトロン

6.6 擬音語・擬態語の扱い

ここでは擬音語・擬態語の扱いについて、一般の単位認定規定とは別に規定する。

6.6.1 擬音語・擬態語の単位認定

擬音語・擬態語の最小単位・及び短単位について、次のように定める。

6.6.1.1

擬音語・擬態語は、原則的にその1回の描写を1最小単位とし、それを他と結合させず単独で1短単位とする。以下、1回の描写の典型例を挙げる。

6.6.1.1.1 動物などの鳴き声の描写

【例】

| こけこっこー | | ツチクテムシクテクチシブーイ | | にゃおーん | | わん |

6.6.1.1.2 同一の1音で構成される擬音語・擬態語

6.6.1.1.2.1 1音（末尾に長音・促音が付加された場合を含む）

【例】

| が | | がっ | | がー | | ぱ | | ぱっ | | ぱあ |

6.6.1.1.2.2 連鎖（末尾に長音・促音が付加された場合を含む）

【例】

| がが | | ががっ | | ががががー | | ぱぱ | | ぱぱぱっ | | ぱぱぱー |

6.6.1.1.2.3 同一の2音の間に長音・促音が挿入されたもの

【例】

| がっが | | ぱっぱ | | がーが |

6.6.1.1.3 擬音語・擬態語一般

6.6.1.1.3.1 2音で構成されるもの

【例】

| がく | | ぐにゃ | | ずば | | がっ | | ざぶ | | どん |

6.6.1.1.3.2 上記 6.6.1.1.3.1 に派生素素※が付いたもの

※派生素素の種類

《語末》 「ーっ」 「ーり」 「ーん」 「ーー」
《語中》 「ーっー」 「ーんー」 「ーーー」

【例】

がくっ	がくり	がくん	がっく	がっくり	がっくん	がくー	がくーん
ぐにゃり	ぐんにゃり	ぐにゃー					
ずばっ	ずばん	ずばーん					
がっん	がっん	がっんー					
ざぶっ	ざぶん	ざんぶ	ざぶー				
どんっ	どん						

6.6.1.1.3.3 上記 6.6.1.1.3.1 , 6.6.1.1.3.2 に当たるものの中で同一の1音が連鎖したもの

【例】

| ずばばば | | ずばばー | | ずばばっ | | ずばばばばばん |
| どどーん | | どどどどん |
| がががっん |

6.6.1.2

擬音語・擬態語一般の2音の形、及び1音に長音・促音が付加された形が、複数連続する場合、便宜的に次のように2連続と3連続に分けたものをそれぞれ1回の描写と見なし、1短単位とする。

【例】

2連続： |ぐるぐる| |からころ| |さっさっ| |があがあ|
3連続： |ぐるぐるぐる| |からころから| |さっさっさっ| |があがあがあ|
4連続： |ぐるぐるぐる| |ぐるぐる| |からころ| |からころ| |さっさっ| |さっさっ| |があがあ| |があがあ|
5連続： |ぐるぐる| |ぐるぐるぐる| |からころ| |からころから| |さっさっ| |さっさっ| |があがあ| |があがあ|
|があがあ|

6.6.1.2.1

以下に挙げるような、連続の形の派生的な形と見なせるものも、1回の描写として全体で1短単位とする。

【例】

|がったがた| |かんかーん| |ぼろっぼろ| |どたばたー| |どかどかつ| |ぱんぱんぱーんっ|

6.6.1.3

6.6.1.2 に当たるもの以外の連続は、それぞれを1回の描写とし、1短単位とする。

【例】

ががっ		ががっ		さっさ		さっさ		ばばっ		ばば		ぐにゃん			ぐにゃん
ばたん		ばたん			ばたん		ずばばん			ずどどん		がたっ			がたっ
がさっ		ごそっ		がたん			ごどん		かんかーん			かんかーん			

6.6.1.3.1

ただし、『岩波国語辞典』第6版、『日本国語大辞典』第2版のいずれか（以下「辞書」といった場合はこの2つを指す）に立項されている場合は、その全体を1回の描写とし、1短単位とする。

【例】

|からんころん| |かんらかんら| |ざっくざっく|

6.6.1.4

擬音語・擬態語の1短単位の間には補助記号が挿入された場合は、記号とそれ以外をそれぞれ1短単位とする。

【例】

|ばた||、||ばた|

6.6.1.5

擬音語・擬態語と一般語とが結合した語については、以下のように最小単位を認定する。

6.6.1.5.1

元の擬音語・擬態語との関係を強く想起させる要素と単独で語として使われる一般語とが結合した語は、擬音語・擬態語に当たる要素と一般語とを、それぞれ1最小単位とする。

【例】

/びく/つく/ /びしょ/濡れ/ /ぶら/下がる/ /べた/付く/ /べた/褒め/ /ばい/捨て/ /
むず/がゆい/

6.6.1.5.2

擬音語・擬態語に当たる要素の語源意識が失われてしまっているものや、他の構成要素が接尾辞的な性格の強いものは、擬音語・擬態語に当たる要素と一般語とが結合した全体を1最小単位とする。

【例】

/ひし=めく/ /ひよ=こ/ /ぼや=ける/ /へこ=たれる/ /よた=話/ /パチン=コ/ /ブラン=コ/

6.6.1.5.3

擬音語・擬態語に単に語調を整えるための要素や語源未詳の要素が結合したものは全体で1最小単位とする。

【例】
／ほか＝すか／　／ほにや＝らか／

6.6.2 擬音語・擬態語に付く「と」について

6.6.2.1

原則の「助詞・助動詞は、1最小単位を1短単位とする」に従い、格助詞「と」として分割する。

【例】
| つる / \ || と |　|　| につこ || と |　|　| ひょう || ど |

6.6.2.2

「一と」の場合、促音を擬音語・擬態語の語形の一部とし、格助詞「と」語形「ト」と認定する。

【例】
| がっ || と |　|　| ふっ || と |　|　| ざっ || と |

6.6.2.3

「と」を含めて副詞として1語化したと見なせるものは「と」の付いた形を全体で1最小単位とし（最小単位認定規程の規定 第1章 第1 2.4.4 参照）、擬音語・擬態語の単位認定規程の適用に含まないものとする。
「室町時代編」に現れる「と」を含む主な副詞の一覧（五十音順、擬音語・擬態語に関わらない語形も含む）を下記に示す。

【例】
うかと　かっと　こっと　しかと　しっと　しゃんと　じっと　すきと　そっと　そと　たんと　ちゃんと　ちょ
かと　ちんと　ていと　とうと　とっと　どっと　はたと　ひしと　ひたと　ひょつと　まっと　まんまと　むさ
と　むずと　丁と　態と　我と　漸と　自ずと

6.6.3 付加情報の認定

6.6.3.1

擬音語・擬態語の品詞は一般に副詞とする。以下に典型的な例を示す。

【例】
[単独用法]　ぐわら / \ / \、ひかり、ぐわら / \ どう
[連用用法]　くる / \ まひて　つらつら物を案ずるに
[付属語を伴う]　から / \ とわらふて　きりりとまはりて

6.6.3.2

擬音語・擬態語に当たる語が格助詞を伴うなど体言的に用いられていても、名詞とせず副詞とする。

【例】
きのふはたくさんに【ほろろ】をかけたが、けふは【ほろろ】をかけぬに依て

6.6.3.3

辞書に形状詞的用法の記述が見られる場合は形状詞を認める。

【例】
バラバラに分解する（形状詞）　バラバラと飛び立つ（副詞）
水をひたひたにして（形状詞）　水がひたひた増す（副詞）

6.6.3.4

笑い声は感動詞、泣き声は副詞（擬音語）とする。感動詞の詳細については、同語異語判別規程の6.7「感動詞の扱い」を参照。

【例】
感動詞：あはは えへへ
副詞：えーん わーん

6.6.3.5

動物の鳴き声等は副詞（擬音語）とする。

【例】
ホーホケキョ こけこっこ にやおーん うおーん

6.6.3.6

擬音語・擬態語の語種は和語とする。

6.6.4 同語異語判別

6.6.4.1 同一「語形」・別「語形」の判定

6.6.4.1.1 同一の「語形」とする出現形と「語形」の定め方

6.6.4.1.1.1

長音を示す母音，小書きの母音，長音符号の差異は同一の「語形」にまとめる。辞書に立項されている語形がある場合はそれを「語形」とする。

【例】
出現形：ぎゅう／ぎゅー／ぎゅう→語形：ギュウ

6.6.4.1.1.1.1

辞書に立項されている語形がない場合には長音符号を「語形」とする。

【例】
出現形：ばたあん／ばたーん／ばたあん→語形：バターン

6.6.4.1.1.2

母音連鎖のうち，「エイ」と「エエ」，「オウ」と「オオ」の差異は同一の「語形」にまとめる。辞書に立項されている語形がある場合はそれを「語形」とする。

【例】
出現形：ぜいぜい／ぜえぜえ／ゼーゼー→語形：ゼイゼイ
出現形：ぼう／ぼお／ぼー→語形：ポウ

6.6.4.1.1.2.1

辞書に立項されている語形がない場合には「エー」「オー」を「語形」とする。

【例】
出現形：ぼうん／ぼおん／ぼーん→語形：ポーン

6.6.4.1.1.3

長音・促音と，それが連鎖している形との差異は同一の「語形」にまとめる。単独の長音・促音で表記される形を「語形」とする。

【例】
出現形：ぎゅう／ぎゅー／ぎゅうう／ぎゅーー →語形：ギュウ
出現形：ばたーん／ばたーーん／ばたあーん／ばたあーん →語形：バターン
出現形：ばったん／ばったん →語形：バツタン
出現形：ばたんっ／ばたんっっ →語形：バタンッ

6.6.4.1.1.3.1

ただし、長音符、母音の順で表記されている場合は異なる「語形」とする。

【例】

ぎゅー↔ぎゅーう
ごお↔ごーお

6.6.4.1.1.4

単独の促音と、促音に長音を示す長音符や小書きの母音が付いた形との差異は同一の「語形」にまとめる。促音のみで記される形を「語形」とする。

【例】

出現形：ごっ／ごっー→語形：ゴッ

6.6.4.1.2 異なる「語形」とする出現形

6.6.4.1.1 に挙げた差異以外の差異を持つ任意の二つの出現形は、原則として異なる「語形」とする。

【例】

ぎゅ↔ぎゅっ↔ぎゅー↔ぎゅーう
ばったり↔ばーったり
ばたん↔ばたん↔ばたん↔ばたんっ
ずる↔ずるー
ぐにゃり↔ぐんにゃり
ずばば↔ずばばば

6.6.4.2 同一「語彙素」・別「語彙素」の判定

6.6.4.2.1 同一の「語彙素」とする「語形」と「語彙素」の定め方

語末に促音が付加されたものと元の形の「語形」の差異は同一の「語彙素」にまとめる。促音が付加されない形を「語彙素（読み）」とする。

【例】

語形：ギユウ／ギユウツ→語彙素：ギユウ【ぎゅう】
語形：バタン／バタンツ→語彙素：バタン【ばたん】

6.6.4.2.1.1

1音の語の場合は促音が付加された形を「語彙素（読み）」とする。

【例】

語形：ギユ／ギユツ→語彙素：ギユツ【ぎゅっ】

6.6.4.2.2 異なる「語彙素」とする「語形」

6.6.4.2.1 に挙げた語末促音の有無の以外の差異を持つ任意の二つの「語形」は、原則として異なる「語彙素」とする。「語形」をそのまま「語彙素読み」とする。「語彙素」は「語彙素読み」を平仮名表記したものとする。

【例】

バタリ↔バツタリ（語中の促音の付加）
ギュー↔ギュー（長音の付加）
ズル↔ズルー（長音の付加）
バタン↔バターン（長音の付加）
グニャリ↔グンニャリ（撥音の付加）
バタ↔バタン（撥音の付加）
バタ↔バタリ（派生要素「リ」の付加）
ズバ↔ズババ↔ズババババ（同一音の繰り返し）
シュルン↔シュルルン↔シュルルルルン（同一音の繰り返し）
パン↔パパン↔パパパン（同一音の繰り返し）
ガ↔ガガ↔ガガガ↔ガガガガ（同一音の繰り返し）
トントン↔トントントン（語基の繰り返し）
カリカリ↔ガリガリ（清濁）
バタン↔パタン（濁と半濁）
ビヨン↔ピヨン（直音と拗音）

6.7 感動詞の扱い

感動詞の同語異語判別に関する規定を次に示す。

6.7.1 感動詞の範囲

次のものを感動詞とみなす。

下記のうち、6.7.1.1 から 6.7.1.6 までの品詞を「感動詞一般」、6.7.1.7 を「感動詞-フィラー」とする。

6.7.1.1 感動や驚きなどを表すもの

【例】

あっ おや すわ やや

6.7.1.1.1

なお、笑い声は感動詞、泣き声は副詞（擬音語）とする。

【例】

あはは えへへ……感動詞
えーん わーん……副詞

6.7.1.2 呼び掛けを表すもの

【例】

おい こら のう もしもし もの申 やい

6.7.1.3 応答を表すもの

【例】

いや はあ はい

6.7.1.4 誘い掛けに用いるもの

【例】

いざ いで さあ

6.7.1.5 掛け声

【例】

えいさ えいや それ

6.7.1.6 あいさつに用いる語のうち、最小単位認定規程で1最小単位となるもの

【例】

さらば こんにちは こんばんは さようなら おはよう

6.7.1.7 フィラー

【例】

あの えっと えー んー

6.7.2 単位の定め方

最小単位認定規程・短単位認定規程に従い単位を認定する。感動詞に関連する部分を抜粋・整理して以下に記す。

6.7.2.1

原則として感動、呼びかけ、応答などの1回の描写を「1最小単位=1短単位」とする。

【例】

| ああ | | いざ | いざ | | すわ | | やあ | | あの |

6.7.2.2

助詞・助動詞は1最小単位とはせず、助詞・助動詞を含む全体で「1最小単位=1短単位」とする。

【例】

| どう=ぞ | | さら=ば | | こんにち=は | | さよう=なら |

6.7.3 同語異語判別

6.7.3.1 同一「語形」・別「語形」の判定

6.7.3.1.1 同一の「語形」とする出現形

次に示す形の差異を持つ任意の二つの出現形は、同じ「語形」とする。

6.7.3.1.1.1 長音を示す母音、小書きの母音、長音符号の差異

【例】

ああ／あー／ああ いやあ／いやあ／いやー

6.7.3.1.1.2 母音連鎖のうち、「エイ」と「エエ」, 「オウ」と「オオ」の差異

【例】

ほう／ほお

6.7.3.1.1.3 臨時的に付加された長音・促音と、それが連鎖している形との差異

【例】

うわー／うわーー／うわああ／うわああああ うわっ／うわっっ

6.7.3.1.1.3.1

臨時的に長音・促音が付加された形と元の形の差異は、異なる「語形」とする。

【例】

うわ←→うわあ うわ←→うわっ

6.7.3.1.1.3.2

臨時的な長音・促音の付加か否かの判断は、和語・漢語の場合と同様、『岩波国語辞典』第6版、『日本国語大辞典』第2版による。

6.7.3.1.1.4 単独の促音と、促音に長音を示す長音符号や小書きの母音が付いた形との差異

【例】
うわっ／うわっー

6.7.3.1.2 異なる「語形」とする出現形

6.7.3.1.1 に挙げた差異以外の差異を持つ任意の二つの出現形は、原則として異なる「語形」とする。

【例】
ふん↔ふうん あ↔あっ あれー↔あれーっ おほほ↔おほほほ

6.7.3.2 同一「語彙素」・別「語彙素」の判定

6.7.3.2.1 同一の「語彙素」とする「語形」

意味に違いが生じない限りにおいて、以下の差異を持つ「語形」は同一の「語彙素」とする。

6.7.3.2.1.1 特殊拍（長音・促音・撥音）の有無及びその交替

【例】
アラ／アラッ／アンラ／アーラ／アアラ ヤア／ヤアァ／ヤ／ヤッ

6.7.3.2.1.1.1

ただし、1音節の語のうち、長音のある「語形」が応答・感嘆の意を、促音のある「語形」が驚きの意を表すものは、異なる「語彙素」とする。その場合、長音・促音のない「語形」は促音のある「語形」と同一の「語彙素」とする。

【例】
アア↔アッ／ア エエ↔エッ／エ オオ↔オッ／オ ハア↔ハッ／ハ

6.7.3.2.1.1.2

上記以外で、長音のある「語形」と促音のある「語形」が同義・類義の場合は、同一の「語彙素」とする。

【例】
ワア／ワッ／ワ

6.7.3.2.1.2 語末音の繰り返し

【例】
アラ／アララ／アララララ

6.7.3.2.2 異なる「語彙素」とする「語形」

6.7.3.2.1 に挙げた差異以外の差異を持つ任意の二つの「語形」は、原則として異なる「語彙素」とする。

【例】
ドッコイシヨ↔ドッコラシヨ ハイ↔アイ アラ↔アリャ↔アリ

6.7.3.3 「語形」の定め方及び表記

6.7.3.3.1 「語形」の定め方

次の基準に従い「語形」を定める。以下の 6.7.3.3.1.1 から 6.7.3.3.1.4 に該当しないものは、本規定と矛盾しない限りにおいて、同語異語判別規程の規定 4.1 に従う。

6.7.3.3.1.1

長音を示す母音、小書きの母音、長音符号の差異については、原則として母音の形を「語形」に当てる。

【例】
ああ／あー／ああ→アア いやあ／いやぁ／いやー→イヤア

6.7.3.3.1.2

母音連続のうち、「エイ」と「エエ」, 「オウ」と「オオ」の差異については, 辞書に立項されている語形がある場合はそれを「語形」に当てる。

【例】
ほう／ほお→ホウ

6.7.3.3.1.2.1

辞書に立項されている語形がない場合には, 原則として「エエ」「オオ」を「語形」とする。

【例】
そおら／そーら／そうら／→ソオラ

6.7.3.3.1.3

臨時的に付加された長音・促音と, それが連鎖している形との差異については, 単独の長音(直前の母音)・促音で記される形を「語形」に当てる。

【例】
いやー／いやぁ／いやぁあ／いやあ→イヤア おっっ／おっっっっ→オッ

6.7.3.3.1.4

単独の促音と, 促音に長音を示す長音符号や小書きの母音が後続している形との差異については, 促音のみで記される形を「語形」に当てる。

【例】
うわっ／うわっー→ウワッ

6.7.3.3.2 「語形」の表記

感動詞の「語形」の表記は, 同語異語判別規程の規定 4.2.1 を適用する。

6.7.3.4 「語彙素」の定め方及び表記

6.7.3.4.1 「語彙素」の定め方

「語形」を「語彙素」として立てる。複数の「語形」を一つの「語彙素」にまとめる場合, 以下の規定によって「語彙素」を定める。以下の 6.7.3.4.1.1 から 6.7.3.4.1.2 に該当しないものは, 本規定と矛盾しない限りにおいて, 同語異語判別規程の規定 5.1.2.1 に従う。

6.7.3.4.1.1

特殊拍(長音・促音・撥音)の有無及びその交替が見られる場合, 原則として特殊拍のない形, 交替のない形を「語彙素」とする。語末長音の短呼形と元の形がある場合は元の形を「語彙素」とする。

【例】
アラ／アアラ／アラッ／アンラ→アラ【あら】
ヤア／ヤッ→ヤア【やあ】
マア／マ→マア【まあ】

6.7.3.4.1.1.1

1音節で語末に促音のある形と促音のない形がある場合, 促音のある形を「語彙素」とする。

【例】
アッ／ア→アッ 【あっ】
エッ／エ→エッ 【えっ】

6.7.3.4.1.2

語末音の繰り返しが見られる場合、原則として繰り返しのない形を「語彙素」とする。

【例】
アラ／アララ／アララララ→アラ 【あら】
アチ／アチチ→アチ 【あち】

6.7.3.4.1.2.1

ただし、笑い声に相当する感動詞は、原則として3拍の形を「語彙素」とする。

【例】
アハ／アハハ／アハハハハ→アハハ 【あはは】
エヘ／エヘヘ／エヘヘヘヘ→エヘヘ 【えへへ】
フフ／フフフ／フフフフフ→フフフ 【ふふふ】

6.7.3.4.2 「語彙素読み」の表記

「語彙素読み」には、「語彙素」として立てることになった「語形」をそのまま登録する。

6.7.3.4.3 「語彙素」の表記

感動詞の「語彙素」には、「語彙素読み」を平仮名表記にしたものを用いる。

6.8 出現形「に」の判別基準

出現形「に」について、断定の助動詞「なり」の連用形か助詞（格助詞または接続助詞）かの判断基準を以下に記述する。

原則、次の6.8.1～6.8.5に該当するものは断定の助動詞「なり」とする。それ以外のものは6.10.1に従って格助詞または接続助詞と認定する。

6.8.1 先行語が形状詞

先行語が形状詞のもの

6.8.1.1

ただし、第3章 第2 1.18.1.2.1.3 に記した事情により、『室町時代編』で「形状詞」用法が認められる語であっても、UniDic既登録情報を優先して品詞が「名詞」となっている場合がある。この場合も、接続する「に」は助動詞「なり」と認める。以下に示すものの「に」の前項は、UniDicでは形状詞（または普通名詞 - 形状詞可能）ではないが、これらの「に」については上記補則に従い、断定の助動詞「なり」連用形とする。

あだ（徒）に いかさま（如何様）に※ おろか（疎）に ～顔に（「馴れ顔に」など）
なかぞら（中空）に なのみ（斜）に もろとも（諸共）に

※「～様に」の「に」の品詞は、日国での「～様」の品詞によって決定する。
「～様」が日国で「形動」、または、「名詞」で「形動」用法の記載がある場合 → 原則、断定の助動詞「なり」
「～様」が日国で「形動」用法の記載なし → 格助詞「に」

6.8.2 存在詞が後続

「あり」などの存在詞が後続し、意味上「～で（～であって）」と解せるもの。

【例】
かるが故に言葉のてにはのみ【に】有らず（助動詞）
玉ものまへは人間【に】あらず（助動詞）

6.8.2.1

意味上「～で（～であって）」と解せないものは、格助詞と判断する。

【例】

知恵は学者のみ【に】有る。（格助詞）
なんぢがふところ【に】あるはなんぞ（格助詞）

6.8.3 ～にして

「～にして」の形で用いられ、意味上「～で（～であって）」と解せるもの

【例】

此人は入道の弟、公達の中にて、文武二道【に】して、よき大将なれ共（助動詞）

6.8.3.1

意味上「～で（～であって）」と解せないものは、格助詞と判断する。

【例】

伝教大師くわんむ天王と御心をひとつ【に】して、（格助詞）
たるを太こ【に】して打こともあり（格助詞）

6.8.4 「や」が後続

係助詞「や」が後続し、「～にやあらむ」と「あらむ」が補えそうなもの

【例】

山陰なれば【に】や日も早う暮れ、（助動詞）

6.8.4.1

「や」が後続しても「あらむ」が補えないもの、「～で（～であって）」と解せないものは格助詞と判断する。

【例】

のがひの牛の一こゑも、草かり笛【に】やまがふらん

6.8.5 やう（様）に、ごとくに

「やう（様）に」「ごとくに」の「に」

【例】

そのやう【に】りふじんな事おしやる、（助動詞）
太郎くわじやそのごとく【に】返事をする（助動詞）

6.9 出現形「にて」の品詞判別基準

出現形「にて」の品詞認定は、「断定の助動詞「なり」連用形+接続助詞「て」」または格助詞「にて」とし、「格助詞「に」+接続助詞「て」」という認定はしない。以下の基準に従って「なり+て」か「にて」かを判別する。

6.9.1 意味から判別する基準

6.9.1.1

「～で（～であって）」の意のものは、助動詞「なり」+接続助詞「て」とする。

【例】

松は千年久しひもの【にて】、ときはなる木なり
何【にて】も御用の事あらば私まで心おかれず仰られひ

6.9.1.2

「～として」「～にして」の意のものは、助動詞「なり」＋接続助詞「て」とする。

【例】
太郎くわじやぎやうじ【にて】、すまふをとり、

6.9.1.3

「～において」（場所・時）、「～を使って」（手段・方法）、「～によって」（原因・理由）の意のものは、格助詞「にて」とする。

【例】
門の御福を、清水【にて】給はらふずの間
てんだいの剃刀【にて】、ひたいをまるめ、
ぶつじんのおしへ【にて】、しゆぎやうをいたせとの事であらふずる

6.9.2 先行語・後続語から判別する目安

6.9.2.1

先行語が形状詞のものは、助動詞「なり」＋接続助詞「て」とする。

【例】
かりそめにまかり出ても、にぎやか【にて】、何をかはふ共ままで御ざる

6.9.2.2

「あり」「はべり」「候ふ」「おはします」などの存在詞が後続し、その存在詞と「にて」で「～であって」の意となるものは、助動詞「なり」＋接続助詞「て」とする。

【例】
なんぼうきどくなる大こく【にて】あるぞ
いかやうなる御かた【にて】候ぞ

6.9.2.3

上記以外のものは、格助詞「にて」とする。

6.10 助詞の品詞認定

複数の品詞の可能性を持つ助詞について、「室町時代編」における品詞認定の基準をそれぞれ以下に示す。基本的に以下の基準によって品詞を決定するが、判断が難しい場合は注釈書等の訳文を参考に個別に決定することがある。なお、UniDicの助詞の分類には「間投助詞」がないため、一般に間投助詞の用法と言われるものについても以下の基準に従い処理する。

6.10.1 「が」

格助詞または接続助詞とする。

6.10.1.1 格助詞とするもの

体言または体言に相当する語に後続し、格関係を表すもの。

【例】
其ま夢【が】さめて、
康頼【が】事は然る事ぢやが
か様の事はかた時もいそひだ【が】よひものぢや

6.10.1.2 接続助詞とするもの

活用語の連体形に後続し、句と句とを接続する役割をするもの。因果関係のない接続や、逆接の関係などを表す。また、終助詞の用法とされることのある文末にあつて感動を表現するものも接続助詞とする。

【例】
都へ御ざらば同道いたしたい【が】、何と御ざらふぞ
平家は北国へ下られた時は、十万余騎と聞こえた【が】、上らるる時は、僅かに三万ばかりに成って
ここには大納言殿こそ御座った物を、この妻戸をばかうこそ出でさせられた【が】、あの木をば自らこそ植えさせ
られた【が】、などと言うて、

6.10.2 「に」

格助詞または接続助詞とする。

6.10.2.1 格助詞とするもの

6.10.2.1.1

体言または体言に相当する語に後続し、格関係を表すもの。

【例】
そぶがここく【に】ありし時、がん【に】文をことつくる
先の雑餉をばそなた【に】贈ったれ

6.10.2.1.2

動詞の連用形に「に行く、来る、参る、遣る」などの形式が続くときの「に」

【例】
宇治へまいらふと存て、さそひ【に】まいつた

6.10.2.1.3

動詞の連用形を受け、「～に～」の形で同じ動詞を繰り返し用いてその動きの程度が甚だしいことを強調するもの。

【例】
まつかうにかざし、もみ【に】もうでかけあわせ、

6.10.2.1.4

「～に」型副詞のうち、第2章 第1 7.5.2.1 により前節部と分割された「に」

【例】
まこと【に】

6.10.2.2 接続助詞とするもの

活用語の連体形に後続し、句と句とを接続する役割をするもの。並列・継起の関係や順接条件・逆接条件などの意味を表す。

【例】
掘って見る【に】、文字のごとく、過分の黄金が見えた。
あか月がたの事なる【に】、一つのふしん候
一時あわひでもおなつかしひ【に】、お国へくだらせられたらば、わらはは何とせう事ぞ

6.10.3 「を」

格助詞・接続助詞・終助詞のいずれかとする。

6.10.3.1 格助詞とするもの

体言または体言に相当する語に後続し、格関係を表すもの。

【例】
鼠の足に縄【を】付けて蛙水の中に飛び入ったれば
はるなつは田はた【を】かへし、秋冬は五こく【を】おさむるもうしのおんどくなり
是にふりうのめんがある【を】きせておかふ

6.10.3.2 接続助詞とするもの

活用語の連体形に後続し、句と句とを接続する役割をするもの。逆接の関係を表すもの、順接の関係を表すもの、因果関係のない接続を表すものなどがある。
「～ものを」の形で逆接を表すものも接続助詞とする。

【例】
おそうまいつて、わたくしが前にいる【を】、たてと申せどもたつまひと申に依て
しうとをみつけずにきりちがゆる【を】、しうとのかたよりことばをかくる事もあり
頼朝を打ち頼うでおちゃったならば、命ばかりは助けうざる物【を】

6.10.3.3 終助詞とするもの

文末用法で、格助詞とも接続助詞とも解せない場合、終助詞を認定することがある。

6.10.4 「と」

格助詞または接続助詞とする。

6.10.4.1 格助詞とするもの

6.10.4.1.1

体言または体言に相当する語に後続し格関係を表すもの

【例】
天下一同の御代【と】なし給ふも、

6.10.4.1.2

引用を表すもの

【例】
三人として哥を一首申上げい【と】の御事じや

6.10.4.2 接続助詞とするもの

活用語の終止形に接続し、仮定の逆接条件・順接条件等の条件句を表すと取れるもの

【例】
づぎんきする【と】、其まま女いづる、
やるまひといふたり【と】取てみせう

6.10.5 「ぞ」

終助詞または格助詞とする。

6.10.5.1 終助詞とするもの

文末用法のもの。文末の「ぞや」「ぞとよ」などの「ぞ」も含む。係助詞の文末用法とされるものも終助詞とする。

【例】
只今めに物みせう【ぞ】
何事【ぞ】やい
急度推量して有【ぞ】とよ

6.10.5.2 係助詞とするもの

文中に位置するもの。

6.10.5.2.1

文中に位置し、係り結びを導くもの。

【例】
二たびしやばに【ぞ】かへりける

6.10.5.2.2

文中の疑問語を受けて不定の意を表すもの。

【例】
たのふだ人は、どこ【ぞ】がきつひ人じや程に
何【ぞ】あらばおかしやれ

6.10.6 「や」

終助詞・係助詞・副助詞のいずれかとする。

6.10.6.1 終助詞とするもの

文末用法のもの。詠嘆、呼びかけ、命令形相当の句に後続するもの。係助詞の文末用法とされるものも終助詞とする。

【例】
人目もさすがはづかし【や】
いや中／＼の事【や】
よくきけ【や】人々よ

6.10.6.2 係助詞とするもの

文中に位置するもの。

6.10.6.2.1

文中に位置し、係り結びを導くもの

【例】
さつまの守、今はかうと【や】おもはれけん

6.10.6.2.1.1

「にやあらむ」の「あらむ」が省略されて「や」が文末相当の位置に現れる場合は係助詞とする。また「にやあらむ」が変化した「やらん」の「や」も係助詞とする。

【例】
口にくわへてぬくべきを、わかげのいたる所に【や】、かぶりのいたにおしあてて
お百姓の名をば何といふ【や】らん

6.10.6.2.2

文中に位置し、不定の意を表すもの。

【例】
いつぞ【や】又召されさせられて今様を歌わせられたにも

6.10.6.3 副助詞とするもの

同種の語を列挙し、並列の意を表すもの。

【例】
一度にぱっと立った羽音が大風【や】、雷などの様に聞こえたれば
西ひがし、北【や】南【や】四のかど

6.10.7 「か」

終助詞・係助詞・副助詞のいずれかとする。

6.10.7.1 終助詞とするもの

文末用法のもの。詠嘆・疑問などの意を表す。係助詞の文末用法とされるものも終助詞とする。

【例】
扱はせみにてまします【か】
山だちのゆるしといふ事があるもの【か】

6.10.7.2 係助詞とするもの

文中に位置するもの。

6.10.7.2.1

文中に位置し、係り結びを導くもの。

【例】
幼い人々何たる目に【か】会わるる

6.10.7.2.1.1

「にかあらむ」の「あらむ」が省略されて「か」が文末相当の位置に現れる場合は係助詞とする。

【例】
天道からその所作を御納受為さるる験に【か】，病も立ち所に平癒して，

6.10.7.2.2

文中に位置し、不定の意を表すもの。

【例】
誰【か】その事を強いて勧むるぞ
何と【か】談合が破れつらう

6.10.7.3 副助詞とするもの

対等の関係に立つ語を受けて、選択の意を表すもの。

【例】
三十【か】五十【か】、あるひは百【か】
又ときのかたへいてよからふ【か】、ふせのかたへゆかふ【か】

6.10.8 「も」

係助詞または接続助詞とする。

6.10.8.1 係助詞とするもの

6.10.8.2 以外のもの。文末に位置するものも終助詞とは認めず係助詞とする。

【例】

世に有り難い事の様人【も】言い、我が身に【も】思うたがい
のりまけて【も】、いのらひで【も】

6.10.8.2 接続助詞とするもの

活用語の連体形を受け、確定の逆態接続の意を表すもの。

6.10.9 「は」「こそ」

「は」「こそ」の品詞はすべて係助詞とする。終助詞は認めない。

6.11 ほか、品詞判別に注意を要する語

上述の事項以外に、「室町時代編」での品詞判別に注意を要する語を挙げる。

6.11.1 「来たる」

「室町時代編」では、動詞「来たる」と動詞「来」＋助動詞「たり」を以下の基準により判別する。

6.11.1.1 動詞「来たる」とするもの

「～である」が後続する、活用形が促音便形や命令形など、動詞「来」＋助動詞「たり」と考えにくいもの。また表記上「来」＋「たり」に分割できないもの。

【例】

なんぢが此所へきたつて有を、
ゆくゑを申て来り候はば、

6.11.1.2 動詞「来」＋助動詞「たり」とするもの

6.11.1.1 に当てはまらないもの。

【例】

せつかんせうと思ふてきたれ共、
仮令狼が来たりとも、

6.11.2 「異なる」

「室町時代編」では、名詞「異」＋助動詞「なり」（断定）とし、動詞「異なる」は使用しない（『日本国語大辞典』第2版によれば、動詞「異なる」の用例は明治以降、それ以前は形容動詞「異なり」としているため）。

6.11.3 「また」

6.11.3.1 接続詞とするもの

並列、「そのうえ」、「さらに」の意のもの。

【例】

さげんのよひ時もあり、またあしひ事も有物じや

6.11.3.2 副詞とするもの

反復、類似、その他（「またの機会」）、「山また山」の類、疑問（「これはまたどうした」）、評価強調（「これがまた格別」）の意のもの。

【例】

人があいていたせば、またうちかへす事もござれども、

6.11.4 「さて」

6.11.4.1 副詞とするもの

「そのまま」「そうして」「それでは」「それなのに」の意のもの。

【例】

然て有らうずる事無ければ、

6.11.4.2 接続詞とするもの

文頭に出現、話題転換、続く事態の言い起こしの意のもの。

【例】

あふさて、いかやうになりともいはふ

6.11.5 「ながら」

6.11.5.1 接尾辞とするもの

数詞を受けて「…とも」の意を表すもの。また、名詞を受けて「すべて」「…ごと」の意を表すもの。

【例】

ふたりながらせがれをもつて御ざる程に
萬のさいわひあらするつりばりを魚ながらこそはとらせけれ

6.11.5.2 接続助詞とするもの

6.11.5.1 以外のもの。動詞の連用形、体言、形容詞の語幹などを受け「まま」「ままで」、「にもかかわらず」「けれども」の意を表すもの、動詞の連用形を受け二つの動作が並行して行われることなどの意を表すものなどがある。

【例】

我が身は伊予に居ながら、先立てて屋島へ奉ったが、
是と申もかりそめながらたしやうのゑんかと存るよ

6.11.6 「ただ」

6.11.6.1 形状詞とするもの

助動詞「なり」が後接し、「まっすぐ」「普通」などの意のもの。

【例】

我も只ならず成った事を言うたれば

6.11.6.2 名詞とするもの

無料・無償の意のもの。

【例】

ただならばいかほどなり共酒をのませう物を

6.11.6.3 副詞とするもの

6.11.6.1 , 6.11.6.2 以外のもの。

【例】

人があまた有かと思ふたれば、ただ一人じや

6.11.7 「やう（様）」

6.11.7.1 接尾辞とするもの

動詞の連用形に付いて、「～する方法・やり方」の意を表すもの。また、名詞について例示・「～風」などの意を表すもの。

【例】

くわんねんのいたしやうが有よ
いるまやうとて、さか言葉をつかふときひたによつて

6.11.7.2 名詞とするもの

物事の様子、方式、手段、事情などの意のもの。また「言う」「思う」などの語を受けて形式名詞的に用いられるもの。

【例】

それは其時のやうによらふ
宿へかへらふやうもなし
信業を招いて申さうずる様は：

6.11.7.3 形状詞-助動詞語幹とするもの

助動詞「ようだ（ようなり）」の語幹。

【例】

この様な人を今は妻と頼うでも何にせうぞ？
なふかんにたえて、身のしみつくやうにむまひぞ

6.11.8 「あまり」

6.11.8.1 副詞とするもの

連用修飾要素となるもの。

【例】

あまりかたひ事をいはしますな

6.11.8.2 名詞とするもの

数量を表す語に付いて、その数量を上回ったり越えたりすることを表すもの。「～のあまり」の形で連体修飾されており、形状詞と見なせないもの。

【例】

家の子郎等百人余りが首を取って、
思いの余りに水の底にも入らせられたか
ただ酔狂のあまりなり

6.11.8.3 形状詞とするもの

助動詞「なり」が後接、または「あまりの～」の形のもの。

【例】

あまりのうつくしさに、いみやうにみめよしと申人がござる
あまりにおそごぞつたほどに、きづかひにぞんじて

6.12 読みの認定基準

読み（語形）が不確定な語の認定基準については、狂言とキリシタン資料で異なるため以下にそれぞれ述べる。

6.12.1 狂言

「室町時代編Ⅰ狂言」では、漢字などの読みを一つに特定できない場合も少なくない。注釈書等を参考に、同時代的な発音を反映させるよう個別に発音形を決定している。基本的な方針は以下のとおりである。

- ・底本とした大塚光信編(2006)『大蔵虎明能狂言集翻刻註解』(清文堂出版)に付されているルビに従う。
- ・同資料中に仮名表記例がある語については、仮名表記例の読みに従う。
- ・北原保雄・村上昭子編(1984)『大倉虎明本狂言集総索引』(武蔵野書院)などの索引類、『日葡辞書』などの同時代資料を参照し個別に判断する。

これらによっても確定できない場合は、文脈や語種などから判断し統一的に読みを付与した。以下発音形の認定に関して注意を要する点を挙げる。

6.12.1.1 連語での発音の融合が想定される箇所

狂言台本には、[出う/イジョー] [今日は/コンニッタ]のように、台本の表記から通常想定される発音と、舞台上で通用される発音が異なるものが存在する。このようなものについては、明らかにそう発音させる意図があることが推測され、かつ言語単位上不都合が生じない表記がなされていない限りは、原則舞台上の通用の読みは反映させない。

6.12.1.2 活用語尾が表記されていない語の音便化の判定

漢字表記された動詞には、活用語尾が表記されていないものが見られる。これらのうち、「致た」「云た」「聞て」「持て」など、現代語あるいは舞台上では通常連用形が音便化するものが多く存在するものの、虎明本狂言集の台本で音便化しているのかどうかの判断は難しい。そこで以下の方針で処理を行った。

6.12.1.2.1

「た」が後接する場合は原則音便化した形として認定する。

【例】

うりての【云】たごとく云
→動詞-一般・文語四段-ハ行・連用形-ウ音便

や、【思ひ出】た、
→語彙素：思い出す・動詞-一般・文語四段-ハ行・連用形-イ音便

6.12.1.2.2

同じ語の仮名表記例において、音便化した形の例しかないものは漢字表記例についても音便化した形として認定する。

【例】

よそみしておみやらぬに【依】てさやうに仰らるる
→語彙素：因る・動詞-一般・文語四段-ラ行・連用形-促音便
(仮名表記例はすべて「よつて」)

6.12.1.2.3

他のものは積極的に音便化させない。

【例】

当年も年をとりにゆかふと【云】て
→動詞-一般・文語四段-ハ行・連用形-一般

慥に成敗は【致】て御ざるが
→動詞-非自立可能・文語四段-サ行・連用形-一般

6.12.1.3 清濁

仮名表記の出現形に対し、現代語で濁音化するところに濁点がないという場合の処理に関しては、『日本国語大辞典』第2版で古くは清音であったとの記述が確認できる限り、別語形として清音形を登録し、清音で読む。

6.12.1.4 連声

「サンイ」(サンイ→サンミ)のように、連声化し得るものについては、本文中の仮名表記および索引を元に読みを判断する。

【例】
観音（カンオン） 親王（シンオウ） 天皇（テンオウ） 天王（テンオウ）
三位（サンミ）

6.12.2 キリシタン資料

『室町時代編Ⅱキリシタン資料』の読み（語形）は原本のローマ字表記に従って決定する。ただしUniDicに登録されている発音形や短単位認定規程による語の分割を優先しているため、厳密にローマ字表記の表す発音を再現しようとするものではない。以下に発音形認定に関する留意点を挙げる。

6.12.2.1 開長音・合長音

õ, ôで示される開長音・合長音の区別はせず、いずれもオ段長音とする。

6.12.2.2 入声音

語中・語末に現れる t 入声音は、該当する箇所を「ッ」で表す。

【例】
末代（matdai）→マツダイ 昨日（facujit）→サクジッ

6.12.2.3 原語表記のポルトガル語

原語表記されているポルトガル語の普通名詞・固有名詞については、近藤政美・池村奈代美・浜千代いづみ編（1999）『天草版平家物語語彙用例総索引（1）』（勉誠出版）、江口正弘編（2011）『天草版伊曾保物語影印及び全注釈 言葉の和らげ影印及び翻刻翻訳』（新典社）などの先行研究での読みや、『日本国語大辞典第二版』を参考に個別に判断した。

【例】
Collegio→コレジョ COMPANHIA→コンパニヤ Greçia→グレシヤ
Feuereiro→へべレーロ Historia→イストリヤ Pastor→パストル

第2 意味の面から見た同語異語の判別

第1 「同語異語判別規程」では、主として語の形の面から同語とするか異なる語とするかを判別するための規程を示すとともに、「語形」「語彙素」の立て方について示した。意味の面からの同語異語の判定については、小椋ほか編（2011）「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』形態論情報規程集 第4版（下）」を参照のこと。

参考文献

小木曾智信・中村壮範（2011）『国立国語研究所内部報告書『現代日本語書き言葉均衡コーパス』形態論情報データベースの設計と実装 改訂版』（LR-CCG-10-06）。

小椋秀樹・小磯花絵・富士池優美・宮内佐夜香・小西光・原裕（2011）国立国語研究所内部報告書『『現代日本語書き言葉均衡コーパス』形態論情報規程集 第4版（上）（下）』（LR-CCG-10-05-01, 02）。

小椋秀樹・須永哲矢（2012）『中古和文UniDic短単位規程集 平成21（2009）-平成23（2011）年度科研費補助金 基盤研究（C）「和文系資料を対象とした形態素解析辞書の開発」研究成果報告書2』。

国立国語研究所コーパス開発センター（池上尚）編（2016）「『日本語歴史コーパス 平安時代編』形態論情報規程集」

国立国語研究所コーパス開発センター（近藤明日子）編（2016）「近代文語 UniDic 短単位規定集 Ver. 1.1」

渡辺由貴・市村太郎・鴻野知暁（2015）「『虎明本狂言集』のコーパスデータにおける短単位認定の諸問題」第7回コーパス日本語学ワークショップ予稿集 pp. 233-240

資料

要注意語

1 接頭的要素

番号	代表形 代表表記	品詞 注記	活用例・その他	接続	異形態
1.1	アイ相	接頭辞 「相」と1最小単位との結合体が名詞である場合は除く。(相=乗り, 相=討ち)			
	【例】 【あひ】かはらず、めでたい事で御ざる 誅罰せうと【相】巧まるる				
1.2	オ御	接頭辞 次に挙げるものは、後の部分と合わせて1最小単位とする。 [御出で(オイデ), 御御(オゴウ), 御事(オコト, 代名詞), 御屋(オヒル, 「お起きになること」の意), 御寝る(オヨル), 御寮(オリヨウ)] 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』で1最小単位とされるもの: [お足, おいた, お家(芸・流), お薄, おかか, お鏡, おかき, お陰, おかず, お河童, おかま, おかみ, おから, おかわ, お冠, 御形, おぐし, お好み(焼き), おこわ, お下げ(髪), お差し, おさつ, おざなり, おざぶ, おさん(どん), おしっこ, おしぼり, おしめ, おじや, おしゃぶり, お釈迦, お洒落, お節, お宅(代名詞), お多福, お陀仏, お玉, おつむ, お手(上げ・の物), おでき, おでまし, お転婆, お伽(話), お腹, お成り, お握り, お主, お寝しょ, お萩, おはこ(十八番の意), おはよう, お払い(箱), おひたし, お冷や, お袋, おふる, おまえ, おまけ, おませ, おまる, お巡り, お娘, おむすび, おむつ, お目見え, お漏らし, おやつ]			
	【例】 はりまの国の【お】百姓でござる 重衡助けて【御】見せ有れ 生きて【御】行方を見継ぎませい				
1.3	オン御	接頭辞 次に挙げるものは、後の部分と併せて1最小単位とする。 [御髪(オングシ), 御身(オンミ)]			
	【例】 さしもにたけき、【おん】ぼうたちも 【御】尺八のおもしろさに、 法皇も【御】涙を流させられ、				
1.4	コ故	接頭辞			
	【例】 【故】池の尼に甲斐無い命を助けられておぢゃれば				
1.5	ゴ御	接頭辞 次に挙げるものは、後の部分と併せて1最小単位とする。[御器, 御幸, 御座, 御所, 御前, 御殿, 御悩, 御辺, 御免, 御覧, 御寮]			
	【例】 【御】せいさつには、何にはよるまじひ 【御】不審尤にて候				
1.6	シヨ諸	接頭辞 漢語の1最小単位と結合したものは除く。(諸=国, 諸=所)			
	【例】 【しよ】まん人がどつとわらふたを、 【諸】大名に仰がれた。				
1.7	ホノ仄	接頭辞 「ほのか」「ほのめく」「ほのぼの」「ほのめかす」は除く。			
	【例】 緑の木の間から朱の玉垣が【仄】見えて、 火の【仄】暗い方へ向かうて、				

1.8

ミ
御

次に挙げるものは後の部分と併せて1最小単位とする。〔御酒、御髪、御子、御輿、御簾、御堂、御執らし、御息所、御幸、御代〕

【例】
天の【御】方を説かんとするには、
【御】年貢に上まらする

2 接尾的要素

番号	代表形 代表表記	品詞 注記	活用型・その他	接続	異形態
2.1	アソバス 遊ばす	動詞-非自立可能	五段-サ行（文語四段-サ行）	動詞連用形、体言	
	【例】 三十七生害に及びし跡にて、御尋ね【あそばし】、				
2.2	アテ 宛て	接尾辞-名詞的-一般			
	【例】 五十騎百騎【宛て】に差し向けられて御座る。				
2.3	アル 有る	動詞-非自立可能	五段-ラ行-一般（文語ラ行変格）	動詞連用形	
	【例】 先に雑餉を贈り【有っ】た犬から寵愛させられい少しの間ここに下り【有れ】				
2.4	イタス 致す	動詞-非自立可能	五段-サ行（文語四段-サ行）		
	【例】 此あたりに住居【いたす】者で御ざるあれが留守【いたせ】ば、いらぬじや				
2.5	イル 居る	動詞-非自立可能	上一段-ア行（文語上一段-ワ行）	動詞連用形	
	【例】 かの妻の籠もり【居】られた家の辺りへ行って、どこでがな返報をせうと思ひ【居る】時分で有ったに因って、				
2.6	ウエ 上	接尾辞-名詞的-一般			
	【例】 父【上】 母【上】				
2.7	エル 得る	動詞-非自立可能	下一段-ア行（文語下二段-ア行）	動詞連用形	文語：ウ
	【例】 当年ほどうりを作り【え】た事はおりなひ柄に手を掛くれども、動き【得】ず：				
2.8	オオセル 果せる	動詞-非自立可能	下一段-サ行-一般（文語下二段-サ行）	動詞連用形	文語：オオス
	【例】 「すっかり終える」の意。				

	【例】 この事し【果せ】て有るならば、				
2.9	オクレル 遅れる	動詞-非自立可能	下一段-ラ行一般 (文語下二段-ラ行)	動詞連用形	文語：オクル
	【例】 郎等に競と言う者が有ったが、馳せ【遅れ】て止まったと言う事を、				
2.10	オル 居る	動詞-非自立可能	五段-ラ行一般(文語四段-ラ行/文語ラ行変格)	動詞連用形	文語ラ変：オリ
	【例】 ようきき【おれ】 何もしり【おら】ひで、しつたつらをして どこへにげ【おる】				
2.11	オワル 終わる	動詞-非自立可能	五段-ラ行一般(文語四段-ラ行)	動詞連用形	
	【例】 と言ひ【終われ】ば、高い所から突き落といて殺いて退けた。 花さき【おはり】みのなるはいね				
2.12	ガタイ 難い	接尾辞-形容詞的	形容詞-タイ(文語形容詞-ク)	動詞連用形	文語：ガタン
	【例】 ざぜんとくほうなり【がたし】と云事が有、 川を隔てても、障え【難かつ】た。				
2.13	ガチ 勝ち	接尾辞-形状詞的		動詞型活用形には連用形	
	【例】 いとど御眠りも覚め【勝ち】に明かし兼ねさせられた：				
2.14	ガテラ がてら	接尾辞-名詞的-副詞可能		動詞型活用形には連用形	
	【例】 先なぐさみ【がてら】まいらふとぞんずる事じや 言葉を学び【がてら】に日域の往事を弔うべき書これ多しと言えども、				
2.15	カネル 兼ねる	接尾辞-動詞的	下一段-ナ行(文語下二段-ナ行)	動詞連用形	文語：カヌ
	【例】 いやかの人がまち【かね】られう、いそひでまいらふ 皆諸共に涙を押さえ【兼ね】させられた。				
2.16	ガル がる	接尾辞-動詞的	五段-ラ行一般(文語四段-ラ行)	形容詞型活用形には語幹	
	【例】 汝がはづかし【がる】はいな事じや 武辺者をきついと云うて嫌【がり】、 これは興【がっ】た者ぢや				
2.17	カワス 交わす	動詞-非自立可能	五段-サ行(文語四段-サ行)	動詞連用形	
	【例】 「互いに～する」の意。				

- 【例】
十五の鎧を射【交わせ】ば、
2. 18 **ギミ** 接尾辞-名詞的-一般
君 「養君」「我君」は除く。
- 【例】
姫【君】
若【君】
2. 19 **キル** 動詞-非自立可能 五段-ラ行-一般（文 動詞連用形
切る 語四段-ラ行）
「すっかり～し終える」「ひどく～する」の意。
- 【例】
ながの在京なれば、つかひ【きつ】て、あたいが御ざなひによつて、
長茂が頼み【切つ】た者共も皆そこで死んだに因つて、
2. 20 **クサイ** 接尾辞-形容詞的 形容詞-サイ 形容詞型活用語には 文語：クサン
臭い 語幹
「～めいた感じがする」の意。望ましくない意を強める用法。「かび臭い」「焦げ臭い」の「くさい」は除く。
- 【例】
言語道断ねだり【くさひ】事をおしやる
じゆくし【くさう】て、あたりへもよられぬよ
2. 21 **クダサレル** 動詞-非自立可能 下一段-ラ行-一般 文語：クダサル
下される （文語下二段-ラ行）
- 【例】
大殿時忠卿へ勅諭の趣を条々申し【下され】、
御馬を一匹預け【下され】うずるか
2. 22 **ゲ** 接尾辞-形状詞的 動詞型活用語には連
気 用形、形容詞型活用
語には語幹
- 【例】
気色真に由々し【気】で、
あほう【げ】にまふ
かみ【げ】でござる
2. 23 **ゴ** 接尾辞-名詞的-一般
御
- 【例】
さらばいそひで祖父【ご】へまいらふ
姫御前ばかり奈良の伯母【御】の下に御座る：
2. 24 **ゴト** 接尾辞-名詞的-一般
毎 そのもの一つ一つ、その時その時の意。
- 【例】
春【ごと】に君をいわひてわかなつむ
戦と申す物は、人【毎】に我一人が大事と思ひ切つてこそ良う御座れ。
2. 25 **サ** 接尾辞-名詞的-一般 形容詞型活用語語幹
さ 「そうだ」「過ぎる」が接続するときの「なさ」「良さ」の「さ」,
「憂さ」の「さ」は除く。
- 【例】
私もあいた【さ】に是までまいつたれ共、そのかひも御ざなひ
夏の暑【さ】を慰めまらする所に、
2. 26 **サス** 動詞-非自立可能 五段-サ行（文語四段 動詞連用形
止す -サ行）

【例】
ぼうずきやうをよむうちよろこび、よみ【さし】、わきへのいて

2.27 サマ 接尾辞-名詞的-一般
様

2.28 ザマ 接尾辞-名詞的-副詞
様 可能
「縦様（タタザマ）」の「様」は除く。

【例】
おとこにおはれていり【さま】に
とをり【さま】にしつくりとつめつたれば

2.29 ジュウ 接尾辞-名詞的-副詞
中 可能
その範囲すべてに渡っている意。

【例】
島【中】の悪人共僉議して言うは：
御所【中】の女房達呆れ騒がれた。

2.30 スギル 動詞-非自立可能 上-一段-ガ行（文語上 動詞型活用語には連 文語：スグ
過ぎる 二段-ガ行） 用形，形容詞型活用 語には語幹
「適当な度合いを超える」の意。

【例】
是はやき【すぎ】た
わごりよは、はやり【すぎ】た人じや

2.31 ズク 接尾辞-名詞的-一般
づく

【例】
面白【づく】にカみ出す。

2.32 スル 動詞-非自立可能 サ行変格-為ル（文語 文語：ス
為る サ行変格-ス）
漢語の1最小単位と結合したものは除く（対=する，信=ずる）。「～んずる」という形式は除く（甘ん=ずる，重ん=ずる）。

【例】
都にすまゐ【する】はちたたきにて候、
むさと【し】た事仰せらるる

2.33 ソウ 形状詞-助動詞語幹 動詞型活用語には連 用形，形容詞型活用 語には語幹
そう
様態の助動詞「そうだ」の語幹に当たるもの。

【例】
後に難の起こり【さう】な事をばするな：
余り寂し【さう】に見ゆる：

2.34 ソウ 名詞-助動詞語幹 終止形
そう
伝聞の助動詞「そうだ」の語幹に当たるもの。

【例】
コーラゲンの量やキメの細かさまで分かる【そう】
「マジシャン」というニックネームで呼ばれている【そう】だが、
四十四年もかかる【そう】です。

2.35 ソコナウ 動詞-非自立可能 五段-ワア行-ナウ 動詞連用形
損なう （文語四段-ハ行-ナウ）

【例】
大海の潮を一口に飲み【尽くさ】るる道が有らうか
羊をも悉く食い【尽くし】、

2. 45 ツケル 動詞-非自立可能 下一段-カ行（文語下 動詞連用形 文語：ツク
付ける 二段-カ行）
「～し慣れている」の意。

【例】
かやうの所へ出【つけ】ぬに依て、

2. 46 ツヅク 動詞-非自立可能 五段-カ行-一般（文 動詞連用形
続く 語四段-カ行）
「引き続く」「打ち続く」等、動作継続の動詞に接続しないものは除く。

【例】
夜が明けるまで降り【続き】そうな勢いだ。

2. 47 ツヅケル 動詞-非自立可能 下一段-カ行（文語下 動詞連用形 文語：ツヅク
続ける 二段-カ行）
「打ち続ける」「打（ぶ）っ続ける」等、動作継続の動詞に接続しないものは除く。

【例】
じゆずだまをとりあつめ、つなぎ【つづけ】て、
疎ましかった昔を思い【続け】て

2. 48 トウ 接尾辞-名詞的-一般
等

【例】
野の花、野菜、果物【等】を描きます。
スギ【等】国産針葉樹資源の合板分野への利用

2. 49 トオス 接尾辞-動詞的 五段-サ行（文語四段 動詞連用形
通す -サ行）
「～し続ける」「終わりまで～する」の意。

【例】
大方聞き【通い】たかと存ずる。

2. 50 ドノ 接尾辞-名詞的-一般
殿

【例】
多びす三郎【殿】へ祈誓をして、
清盛入道【殿】の御許し無くは、

2. 51 トモ 接尾辞-名詞的-副詞
共 可能
全部の意。

【例】
ふたり【とも】、わたればしづむうきはしを
二人【共】三人【共】出ればわきのごとく向ひあふ

2. 52 トモ 接尾辞-名詞的-副詞
共 可能
それを含めての意。

【例】
送料【とも】
住所・氏名【とも】

2. 53 ドモ 接尾辞-名詞的-一般
共

【例】
孫【ども】にねぶらせひ
鳩【共】が群がり居る所に鶯が来て

2.54	ナガラ 乍ら	接尾辞-名詞的-一般		動詞型活用語には連用形	
			「～のまま」「～すべて」の意。		
	【例】 ふたり【ながら】見しられた程に、 三人【乍ら】島を出でたなどと聞こえば、				
2.55	ナシ 無し	名詞-普通名詞-一般			
			「有り無し」「心無し」「事無し」「因無し」「人で無し」「頼り無し」「名無し」「由無し」「よしなし」の「無し」は除く。		
	【例】 そなたはのふ【なし】じやに依て、 あひしらひうたせても、つづみ【なし】にもする				
2.56	ナミ 並み	接尾辞-名詞的-一般			
			その類と同じ、又は同じ程度であることを表す。		
	【例】 人【並み】に何ぞ持ちませいで 汝等は一旦従い付く渡り【並み】の人々では無い。				
2.57	ナレル 慣れる	動詞-非自立可能	下一段-ラ行-一般 (文語下二段-ラ行)	動詞連用形	文語：ナル
	【例】 住【なれ】し、ちごくの里を立出て、 年頃見【慣れ】奉った雑色、				
2.58	ニクイ 難い	接尾辞-形容詞的	形容詞-クイ(文語形容詞-ク-一般)	動詞連用形	文語：ニクシ
			醜悪の意の「醜い」は除く。		
	【例】 いや此分ではありき【にくひ】程に、 古い癖は改め【難い】事ぢゃ。				
2.59	ハジメル 始める	動詞-非自立可能	下一段-マ行(文語下二段-マ行)	動詞連用形	文語：ハジム
	【例】 度々の合戦に打ち勝って運を開き【始むる】に、				
2.60	ハタス 果たす	動詞-非自立可能	五段-サ行(文語四段-サ行)	動詞連用形	
			「すっかり～し終える」の意。		
	【例】 いままでの女めが、みなし【はたい】てござる、 平家断絶の所をも語り【果たし】ませうず。				
2.61	ハテル 果てる	動詞-非自立可能	下一段-タ行(文語下二段-タ行)	動詞連用形	文語：ハツ
			「すっかり～する」「～し終わる」の意。		
	【例】 たんざくのはかへにやり【はて】て、此ていになつた程に、 別して身も疲れ【果て】て後は、夢も現も思い分かず：				
2.62	ハベリ 侍り	動詞-非自立可能	文語ラ変変格	連用形	
	【例】 朝な朝なは頭の痛みて晏くも強て起き【はべり】ぬ。				
2.63	バム ばむ	接尾辞-動詞的	五段-マ行-一般(文語四段-マ行)		

- 【例】
梅の花のわづかに気色【ばみ】はじめてをかしきを、
2. 64 **ブリ** 接尾辞-名詞的-一般 動詞型活用語には連 ップリ
 振り 様子・状態の意。 用形
- 【例】
さても見事や、おとこ【ぶり】にかはつて、見事やと仰られ
2. 65 **ブル** 接尾辞-動詞的 五段-ラ行-一般（文 形容詞型活用語には
 振る 語四段-ラ行） 語幹
 「～のように振る舞う」の意。
- 【例】
あの高【振ら】ぬ處が何うも豪い。
ハイカラ【振つ】た清國留學生が
2. 66 **ブン** 名詞-普通名詞-副詞 可能
 分 分量の意。
- 【例】
その分け【分】をば与ようず
2. 67 **マイラセル** 動詞-非自立可能 下一段-サ行-一般 連用形 文語：マイラス
 参らせる （文語下二段-サ行）
- 【例】
ゆづりはをみ年貢に上げ【まらする】
この御有り様とはゆめゆめ知り【参らせ】られなんだ
2. 68 **マエ** 名詞-普通名詞-副詞 可能
 前
- 【例】
夜中【前】から起こいて、仕事を言い付けらるるに
2. 69 **マクル** 動詞-非自立可能 五段-ラ行-一般（文 動詞連用形
 捲る 語四段-ラ行）
- 【例】
おんぼうたちも、つき【まくら】れてぞにげたりける
2. 70 **マス** 動詞-非自立可能 文語-四段サ行 動詞連用形
 坐す 「あられます」「います」「おわします」「まします」は除く。
- 【例】
住みなれし、宿こそなけれ、めで【まし】し、母こそまさね、
むまのはなむけしに出で【ませ】り
2. 71 **マワリ** 接尾辞-名詞的-一般
 周り
- 【例】
「おなか【まわり】がスッキリした」
門【まわり】に1本、ポーチわきに1本、
2. 72 **ミ** 接尾辞-名詞的-一般
 み ミ語法
- 【例】
毗沙門天は、みちもくらまの山ふか【み】、
枕より跡より恋のせめくればせんかたな【み】ぞとこ中における

2.73	ミ み	接尾辞-名詞的-副詞 可能 並列		動詞連用形	
	【例】	泣き【み】笑ひ【み】語らひ明かす。			
2.74	メ 奴	接尾辞-名詞的-一般 ののしる語。			
	【例】	今のやっ【め】はたらし【め】にて有りけるぞや 蠅【奴】はどこに居るぞ			
2.75	メ 目	接尾辞-名詞的-一般 順序を表す。			
	【例】	すはぶきを三つして、三つ【め】にかけいだす 二番【目】の陣は家長と言う人で有ったが、			
2.76	メカス めかす	接尾辞-動詞的 擬態語的なものの「めかす」は除く。（ざわ=めかす，ゆら=めかす）	五段-サ行-一般（文 語四段-サ行）		
	【例】	思ほし人【めかさ】むにつけても、			
2.77	メク めく	接尾辞-動詞的 擬態語的なものの「めく」は除く。（きら=めく，ざわ=めく，（胸が）とき=めく）	五段-カ行-一般（文 語四段-カ行）		
	【例】	秋の野のいとなま【めき】たるなど見たまひて、			
2.78	モウス 申す	動詞-非自立可能	五段-サ行（文語四段 -サ行）	動詞型活用語には連 用形	
	【例】	代物はどこで渡し【申さ】う えこそ出で【申す】まじけれ			
2.79	ヤスイ 易い	接尾辞-形容詞的	形容詞-スイ（文語形 容詞-ク）	動詞連用形	文語：ヤスシ
	【例】	かみのふすままふけ【やすふ】して、道心の望すくなし 弓手へも馬手へも回し【易い】物で御座るが、			
2.80	ヨイ 良い	形容詞-非自立可能	形容詞-オ段-良イ （形容詞-イ段-良 イ，文語形容詞-ク）	動詞連用形	イイ 文語：ヨ シ
	【例】	「心地良い」「程良い」は除く。			
	【例】	わごりよ達は、てちだいが有てもち【よかつ】たが、身共一人ではもたれまひ 世の憂きよりは住み【良から】うずる物を			
2.81	ヨウ 様	形状詞-助動詞語幹 助動詞「ようだ」の語幹に当たるもの。		活用語には連体形	
	【例】	某がいふ【やう】にめされたらばやらふ たのふだ人の【やう】に、なん時物を仰付らるれども、 臆て同じ【様】に打ち入れた。			
2.82	ヨウ 様	接尾辞-名詞的-一般 方法の意。		動詞連用形	

【例】
 汝がしつたもの【か】
 してそなたは是からすぐにゆく【か】
 藤六ある【か】やい

3.5 **カ** 助詞 係助詞 活用語には連体形
か

【例】
 人形もそのままある【か】しらぬよ
 何【か】はこれに勝らうぞ

3.6 **ガ** 助詞 格助詞 活用語には連体形
が

【例】
 いのち【が】おしくば、おのれ【が】つらをすうて、みめわるふしてくれう
 とるべき物はとつた【が】よひ

3.7 **ガ** 助詞 接続助詞 連体形
が

【例】
 いやさうでは御ざらぬ【が】、おいきづかひがあらふござる

3.8 **カシ** 助詞 終助詞 活用語には終止形、
かし 命令形

【例】
 よひつれも御ざれ【かし】
 此時よりのことばぞ【かし】

3.9 **カナ** 助詞 終助詞 活用語には連体形
哉

【例】
 扱もおびただし事【かな】
 何とぞ鼻をとられぬ調儀はなるまひ【かな】

3.10 **ガナ** 助詞 終助詞 活用語には連体形、
がな 命令形

【例】
 両人の者をただはおきやるまひ【がな】

3.11 **ガナ** 助詞 副助詞
がな 何がな、どうがな等

【例】
 誰【がな】やらふ
 何【がな】このへんたうしたひが、おもひいだひた事が有

3.12 **カラ** 助詞 格助詞 活用語には連体形
から

【例】
 そなたは此牛はどち【から】もとめたぞ
 かたきの国ときく【から】に、身のけよだちておそろしや

3.13 **クライ** 助詞 副助詞 活用語には連体形 **グライ**
くらい

【例】
 かしらをゆへば、十位も、廿【くらひ】も、うつくしうみゆると申が、

3.14 **ケレド** 助詞 接続助詞 終止形 **ケド**
けれど

3.24	ゾ ぞ	助詞	終助詞	活用語には終止形	
	【例】 さてたけはなん尺にいたさうずる【ぞ】 此川は何と申川にて御ざる【ぞ】				
3.25	ツ つ	助詞	副助詞	連用形	ズ
	【例】 さかづきをいだし、さい【つ】 さされ【つ】 のむ				
3.26	ツ つ	助詞	格助詞		
	【例】 秋の末【つ】方、いともの心細くて嘆きたまふ。				
3.27	ツツ つつ	助詞	接続助詞	連用形	
	【例】 坊主はかしらを、かかへ【つつ】、めんざうしてぞいりにける				
3.28	テ て	助詞	接続助詞	連用形	デ
	【例】 いそひ【で】たのしうなひ【て】下されい 我も我もと力を尽くい【て】折つ【て】見れども				
3.29	デ で	助詞	格助詞		
	【例】 さいぜん路次【で】で云てきかせたに、今のやうな事をいふものか 鼠もそこ【で】大きに肝を消し、慎んで申したは：				
3.30	デ で	助詞	接続助詞	未然形	
	【例】 さりながら、まいら【で】はかなはぬ事じや程に、参ふまでよ 何故にその御所なら【で】は、いつくに御座らうぞ？				
3.31	ト と	助詞	格助詞		
	【例】 身共が互に手【と】て【と】取やうて引合せう程に、 酒をのふでゆるり【と】ねふが、身共はねられぬ 佐々木殿の御馬で御座る【と】申す。				
3.32	ト と	助詞	接続助詞	終止形	
	【例】 何とよるこぶ【と】かへすまひぞ 太刀はとられう【と】ままよ				
3.33	ド ど	助詞	接続助詞	已然形	
	【例】 是ほどみ事な花なれ【ど】、うたにはよまぬ たらされたはにくけれ【ど】、はやし物がおもしろひ				
3.34	トテ とて	助詞	格助詞		

3.44	ニ に	助詞	格助詞	活用語は連体形、連用形
	【例】 只今馬をかり【に】おじやつた程【に】、 極楽へぞろり／＼と、案内なし【に】とをる【に】よつて、 吾殿は生きて証人【に】立て			
3.45	ニ に	助詞	接続助詞	連体形
	【例】 私が渡る分さへあぶなう御ざる【に】、何としてあなたをおふてわたられませう 国々宿々を過ぎ行く【に】、ここにもここにもやと思われたれども、尾張の国野間と言う所に着かせられた。			
3.46	ニテ にて	助詞	格助詞	活用語には連体形
	【例】 だうのやうすを見おひて、国本【にて】の物がたりにせう 汝一人【にて】はわれもめいわくにあらふず			
3.47	ノ の	助詞	格助詞	活用語には連用形、 終止形、（体言に準ずる）連体形
	【例】 かの人【の】むこになさう なふいとし【の】人や われらごとき【の】いたづらもの			
3.48	ノ の	助詞	準体助詞	活用語には連体形
	【例】 今【の】をきひたか せんどそちへわたひた【の】をかくいてむこにやる			
3.49	ノ の	助詞	終助詞	活用語には連体形
	【例】 ちとそのはなしがききたひ【の】 さてさて長々しい事を退屈も無う御語り有った【の】			ン
3.50	ノウ のう	助詞	終助詞	終止形・命令形・助詞
	【例】 げにもさあり、やようがりもさうよ【なふ】 夫はめづらしひ物をとる【のふ】			
3.51	ノミ のみ	助詞	副助詞	活用語には連体形
	【例】 知恵は学者【のみ】に有る。 このとのはひきかへて、手形をたもる【のみ】ならず、酒までのませ給ひけり			
3.52	ハ は	助詞	係助詞	活用語には連体形 （ただし形容詞型活用語には連用形）
	【例】 又それに見えさせ給ふ【は】、いかやうなる御かたにて候ぞ 山の手【は】既に大事ぢや			

- 3.53 **バ** 助詞 接続助詞 未然形, 已然形
ば
【例】
さやうの物もあら【ば】、今のおりからあげたら【ば】よからふ
平家は西国に居られ、頼朝は関東に有れ【ば】、木曾は京に居て色々の事をする：
- 3.54 **バカリ** 助詞 副助詞 活用語には連体形
ばかり
【例】
こしのいたみ【計】でなふて、中風気に御ざる
下臈は御使い仕る【ばかり】でこそ有れ、何事とは知りませぬ
- 3.55 **バシ** 助詞 副助詞 活用語には連用形,
ばし 活用語の連用形に接
続助詞「て」の付い
たもの
【例】
|屋島への案内者に連れて行け; 目【ばし】放すな:
何とした子細で【ばし】御座るぞ
- 3.56 **バヤ** 助詞 終助詞 未然形
ばや
【例】
かの狼この羊を食らわ【ばや】と思ひ、
- 3.57 **へ** 助詞 格助詞
へ
【例】
俊寛僧都と、康頼と、この少将相具して三人薩摩の鬼界が島【へ】流されて御座った。
- 3.58 **ホド** 助詞 副助詞 活用語には連体形
ほど
【例】
是【ほど】うまさうな物はなひ
山も、川も唯一度に崩るるかと覚ゆる【ほど】に御座った。
- 3.59 **マデ** 助詞 副助詞 活用語には連体形
まで
【例】
人間は申におよばず、畜生鳥類【まで】も、その石のいきほひにあたつてしする
然は御座りとも御命を失い奉る【まで】はよも御座あるまじい：
- 3.60 **モ** 助詞 係助詞 活用語には連体形、
も 連用形
【例】
旅寝の床の草の枕に涙【も】、露【も】争うて、
是へ参る【も】別の事でも御ざなひ
- 3.61 **モ** 助詞 接続助詞 連体形
も
【例】
内裏へ参らんと申しつる【も】出で立たれず。
- 3.62 **モノ** 助詞 終助詞 活用語には連体形
もの
【例】
「いやまいらふ」「おりやるまひ【もの】」

3.63	ヤ や	助詞	副助詞	
	【例】 ここもとに雁【や】，鴨は無いか？			
3.64	ヤ や	助詞	終助詞	活用語には終止形、 形容詞の語幹
	【例】 なふ / \ あぶなひ事にあふた【や】 あらいとをし【や】			
3.65	ヤ や	助詞	係助詞	
	【例】 今宵ばかり【や】限りなるらん。 お僧も尺八をあそばす【や】らん			
3.66	ヤラ やら	助詞	副助詞	活用語には連体形
	【例】 木曾と【やら】言う者に都を攻め落とされ、 隠蓑かくれ笠はどちへどうなつた【やら】しらず、			
3.67	ヤレ やれ	助詞	終助詞	
	【例】 どじやうのすしをほう、ばつて、もろはくをのめ【やれ】 何とがなせう【やれ】			
3.68	ヨ よ	助詞	終助詞	活用語には連体形、 命令形
	【例】 いやきたいな事を云人じやと云事【よ】 福をあたようと思ふて是まで出てある【よ】			
3.69	ヨリ より	助詞	格助詞	活用語には連体形
	【例】 是はいつかた【より】御参詣にて候ぞ 男女の公達差し集まって、泣く【より】他の事は無かった。			
3.70	ワ わ	助詞	終助詞	活用語には終止形
	【例】 あわや！事が出来た【わ】 ただならばいかほどなり共酒をのませう物を、何共せうようがなひ【は】			
3.71	ヲ を	助詞	格助詞	活用語には連体形
	【例】 やらきこへぬ事【を】いふ人じや 人の聞く【を】も憚らず、声も惜しまず、喚き叫ばれた。			
3.72	ヲ を	助詞	接続助詞	連体形
	【例】 弓取りは日頃高名を仕れども、最後に不覚を仕れば、長い傷で御座る物【を】：			

3.73	ヲ を	助詞	終助詞
	【例】 ただ、「心やすく【を】思ひなしたまへ」とのみ聞こえたまふ。		

4 助動詞

番号	代表形 代表表記	品詞 注記	活用型・その他	接続	異形態
4.1	イ い	助動詞 軽い敬意を持った命令	無変化型	四段動詞の未然形	
	【例】 おうちがこしはなをるまひといは【ひ】 ちがいだなにあめがあらふほどにねぶら【い】				
4.2	ウ う	助動詞 意志・推量	無変化型	未然形	
	【例】 いねといはばもどりませ【う】が、 平家の子孫尋ね出さ【う】人は何事も望みの俣に有らうずる おにがこはふなふて何がこはから【ふ】ぞ				
4.3	キ き	助動詞 過去・完了	文語助動詞-キ	連用形（カ変・サ変 には未然形・連用 形）	
	【例】 是はいにしへ尺八をふきじにせ【し】、らくあつといへるものなるが、 抑一の谷の合戦やぶれ【しか】ば、源平互に入みだれ、				
4.4	ゲナ げな	助動詞 推測・伝聞	助動詞-ゲナ	終止形、連体形	
	【例】 又あの年になれども、女ぼうもなひ【げな】 きけば夏かやもつらせひでねさする【げな】が、				
4.5	ケム けむ	助動詞 過去推量	文語助動詞-ケム	連用形	
	【例】 さつまの守、今はかうとやおもわれ【けん】、				
4.6	ケラシ けらし	助動詞	文語助動詞-ラシ	連用形	
	【例】 しやくもつあまたをいにけり、おいに【けらし】なそのかたに、				
4.7	ケリ けり	助動詞 過去・完了	文語助動詞-ケリ	連用形	
	【例】 いくひさしさもかぎらじと、申納てかへり【けり】				
4.8	ゴトシ ごとし	助動詞 比況	文語助動詞-ゴトシ	活用語には連体形	
	【例】 又まへの者出て、やくそくの【ごとく】、いなば堂へゆく 今宵鶏の鳴く時分から、今まで汗の出る事は車軸を流す【ごとく】ちゃ				

4.9	サシモ さしも	助動詞 尊敬	文語助動詞-シモ	上一段・上二段・下一段・下二段活用の未然形	
	【例】 あつちまでおぬしもつてくれ【さしめ】 さらばおぬしい【さしめ】				
4.10	サセマス させます	助動詞 尊敬	文語四段-サ行	上一段・上二段・下一段・下二段・カ変の未然形	さします
	【例】 やるほどに、うけ【さしませ】 其元にみてすねをながれてくれ【さします】な				
4.11	サセル させる	助動詞 使役・尊敬	文語下二段-サ行	四段・ナ変・ラ変以外の未然形	
	【例】 ていしゆ大名にいだきつき、まづこらへ【させ】られいといふ 然しも不憫に思い有った菊王を射【させ】、その後は戦もせられず、船を沖へ押し出さるる。				
4.12	サル さる	助動詞 尊敬	文語四段-ラ行	サ変・ナ変・ラ変以外の未然形、カ変には連用形	
	【例】 おうちごの / \ ちごになつた見【さひ】な / \				
4.13	ジ じ	助動詞 打ち消し推量	無変化型	未然形	
	【例】 都にありとも心はかはら【じ】 定めてその恩をばよも思い忘れられ【じ】				
4.14	シマス します	助動詞 尊敬	文語四段-サ行	四段活用の未然形	
	【例】 けふは天気がようてうれしうおりやら【します】				
4.15	シメル しめる	助動詞 使役	文語下二段-マ行	未然形	
	【例】 耳に触るる事の一つとして哀れを催し、心を痛ま【しめ】ぬと言う事は御座無かった。				
4.16	シモ しも	助動詞 尊敬	文語助動詞-シモ	四段・ナ変の未然形	
	【例】 さらばまづわごりよからいは【しめ】 あつちへとう / \ いな【しめ】				
4.17	ジャ じゃ	助動詞 断定	助動詞-ジャ	体言、副詞、活用語の連体形、助動詞「ごとし」の連用形	
	【例】 爰はとりべのちかく【じゃ】ほどに、ゆうれい【じゃ】といはふ程に、 汝がいふごとく【じゃ】				

4. 18	ス 候	助動詞 丁寧	無変化型	連用形、接続助詞 「て」など	スル
	【例】 なふひさしうみぬまに、おとなしうなつて【す】は、 身共は花をかがふと思ひ【する】よ				
4. 19	ズ ず	助動詞 打ち消し	文語助動詞-ズ	未然形	
	【例】 何事をも存ぜ【ぬ】 某いまだ都を一見仕ら【ず】				
4. 20	セル せる	助動詞 使役・尊敬	文語下二段-サ行	四段・ナ変・ラ変の 未然形	
	【例】 身共にまかさ【せ】られひ 只今さん用をすまさねばいな【せ】ぬぞ				
4. 21	タ た	助動詞 過去・完了	助動詞-タ	連用形	
	【例】 やどへ帰りつゐ【た】と云て、くわんじやうする 叔遂には兄弟の御仲何と成つ【た】ぞ？				
4. 22	タイ たい	助動詞 希望	助動詞-タイ（文語形 容詞-ク）	連用形	文語：タシ
	【例】 ゑんまわうへ申【たひ】事がござる 相撲は見【たし】、あひてはなし				
4. 23	タリ たり	助動詞 断定	文語助動詞-タリ-断 定	体言	
	【例】 君君【たら】ずと言うとも、臣持って臣【たら】ずんば、有るべからず： 花ゆへ心をそらにして、峨々【たる】、谷に落てむなしくなる				
4. 24	タリ たり	助動詞 完了	文語助動詞-タリ-完 了	連用形	
	【例】 雪の内のたかんなを尋て親にあたへ【たり】 熊谷は先に寄せ【たれ】ども、木戸を開かねば、駆け入らず。				
4. 25	ツ つ	助動詞 過去・完了	文語助動詞-ツ	連用形	
	【例】 伝えても聞い【つ】らう、武蔵の国の住人熊谷、その子小次郎一の谷の先陣ぞ 未夜半なれども、せきもり戸を開【てん】げる				
4. 26	ナリ なり	助動詞 断定	文語助動詞-ナリ-断 定	活用語には連体形	
	【例】 いやそうしては、見事【な】栗のゑきがなひ くだりたうござれども、ながの在京【なれ】ば、つかひきつて、あたいが御ざなひ 山里は物の寂しき事こそ有る【なれ】ども、世の憂きよりは住み良からうずる物を				

4.27	ナリ なり	助動詞 伝聞	文語助動詞-ナリ-伝聞	終止形, ラ変・形容詞・ラ変型活用の助動詞には連体形	
		【例】 笠をさす【なる】春日山、是も神のちかひとて、人が笠をさすならば我もかささそふよ			
4.28	ナンダ なんだ	助動詞 過去における否定的状態	助動詞-ナンダ	未然形	
		【例】 誠に此ほどは久しうあは【なんだ】 落つる涙も争うて、袂も更に干し敢えられ【なんだ】			
4.29	ヌ ぬ	助動詞 過去・完了	文語助動詞-ヌ	連用形	
		【例】 身のはて何と成【ぬ】らん 神がくれしてうせ【に】けり			
4.30	ベイ べい	助動詞 意志・推量	無変化型 東国（関東）方言	終止形	ベエ
		【例】 「うる【べひ】か「あげませうず			
4.31	ベシ べし	助動詞 推量	文語助動詞-ベシ	終止形, ラ変には連体形	
		【例】 口にくわへてぬく【べき】を、わかげのいたる所にや、 又世に有る【べう】も覚えぬ			
4.32	マイ まい	助動詞 打ち消し意志・打ち消し推量	無変化型	四段には終止形, ラ変には連体形, その他には未然形	
		【例】 汝がゆく【まひ】ならば、身共にもつてゆけといふ事か この人々も遅れ【まい】と言うて、面々に出立たるれば			
4.33	マシ まし	助動詞 反実仮想	文語助動詞-マシ	未然形	
		【例】 行暮て、木の下陰を宿とせば、花や今宵のあるじなら【まし】			
4.34	マジ まじ	助動詞 打ち消し推量	文語助動詞-マジ	終止形, ラ変・形容詞・ラ変型活用の助動詞には連体形	
		【例】 かやうにありがたき事はある【まじく】候 つうゑんものみつくされ【まじひ】とて			
4.35	マス ます	助動詞 丁寧	助動詞-マス	連用形	
		【例】 あれがかしこまつて御ざらば、某は心得【まし】た 今度はかつこ打【ませ】う			

4.36	マホシ まほし	助動詞 希望	文語形容詞-シク	未然形	
	【例】 世を逃れうぞならば、かうこそ有ら【まほしゅう】思われ：				
4.37	ム む	助動詞 意志・推量	文語助動詞-ム	未然形	
	【例】 いで / \ 奇特を見せ【ん】とて れんがに返哥と云は、古来ありこそせ【め】				
4.38	ムズ むず	助動詞 推量・意志	文語助動詞-ムズ	未然形	ンズ
	【例】 心やすくしんがうせよ、たのしうなさ【うずる】 扇のほねを七つひろげてみせませ【ふず】				
4.39	メリ めり	助動詞 推量	文語助動詞-メリ	終止形	
	【例】 御前の池なる亀岡に鶴こそ群れ居て遊ぶ【めれ】				
4.41	ヤル やる	助動詞 尊敬、丁寧	文語四段-ラ行	連用形	
	【例】 かまひておそうもどり【やつ】たらば、くせ事でおりやらふぞ 何故に山はこの様な赦免をば御遣り【やつ】たぞ？				
4.40	ヨウ よう	助動詞 意志・推量	無変化型	一・二段活用の未然形	
	【例】 都に上って、恋しい者共を見もし、見【よう】とは思えども、 汝をつかふそれがしが、声をききちが【よう】か、				
4.42	ラム らむ	助動詞 現在推量	文語助動詞-ラム	終止形、ラ変・形容詞・ラ変型活用の助動詞には連体形	
	【例】 ぬす人においといふ事は、かかることをや、申【らん】 会う事も露の命も諸共に、今宵ばかりや限りなる【らん】				
4.43	ラレル られる	助動詞 受身・可能・自発・尊敬	文語下二段-ラ行	四段・ナ変・ラ変以外の未然形	
	【例】 一たび下されてから、取かへさせ【らるる】といふ事はあるまひほどに、下されい 唯疾う出ださせ【られい】				
4.44	リ り	助動詞 完了・存続	文語助動詞-リ	サ変の未然形、四段の命令形	
	【例】 惣じて鷹と申ものは、国々によつて名もかはれ【り】 富貴の家には禄位重畳せ【り】				
4.45	レル れる	助動詞 受身・可能・自発・尊敬	文語下二段-ラ行	四段・ナ変・ラ変の未然形	

【例】
能登殿は矢種射尽くいて、今は最後と思わ【れ】たれば
牛の子に、ふま【る】な庭のかたつぶり

4.46 **ロウ** 助動詞 無変化型 終止形（ラ変には連
 ろう 推量の助動詞「らむ」の変化したもの 体形)

【例】
そなたと我は縁こそ尽きつ【らう】
郎くわじやがまちかねてこそある【らふ】

5 「一の～」

番号	代表形 代表表記	品詞 注記	活用型・その他	接続	異形態
5.1	アマノガワ 天の川	名詞-普通名詞-一般			
	【例】 これをば【天の川】となむ思ひぬる				
5.3	アマノハシダテ 天の橋立	名詞-固有名詞-地名 -一般			
	【例】 【天の橋立】の丹後和布、出雲の浦の甘海苔、				
5.4	アリノママ 有りの儘	名詞-普通名詞-副詞 可能			
	【例】 【有りの儘】にその容態を申せ				
5.5	アリノミ 有の実	名詞-普通名詞-一般			
	【例】 其まま夢がさめて、則【ありのみ】は是にあつた				
5.6	イチノカミ 一上	名詞-普通名詞-一般			
	【例】 めづらしげなし。【一上】にてやみなん				
5.7	イチノミヤ 一宮	名詞-普通名詞-一般			
	【例】 女【一の宮】も、かくぞおはしますべかめる、				
5.8	イツキノミヤ 齋宮	名詞-普通名詞-一般			
	【例】 【齋の宮】のわらはべにいひかけける。				
5.9	イノコ 亥子	名詞-普通名詞-一般			
	【例】 その夜さり、【亥の子】餅参らせたり。				
5.10	イノシシ 猪	名詞-普通名詞-一般			

【例】
そのとき、大きな【猪】が、にはかに、草の中から、あれて出ましたから、

5. 11 **ウエノハカマ** 名詞-普通名詞-一般
表袴

【例】
浮紋の【表袴】にかかれるほどげざやかに見ゆ。

5. 12 **ウジノカミ** 名詞-普通名詞-一般
氏上

【例】
また六百六十四年には【氏上】を定め、豪族領有民を確認するなど豪族層の編成が進められた。

5. 13 **ウノハナ** 名詞-普通名詞-一般
卯の花

【例】
さて又夏は【卯の花】の、かきねの水にあらひがは

5. 14 **ウワノソラ** 名詞-普通名詞-形状
上の空 詞可能

【例】
そのほか雲井のかり、【うはの空】のかりがねとこそあれ

5. 15 **エノキ** 名詞-普通名詞-一般
榎 動植物

【例】
肥後五日町の古い【榎】の空洞に、|長三尺餘周り二三尺の白蛇住む。

5. 16 **オクノイン** 名詞-普通名詞-一般
奥の院

【例】
廳で滝口先達をして堂塔を巡礼して、【奥の院】へ参った。

5. 17 **オクノテ** 名詞-普通名詞-一般
奥の手

【例】
実は【奥の手】がある。

5. 18 **オニノマ** 名詞-普通名詞-一般
鬼の間

【例】
上、【鬼の間】におはしますほどなりけり。

5. 19 **オノエ** 名詞-普通名詞-一般
尾の上

【例】
花の色は林霧の底に綻び、鐘の声は【尾の上】の雲に響き、

5. 20 **オモイノホカ** 副詞
思いの外

連用修飾しているものは副詞とする。ただし、「思ひの外な事」などのように連体修飾となるものは|思ひ|の|外|と分割する。

【例】
【思ひのほか】なんのござさもなふ、一刀にてしとめて御ざる

5. 21 **カクノミ** 名詞-普通名詞-一般
香菓

【例】
九種の【香菓】以下のものを、

5.22 カノコ 名詞-普通名詞-一般
鹿の子

【例】
【かのこ】まだらにたつはしらなみ

5.23 カルノイチ 名詞-普通名詞-一般
軽市

【例】
飛鳥時代の市である海石榴市や【軽市】、

5.24 カンノキ 名詞-普通名詞-一般
貫の木

【例】
錠前を打ちこわして【貫の木】を抜いた。

5.25 キサイノミヤ 名詞-普通名詞-一般
后宮

【例】
朱雀院の【後の宮】の御方などめぐりけるほどに

5.26 キタノカタ 名詞-普通名詞-一般
北の方

【例】
成親卿の【北の方】は都の北山辺に忍うでおちゃった：

5.27 キノコ 名詞-普通名詞-一般
茸 動植物

【例】
「ウミクサ」、「【キノコ】」、「コケ」、「シダ」等、肉眼を以て見得べきもの、これに屬す、

5.28 キノドク 形状詞-一般
氣の毒

【例】
他の人たちは、【氣の毒】だが

5.29 キノミ 名詞-普通名詞-一般
木の実

【例】
十月の草原で、【木の实】のかおりをかぎながら

5.30 キノミヤツコ 名詞-普通名詞-一般
柵造

5.31 キノメ 名詞-普通名詞-一般
木の芽 サンショウの芽の意。

【例】
だいごのうどめ、鞍馬の【きのめ】づけ、牛房はべん、

5.32 クスノキ 名詞-普通名詞-一般
樟

【例】
【楠の木】は、木立おほかる所にも、ことにまじらひ立てらず。

5.33 クニノカミ 名詞-普通名詞-一般
国守

【例】
この【国守】の北の方も詣でたりけり。

5.34 **クニノミヤツコ** 名詞-普通名詞-一般
国造

【例】
郡司は、もとの【国造】など伝統的な地方の豪族が任じられ、

5.35 **クノキミ** 名詞-普通名詞-一般
九君

【例】
かの北の方の御おとうと【九の君】を、やがてえたまはむと、

5.36 **クレノオモ** 名詞-普通名詞-一般
呉母

【例】
【くれのおも】つらゆき来し時と恋ひつつをれば

5.37 **コウノモノ** 名詞-普通名詞-一般
香の物

【例】
たくあんやぬか漬けなど【香の物】が並べられました。

5.38 **コウノモノ** 名詞-普通名詞-一般
剛の者

【例】
扱も【剛の者】の手本や！

5.39 **コウリノカミ** 名詞-普通名詞-一般
評督

【例】
一般のコホリの評造または【評督】に対応するものが柵造、

5.40 **コオリノミヤツ** 名詞-普通名詞-一般
コ
郡造

【例】
一般のコホリの【評造】または評督に対応するものが柵造、

5.41 **コシノモノ** 名詞-普通名詞-一般
腰の物

【例】
某はまるごしじや程に、其お【こしの物】かさせられひ

5.42 **コトノハ** 名詞-普通名詞-一般
言の葉

【例】
今夜の【ことノ葉】をかたつてきかせう

5.43 **コトノホカ** 副詞
殊の外

【例】
さいぜんより【事の外】かるうなつた

5.44 **コノカタ** 名詞-普通名詞-副詞
此の方
可能
以来・期間の意

【例】
某はうまれて【此かた】、やうじをちがへた事も御ざなひに、

5. 45 **コノカミ** 名詞-普通名詞-一般
兄

【例】
「似るべき【兄】やははべるべき」

5. 46 **ゴノキミ** 名詞-普通名詞-一般
五君

【例】
中の君、四の君、【五の君】とおはす。

5. 47 **コノシタ** 名詞-普通名詞-一般
木の下

【例】
行暮て、【木の下】陰を宿とせば、花や今宵のあるじならまし

5. 48 **コノハ** 名詞-普通名詞-一般
木の葉

【例】
風に【木の葉】の散る様に、東西に敗北した。

5. 49 **コノマ** 名詞-普通名詞-一般
木の間

【例】
夏山の峰の緑の【木の間】から朱の玉垣が仄見えて、

5. 50 **コノミ** 名詞-普通名詞-一般
木の実

【例】
はじのてらへまいり、もくげんじゆの【木のみ】をとり、

5. 51 **コノワタ** 名詞-普通名詞-一般
海鼠腸

【例】
なまこ（海鼠）・【このわた】（【海鼠腸】）・かかな（めばる、鮓）

5. 52 **ゴンノカミ** 名詞-普通名詞-一般
権頭

【例】
越前の【権守】兼盛、兵衛の君といふ人にすみけるを、

5. 53 **ゴンノソチ** 名詞-普通名詞-一般
権帥

【例】
大宰【権帥】になしたてまつりて、流されたまふ。

5. 54 **サイノカワラ** 名詞-普通名詞-一般
賽の河原

【例】
【賽の河原】で石を積む

5. 55 **サイノメ** 名詞-普通名詞-一般
采の目

【例】
五百の【さいの目】を只今そらにていかほど有ぞ

- 5.56 **サンノキミ** 名詞-普通名詞-一般
三君
【例】
【三の君】泣けば、四の君もうち泣きて、
- 5.57 **サンノマル** 名詞-普通名詞-一般
三の丸
【例】
城の水の手は【三の丸】の崖下にあった。
- 5.58 **サンノミヤ** 名詞-普通名詞-一般
三宮
【例】
【三の宮】こそいとさがなくおはすれ。
- 5.59 **シチノキミ** 名詞-普通名詞-一般
七君
【例】
【七の君】、「刈萱のなまめかしきさまにこそ、弘徽殿はおはしませ」
- 5.60 **シノキミ** 名詞-普通名詞-一般
四君
【例】
源中納言の【四の君】なり。
- 5.61 **ジンノザ** 名詞-普通名詞-一般
陣座
【例】
おこなひに【陣座】さまにおはします道に、南殿の御帳のうしろのほど通らせたまふに、
- 5.62 **スケノミヤツコ** 名詞-普通名詞-一般
少領
【例】
一般のコホリの評造または評督に対応するものが柵造、【助督】にあたるものが判官なのであろう。
- 5.63 **スノコ** 名詞-普通名詞-一般
簀の子
【例】
あれをきつて【すのこ】になひたらばよからふな
- 5.64 **スノモノ** 名詞-普通名詞-一般
酢の物
【例】
【酢の物】として食べるのが定番
- 5.65 **セノキミ** 名詞-普通名詞-一般
兄の君
【例】
我が【背の君】はひとりか寝らむ
- 5.66 **ソチノミヤ** 名詞-普通名詞-一般
帥宮
【例】
その日、【帥宮】も参りたまへり。
- 5.67 **タケノコ** 名詞-普通名詞-一般
竹の子

- 【例】
当年は事の外【竹の子】があがつたと申程に、
5. 68 **タノモ** 名詞-普通名詞-一般
田の面
- 【例】
春は燕，秋は【田のむ】の雁の訪るる様に、
5. 69 **タブノキ** 名詞-普通名詞-一般
楯 動植物
- 【例】
【タブノキ】・スダジイ・アカガシなどを優占種とする照葉樹林が発達している。
5. 70 **タラノキ** 名詞-普通名詞-一般
たらの木
- 【例】
【タラノキ】の芽の天ぶら
5. 71 **チノワ** 名詞-普通名詞-一般
茅の輪
- 【例】
たましひのかたちを想ふ【茅の輪】かな
5. 72 **チャノコ** 名詞-普通名詞-一般
茶の子
- 【例】
一桁の足し算、引き算はお【茶の子】さいさいになりました
5. 73 **チャノマ** 名詞-普通名詞-一般
茶の間
- 【例】
高度成長期の【茶の間】を再現。
5. 74 **チャノユ** 名詞-普通名詞-一般
茶の湯
- 【例】
明日それがしも【ちやのゆ】をする程に、
5. 75 **ツカノマ** 名詞-普通名詞-一般
束の間
- 【例】
【束の間】も去り難う思われた北の方，幼い人々にも別れ果てて
5. 76 **ツキノカツラ** 名詞-普通名詞-一般
月の桂
- 【例】
秋くれば【月の桂】の実やはなる光を花と散らすばかりを
5. 77 **ツギノマ** 名詞-普通名詞-一般
次の間
- 【例】
【次の間】に、長炭櫃に、隙なくみたる人々、
5. 78 **テノウチ** 名詞-普通名詞-一般
手の内
- 【例】
水の中へうちこうだやうな【手の内】で御ぎつた

- 5.79 **トウノベン** 名詞-普通名詞-一般
頭弁
【例】
蔵人所より、【頭弁】、宣旨うけたまはりて、
- 5.80 **トオノキミ** 名詞-普通名詞-一般
十君
【例】
【十の君】、「淑景舎は『朝顔の昨日の花』となげかせたまひしこそ、ことわりと見たてまつりしか」
- 5.81 **トキノコエ** 名詞-普通名詞-一般
関の声
【例】
前後から四万ばかりの【関の声】で山も、川も唯一度に崩るるかと思ゆるほどに御座った
- 5.82 **トノエ** 名詞-普通名詞-一般
外の重
【例】
御垣より 【外の重】 守る身の 御垣守
- 5.83 **トノクスリ** 名詞-普通名詞-一般
外薬
【例】
「本草集注」「典薬」「【外薬】」という文字の書かれた木簡も発見されています。
- 5.84 **トモノオ** 名詞-普通名詞-一般
伴の緒
【例】
もののふの八十【伴の緒】の思ふどち心遣らむと馬並めて
- 5.85 **トヨノアカリ** 名詞-普通名詞-一般
豊明
【例】
【豊明】は今日ぞかしと、京思ひやりたまふ。
- 5.86 **トリノコ** 名詞-普通名詞-一般
鳥の子
【例】
【鳥のこ】いろのかたびらの、かたのくわつとさけたるに、
- 5.87 **ナイシノカミ** 名詞-普通名詞-一般 ナイシノカン
尚侍
【例】
【尚侍】の御腹に、故殿の御子は男三人、女二人なむおはしけるを、
- 5.88 **ナイシノスケ** 「一の～」
典侍 表記上切れないため
【例】
源【典侍】といひし人は、尼になりて、
- 5.89 **ナカノキミ** 名詞-普通名詞-一般
中君
【例】
この御腹には、太郎君、三郎君、五郎君、六郎君、【中の君】、四の君、五の君とおはす。
- 5.90 **ナカノマ** 名詞-普通名詞-一般
中の間

【例】
宰相は【中の間】に寄りて、まだささぬ格子の上押し上げて、

- 5.91 **ニノマイ** 名詞-普通名詞-一般
二の舞

【例】
大衆に向かうて合戦をするならば、少しも違わぬ【二の舞】で有らうず

- 5.92 **ニノマル** 名詞-普通名詞-一般
二の丸

【例】
この大手三之門内から【二の丸】となる。

- 5.93 **ニノヤ** 名詞-普通名詞-一般
二の矢

【例】
先な大鹿の真ん中射て留め、馳て【二の矢】を取って次の鹿も射止めて

- 5.94 **ヌイノカミ** 名詞-普通名詞-一般
尚縫

【例】
父種継の従姉である【尚縫】が最近体調を崩して宿下がりをしていると聞いたからである。

- 5.95 **ノノミヤ** 名詞-普通名詞-一般
野の宮

【例】
九月には、やがて【野宮】に移ろひたまふべければ、

- 5.96 **ハチノオ** 名詞-普通名詞-一般
発緒

【例】
老越調の声に【発の緒】を立てて、

- 5.97 **ハチノコ** 名詞-普通名詞-一般
鉢の子

【例】
【鉢の子】の中は空っぽ

- 5.98 **ハチノス** 名詞-普通名詞-一般
蜂の巣

【例】
【蜂の巣】の大きにて、つきあつまりたるなどぞ、いとおそろしき。

- 5.99 **ハリノキ** 名詞-普通名詞-一般
榛の木

【例】
ばくちうちのさいめきれ、かちんやあさぎや、【はりの木】ぞめやかきぞめ、

- 5.100 **ヒダリノツカサ** 名詞-普通名詞-一般
左の司

【例】
【左馬寮】の御馬、蔵人所の鷹すゑて賜りたまふ。

- 5.101 **ヒトノクニ** 名詞-普通名詞-一般
外国

【例】
【外国】にありけむ香の煙ぞ、いと得まほしく思さるる。

- 5.102 **ヒノキ** 名詞-普通名詞-一般
檜 動植物
【例】
何の心ありて、あすは【檜の木】とつけけむ。
- 5.103 **ヒノコ** 名詞-普通名詞-一般
火の粉
【例】
【火の粉】が舞いあがった。
- 5.104 **ヒノデ** 名詞-普通名詞-一般
日の出
【例】
【日の出】を迎えることができた。
- 5.105 **ヒノモト** 名詞-普通名詞-一般
日の本
【例】
たうどにまさる【日の本】なれば、君安全に、民もゆたかに納る
- 5.106 **フキノトウ** 名詞-普通名詞-一般
菫の臺
【例】
【菫の臺】の天麩羅
- 5.107 **フクノカミ** 名詞-普通名詞-一般
福の神
【例】
身どもは【福の神】にてあるが、
- 5.108 **フンノツカサ** 名詞-普通名詞-一般
書司
【例】
上の御遊びはじまりて、【書司】の御琴ども召す。
- 5.109 **ヘソノオ** 名詞-普通名詞-一般
臍の緒
【例】
第一の誕生の際に【臍の緒】の代わりとなった母乳は、
- 5.110 **ホオノキ** 名詞-普通名詞-一般
朴の木 動植物
【例】
巨大な【朴の木】を手彫りした捏鉢
- 5.111 **ホゾノオ** 名詞-普通名詞-一般
臍の緒
【例】
御【臍の緒】は殿の上。
- 5.112 **ホトケノザ** 名詞-普通名詞-一般
仏の座
【例】
春の七草の【仏の座】
- 5.113 **ボンノクボ** 名詞-普通名詞-一般
盆の窪

【例】
後頭部と首の境目にある、【盆の窪】

- 5.114 マノアタリ 名詞-普通名詞-副詞
目の当たり 可能

【例】
眷属共に用いられてこそ過ぎられたに、【目の当たり】にこの様な憂き目を見らるる事は

- 5.115 ミチノシ 名詞-普通名詞-一般
道師

【例】
真人・朝臣・宿禰・忌寸・【道師】・臣・連・稻置

- 5.116 ミチノベ 名詞-普通名詞-一般
道の辺

【例】
【みちのべ】にしみづながるる柳かげ

- 5.117 ミノウエ 名詞-普通名詞-一般
身の上

【例】
身共が【身のうへ】をわらはせらるるかと思ふて

- 5.118 ミノケ 名詞-普通名詞-一般
身の毛

【例】
かたきの国ときくからに、【身のけ】よだちておそろしや

- 5.119 ミノモ 名詞-普通名詞-一般
水面

【例】
【水の面】見る女の瞳。

- 5.120 ミヤノメ 名詞-普通名詞-一般
宮咩

ミヤノベ

【例】
近うて遠きもの 【宮のべ】の祭。

- 5.121 ムクノキ 名詞-普通名詞-一般
棕の木 動植物

【例】
庭でいちばん高い【棕の木】

- 5.122 ムロノキ 名詞-普通名詞-一般
榎木 動植物

【例】
玉箒刈り来鎌麻呂【むろの木】と藁が本とかき掃かむため

- 5.123 メノタマ 名詞-普通名詞-一般
目の玉

【例】
二つの【目の玉】が飛び出してしもうての、

- 5.124 モチノキ 名詞-普通名詞-一般
藜の木

【例】
ツバキや【モチノキ】などの常緑樹

- 5.125 **モッテノホカ** 形状詞-一般
以ての外
【例】
獅子【以ての外】に相患うて散々の体で有ったれば
- 5.126 **モノノカズ** 名詞-普通名詞-一般
物の数
【例】
始め鳶から受けた恥辱は【物の数】でも無い
- 5.127 **モノノク** 名詞-普通名詞-一般
物の奥
「もののおく」は除く。
【例】
「【もののおく】にて、むかひさぶらひて、かかるわざし出づ」とさいなむ。
- 5.128 **モノノグ** 名詞-普通名詞-一般
物の具
【例】
その俣【物の具】を脱ぎ捨てて、泣く泣く暇を申して、東国の方へ落ちて行いた。
- 5.129 **モノノケ** 名詞-普通名詞-一般
物の怪
【例】
昔より【物の怪】には、時々わづらひたまふ。
- 5.130 **モノノフ** 名詞-普通名詞-一般
武士
【例】
猛き【武士】、仇敵なりとも、
- 5.131 **モノノホン** 名詞-普通名詞-一般
物の本
【例】
いろいろな【物の本】によると
- 5.132 **ヤノネ** 名詞-普通名詞-一般
矢の根
【例】
おもての侍共にただいられいで、【矢の根】をけづられひ
- 5.133 **ヤマノイモ** 名詞-普通名詞-一般
山の芋
動植物
【例】
【山の芋】をおろしてすってあるもの
- 5.134 **ヤマノカミ** 名詞-普通名詞-一般
山の神
【例】
【山のかみ】がこはひか、身共がこはひか
- 5.135 **ヤマノハ** 名詞-普通名詞-一般
山の端
【例】
星合いの空を眺め、日影の西の【山の端】に掛かるを見ても
- 5.136 **ユキノシタ** 名詞-普通名詞-一般
雪の下
動植物

【例】
【ユキノシタ】科の落葉小低木です

5.137 ヨノナカ 名詞-普通名詞-一般
世の中

【例】
老少不定の【世の中】は石火の光に異ならぬ

5.138 ロクノキミ 名詞-普通名詞-一般
六君

【例】
典侍腹の【六の君】とか、いとすぐれてをかしげに、

5.139 ワタノハラ 名詞-普通名詞-一般
海の原

【例】
【わたの原】寄せくる波のしばしばも見まくのほしき玉津島かも

6 「ーが〜」

番号	代表形 代表表記	品詞 注記	活用型・その他	接続	異形態
6.1	アメガシタ 天が下	名詞-普通名詞-一般			
	【例】 【天が下】に住まうずる限りは、ともかうも清盛の仰せを背くまい事こそ有れ				
6.2	イワガネ 岩が根	名詞-普通名詞-一般			
	【例】 かどかどしき【岩が根】に一輪の花を點したる風情、				
6.3	カリガネ 雁が音	名詞-普通名詞-一般			
	【例】 同じ鳥をもつてまいつて、一人はがん、一人は【かりがね】と申上た				

7 「ーつ〜」

番号	代表形 代表表記	品詞 注記	活用型・その他	接続	異形態
7.1	ウエツガタ 上つ方	名詞-普通名詞-一般			ウエツカタ
	【例】 まんぢう共、申、てんちんとも申て、【うへつかた】のおしうも参るものでござる				
7.2	タキツセ 滝つ瀬	名詞-普通名詞-一般			
	【例】 奥山にたぎりて落つる【滝津瀬】の玉散るばかりものな思ひそ				
7.3	ワタツウミ わたつうみ	名詞-普通名詞-一般			
	【例】 【わたつ海】に親おし入れてこのぬしの盆する見るぞあはれなりける				

7.4

ワタツミ
海神

名詞-普通名詞-一般

【例】

棹させど底ひも知らぬ【わたつみ】の深き心を君に見るかな

『日本語歴史コーパス 室町時代編』 形態論情報規程集 Ver.1.0

2019年5月30日

編者・発行者 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国立国語研究所 言語変化研究領域

執筆担当者 片山 久留美 (言語変化研究領域 プロジェクト非常勤研究員)

〒190-8561 東京都立川市緑町 10-2

電話 042(540)4300 (代表)

URL http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/